

南極記





# 南極記

デジタル復刻版

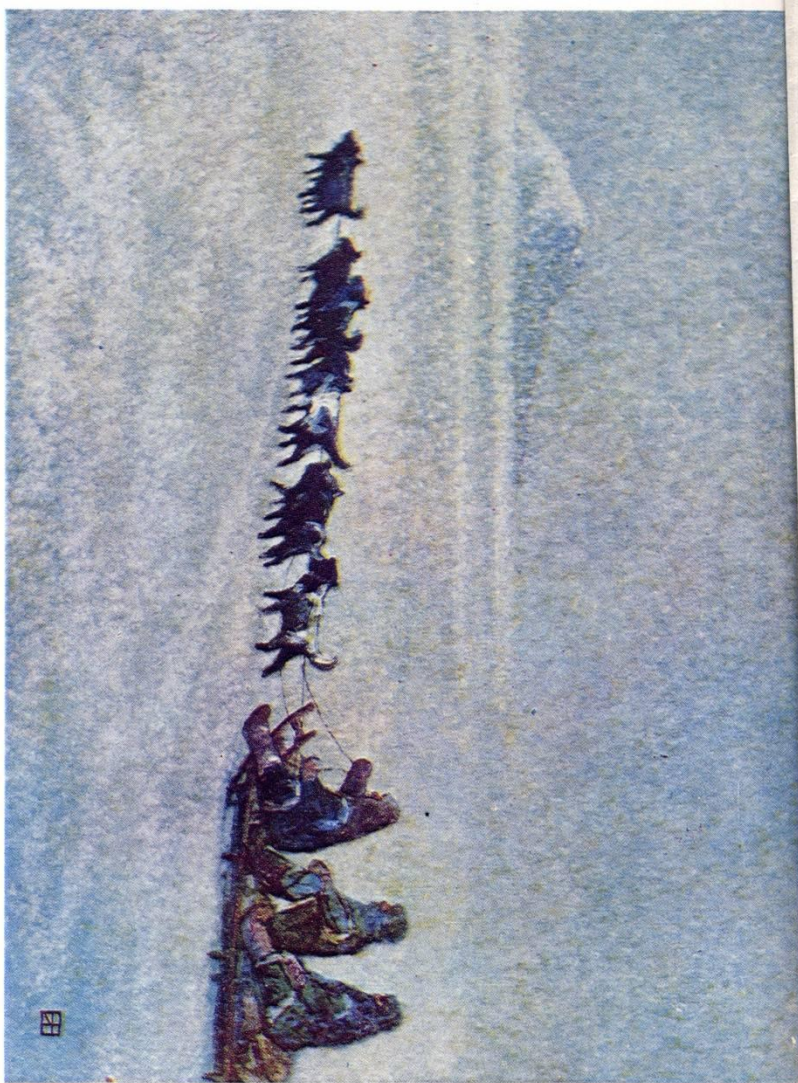


南極訪





探檢隊員幻岳を望んで橋を渡る





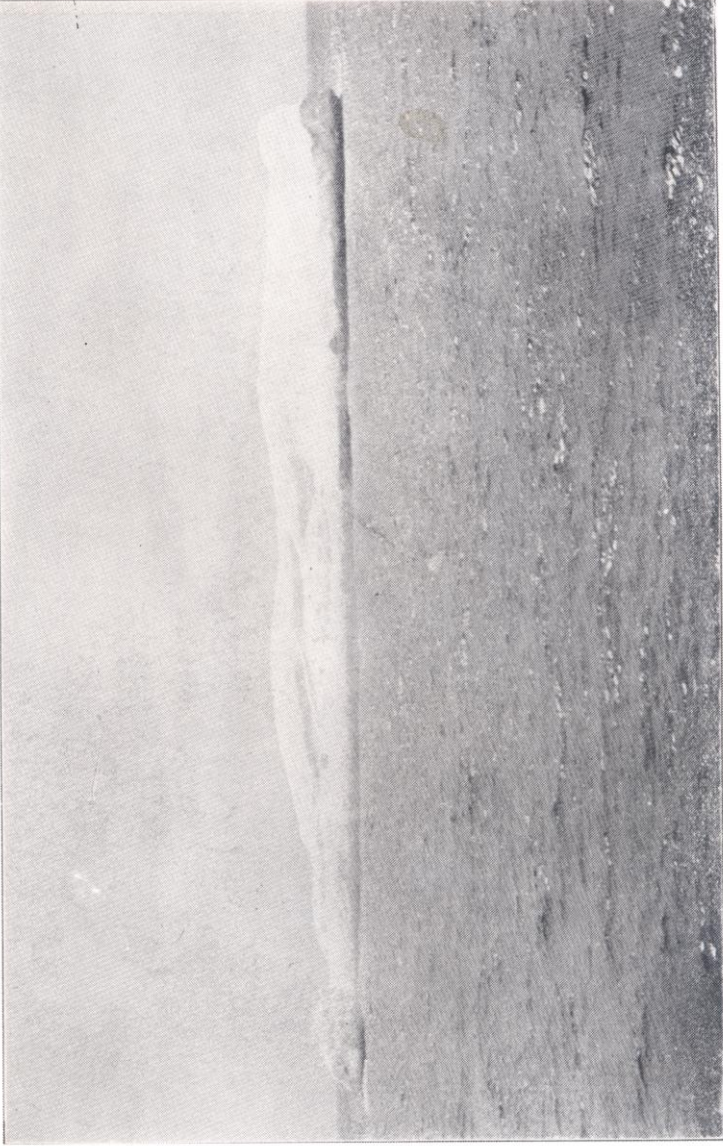




明治四十四年十二月二十六日撮影



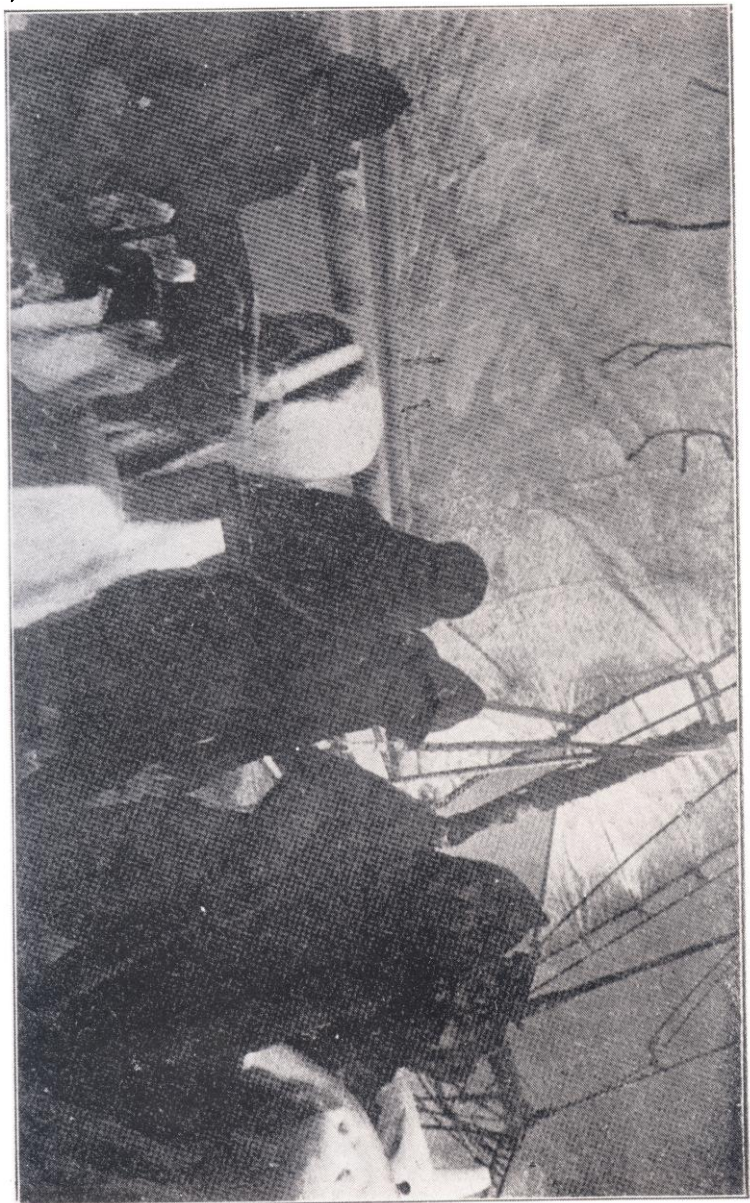
氷塊を雪きべすなど水でリ下而上水員船際しれさ総圍に氷流の致無



問南丸の出入遭しひ大水山(高サ百五十五尺)の米の山

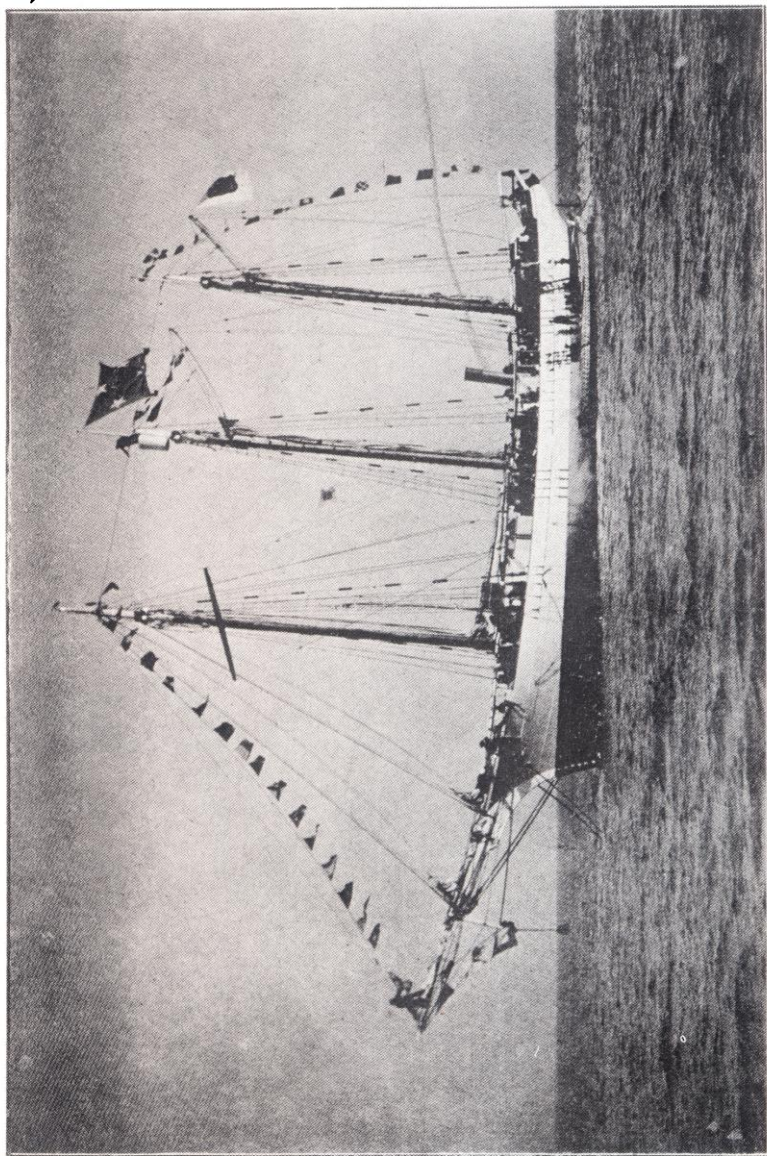
明治四十七年十二月十三日撮影



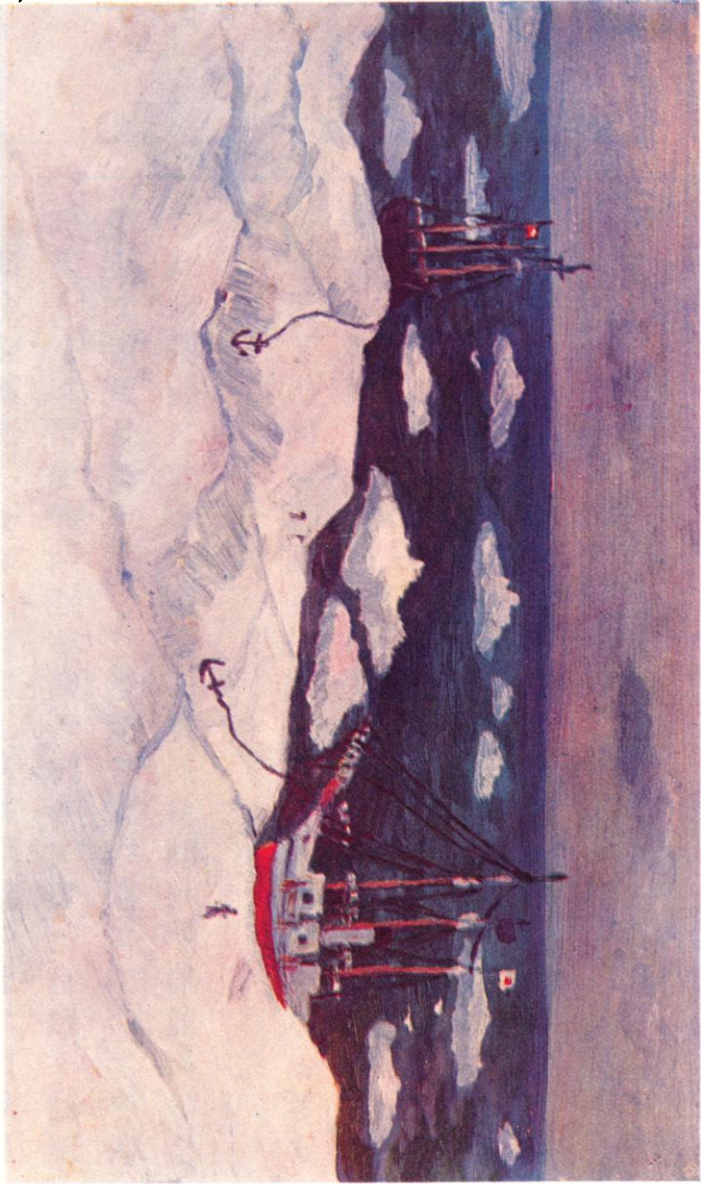


（影撮日十月三年四十四治明）除掃氷結の上板甲丸南開





開南丸の雄姿



日本探検船開南丸鯨灣に於て諸探検船のムラノ號に選ぶ





## 序

南極記成る。回顧すれば我が南極探檢の事業は、明治四十三年七月五日錦輝館に於ける發表式に緒を啓き、爾來星霜を閲すること三たび。今や本書に由りて探檢の經過を公表するに至れり。余は之を機會として、滿天下の同情者諸君に感謝せざる可からざる者あり。

歐米諸國に於ては、探檢の風夙に開け、剛悍敢爲の士、争ひて遠馭長駕を事とし、混沌未鑿の地に向つて、學術的若しくは冒險的踏査を試み、頼りて以て自然を制服し、領土を擴拓し、物産を發見し、人文開進の上に貢獻す

る者多く、一般社會も亦甚深なる興味と同情とを以て之を迎ふ。故に其事に従ひ功を收むる、必ずしも難からず、然るに我國には從來絶えて此種の風尚なく、間々探檢の事なきに非らずと雖も、一定の規模、組織を立て、之を行へるは殆どある事なし。其これ有るは實に南極探檢を以て嚆矢とす。故を以て事に當る者と賛襄者とを問はず、皆經驗の徴すべき無きに苦めり。當初窃に以爲らく、南極探檢の擧たる、學術上の研究に資益する所あり、航海上にも貢獻する所あれば、當局者も必ずや相當の援助を與ふるならんと、然るに行政上の煩瑣なる形式等ありて事意の如くならず、殆ど民間の力を以て成就せざる可からざる至れり。然れども



是等障害の爲めに躊躇逡巡するが如きは、一旦勃興せんとせる國民の遠征心を挫折するの惧れあるを以て、資金未だ充實せず、準備未だ完全せざるも、斷然豫定の計畫を實行するに決せり。但だ開南丸の品川灣を出帆する、時期已に遅れしが爲め、其南極圏に入れる頃には、寒氣殊に強く、猛烈なる氷威、船體を壓迫して着陸するを許さず。着陸すべき地點を指顧の間に望みつゝ空しく濠洲シドニーに歸還するの已む可からざるに至り、第一次の探檢は全く失敗に畢れり。

當時或は議を建て、曰く、南極上陸の事竟に必ず可からざれば、寧ろ今に及んで再舉を中止するに若かず。開南丸一たび南極圏内に入る。社會に對して中止の

辭柄なきを患へざるなりと。然れども此の如きは日本男兒の面目を汚損するもの。乃ち斷乎として之を排し、直に第二次の計畫を立つ。而かも第二次の計畫たる復た少なからざる費用を要す。船舶は修繕せざる可からず。糧食防寒具は補充せざる可からず。濠洲滞在費は支辨せざる可らず。學術部員は増加せざる可からず。輓犬は補足せざる可らず。之に要するの費額は殆ど新に探檢隊を編成して出發せしむるに等しきものあり。經營最も困難を極めたり。

然れども第二次計畫は遂に斷行せり。國民の多大なる同情に依りて斷行せり。我が開南丸は孤帆一片明治四十四年十一月十九日を以て濠洲シドニーを出

發し、風濤冰雪と戰ふと二閱月、翌年一月十七日無事、本隊を鯨灣に、同月二十四日沿岸隊をエドワード七世州に上陸探檢の事に従はしめ、更に東方に航して西經百五十一度二十分の地點を究め、歸路に就けり。

思ふに十八世紀の中葉、キャピテン、クツクが南洋遠航の途を開きしより以來、南極探檢を企てし者無慮三十餘人、各々、一方に雄飛して、特異の光采を放つものありと雖も、其最南の地點に到達せし次序より言へば、諾威のアムンドセン、英のスコットを以て最優者と爲し、シャツクルトン之に次ぎ、我が日本探檢隊は又之に次ぐ。而して此等優者中、アムンドセンは能く脱兎の勢を以て種々の困難より免れたりと雖とも、スコットは竟に

萬古氷界の鬼と化せり。彼等は皆積年の研究に頼り、豊裕なる資金を擁し、之を實行してすら猶此の如きに、我が陸上本隊が、貧しき資力と乏しき經驗とを以て、南緯八十度五分に到達し、沿岸支隊が前古未だ曾て上陸せし者なきビスコー灣方面よりエドワード七世州に上陸してアレキサンドラ山脈を探檢せしは、最初の探檢事業として、寧ろ成功に近しと謂ふべし。若し夫れ開南丸が脆弱なる二百四噸の小帆船を以て前後兩度南極圏内に入り、船として達し得べき最南點なる南緯七十八度三十一分に達し、更に東方に進みて往年スコツトの到達せし最東點を越え、西經百五十壹度二十分に達して、一人の死傷者を出さず、寸毫も船體を毀損せ

ず、無事二萬餘哩の航海を終へて歸還せしに至つては、我が船員の優秀なる伎倆を中外に發揚せるものにして、本邦の航海史上に特筆大書すべき偉業を成就せるものと謂はざるべからず。

之を要するに、我が探檢事業の艱難を凌ぎ、障害を排して兎に角如上の効果を收むるを得しは、一に全國新聞社及び有志諸君の熱烈なる同情と援助とに職由せるものにして、感謝の已む可からざる所以なり。余は更に望む、今後我が國民の間に、遠征探檢の風盛んに起りて、天涯地角到る處に欧米諸國民と角逐するの日あらんことを、併せ記して序と爲す。

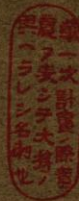
南極探檢後援會長

大正貳年十一月 伯爵 大隈重信 識



祝  
壯  
舉

陸軍大將乃木希典







# 緒言

一、南極探檢は、本邦人の行ひし最初の世界的探檢なり。之を以て經驗の就いて徴すべきなく、設備又完全を缺く所なきにあらざりき。然れども海上隊員は僅に二百四噸の小帆船を以て、能く船舶の達し得べき最南の地點たる南緯七十八度三十一分に達し、更に東方に進みて西經百五十一度二十分の地點を究め、往年スコットの達せし最東點の記録を破りて歸還し、陸上隊員は鯨灣及びビスコー灣の二方面より上陸して、一は南緯八十度五分に達し、他はエドワード七世州のアレキサンドラ山脈を探檢して歸路に就けり。思ふに初度の探檢に於て、此の如きの成績を收むるを得しは、是れ偏に本邦及在外の同胞諸士が、熱心に此事業を援助せられしに因るものにて、謹んで深く謝意を表する所以なり。

一、本書は、此事業に従事せる隊員船員の記録報告及陳述に基きて編輯し、壹年半の歳月を費して成りしものなり

一、本書は、一般讀者諸士をして、速に此事業に於ける最大舞臺たる第二次計畫の探檢狀況を知らしめんが爲め、倒叙史の例の倣ひて、卷頭に第二次計畫の探檢記を掲げ、之に次ぎて第一次計畫の探檢記及濠洲シドニーの露營生活を掲ぐる事と爲せり。

一、本書には、附録として、南極圈採集標品調査報告、氣象觀測表、ペングイン鳥の胃中より出でし岩石破片の研究、探檢用糧食の研究、防寒具の研究、樺太犬及橈の研究、衛生報告、開南丸氷海進航設備、南極圈航海概要を掲げ、更に卷末に附するに、南極探檢後援事業經過の梗概を以てせり。

一、南極圈採收標品調査報告は、帝國大學關係の各専門諸博士諸學士に依頼して調査したるものにして、特に理學博士岡村金太郎、理學博士徳永重康、理學士佐々木望、理學士田中茂穂、理學士寺尾新、理學士内田清之助諸士の熱心なる援助を受けたり。茲に其好意を謝す。

一、ペングイン鳥の胃中より出でたる岩石破片の研究は、第一高等學校助教授和田八重造氏に依頼して調査せしもの、茲に其好意を謝す。

一、 卷中に挿入せし日本南極探檢區域圖に於ける第一次航海及第二次航海の航路は、野村船長及土屋運轉士の手に成りし物なり。

一、 卷中の記事と相俟ちて、一層極地の狀況を明白に知悉せしめんが爲め、本書には日本探檢隊が極地にて撮影せる極地光景寫眞六十頁を挿入し、又極地にて描寫の繪畫五十餘個、三色版四葉、コロタイプ刷二葉を挿入する事と爲せり。極地光景寫眞は紙數頗る多きを以て最初一冊の寫眞帖として別に發行の豫定なりしも、讀者諸士が購讀の便を計り全部此書中に挿入する事と爲せり。

一、 コロタイプ刷と爲せしアレキサンドラ山脈實景は、世界未曾有の珍品なり。英國のスコット大佐が、第一次探檢の際、大佐は天候の不良と時期の遅延との爲め上陸を得ず、海上より雲か山か判明せざるも、恐らく山脈なるべしと思はるゝ物を認めて、之にアレキサンドラ山脈の名を附し、其物の存在せる陸地をエドワード七世州と命名せり。随つて當時、大佐一行は、其山脈らしき物の實體を撮影するを得ず、僅に繪畫を以て雲煙模糊たる山姿を髣髴し、其著書中に之を公けにし得たるに過ぎざりき。然るに我が沿岸隊が同地に航せし際に

は、幸にして天氣好良なりしを以て、獨り同山脈に登攀探檢を行ひ得たるのみならず、又明白に同山脈の全景を撮影し得たり。是れ實に開關以來神祕の仙寰を人間に向つて開示せるものにして、啻に日本探檢隊の幸福たるのみならず、世界人類の等しく喜悅する所ならんを思ふ。

夏期太陽の汐せざる南橋内園の太陽



明治四十五年一月三日撮影

式賀祝且元の部全員船隊加參檢探次二第



上部別務の人は向つて左より福島水夫、田泉技師、三井所衛生部長、藤平機關士



長務事島 工木田安 士轉運等一屋士 習見士轉運等 員隊川釜 夫範田釜 士轉運等二井酒 員隊野三 士轉運宅三 員隊松村野 夫松村野 員隊田多 掛犬邊山 書秘松村 長夫夫松川高 員隊野吉 長隆瀨白 員隊瀨白 長隆瀨白 掛犬守花 長箭衛學田武 長隆支田池 夫水田柴 夫火崎濱 員隊邊渡

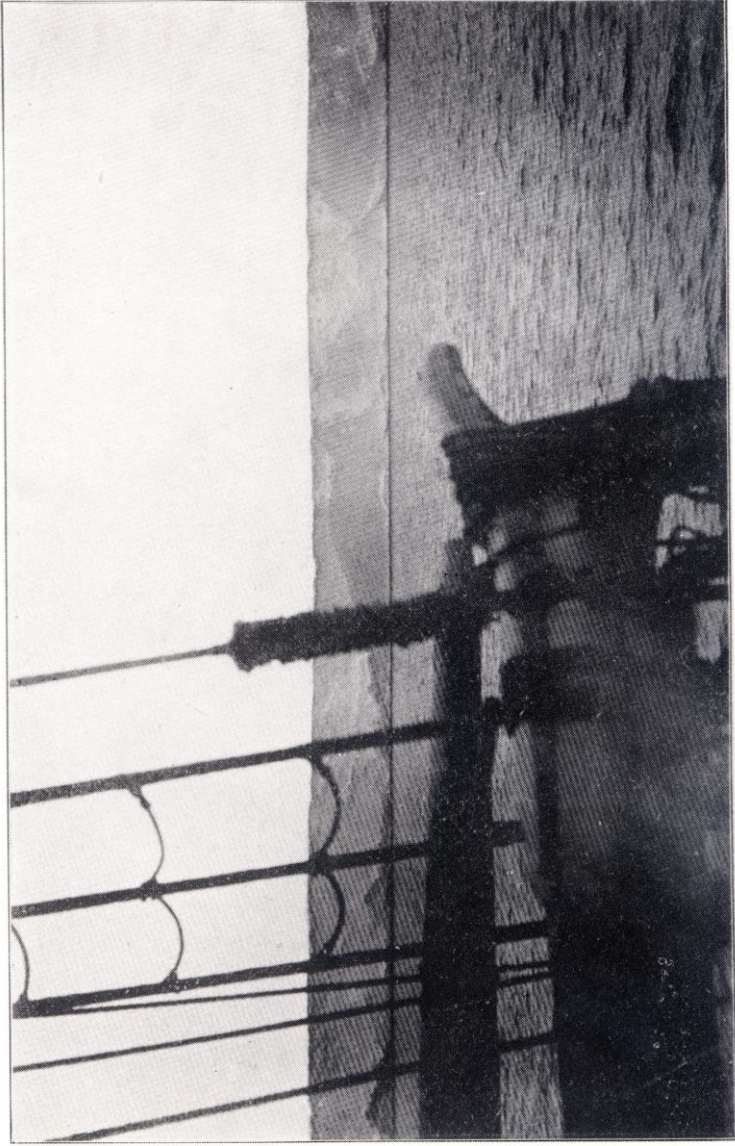
明治四十五年一月一日撮影



明治四十五年一月十四日撮影

氷の上の海豹狩(船中の人、花守犬、山邊犬の三人)





(りあ位尺百貳上面水さ高は堤米此)堤米大の近附灣鯨るた見りり丸南南開

明治四十五年一月十六日撮影

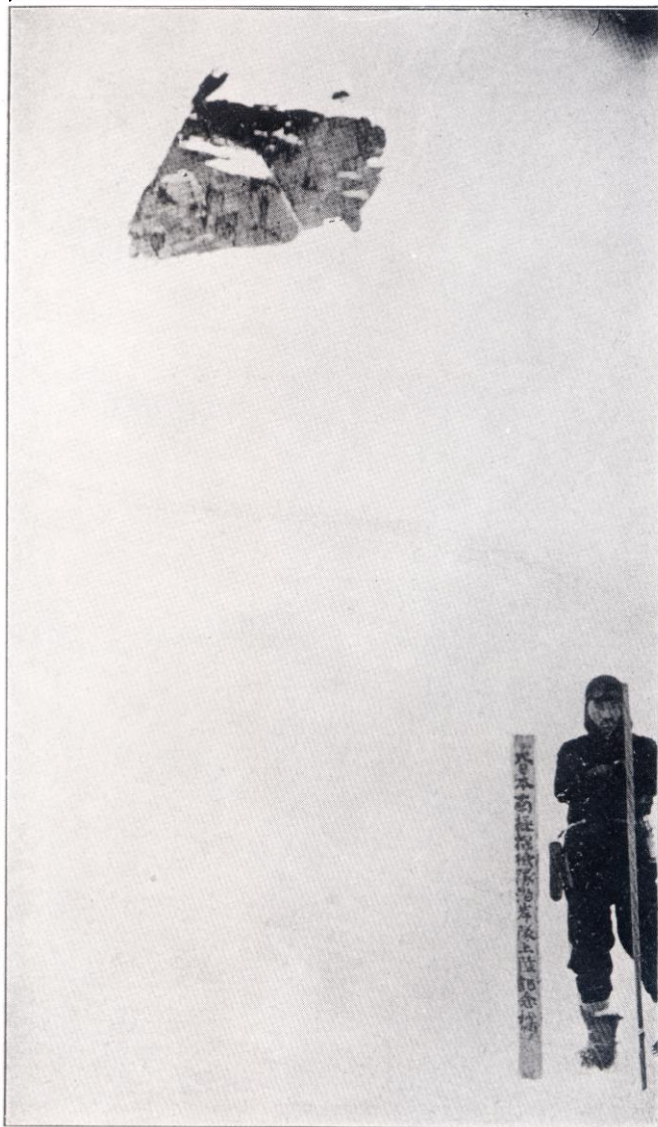




明治四十五年一月二十四日撮影

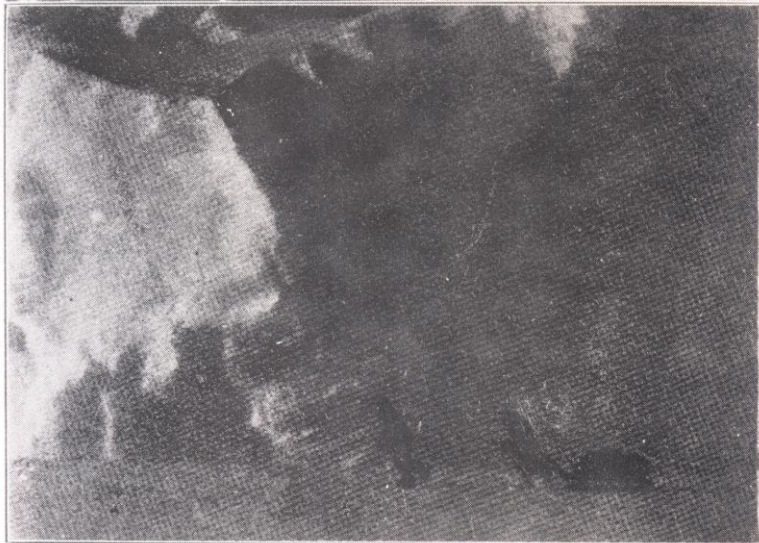


鳥ソローイグレンベ王帝の下堤水大州世七ポーランド



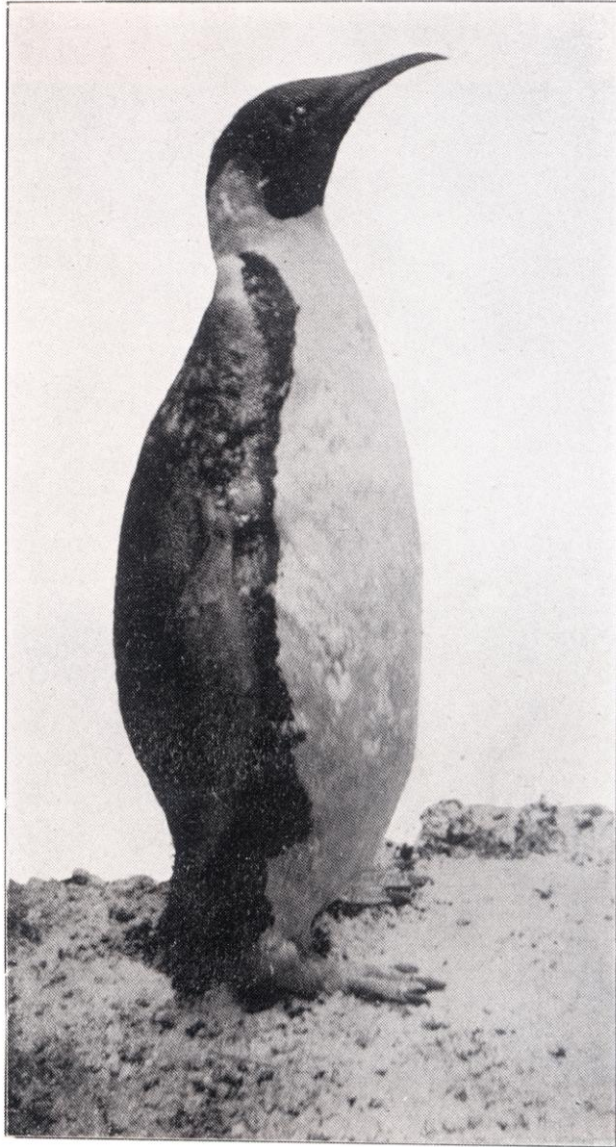
明治四十五年一月二十四日撮影

西川隊員とアキレスドンラド山脈に露せ岩る石  
(同日に沿岸隊上陸記念標を建てつ)



明治四十五年一月二十四日撮影

員隊川西は者前 ふ向に檢探の脈山ラドンサ キレアてみ進を上氷野の下山水大  
也比無觀壯は山水の上氷野るゆ聳く高てにき續の圖上は圖下、員隊邊渡は者後

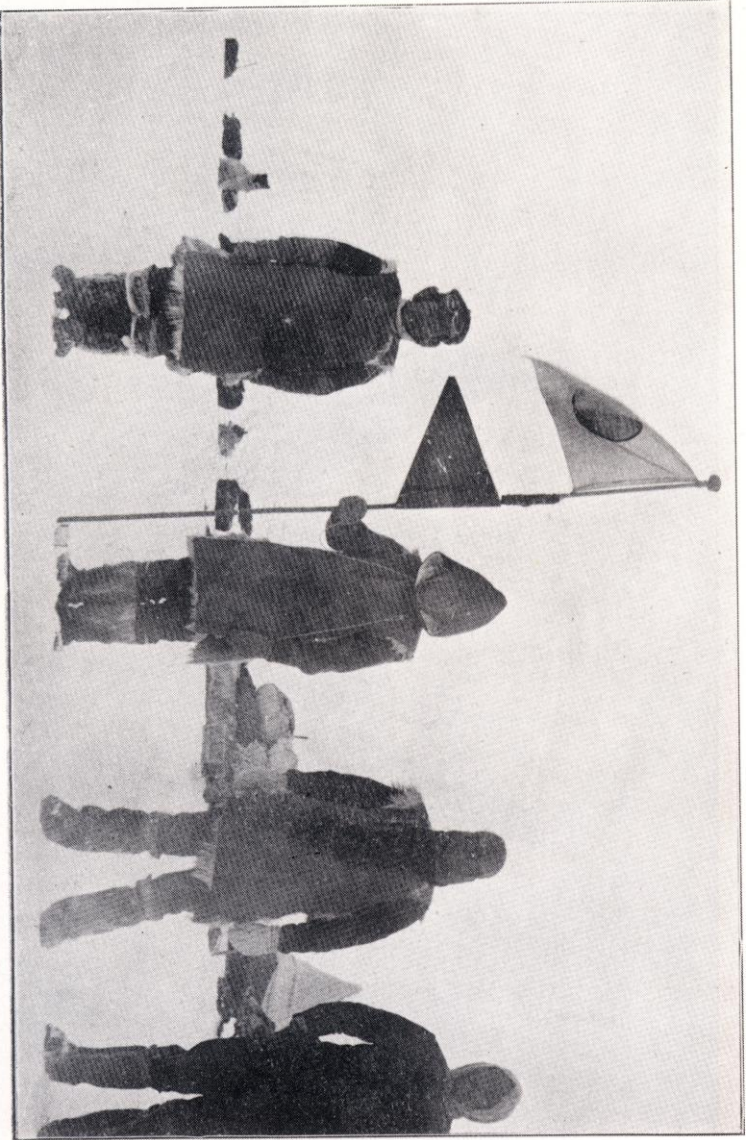


明治四十五年一月二十四日エドワード七世州氷塊下にて捕獲せし物

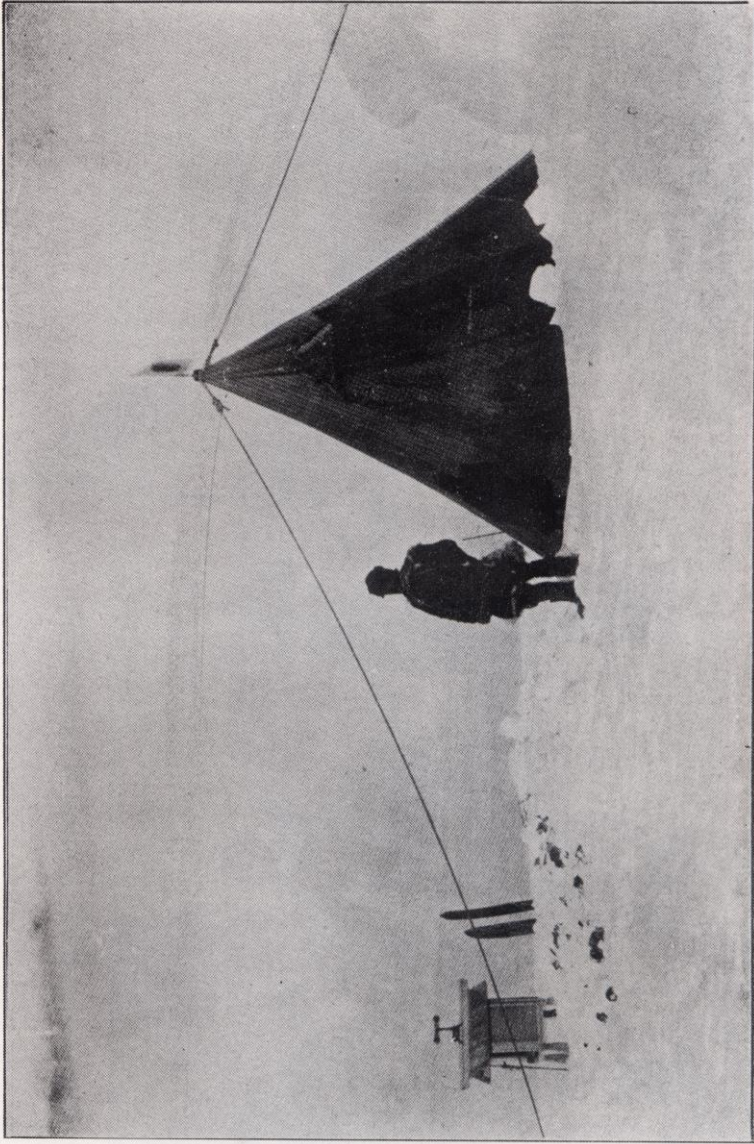
鳥 ン - イ グ ン ベ 王 帝



明治四十五年一月二十八日撮影



（掛六邊山、長部衛學田武、長塚頼白、長中左衛門井三ヲト左で右向）旗京日の分五度十八緯南



長 都 生 衛 所 井 三 と 幕 天 地 煉 根 洞 窟

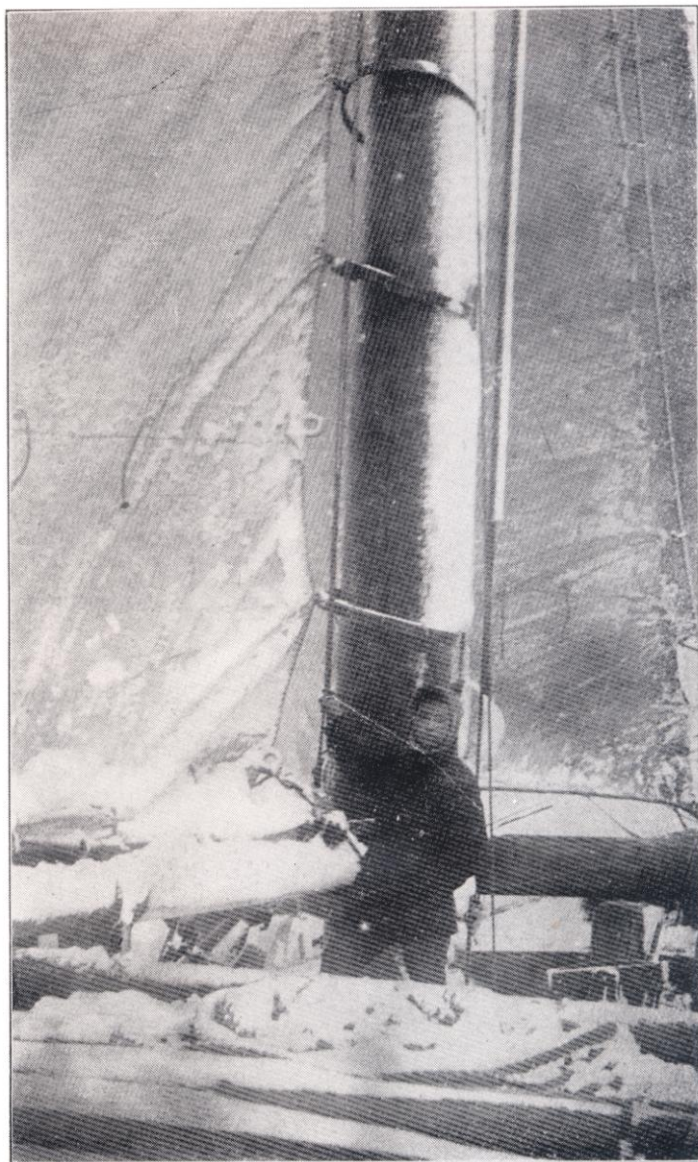
明治四十五年二月二日撮影



明治四十五年二月四日撮影



丸南開なるゆ見に方造土樽等二井酒は入一の他長夫水川高なるせに手を舟、景光攝引蘭鯨



明治四十五年二月十五日撮影

(夫水島福は央中)丸南開の航途中雪吹



# 目次

## 序文

### 第一章 發端

一發の實彈・冰山遮レ路船難レ前・無事三萬哩の航海・八十度五分の日章旗・船として達し得べき最南點・最初の世界的探檢

### 第二章 南極圏突進の航海

開南丸再征の機來る・諸般の準備終了・最後の握手・甲板上別辭の交換・シドニー山河に告別・萬歳の聲海上に湧く・バースル灣附近の一時停船・中空に掲揚されし信號旗・いざさらば・舷頭の君が代・再舉遠征の第一歩・滑稽なる鳥釣・信天翁縞鳥の群翔・鳥釣の成功・急雨の來襲・驚くべき信天翁の強力・初雪降り始む・冬支度整ふ・船員の髭白く凍結す・右舷十哩に冰山現る・冰山を避けつゝ前進・群氷中の縫航・氷塊舷端に衝突して大音響を發す・雪鳥の飛翔・ペングイン鳥舷側に集る・種々の形の冰山・流水を溶解して沐浴す・遠雷の如き音響終夜絶えず・海上一面の氷群・人力の限りを盡して進航す・壯觀無比の鯨群棲息・船は辛ふじて氷圍を脱す・流氷上に海豹を發見す・帆影高く東航を急ぐ・高さ三百五十尺の大冰山・海豹に一彈を見舞ふ・零點下の海中に海豹との大格闘・船は鞠の如く狂風に翻弄さる・後部帆檣の絶頂登攀・飲料水の缺乏を杞憂す・握雪を犬に與ふ・輓犬の箱詰生活・輓犬の悲鳴と嘯合・深夜犬群箱を破つて甲板を駈

け廻る・船は群氷の包圍中に陥る・鋸状の大氷山現出す・愈々南極圈に入る・地平線上に一大白光體見ゆ・猛烈なる大吹雪・不安は刻一刻に募る・船は西經に入る・終日大氷山より離るゝこと能はず・一望皚々たる浮氷の野・奇聲天地の静寂を破る・止むなく逆航に決す・一難去つて又一難・幹部會議開かる・船長海圖を披き指す・航路は余に充分の自信あり・群氷に沿ふて進行・巨濤狂亂天地物凄き光景・甲板上の餅搗・勇ましき杵の音・餅臼は醬油の空樽・木屑が餅の中に飛込む・氷山水盤に包まれ進退谷まる・船漸く血路を開く・氷盤の裂目より大海豹・四十四年も餘すところ三日・出帆以來の快晴・太陽水平線下に没せず・鯨群時々潮柱を立つ・甲板に集り鳥眼瞰・迎年準備成る・元旦來れり・船中の拜賀式・屠蘇に代ゆる葡萄酒の祝盃・ストーブ會議に花を咲かす・海鳥を見て陸地の接近を知る・雲烟模糊裡に山岳を認む・萬歳の絶叫・一行喜色滿面に隘る・雄大なる陸影限界に映ず・愈々南極の玄關口に來れり・陸影漸く展開す・火山岩の露出・鮮かに眼前に立つホエウエルの白姿・萬歳三唱・波間に出没せるペングイン鳥の一隊・ポッセッション群島視界に入る・流水の群來益々多し・深藍色の海波・静穩なるロツス海・船は海流に乘じ居れり・非常なる雲形美を現す・銀山の倒影長く海波に映ず・氷上に大海豹の横臥・海豹狩に出掛く・狩猟隊の萬歳・水晶島上の點々たる黒影・ペングイン鳥狩・ペングイン鳥と活劇・二人に二羽の取組・生擒の目的を達せり・珍客を捕虜室に好遇す・滑稽なるペングイン鳥の態度・初猟の祝盃を酌む・隊長は海豹料理の指揮役・海豹脂肪の燃料・ペングイン鳥の胃中より小石を得・甲板は頬を裂かんほどの寒氣・三百尺の大氷堤眼界に入る・ペングイン鳥の聲に征旅の夢を亂さる・氷堤は恰も萬里の長城を望むが如し・幻日現はる・ペンサキのインキ氷結す・南極特有の幻岳・一隊の鯨軍悠々舷側に來襲・アイヌの鯨軍禮拜・惣然山獄の如き氷山現る・南極の崇高なる自然美・人事の最善を盡して已まん・目的の氷堤までは三四十里・六尺棒を揮翳し大海豹狩

・海豹討伐隊の好功蹟・三十餘頭の海豹群を乗せし氷塊・半月形を示せる氷堤・氷堤の處々に洞穴及龜裂あり・硝子棒を吊下げし如き氷桂・氷堤試験の實彈一發・希くは十二珊瑚あれ・上陸し得べく見ゆる一灣あり・陸上實地踏査の爲め端艇派遣・大海豹と格闘の三十分間・四人の影高き氷堤上に現はる・海豹蘇生して頭を擡ぐ・水底に沈みし海豹・龜裂散在して突進不可能・花守アイヌの龜裂陷落・名刺を水底に埋め歸航・『四人氷河』と命名・『開南灣』と命名・氷界無人の境に不思議の船影・近づけばは諾威探檢船フラム號・鯨灣の野氷上に投錨・灣内は一望廣濶・極鯨幾群となく現る・氷の流出季節？・目高の如き魚棲息・探檢隊一行の服装・流汗淋漓全身を濕ほす・二百尺以上の氷の障壁・極地ならでは見られぬ凄壯の光景・辛ふじて一大氷塊に這ひ上る・頭上を仰げば氷堤の一部將に落下せんとす・氷塊に壓せらるゝか深溪に陥るかの二途・命綱を曳き乍ら進む・萬歳萬歳の連發・墨繪の如き開南丸とフラム號・無人の清淨界を踏破せんとする鐵脚・西方に凸起する雪丘・適當なる登攀地點・犬橇の荷物運搬・氷堤道路の開鑿工事・大龜裂に架する手橇橋・黒きこと漆の如き容貌・船長のフラム號訪問・稀有の好晴續き・荷物を置きし野氷流失せんとす・猛烈なる雪塵の飛揚・危機一髪の水上市物取除作業・寒風を冒してペングイーンの捕獲に向ふ・フラム號士官の開南丸訪問・此の如き船にては來り得ず・六尺棒を杖として登攀す・蟻の如く氷堤を上下す・浮模様の如く身ゆる氷片の流出光景・荷物の一部見るく流失・防寒服上の雪片銀の鎧の如し・足許の氷頻に流れ出す・九死に一生を得たる危険・山邊アイヌと挽犬三十頭を乗せし氷流出せんとす・最後まで二分間・氷塊の脱落する大音響・潤然たる鏡面巍峨たる白壁を宿す・魚鱗の如き卷層雲・突進隊と沿岸隊との訣別・昨日の堅氷今日の龜裂・アイヌ式睡眠法・上陸隊と母船との聯絡斷たる

### 第三章 陸上本隊の探檢・・・・・・・・・・・・・・・・一〇七

上陸隊員を氷岸に残す・根據地を定む・突進一刻を争ふ・雪盲症に襲はる・一望千里の雪野・廿八頭を二隊に分割・白鉛色の雲・根據地天幕竣工・床は白銀の色・自然の大壁畫・雷の如き駭聲無人境に起る・夜の無き時・却々の奇寒・一種異様なる犬の鳴聲・突進隊員と殘留員との袂別・橇の後押役・最後の握手・右方に龜裂の一帶・數個の小丘研究・特殊設計の天幕入口・泥雪脛を没して歩行困難・猛烈なる大風雪・昨夕は非常な吹雪・出發の躊躇・何時になき大群の元氣・天幕は青色に限る・實地經驗上の活智識・雪中の貯藏所・磁針と橇上の鐵器・山？屨氣樓？・雪原突進の第三夜・鯨灣終點の屈折・案外にも平凡なる小丘・輓犬大に疾走に慣る・犬に先じて道案内・折々行路を誤る・進むと共に變化する丘頂と雲形・雪原上の味噌汁・氷骨處々に横はる・橇の顛覆・氷點下廿二度・第五夜の露營・怪しき今日の天候・氷骨壘々一步一滑・大吹雪の襲來・前隊と後隊との聯絡を失ふ・三四本の竹柱・八寒地獄・人も犬も悄然・方向に迷ふ・氷骨上一條の痕跡・徐ろに天候の恢復を待つ外なし・氷上に印せる凍傷の血痕・前方幽かに暗影・狂氣の如く絶叫す・漸く再會するを得・犬と馬との比較・雪を入れるれば天幕より三間の退却・塵ッ氣一ツ無き天地・人間は天幕吹飛し豫防具・雲粉天幕内を襲ふ・飲まず食わずの廿六時間・病犬隊後に從ひ來る・鳥か山か四個の峯頂・所謂幻岳？・喘ぎぐ前進・突進の最終點・西經百五十六度三十七分南緯八十度五分・國旗の下に整列す・大和雪原と命名・千古不滅の氷雪・感慨無量・耳に聽ゆるものは風の音のみ・糧食を犬に割愛す・道先案内者・怪鳥と思ひしは放棄されし新聞紙・灣内より漏るゝ異様の音響・霧の爲めに雲か對岸か不明・困難なりし濃霧中の搜索・遙かの方に根據地を發見す・生涯忘れ得ざる喜悅・輓犬に馳走・夢現つで箸を執る・根據地殘留部員の生活・形ばかりの中食・海南丸は如何・フラム號は如何・雪鳥の空中に鳴くを聞く・鐘詰箱の釘應用頓智・豫定は今日一日を餘すのみ・新式輕便卓子・氷上小屋成る・霰の天幕に當りて

碎くる音・フラム號何時しか姿を消す・雪野の旭光鮮か也・タウゾクカモメ天幕を見舞ふ・零下二十三日・大吹雪防禦に忙殺さる・夜の無き世界・遠雷の如き氷堤脱落の音響・アムンドセン一行の遣せし足跡か・長靴形の灣・數條の大龜裂前程を遮る・フラム號灣内に向ひ進航し來る・諾威探檢隊の露營地を訪ふ・彼我の間隔僅に七哩・諾威人と熱情籠れる握手・層雲棚曳く水平線・宛然一條の瀑布を遠望するの觀あり・風力計停止四顧暗澹たり・突進隊員の歸着・犬群吹雪中に熟睡・今後の方略に就き協議・コールマン島に向ふに決す・トオクカイクの掛聲・根據地に向ふ嬉さに犬群疾風の如く走る・侮り難き犬の速力・微かに漚笛を聴く・天幕入口の風雪防禦工事・開南丸見ゆ・小春日和・根據地引揚の準備・乗船地點の偵察・荷物運搬の櫓幾度が氷上を往來す・引揚の結了・海上一面の濃霧

## 第四章 エドワード七世州の探檢……………一七九

エドワード七世州に向ふ・陸岸一帯の尖氷・神々しき山脈・山腹の黒點・野氷中の水溜・如何なる動物が此地に住むか・美しき皇帝ペングイン鳥に遭ふ・天工の偉大・氷河に遭う・龜裂縦横に横はる・手櫓を棄つ・腰と腰とを繋ぐ一條の縄・神秘寶庫を藏するアレキサンドラ山脈・疲るれば雪原上に仰臥・冥朦一間先も見えず・新案ミルクセーキの馳走・爪先登り終る・半天より落下する大雪崩・危く一命を拾ふ・地獄の道とは斯る處か・記念の木標と撮影・佛典中の瑠璃世界・龜裂に陥り救を叫ぶ・此山脈を往かば南極の中心に達せん・雪を喰ひて咽喉を痛む・二人は生死不明と判断・搜索隊の出發・五歩に一休十歩に一憩・空腹を満たす冷え鯔鮓・船長涙を流して喜ぶ・上陸不可能の地・南極の諸現象を集めし博覽會の如き場所・野氷上の冰山・大龜裂を有せる山脈・海底の地質

## 第五章 開南丸の東方沿岸探検……………二〇三

四六時中太陽頭上を廻る・前人未航の海・氷島に遭う・流水海を壓して来る・開南丸の達せし最終點・既往のレコードを破る・船の周圍は流水又氷山・茶褐色の海と氷・縁の多く出入し居る灣・石塊採集・一個の氷山大音響と共に天を指して上る・塵寰に於ける現象と思はれず・大隈灣・空には氷堤海には極鯨・非常なる水烟・再び鯨灣に入る・諾威か日本か・今にも海中の藻屑・海中に落ち込む・極海の鬼たるを免る・虫の如き五個の黑影・手眞似の挨拶・一幅南極の好畫圖・六十尺の絶壁より身を躍らして降る・突進隊一行無事海南丸に乗船す・犬に端艇を曳かしむ

## 第六章 南氷洋の再航……………二二三

コールマン島に向ふ・甲板上の祝杯・太陽始めて水平線下に没せんとす・吹雪の爲船を寄するは危険なり・幹部會議・此儘歸航と決す・磁極附近通過・日暈現はる・怒濤幾度か甲板を洗ふ・寒暖潮の相合する處・初めて星光を見文明界に入る・入港に就ての仕度・新西蘭を認む・海豚群船側に來襲す・ウエリントン港に投錨・長閑なる出帆日和・今尚三千九百餘海里・鳥賊甲板に飛込む・暴風の爲め帆桁を折らる・佛領サンタ、クルース島を見る・南極の垢を洗ふ・船だ船だと叫ぶ聲・小笠原群島眼界に入る・父島に碇泊す・小學校の探檢談・燈臺の光も見えぬ眞の暗・推進機の空轉・神風とや云はん・三年振りに見る富嶽の絶頂・漸く蘇生の思あり・鷹島附近の假泊す・勇ましき萬歳の聲・海南丸横濱港に入る・懐舊談にて持切る・芝浦灣頭に投錨・隊船員の上陸・鬼神を泣かしむ・二重橋畔の最敬禮・雨中に提灯行列・大隈伯邸の歸朝報告式

## 第七章 最初の探検・・・・・・・・・・・・・・・・二五五

出發準備・伯爵夫人の心を込めしチョッキ・大隈老伯訓示的告別の辭・國民的送別會・悲壯の淒氣滿々たり・此目出度き日・五分間演説・二重橋外に奉告文を捧ぐ・空砲より實彈・最後の袂別・五萬の群衆一齊に萬歳を叫ぶ・意氣衝天・英國領事の祝辭・星斗爛たる鏡ヶ浦・さらば！・貨物の大整理を爲す・船長の英斷・冒險の征帆を張る・南へ南へ・漂泊しつゝ夜を明かす・船暈に悩まざる・船艙の惡臭・奇抜なる驟雨浴を行ふ・北回歸線を通過す・甲板上に鯉の山・苦熱愈々迫る・廿五貫餘の大鱈を釣上ぐ・驟雨の度に火事場の騒ぎ・母國では炬燵船中では裸一貫・洋中の月と笛・甲板上の蓄音機・赤道が見える・浴衣一枚の年越し・雪の如き米の飯・雲か山か一髪の青螺・汽罐に故障を生ず・好日和のお祝と號外・恰も彌生の花曇り・今日は母國の天神祭・漸く新西蘭を發見す・富士山に似たるエグモントの高峯・ウエリントン港指して針路を取る・一陣の旋風來る・不安の一夜・ウエリントン港に投錨す・政廳の大なる好意・名譽領事ヤング氏の幹旋・花の如き美人と眞黒の勇士・紀元節を以て愈々極地向ふ・瞬時も早く南極に達せん・見送りの快走艇花に集まる蝴蝶の如し・山なす波濤の襲來・南太平洋の濃霧・海獸に似たる水禽・寒氣漸く強烈・恐るべき三角波・線狀を爲せる奇雲・粲然たる南十字星と三光星・激浪の爲め主帆を損ず・初めて流水を見る・島嶼狀の大氷山・探海燈の如き極光・巨大の鯨群氷山の間に現はる・白皚々たる南極洲・仙境とはコンナ美景・ポッセッション群島の傍を進航す・海上一面に白蓮葉の如き氷・終日氷海を縫航す・之より以南は一面の結氷・屢次航走力を失ふ・偏に天候の恢復を祀るの外なし・南緯七十四度十六分・ハツタとばかり停船・漸く危地を脱す・上陸の希望絶ゆ・一同天を仰ぎ長嘆す・初めて仰ぎし月光・自然に流れ往く・平和なる海上に神武天皇祭・信天翁の群集・南

氷洋中最も危険なる處・美しき小鳥一羽・燐の如き光・豪雨疾風迅雷・濠洲の陸地を見る・入港準備・ダブル灣に投錨

## 第八章 濠洲シドニーの露營生活……………三二五

途方もなき論說・開南丸は公船・一幅の活畫を展せし位地・金殿又玉樓・總員の元氣旺盛なり・目的の變更・日本男子の面目を施さん

# 附 録

## 第一章 南極圏採集標品調査報告……………三三七

植物・動物・海燕屬・アホウドリ・ウミツバメ・雪鳥・水風鳥類・フルマカモメ・ペンギン・カツラドリ・タウンヅクカモメ・魚類・蝦・蟹・地質の大略・グラハム地方とロス海地方との岩石の比較・太古紀・侏羅紀・白堊紀・太古代の岩石

## 第二章 氣象觀測表……………三五七

## 第三章 ペンゲイーン鳥の胃中より出てし 岩石破片研究……………三七七

エドワード七世州地質研究の好標本・結晶片岩・凝灰岩片・硅岩破片・砂岩破片・硬



砂岩片・粘板岩片・片麻岩片・新火成岩片・磁鐵に吸引・此石片を根據とせる地質の推定・火山の噴出も推定し得・地質學地文學上の價值

#### 第四章 探檢用糧食の研究……………三八三

一行廿七名二年間の糧食・白米の變味・玄米は變質せず・重燒麵麩・ビスケット類・素麵と乾鰹鮓・福神漬・醬油・鯛味噌・壞血病を豫防し得たる『ライムジュース』・菓物類・罐詰製法の不完全

#### 第五章 探檢用防寒具の研究……………三八九

南極夏季の防寒服・毛布製防寒服・極地の寒氣程度・寢囊・此囊は是非共必要・冒され易き雪盲病・理想的の雪眼鏡・氷上靴・便利なる藁靴・海豹靴は最も良好

#### 第六章 樺太犬及橇の研究……………三九五

第一次の輓犬運搬・最初の輓犬の斃死・輓犬の病症・第二次の輓犬輸送・其原因は絛蟲・先頭犬・犬の運搬力・荷物の總重量・人間の目方總締五十九貫・十一里二十三町・雪の穴に安眠・手橇・犬橇・實驗より得たる橇の構造法・外國探檢隊の犬橇

#### 第七章 探檢隊衛生報告……………四〇七

猛烈なる船暈・惡臭物の醜酵・百度以上の炎熱・飲料水不充分・船中にて冒され易かりし病症・一同歯痛に悩まざる・一部不健康者の歸國・シドニー滞在中の營舎生活・山川の秀麗と隊船員の慰藉・天候の不定・雪盲症の豫防・凍傷の豫防・第二次の齒痛患者・

酒精類は絶対禁止・一行中一人の病歿者無し

## 第八章 開南丸氷海進航設備・・・・・・・・・・四一五

開南丸の構造・三本櫓スクーナー型・龍骨槻材・氷海突入設備・外部の装置・氷の衝る個處へ厚板・毛製紙と鐵板・中櫓見張所・内部の構造・汽鐘の据付・鐵索及鐵帶寒氣の爲め切斷・シドニー港船渠に於ける修繕・船首の四分の一は全部鐵材張・第二次には三角帆・本邦歸還後の船體検査

## 第九章 南極圏航海概要・・・・・・・・・・四二五

四回南氷洋を航す・オー克蘭ド島の北端・天候最も不定にして險惡なる個所・ロツス線に入る・薄白色の海水・午前一時頃より夜明け・氷山の數増加し來る・不夜の海・高度なる自差・築港防波堤の如き氷山・奇麗なる青色の雲・一時氷圍を脱す・日本人は日本人としての能力あり・依然たる氷海・一旦船を南ヴエクトリア州に寄するの方針・上陸地の踏査・フラム號との邂逅・船の往ける處まで行かん・氷堤に接近する危険・エドワード七世州の上陸・開南丸最終の到達點・氷島・海底の測量・灣形の大變化・天候險惡・新西蘭貴婦人の開南丸訪問

## 第十章 南極探檢後援事業の梗概・・・・・・・・・・四三九

錦輝館に於ける發表演說會・後援會組織の議成る・大隈伯を會長の推す・都下新聞社の應援・用船につきての苦心・各所の演說會・幹部會議・第二報效丸購求・東郷大將の開南丸命名・議會へ建議案提出・恨を呑み濠洲に歸還・第二次計畫・名士と婦人との大活

# 目次終

動・南極探檢應援團成る・各地方の遊説・第二次の出發準備・増派學術部員の出發・富豪の應援・意外の吉報・各種採集品の台覽・盛大なる歡迎會・活動寫真台覽に入る・展覽會・各宮殿下の御成・大御心・國民に及ぼせし効果



# 南極記

## 南極探檢後援會編纂

### 第一章 發端



『百發はつの空砲くうほうは一發はつの實彈じつだんに如しかず』とは世界せかい的偉人おほくましげのぶはく大隈重信おほくましげのぶはく伯はくが、日本にほん南極探檢隊なんきょくたんけんたい一行かうの勇いさましき南征なんせいをおく送るべく、品川灣頭しながはわんとうに試こころみた悲壯ひそうなる告こく別演說べつえんぜつの一句くである。此この一句く中ちゆうには、實じつに百萬言まんげんの長廣舌ちやうくわうぜつにも優まされる深長しんちやうの意味いみが寓ぐうせられて居あた。當時たうじ此この一語ごを送をくつた大隈老伯おほくまらうはくの聲こゑは涙なみだに打顫うちふるひ、其沈痛そのちんつうの語ごと悲壯ひさうの調てうとは、心こころある聽者ちやうしやをして坐そろに暗涙あんるいに咽むせばしめたのである。



當時此事業に對する一般社會の狀態を觀るに、悲觀に非ざれば嘲笑、嘲笑に非ざれば冷罵であつた。老伯は此悲觀と、嘲笑と、冷罵とを以て『百發の空砲』であると斷じた。而して南極に向つて發射したる『一發の實彈』の行衛を徐ろに見守つて居た。然るに其『實彈』は不幸にして結氷に遮られ、烈風に妨げられ井上圓了博士の所謂『日月不照時不利、冰山遮路船難前』で、萬斛の血涙を呑んで、空しく濠洲シドニーに引返したのである。老伯當時の心中は、そも如何であつたらうか。併し老伯には、一片抜くべからざる牢乎たる信念があつた。日本國民には百折不撓の勇氣があつた。

『征け、再び征け、目的を達するまでは死すとも歸るな、』伯は後援會を代表し、日本國民の意思を代表して、直に此意味の電報をシドニーに送つたのである。天涯漂泊の二十七勇士、此一語に接して如何に感じたであらうか。それは素より論ずるまでもない事である。

斯くて、運拙くして、一旦濠洲に引揚げたる勇士は、シドニー郊外の露



營ゑいに夢ゆめも暖あたたかならず、半歳はんさいの間起臥あひだきくわして居ゐたが、時來とききたつて、再び南征なんせいの途とに上のぼつた。更さらに幾倍いくばいせる勇氣ゆうきを以もつて南征なんせいの途とに上のぼり氷山怒濤ひやうざんどとうと戰たたかつて無事ぶじ三萬餘哩まんよマイルの航海こうかいを遂とげ南緯八十度五分なんゐ じゅうはちど ぶんの地に日章旗にっしょうきを翻ひるがへして歸かへり來きたつたのである。其旗そのはたを樹たてし地點ちてんこそ、アムンドセン、スコットに比ひして遜色そんしよくもあれ、探檢船たんけんせんの到着とうちやくせし地點ちてんは、船ふねとして達たつし得えべき最南さいなんの地點ちてんである。本邦ほんほうの航海史上こうかいしじやうに特筆大書とくひつたいしよすべき偉業いげふを成就じやうじゆしたるは、言いふまでもなく、本邦人ほんほうじんの探檢思想たんけんしきやうを鼓舞こぶし、世界的事業せかいてきじげふに指ゆびを染そむるの端たんを開ひらかしめたるの功こうは没ぼつすべからざるものがある。老伯らうはくの所謂一發いはゆる いちぱつの『實彈』じつだんは、果はたして相當そうたうの効果を奏そうした。大和民族やまと みんぞくが企くわだてたる最初さいしよの世界的探檢事業せかいてきたんけんじげうとしては、決して耻はづかしからざる効果を奏そうしたのである。いでや讀者諸士どくしやしよしが便益びんえきを計はかり、第二次計畫だいに じけいけいわくに於おける、濠洲シドニー出發ごうしゅう しどに しゅつぱつを起點きてんとして筆ふでを起おこし、倒叙史たうじよしに做なひて、漸次第一ぜんじ だいい次計畫じけいけいわくの經過けいこを述のぶる事こととしやう。是れ敢あへて奇きを好このむにあらず諸士しよしをして速すみやかに、氷山峨々ひやうざんが ざとして半空はんくうに聳そびへ、旭日瞳々きよくじつどうくとして晝夜没ちゆうやぼつする事ことなき南

極大<sup>きよくたい</sup>陸<sup>りく</sup>の偉<sup>ゐ</sup>觀<sup>くわん</sup>に接<sup>せつ</sup>せしめんが爲<sup>た</sup>めである。



## 第二章 南極圏突進の航海

第一次航海に際し、結氷の爲め上陸不可能の故を以て濠洲シドニー港に假泊中であつた日本南極探検船開南丸は、爾來同港ヂブリ―船渠に於て新武裝を整へつゝあつたが。明治四十四年十一月十九日、再征の機來つて、隊長以下二十七名の隊船員と、一行二箇年分の糧食と、極地橈輓用の樺太犬三十頭とを搭載して、午後三時愈よ待ち焦れたる南征の帆翼を張ることとなつた。

隊長以下隊員は貨物の整理、船長以下船員は出帆の準備と、此日味爽から各々其部署に就き、多忙を極めて居たが、やがて、午前十一時、チラホラと見送者の姿が、甲板に見ゆる頃には、既に諸般の準備は終つて居た。最後の握手の爲めに來船した面々は、同情家ボースウキツキ氏と其家族、顔馴染の紳士淑女團、江木氏夫妻及び在留邦人有志、其他篤志の外

人等であつたが、續いて午後二時、齊藤總領事代三保副領事夫妻、林書記生、日本人會幹事並に會員等約三十餘名、デビット、シドニー大學教授、シドニー植物園長及び其令嬢等も來船し、日影麗らかなる甲板は、是等見送者を以て埋められ、別辭交換の聲に賑はつた。

此日は快晴に加ふるに日曜なので、一見識なき外人連も、快艇、輕舸、思ひくに漕ぎ近づき、開南丸の周圍を繞つて、海上から萬歳を絶叫して居る。間もなく警鈴は午後三時を告げた。見送の群衆は船を去つて汽艇其他に移乗する。此時野村船長は水先案内者と共に、後部船橋に立現はれ、汽笛三聲先づシドニーの山河に告別の響を傳へると、船首にはエンヤくと錨巻く水夫の掛聲勇ましく起る。見送者中デビット教授と、少數日本人とは、途中まで便乗と決したので、船は再度の汽笛を鳴らし、機關は緩やかなる運轉を開始した。

船の徐航を始めると共に、萬歳の聲は海上に湧き、船内からは之に應





じて叫ぶ。隊長は軍服姿凛々しく前部甲板上に佇立し、此盛大なる光景に満足せるものゝ如く、絶えず手の小國旗を打振つて見送者の歡聲に應じて居る。

やがて船のシャーク島附近に至つた時、隊長は便乗のデビッド教授と三保副領事及び日本人會幹事連と乾杯の後、一場の別辭を陳べ、露營中の芳志に對する感謝狀並に來國光の白鞞一振を記念の爲め、教授に贈呈すると、教授は丁寧なる別辭を述べ、總員と握手の後下船し、之に續いて他の便乗者も、汽艇に移乗した。此間日本人會汽艇は、本船と同速度を以て駢進し、艇上と、船上とは軍歌隊歌の合唱絶間なく、其曲調の移る毎に、萬歳の聲は天地を撼がせて湧き立つ。

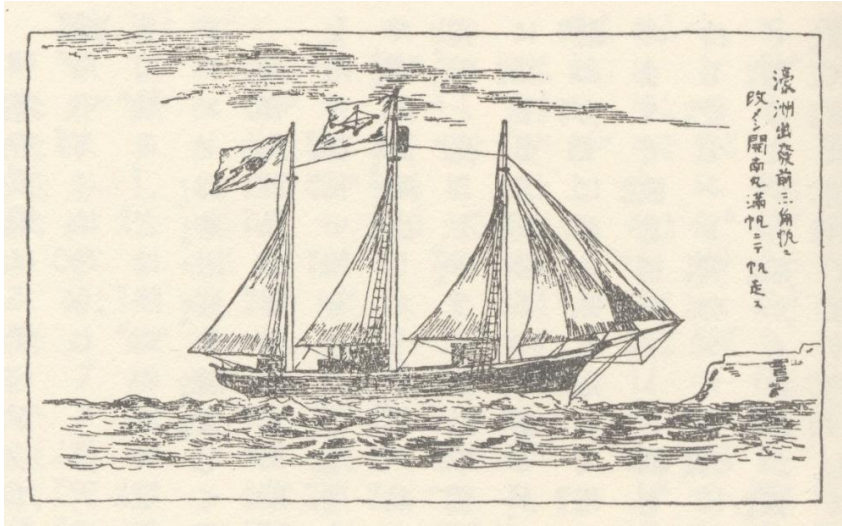
午後四時二十分、開南丸は、パール灣の埠頭附近に一時停船した。此灣は、隊長以下隊員が、過去七ヶ月間露營生活を營んだ記念の地である。今や再征の門出に際し、其里人と風光とに告別すべく、特に命令して停船せしめたのである。



見亘せば、棧橋上に群がれる、紳士淑女の一團は、皆顔馴染の人ばかり、白き手巾、黒き帽子を打振りく萬歳の聲と共に見送つて居る。送らるゝ一同は、坐るに、故郷を辭するの思ひに堪へぬ。海岸近くのドクター・リード氏の信號檣には、中空高く『安全なる航海と成功とを祈る』との萬國信號は掲揚せられ、同時にリード氏の汽艇は波を截つて來船し、熱誠なる別辭を述べられた。

停船二十分間の後、午後四時四十分再び前進を始めた。時しも夕陽半ば没し、暮風蕭々として別離の情を切ならしめた。船がワットソン灣沖合に進航すると、海岸に立並べる、見送人は、頻りに萬歳を連呼しつあつたが、やがて燈臺船を右に見、港口に近づけば、外洋の波、漸く高い、隊長は見送りの汽艇に向ひ

『いざさらば、此處にて永別を告げん』とて、先づ一場の挨拶を述べ船上、艇上の一同は互に舷頭に立並んで『君が代』を合唱し、隊長の發聲にて、祖國の萬歳を三呼し、こゝに、征く者と、送る者との永別は告げられた。



水先案内者の下船と共に、開南丸は汽  
 走を早め、南岬を廻つて、外洋に出た  
 が、折しも北東の順風徐ろに來つたので、  
 新調の三角帆は、白く暮れゆく洋上に  
 展開され、東南の針路に向つて心地よき  
 帆走を始めた。  
 再舉南征の第一歩は、斯くして踏出さ  
 れたのである。  
 シドニー出帆後の開南丸は風波無事二  
 週夜を送つて、十二月三日を水や空なる  
 洋上に迎へた。出帆以來無聊に苦んで居  
 た隊員連は、此日午餐後、船尾に於て、  
 滑稽なる鳥釣を試み、少しく連日の積鬱  
 を散ずることが出來た。

朝來の雲翳は正午に至つて散じ、麗らかなる好晴となつた。すると船尾の方には珍らしくも信天翁や縞鷗等が無數に群翔しつゝ、船を追うて居る。之は陸地の近い證據で、船は今新西蘭の西南端に當る、オー克蘭ド群島附近を航走して居るからである。

最初、此群鳥を認めた安田船工は、一計を案出し魚釣針に薰豚の白味を附け、細長い紐をば二三十間も手繰つて、船尾から海上へと流して見た處が計略虚しからず、信天翁の一群は、互に嘴を揃へて、珍味は拙者が賞翫と先きを争うて、釣針の薰豚を啄む。船からは得たり賢しと、徐々に紐を曳き初めるのであるが、少し焦らせ氣味で一氣には曳ぬ。信天翁の方では此珍味を逸して堪るものかとばかり嘴を開き羽翼を擴げたまゝで、波と摺れくに餌を追うて翔け出す。やがて先鋒の一鳥が、待ち兼て一ト嘴、啣へて中天に舞上らうとすると、ドッコイ其うは問屋で卸さないと、船からは聊か強く曳き初める途端、釣針は口内に引掛る。信天翁は閉口でなく、開口して痛いくで





已むを得ず、釣針に曳れ乍ら、翔けて来て、紐が船尾に達し、海面を離れても、釣らるゝ儘に、羽翼を擴げて居る。此場合最も注意を要するのは、決して其羽翼を舷に觸させぬことで、實に危機一髪の呼吸である、安田船工は其うとは知らず、最早獲物は手中の物と、油斷して曳上げたから、遂に逃げ出され、折角の苦心も晝餅に歸した。

此安田式新案鳥釣法は、見るく數名の模倣者によりて、實行され出した。併し何れも危機一髪、九分九厘といふ處で、羽翼を舷邊に觸れさす爲めに取逃すので。

『アツ失敗つた、残念！』の聲は、口々に順を追うて唱へられる。

安田船工は、發明者たるの名譽を完ふせんが爲めとあつて、苦心慘憺、幾たびかの失敗の後、漸つと一羽を釣り上げると、他の失敗連は、益々焦慮し、何うしても一羽は捕つてやろうと苦心するが、何時も際どい瀬戸際で逃げられて終ふ。

一體信天翁は、一名を阿呆鳥と云はれる丈けに、餘り伶俐でない。一

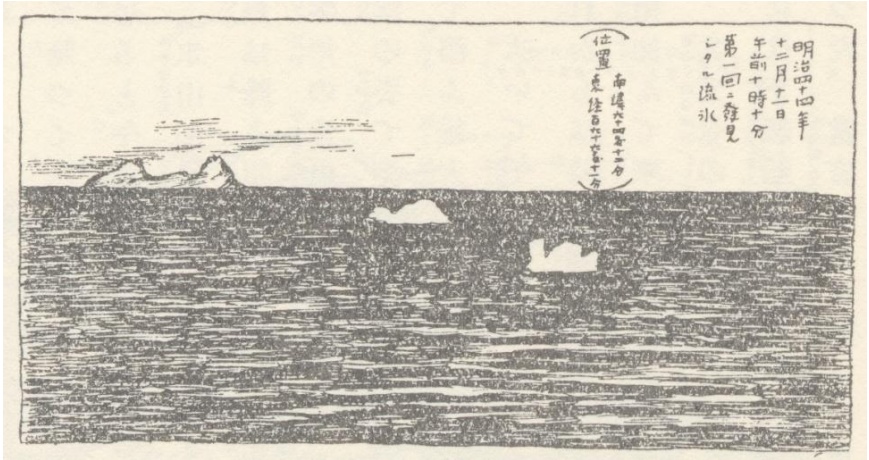
度辛どふじて虎口ここうを脱だつしても、一向かふに懲こりず、再び引掛ひつかる。實じつに氣きの毒どくなものである。兎とに角かく、此鳥このとり釣つりは、獲物えものの一舉きよ一動どうが眼めに見みえるから、尋常じんじやう魚釣つりいじやう以上の興味きやうみがある。

久方振ひさかたぶりの此釣遊このつりあそびも、結局安田船工けつきよくやすだせんこうの一羽はだけで、此日このひは、俄にわかに來襲らいしゆうの急雨きううの爲ために、中止ちゆうしされた。

翌四日よくも幸さいひの快晴くわいせい、鳥群ちやうぐんも前日ぜんじつに倍ばいして多數たすうなので、午後ごごから釣翁つりおうは船尾舵室せんびだしつの後方こうほうに列れつを作つくつた。よく懸かるが又またたよく逃にげるので、成績せいせきは昨日きのふと同様どうやう、處ところがこゝに抜群ばつぐんの功名こうめうを收おさめたのは三井所衛生部長みみしよゑいせいぶちやうである。遂つひに苦心くしんの末釣すゑつり上げたのは、頗すこぶる大なる一羽はの信天翁しんてんおうであつた。重量ぢゆうりやう二貫目くわんめ、兩翼りやうよくの長さ七尺しやくといふ稀有けけうの逸物いつぶつなので、一同どうは歡聲くわんせいを揚あげ、此日このひも此一羽このを獲えたのみで中止ちゆうしされた。

此大信天翁このだいしんてんおうは、武田學術部長たけだがくじゆつぶちやう、村松むらまつ、西川にしかわ、兩隊員等りやうたいいんらの手てで、漸やつと水中ちゆうに押付おしつけて窒息ちつそくの刑けいに處しよしたが、此鳥このとり却々なかくの強力じやうりきで、平素力自慢へいそちからじまんの面々めんめんも、屢次惡戰苦闘しばくあくせんくどうした位くらゐである。





滑稽奇抜なる鳥釣に興を喚んでから、早や一週夜を経て、十二月十一日の朝となつた。一昨九日は、氣温、結氷點に降り、昨日には更に幾度かの下降を示し、初雪さへ、ちらちらと降り出したので、今日の寒氣は豫想せられた。そこで安田船工は、船首に流氷見張所の新築を了し。又た甲板通路の要所には、歩行の安全を保つ爲めに、棧を打付け、海圖室前には蓆を敷き、前部食堂には暖爐を焚き初めるなど、冬支度は既に整へられて居た。

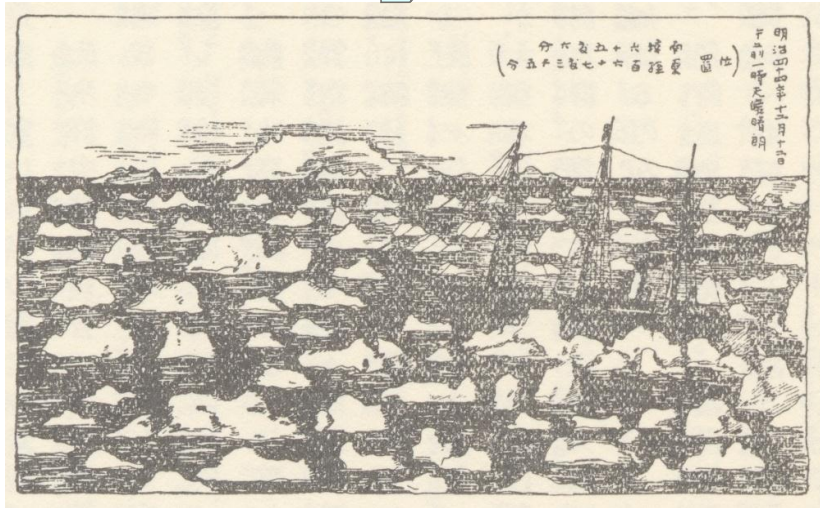
果然今朝は非常なる嚴寒である。上甲板の飲料水槽の底板には、氷柱が下つて見える。當直船員の髭も白く長く凍結して居る。



空を仰ぐと一天隈なく掻き曇り、時々霏交りの雪片が霏々として降つて来る。『今日あたりは氷山が出現しさうだ』など船室で噂して居ると、午前十時三十分頃に、見張所に居た釜田水夫は、大聲を擧げて、『氷山が見えるく、』と叫んだ。今次航海に於ける最初の氷山とて、總員は降り頻る雪の中を甲板に立出で、右舷十哩ばかりの沖を流るゝM字形の氷山に視線を注ぐ。何分南極地方は夏期のことゝて、流氷も半解の姿である。餘り大なる物でもなかつたが、其透明體が碧波に映じて漂ふ雄大なるさまは、相變らず、一行を活氣立たせる景色であつた。

次いで、午後二時、安田船工は、矢張右舷に三四個の流氷を認めしたが、それからは時々刻々に續々と出現し、其光景は宛ら、白色艦隊が堂々舳艫相卸んで來襲するが如く實に莊嚴雄大である。

其光景の莊嚴雄大なる丈に、危険の度も甚だしいので、前部上甲板には下級船員、後部上甲板には高級船員、互に交代で歩哨に立つ事となつた。當直船員は絶えず、甲板を左右して、海上を注視すると共に歩哨



明治四十年七月十二日  
午後一時大晴明

(位 陸 六 五 十 七 七 三 五 分)

よりの報告を得ては、『**卯舵ッ**』『**酉舵ッ**』  
『**垂直舵ッ**』と、舵手に號令し、衝突を避け  
つゝ前進する。

程なく雪歇み、一群の流氷去つて、先づ  
安心と思つたは束の間、午後九時頃から、  
流氷の來襲以前よりも夥しく。遂に船は群  
氷中を縫航するに至つた。來襲の流氷は何  
れも融残りで、其形状は千狀萬態である。  
即ち門の如きもあり、小山の如きもあり、  
釣鐘に似て圓頂なるものや、靴底の如く  
中部の凹形なるものや、實に千差萬別で、大  
冰山屹として聳立するかと見れば、氷盤平  
らかに浮出し、峰あり、洞あり、三角あり、四

角あり、實に形容の辭なき奇觀である。

此氷群中縫航の苦心は、到底筆紙に盡されぬ。殊に氷塊が、航路を遮ぎる時、船の舷端に衝突して、突如砲聲に似たる異響を發する光景は、全く凄愴の極度で、總員の神經は頓に興奮した。

此氣味惡き異響のうちに暮れ、明けて、翌十二日となつたが、相變らずの雪空、流水は多々益々海上に浮遊して居る。船は此中をば、右に避け、左に轉じて、例の如く縫ひゆくのであるが、船首に氷塊の當る響は、斷續の度益々急となり、小なる氷塊に衝突しては、船首之れに打勝つて碎くが、大なる氷塊に逢つては、時に進航を停止されることもある。斯くて結局氷群の爲めに、進航速力大に阻害せられ、縫航苦心の度は、時々刻々に加はるのみである。

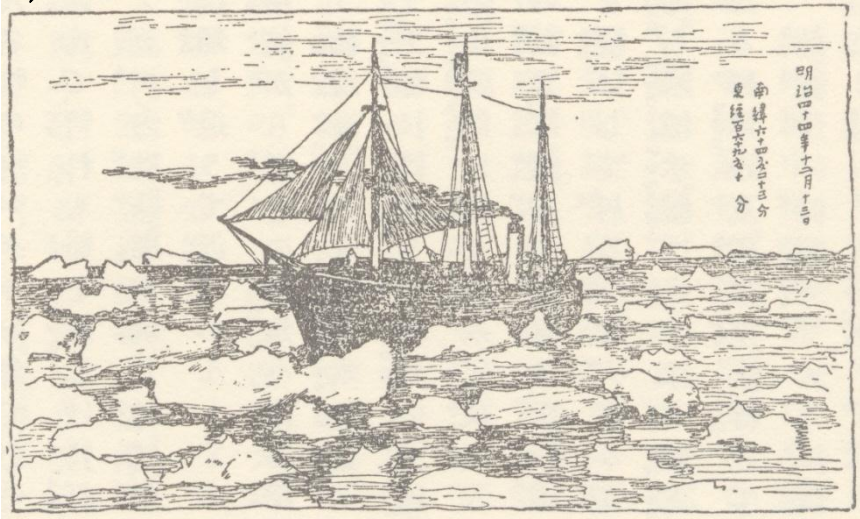
此時、風波全く絶え。緩漫なる潮水は、悠然たる上下動を無數の流水に與へて居る。どす黒き雲中に純白の色あるは、南極産の雪鳥の飛翔けるので、皚々たる氷山上、此處、彼處、に在る無數の黒點は、云はずと知れ



た名物のペンギン鳥である。此ペンギン鳥は、例の滑稽なる歩を運んで、何れも船を珍しげに打眺め、中には水中を潜つて舷側に來りガアガアと駄味聲を發しては、甲板へ飛上らうとするもあれば、又た或時は船を追うて近づかんとするも、船脚の迅きと潮流の工合とで失望し、中途から元の流氷へ泳ぎ歸るもあつて、先生却々愛嬌な眞似をやる。

此邊海上の氷塊は、氷餅とは違ひ、盤狀ではあるが、周圍不規則であつて、上部には軟き雪を戴いて居る。偶には高さ數十尺、周圍數丁に亘る氷山其間に混じ、試みに、眼に入つたゞけの、形狀を形容すると、洋風建物の如き、軍艦型を成せる、眼鏡橋型なる、さては食卓狀なる等、種々の奇形を現はして居る。此大なる方の流氷は、氷堤の破片であつて、小なる方、即ち氷塊氷盤は多くは水面上三呎位であるが、皆冬期海岸に張詰られたる野氷の夏期に至り碎けて流出したるものである。

此夜十一時、花守アイヌは、流氷の小塊を拾集して湯を沸かせたので、總員は交るく久振の沐浴をなし、出帆以來の積れる垢を洗ひ落した。



進むに随ひ、流氷愈よ多く、船は悪戦苦闘  
 の中に夜を明して翌十三日を迎へた。遠雷  
 の如く、砲聲の如き、氷と船首との衝突の  
 音は、終夜少しの絶間もなく、ドシーンと突  
 當つては、ザーくと舷を軋る音が長く続く。  
 漸く其音が消えると又、新らしくドシーン。  
 寢臺に横はつて此音響を聞くと、宛も樽の  
 外側から、棒で啄かれて居る心地がする。  
 船體は其都度猛烈なる反動と、氣味悪しき  
 動揺とを起し、實に不快且不安の限りであ  
 った。  
 甲板に出て見ると、大小の氷群は、海上一  
 面を掩ひ、前後左右、只一白、船は之



れを突破して進んで居るのであるが其等の群氷  
 は一夜のうちに著るしく其厚さを増加し、小なる  
 ものは船の進航を遮り、中なるものは船を停止  
 せしめ、大なるものは船をして烈しき震動と共に  
 一二寸退却せしむる程で、其航行の困難名状すべ  
 くもない。仍て船は、成るべく厚き箇所を避けて、  
 薄弱なる箇所を擇び、左縫、右折、苦心慘憺、人力  
 の限りを盡して、進んでゆく。  
 一天を掩ふ白鉛色の雲は、低く海面を壓し、見亘  
 す限り重疊起伏せる氷塊の形状は益々奇態を示  
 し、高臺の如きあり、逆鋒を立てしが如きあり、又  
 白毛氈を敷並べたるが如きもあつて、近く之を望  
 めば壘々たる奇岩怪石の一大集合で、遠く之を望  
 めば萬里に亘る茫漠たる一大氷野の

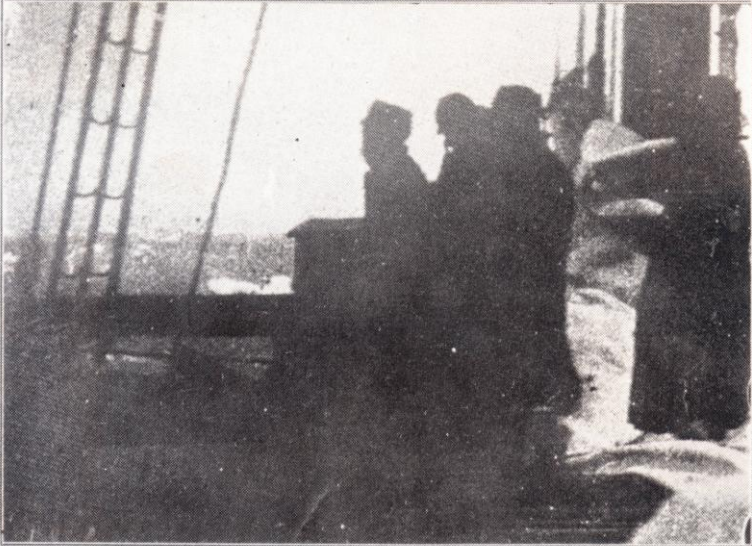
如くである。

此大氷野の處々に碧色を呈するは、氷なき蒼海の一部で、其處には幾條の汐柱遠近に立並び、此邊海上鯨群の棲息夥しいことが知られて、壯觀無比である。

午後二時、一陣の雄風吹き來ると共に、船は辛ふじて氷圍を脱し、其全く氷軍を離れて、漫々たる碧波上に迂り出たのは午後七時であつた。併し流氷は稀少になつたと云ふのみで、依然斷續して流れて來る。其流氷上には、例のペンギン鳥、三々五々立並んで船を眺め、白き信天翁、黒き南極鷹の一群は、高く低く飛翔しつゝ、流氷を追うて居る。

次第に進航する途上、漂來れる一箇の流氷上に、悠然身を横へて、春夢正さに濃かなる二頭の海豹あるを發見したので、船からは二人の射手互に射撃し、八發の彈丸を其長驅上に浴せ掛けた。併し海豹は、頗る平氣なもので、一發毎に首を擧げては四圍を見廻し、何處の惡戯小僧が石片を投げ、吾輩等の安眠を害するかと云はぬばかり、又た首を俛れて





明治四十四年十二月十三日撮影

開南丸より右舷一哩に現はしれ大氷山を望む

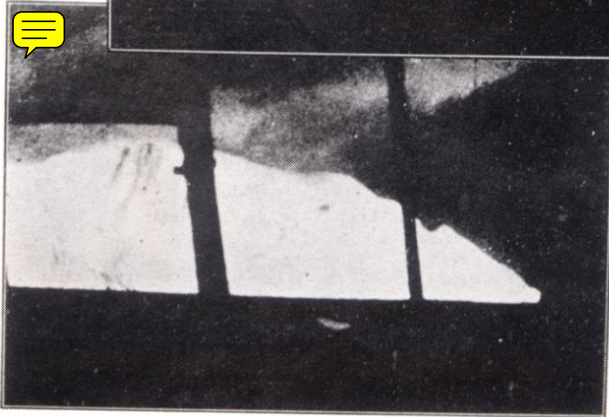
高サ三百尺周圍約六哩の驚くべき大氷山  
(其一)



大氷山(其二)上部の氷山に接續  
せる中腹



大氷山(其三)中腹に接續せる尾端



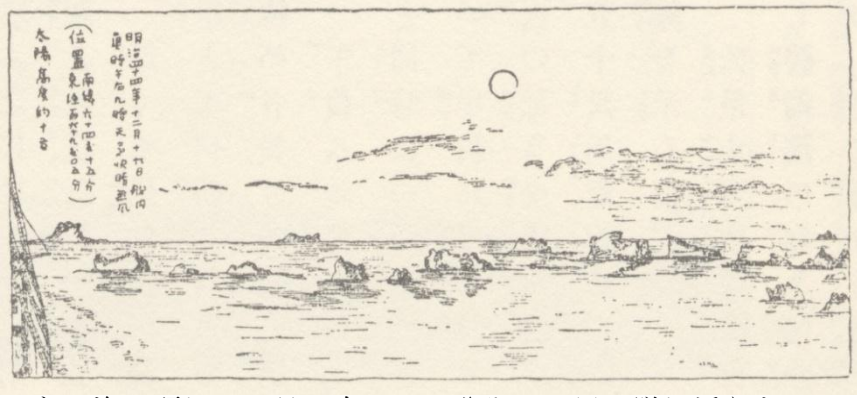
明治四十四年十二月十三日撮影

終ふ、之には船上の射手も張合抜して、大切の彈藥を空費するも無益の業と、其儘射撃を中止した。

斯くて船は帆影高く南航を急いだが、妖魔の境にも似たる南極海の事とて、何時如何なる危険に遭遇するやも知れずと船員の警戒嚴重を極め、各員寸時の油斷もない。

午後八時頃に至り、突如一條の怪光は、赫灼として船の右舷を照し、之と同時に一脈の奇寒は船を襲うて俄然總員を戰慄せしめた。一同驚いて、甲板に出て見ると、今し稀有の大怪物は、右舷一哩の海上に出現し、火の如き夕陽を浴びて、燦たる光輝を發して居る。此怪物は、高さ三百五十尺、周圍約六哩の大氷山で、氣温爲めに華氏七度以上の急劇なる下降を示した。

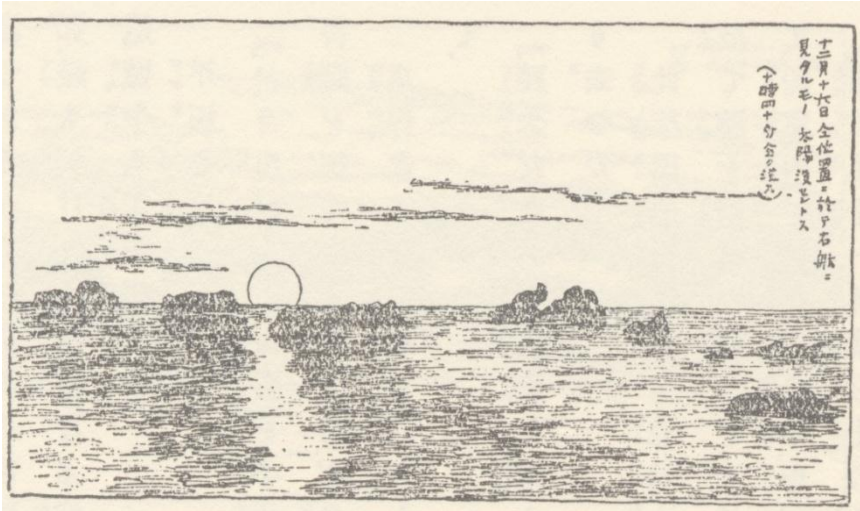
此最大氷山は、底部では一箇のものであるが、海面上には二分劃を示し、碧瑠璃の如き海水は、其間に漂うて居る。其前方なるは、一大山岳の如く、之に續ける後方の一部は、兀然として圓塔の如く聳え、怪姿堂々と



して、急潮に漂流して居る。其光景は莊嚴とも雄大とも殆ど形容の辭がない。田泉技師は、直ちに活動寫眞に撮影し、學術部員は之が測量に従事し、隊員は争うてスケッチ帖に鉛筆を走らせる等、甲板は非常なる騒ぎであつた。

大氷山の出現から三日目の十六日午前九時四十分、突然甲板上に一發の銃聲が起つた。『何事ッ？』と飛出して見ると、花守アイヌは、折しも右方の舷に寄り來る一頭の海豹に向つて、一弾お見舞申したのであつた。

其處へ折よく通り合せた最少年の柴田船員は一頭、頭、の海豹が、花守アイヌの一彈を見事に背に受け、海水を鮮血に染めて去りも敢えず、稍や苦悶の體なのを見て取つて、急ぎ着衣を脱ぎ捨



十二月十六日全佐置・特ノ石船・見タルモ、本船没トス。今時四十分合ラズハ

て腹部ふくぶに一條いっぴょうの命索いのなづなを巻まいて、  
『花守君はなもりくん、頼むぞ』と云いふや否いな、ざん乎ぶと  
ばかり海上かいじやうへ一足飛そくとびに躍をどり込んだ時とき、甲板デッキに  
は早はや多おほくの見物客けんぶつかく來集くわいじゆうして、今いましも、シ  
ヤツ一枚まいのまゝ海中かいちゆうで、身長しんちやう六尺しやくもあらう  
といふ海豹かいへうと、大格闘だいかくとう中の柴田船員しばたせんいんに、『し  
つかり遣やれッ』と聲援せいえんを與あたへて居ゐる。  
此時このとき海上かいじやう、風波ふうは全まく收おまり、船ふねも漂泊へうはく中  
であつた。大海豹だいかいへうは地ちの利りを得えた上うへに手疵てきず  
を負おうて居ゐるから、獅子奮迅ししふんじんの猛勢もうせいである。  
柴田船員しばたせんいんは此勁敵このけいてきにも屈くつせず、巧たくみに怒いかれ  
る牙きばを避よけ乍ながら、接戰せつせん數合すうがふに亘わたつたが、何分なにぶん  
海水かいすいは、攝氏せつし零下れいご五分ふんの低てい

温であるから、三分間の戦鬪を續けた後、いざ捕縄を打たうとする一刹那、鐵も裂けなん猛烈なる寒氣に、流石の勇士も四肢の自由を失ひ、遂に遺憾乍ら手を退いた。

甲板では、

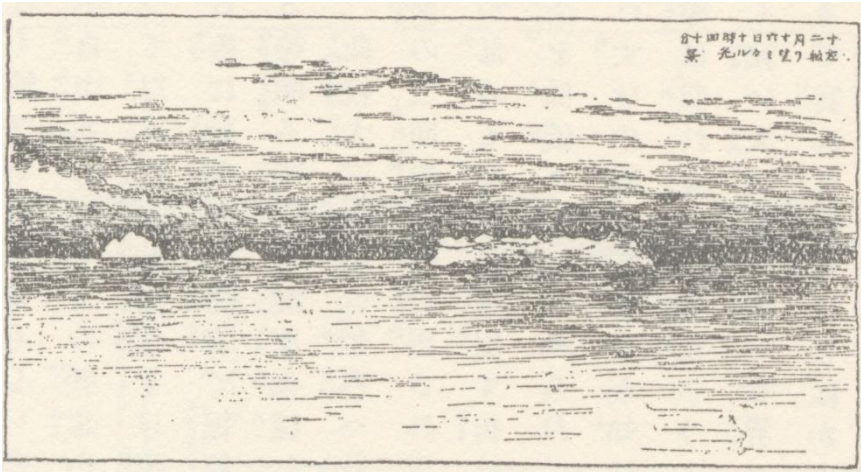
『ソラ曳け！』と、命索を手繰つて柴田船員を甲板まで曳上げたが、激戦苦鬪を経たにも拘はらず、身體には少しの負傷もない。

勇悍なる柴田船員は今しも敵か、水底深く潜り入らうとするのを見て、

『残念だなア』と切齒し乍ら、同僚に伴はれ、暖氣を取るべく寢室へと下り去つた。

此柴田船員は、曾て郡司大尉の部下に属し、東察加、千島等の北洋の荒波で腕を鍛へた勇士である。過般も隊員連が、稀有の大動搖に辟易して、船室内で蟄居の最中、甲板上で武田部長が、

『諸君見給へ、輕業以上の大輕業だッ』と叫んだ聲に、何事ならんと出て



見ると、成る程之は輕業以上である。

宛も十一月廿九日の事であつた。夜來の激

浪は益々狂暴を逞ふし、船は宛ら鞠の如く

に翻弄せられ、傾斜計三十五度以上を示すと

いふ、出帆以來の大動搖であつたが、此最中を

柴田船員は、職務とは云ひ乍ら、大危険を冒し

て、後部帆檣の絶頂に攀ぢ登り、上檣の縛着

作業に従事したのである。

すべてに於て、勇悍氣鋭の柴田船員は、今日

の海豹との格闘に、武名を輝かしたので、

隊長は特に果物一罐を褒賞として與へた。

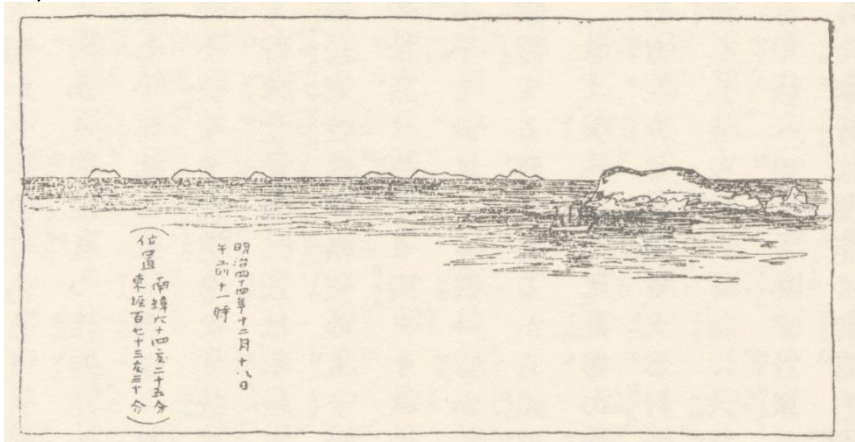
節約に節約を重ねて來た飲料水も、程

なく缺乏を告げるらしいので、一日三回づゝ多量の水を飲む。犬共に、自由あらせじとの懸念から、山邊、花守の兩犬奉行は、船の群水圏に入つて以來、連日舷側近くに流れ寄る氷片の引揚方に勞し、又た雪後には、日陰に融残つた積雪で、握飯ならぬ握雪を拵らへて、犬共に分配してやる等、頗る靉犬の健康保護に力めた。

此靉犬三十頭は、船内へ收容以來、山邊、花守の兩アイヌによりて、朝晝夕の三回、甲板へ曳出され百目許の鯡や鱒の干物と、水とを與へて居るが、毎時も箱から曳出す折は、却々の騷擾を演ずる。狭い窮屈な箱詰生活を餘儀なくせしめられて居る犬共に取ると、此一日三回の自由が、何れ丈の愉快であるか知れぬ、それ故愈々一方の戸が開かれたが最後、彼等は、我れ先きに飛出さうとするのみならず、他の箱の犬等も、一時も早く狭い天地から廣い世界へ出たいと焦り、吠える、唸る、戸を噛む、箱を蹴るで實に耳を聳せむばかりの喧囂を極める。

これは尤も無理がない、平生靉犬等の押込められて居る小舎といふは、





都合三箇あるが、其一は甲板物置場の前右方に、高さ六尺長さ五尺奥行三尺五寸を二段に仕切り之に十頭を收容し、其二是海面室の前方機關部の右方、短艇前に三間許の板圍をなし、之に十四頭を收容し、其三是、其板圍の前面に高さ三尺五寸幅六尺奥行三尺の區劃をなし、之に四頭を收容してある。處が之では尚ほ二頭の收容場が不足である。仍て臨時に學術室の戸の外側をトして、野天生活をなさしめて居る。尤も此二頭に對しては、出帆早々、適當の小舎を新築してやる筈であつたが、何分連日の大傾斜の爲めに、大工仕事は意外に延期せられ、雨には濡れ次第、怒濤には浴び次第、畜類乍ら

も嘸かし不快であらうと察せられる。

斯かる窮屈且つ慘澹たる生活であるから、箱の中の連中でも傾斜の甚しい時には、五寸乃至一尺づゝは、箱中で互に迂り轉げ、身體と身體との不快なる衝突をなす故に、其都度に悲鳴を揚げ、噛合を始める。わけて野天生活の二頭は、不快と不安との爲め、日夜吼え叫ぶ聲は、少からず、隊長室並に學術室の人々の安眠を害した。併し此厄介千萬なる輓犬の世話に任ずる兩アイヌの勞を思ひ、犬其ものゝ境遇を察したならば、不平も云はれず、又一方から考ふれば、此喧囂も要するに犬群の強壯を實證する譯であるから、迷惑乍らも心強く思はれた。

さて、元へ戻つて、此等の犬共が甲板へ曳出されると、彼等は狂喜して、右方左方を飛廻る、犬奉行が之等を一定の場所に繋ぎ集めるまでには、少なからぬ骨折で、殊に犬共は習慣として、己が小舎内では用便せぬから甲板へ出すと、必ず放尿し脱糞する。それが更に場所を擇ばないから、犬奉行は彼等に食餌と水とを與へ、三四十分を経て、又た地獄の古巢

内に追込んで後の甲板掃除は、随分辛いお役目と云はねばならぬ。

それも、一日三回だけで済めばよいが、時々深夜犬群が、箱の戸を蹴破つて、甲板を駆け廻り其度に例の放尿脱糞で所嫌はず汚し廻るから、之を追込んで、後始末をする勞苦は決して尋常でない。

併し職務に忠實なる犬奉行は、犬群の嬉々として打騒ぐのを指し乍ら。

『之れからの航海は、益々寒地向ふのであるから、犬も今の元氣なら、前回とは反對に一頭も殺さず無事極地へ上陸させる事が出来るであらう』と、髭武者面に得意の微笑を浮べて語る。

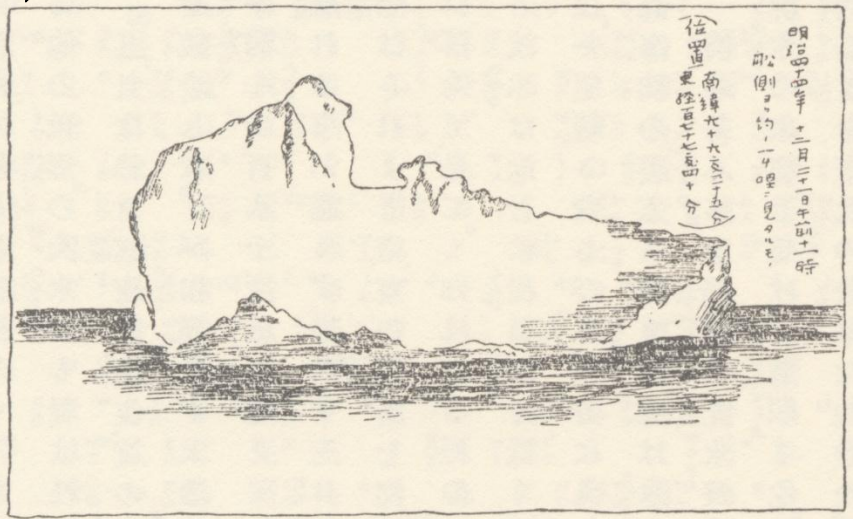
山邊、花守、の兩アイヌは、斯く日夜本職の犬の世話に勞した上に帆の掛替には必ず船員と共に働き、又た學術部の小使をも、兩人交代で兼務し、其他隊員にも立交つて何くれと立働くのである。兩アイヌの常に勤勉、精勵、忠實なるには、總員の齊しく感謝措く能はざる所である。

こゝに憐を催したのは例の野天生活の二頭である、十二月一日の夜

半、三十度以上の大傾斜最中、件の二頭は數回の怒濤を浴びたと見え、全身づぶ濡れになりて、學術室に忍入つた。之は餘りの苦痛に、繩を切て飛込んで來たのであつた。室内の一同は、一種の臭氣によりて犬の來來と知り點燈して見ると果して例の二頭、さも憐哀を乞ふのも、如く如何にも同情に堪へぬので、臭いが兎も角一夜の宿を許してやつた。

一たび群氷海を脱出したる開南丸は、十二月二十日午後二時、又もや群氷の包圍中に陥つた。船員一同は一刻も早く之を横斷せんものと、死力を盡した効あつて、四十分間の苦闘の後漸く碧海上に脱出するを得たが、やがて、午後四時に至るや、突如右舷に鋸状の大氷山現出し、同時に大吹雪が來襲した。船は急遽針路を轉じ、南東東東北と、寸進尺退、數回も帆の掛替を行ふ等、非常なる苦心を以て航走したが、夜一夜の難航の後、翌二十一日に至つて、漸く正南の針路を航するに至り、午前八時東經百七十七度線から、愈よ南極圏内に進航した。

然るに、午前十一時、船も水も一時に凍結するかと思はるゝ一脈の奇



寒かんと同時どうじに針路しんろの水平線すいへいせん上に大範圍だいはんゐに亘わた  
 る一箇いの白光體はくわうたい現出げんしゅつし、次第しだいに眼界がんかいに近きん  
 接せつして來くる。見みると、一大氷山だいひやうざんである。船ふね  
 では大おほいに驚おどろいて直たゞちに船首せんしゅを北東ほくとうに轉てん  
 じたが、從來じゅうらい未だ曾かつて見みざる大氷山だいひやうざんで、其その  
 高さ六十尺位しやくぐらゐんちやうなん延長マイル何十哩たつに達たつして居ゐ  
 か解わからぬ。船ふねでは其末端そのまつたんに達たつせんものと、  
 航走かうそうを急いそぐのであるが、進すすめどもく更さらに  
 末端まつたんを見みない。加くはふるに猛烈もふれつなる大吹雪おほふぶき  
 は數次しばしば來襲らいしゅうし波浪はらう亦た立騒たちさわいで、大おほいに進しん  
 航かうの困難こんなんを來きたした。

『此氷山このひやうざんを離はなれて南進なんしんしたら、ロツス  
 海かいであらう』と船長せんちやうは云いふ。併しかし何時いつ

に至れば全く離れ得るものか、前途全く測るべからずで、加ふるに前面に他の靴形の大冰山も現はれ不安は刻一刻と募るのみである。

其日は終日、其夜は終夜、魔の如き冰山を右舷に見乍ら東東北の針路を航走した。が相變らず末端を見ずして、翌二十二日となった。船は午前一時、百八十度線を越えて西経に入つたが、此日も終日大冰山から離れる事ができず、翌二十三日午前二時漸く其東端と覺しき點へ出た。船はそれより南東の航路を採つたが此長冰山は非常に長き氷堤が崩れ落ちて、果ても知らざる程の大冰山と爲つたものと思はれる。

流氷は進むに従ひ漸く低く、何れも大氷盤の群集せるものとなり、船は一望皚々たる浮氷の野に入った。氷上に積れる雪中には、ペングイン鳥海豹の遊ぶも見え、奇聲は氷又氷を傳うて天地の靜寂を破つて居る。

例の苦心多き縫航で、此氷野を前進すること二時間に亘つた時、又々群氷の來襲を受け、前進頗る危険となつたので、止むなく逆航に決し、急遽船首を東北の針路に向けた。今日此頃の航海は、一たび群氷を截抜

けると、直ぐ又た氷山の出現に逢ひ、辛ふじて氷山を避けて進まふとする  
と、又もや群氷に遮ぎられる。前門の猛虎、後門の兕狼、一難去つて又一  
難斯くて連日の難航の爲めに、船長始め船員の重なる連中は、心身過勞の  
結果、強度の神經衰弱に悩まんとするに至つた。

『先日來の海上の狀態から察すると、船は餘りヴキクトリア州近くを航  
するよりも、寧ろ深く西經に航入し、エドワード七世陸に沿うて進む方、  
得策である。今航しつゝある此海上は、エドワード七世陸方面より、氷堤  
の下を洗ひ、ヴキクトリア洲に沿うて流るゝ海流の爲めに流水の多くは斯  
く此處に集滯するものであらう』との説、學術部より出たので隊長は午後  
三時より船尾室に於て、幹部會議を開くことになつた。其會議の模様は左の  
通りである。

隊長『今日まで船長の苦心はお察申す、併し隊長としては、一刻も早く  
上陸がしたい。又デビット教授の注意をも参考に資したく、學術部よりの  
意見も參酌を願ひたい』。すると船長は海圖を抜き指し乍ら



三日の狀態を考ふるに十分南進は能きると信ずる』

武田學術部長『デビッド教授の説によると現在船のある地點の邊より西經に入り南寒帶流に随つて斜にエドワード七世州に到り、更に潮流を利

用して鯨灣に往くが可なりとの事だ。余は斯せんことを希望する』

隊長『若し西經の群氷に沿うて南進しても、又前途に群氷ある時は、五十海里位北航し、尙ほそれにて血路なき時は、已むを得ぬから群氷や氷山の研究を遂げて歸ることになつても、之は詮方なき事である』

船長『諸君方に其れ丈けの決心が有ればよろしい。然し予は船長とし



ては西經せいけいに深く進すすめば、エドワード七世陸一帯せいランドよりの氷堤アイスバリアが、數百哩すうマイルも突出しゅつしゅつし居ゐりて、再び西歸せいきするの愚ぐを學まなぶことのあるやも知しれざるを怕おそるるのである。若もし此かくの如ごとき事こととならば、航海者こうかいしやとして予よは天下てんかの嘲笑てうせうを招まねぐに至いたるであらう。昨年さくねん（前回ぜんくわい）の航路こうろは、予よに十分ぶんの自信じしんがある。若もし不幸ふかうにして、不結果ふけつぐわに終をはつても、其方そのほうが同じ心配しんぱいをするにしても、國民こくみんに對たいし申まはし譯わけが立つことになると思おもふ』

以上いじやうの如ごとく、甲論こうろん、乙駁おつぱく、討議とうぎを重ねた結果けつぐわ、左さの如ごとき判決はんけつとなつた。

（判決）東經とうけい百八十度、西經せいけい百七十度の間あひだから、群氷ぐんひやうに沿そうて進航しんかうすること。

斯かくて、船ふねは東航とうかうの汽走きそうを急いそいだ。折をりしも南風なんふう頗すこぶる強つよく、密雲みつうん益ますます々あんなん暗あん澹たんとなり、飛雪ひせつ粉ふん々ぶん、巨濤きよとう狂亂けうらん、天地物てんちもの凄すこき光景くわうけいを呈ていした。

十二月じふにがつ二十六日午前にちごぜん一時じから、中部甲板ちゆうぶでっきに於おいて餅搗もちつきが始はじまつた。

先まづ炊事場すゐじばには、勇いさましく蒸汽スチームを吹ふく大釜おほがまの上うへに、安田船工やすだせんこうの手てに成なつた二箇この蒸枿むしわくが載のせられてあつて、其外側そのそとがはには、「初春はつはるの壽立ことぶきたつや釜かまの



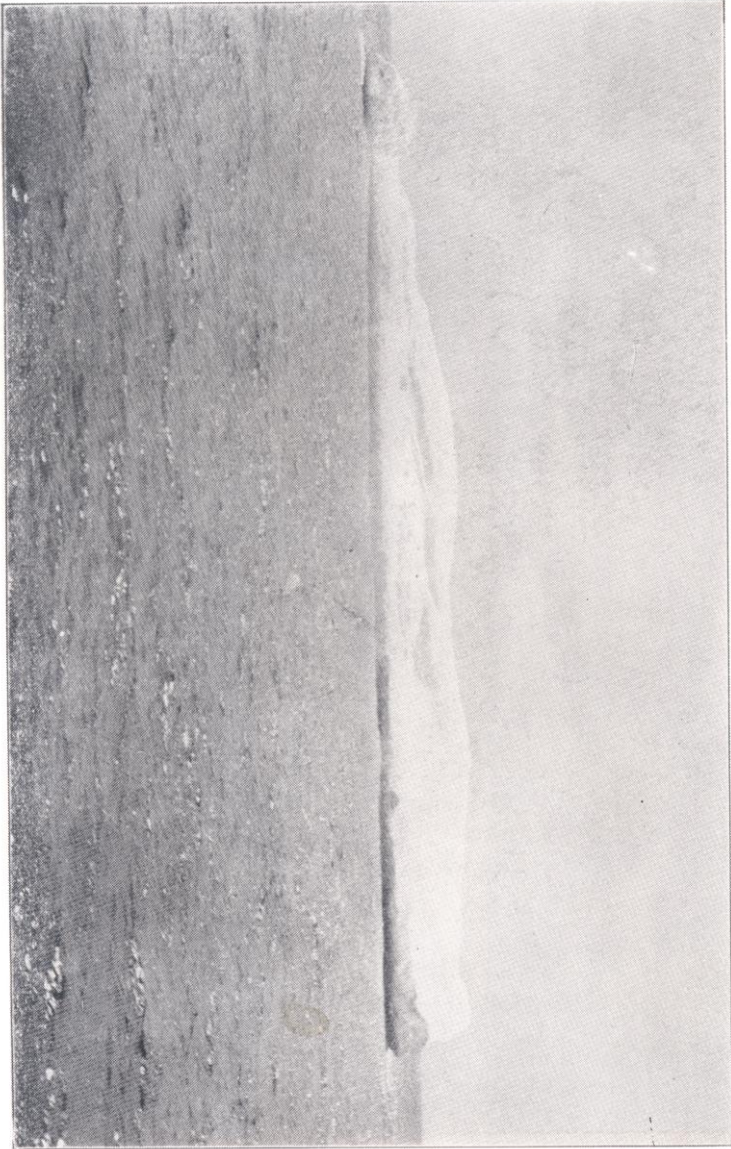
上<sup>うへ</sup>」とか、「松竹梅<sup>しょうちくばい</sup>」とか、「目出鯛<sup>めでたい</sup>」とか、吉祥<sup>きつしやう</sup>の文字<sup>もんじ</sup>が記<sup>しる</sup>されてある。釜<sup>かま</sup>の前<sup>まへ</sup>には渡邊<sup>わたなべ</sup>厨夫<sup>くつぷ</sup>や、安田<sup>やすだ</sup>船工<sup>せんこう</sup>等<sup>ら</sup>が、餅米<sup>もちこめ</sup>の世話<sup>せわ</sup>と鯿<sup>あん</sup>ごしらへとの最中<sup>さいちゆう</sup>で、西川<sup>にしかは</sup>隊員<sup>たいいん</sup>、高川<sup>たかが</sup>船員<sup>せんいん</sup>の兩人<sup>りやうにん</sup>は、今<sup>いま</sup>しも臼<sup>うす</sup>から、移<sup>うつ</sup>した餅<sup>もち</sup>を俎板<sup>まないた</sup>に載<sup>の</sup>せ、粉<sup>こな</sup>をふるやら、撫<sup>な</sup>でるやらで、供餅<sup>おそなへ</sup>拵<sup>ごし</sup>らへに忙<sup>いそ</sup>がはしい。

甲板<sup>デッキ</sup>へ出<sup>で</sup>て見<sup>み</sup>ると、柴田<sup>しばた</sup>船員<sup>せんいん</sup>、花守<sup>はなもり</sup>アイヌの兩名<sup>りやうめい</sup>は、調子<sup>てうし</sup>よく雙方<sup>さうほう</sup>交互<sup>かたがはり</sup>に搗<sup>つ</sup>き下<sup>おろ</sup>す。側<sup>そば</sup>には後鉢<sup>うしろはち</sup>巻<sup>まき</sup>の藤平<sup>ふぢひらくわ</sup>火夫<sup>ちやう</sup>長<sup>ちやう</sup>が、頻<sup>しき</sup>りに杵<sup>きね</sup>の下<sup>した</sup>をくぐつて、手<sup>て</sup>返し<sup>がへ</sup>をする。處<sup>ところ</sup>が杵音<sup>きねおと</sup>は却々<sup>なかくい</sup>勇ましいが、何<sup>ど</sup>うも搗<sup>つ</sup>き下<sup>おろ</sup>した時<sup>とき</sup>の音<sup>おと</sup>が悪<sup>わる</sup>い。何<sup>な</sup>故<sup>げ</sup>かと思<sup>おも</sup>つて、熱<sup>あつ</sup>く視<sup>み</sup>ると、之<sup>これ</sup>は尤<sup>もつとも</sup>千萬<sup>せんばん</sup>だ。餅<sup>もち</sup>臼<sup>うす</sup>は醬油<sup>しやうゆう</sup>樽<sup>だる</sup>の明<sup>あ</sup>いたので鏡<sup>かがみ</sup>を取<sup>とり</sup>去<sup>さ</sup>り、底<sup>そこ</sup>に圓木<sup>まるき</sup>を埋<sup>うづ</sup>め、其中<sup>そのなか</sup>に帆木<sup>カン</sup>綿<sup>パス</sup>を敷<sup>し</sup>いてあるといふ、廢物<sup>はいぶつ</sup>利<sup>り</sup>用の品物<sup>しなもの</sup>である。それ故<sup>ゆゑ</sup>搗手<sup>ちやうて</sup>が力<sup>ちから</sup>を出<sup>だ</sup>す割<sup>わり</sup>に一向<sup>かふもち</sup>餅<sup>つぶぐ</sup>の粒<sup>つぶ</sup>々<sup>ぐ</sup>が消<sup>き</sup>えない。それから其儘<sup>そのまゝ</sup>では動搖<sup>どうごう</sup>つくので、二尺<sup>にしゃく</sup>ばかりの高<sup>たか</sup>さある船艙<sup>せんそう</sup>の水<sup>みづ</sup>除<sup>よ</sup>けへ頃合<sup>ころあい</sup>の臺<sup>だい</sup>と共に銚留<sup>かすがひどめ</sup>にしてある。兎<sup>と</sup>に角<sup>かく</sup>、不完<sup>ふくわん</sup>全<sup>ぜん</sup>乍<sup>なが</sup>らも一<sup>しやう</sup>生<sup>けん</sup>懸命<sup>めい</sup>に知<sup>ち</sup>恵<sup>ゑ</sup>袋<sup>ぶくろ</sup>を絞<sup>しぼ</sup>つたこと丈<sup>ただ</sup>けは知<sup>し</sup>られる。

そこで腕<sup>うで</sup>一<sup>いつ</sup>ぱいの力<sup>ちから</sup>で搗<sup>つ</sup>いて居<sup>ゐ</sup>るうちには何<sup>ど</sup>うか恁<sup>こ</sup>ふか餅<sup>もち</sup>になる



明治四十二年十二月十三日撮影



(山米の哩六約圍周尺十五百三サ高) 山米大しひ遺出カ丸南開



南極圏に於ける元旦祝宴



アデリー、ペンギン島と隊員

南緯九十六度四十分東經七十一度五十分の上海に催せし明治四十五年元旦祝宴



が船は動搖する、寒氣は烈しいと来て居るから、却々の骨折である。さて柴田、花守組の一日が終むと、次が三井所、村松の新組が入代つて搗き初めると、其最中に雪片霏々として飛んで来る。大降りにならぬうちにと、杵を早めやうとすると、杉丸太の杵は、幾度か臼の縁邊に當り、木屑は餅の中に飛込むといふ次第、漸つと一日、生命からぐ搗き終ると、次は渡邊、鎌田組で、杉崎船員も手傳ふ。それが終むと其次が武田、多田組といふ風、斯くて都合五斗の餅を搗き終つたのは午前六時頃であつた。

餅搗き騒ぎで、賑はつて居た甲板は、一と頻りの降雪で白くなつた。やがて、それが歇むと、前日午前頃から少なくなつて居た流氷の姿が、又たチラくと針路に現はれて来た。そして午前九時には、又もや群氷の包围を受けた。船は右曲、左折、帆、汽兩走で長時間の苦闘の後、辛ふじて脱出し得たが、午后五時に至つて、高さ三百尺、周圍二哩位の冰山、右舷二三哩ばかりに出現すると同時に、三四町乃至十町位の氷盤は、群を成して來襲し、船體は之に進航を遮ぎられると共に背後よりも包み込ま

れて終ひ、進退維れ谷まつて終つた。

此時西川隊員、安田船工、山邊、花守、兩アイヌの四人は、船から氷盤上に下り、シャベル、バケツトを以て雪を掬ひ、四斗樽並に犬の料水槽に運び込んだ。此機敏なる動作のうちに、船は漸く血路を開き、辛うじて突貫けることを得た。最初汽走のみの時、前進を阻止されて終つたので、折からの風力を利用し、總帆を展開して、漸く突進したので、氷盤上の雪の掬集は、帆を張る間の早手業であつたのだ。

斯くてホツと一ト息を吐く間もなく、第二の氷群は來襲した。併し幸にして今回ののは、少し軟かで、且つ小型であつた爲め、前回に比して容易に突貫けることを得た。併し骨の折れたのは前回同様であつた。此時に輓犬一頭を試みに氷盤上に下すと、犬は喜んで走り廻つたが、結氷の薄弱なる部分へ行くと、前肢が海中に陥りさうになるので、尻込みする状は頗る滑稽であつた。又た此時下方の氷盤と氷盤との間から二回程海豹が首を出したので、花守アイヌは早速銃を持つて撃たうとしたが、其れつ限りで、

首くびを出ださなかつた。

恨うらみ多おほき明めい治ち四し十じゅう四し年ねんも、餘あます處ところ纒わづかに三さん日にちなる十二月じふにがつ二十九にじゅうくにち日は朝あさ來らい雲うん翳えいなく、出しゅつ帆ぱん以い來らいの快くわい晴せいなので、甲が板ばんも亦またた出しゅつ帆ぱん以い來らいの賑にぎはひを呈ていし、洋やう々くたる喜き色しよく、靄あい々くたる和わ氣きは、開かい南なん丸まるに満みち充みちた。

波は瀾らんを經へたる平へい和わは、活いける平へい和わである。船せん長ちやうは船ふねの安あん全ぜんの爲ために人じん事じの限かぎりを盡つくさうとする。隊たい長ちやうは少しょう々くの危き險けんを冒をかしても上じやう陸りくを急いそがうとする。孰いっれも共ともに此この事じ業げふに生せいを賭とした人ひと、死しを決けつした人ひとである以上いじやう、雙さう方ほうに五ご分ぶん々く々の理りはある。そこで雙さう方ほうは互たがひに讓ゆづつて、隊たい長ちやうは船せん長ちやうを急いそがせ乍ならも其その人ひとを信しんじ、船せん長ちやうは隊たい長ちやうの意いを諒りやうとして、益ます々く努力どりよくの度どを高たかめる。斯かくして漸やうく連れん日じつの氷ひやう圍ゐを脱だつし、今けふ日は幸さいはひにも無む氷ひやう海かいに入り、出しゅつ帆ぱん以い來らいの快くわい晴せいを迎むかへ、こゝに雙さう方ほうは、互たがひに事じ業げふの爲ために議ぎ論ろんを交まじへた効かひの頭あはれたのを笑わらつて喜よろこんだ。之これこそ眞しんの平へい和わである。而しかして幹かん部ぶの融ゆう合がふは即すなはち部ぶ下かの融ゆう合がふである。前ぜん途とには目も的くてきのロッス海かいが目もく捷しやうの間あひだに控ひかえて居ある。油ゆ斷だんは出で來きぬが先まづ此この分ぶんならば大だい丈ちやう夫ぶと、總そう員いんは出しゅつ帆ぱん以い來らいの愁しう眉びを開ひらき



連日の難航を語り艸とした。

太陽は前日頃から頭上で環状を描くのみで、更に水平線下に没しない。全くの永晝である。甲板より見亘す四方の海面は、波收まつて一片の氷痕もなく、船は和風に帆を張りつゝ南進して居る。行手の波、間時々鯨群は潮柱を立て、それが日光に映じて美はしき虹を彩どる。

さて、甲板に集つた連中の行動の鳥眼瞰を示すと、隊長は多田、村松の兩隊員に命じて蓄音機に耳を娛ませて居る。當直船員等は各々甲板上の作業に勞して居る。花守、山邊の兩アイ又は、池田學士の寢袋裁縫に餘念なく、床屋は鋏をバチ付かせて、非番船員の髪をチョコキくやつて居る。安田船工は海深計の製作をなし、天狗連の圍碁は二三の彌次馬連に取圍まれて興を湧かせて居る。三井所部長は寫眞機の革細工を試み、武田部長はコンパスの差異を調べて居る。又た中には銃を手にして甲板を右往左往する者あれば、欄平に凭つて雲や波のスケッチに夢中になつて居る者もある。而して此等の連中を田泉技師は、一々活動寫眞に撮影して居る。





甲板の處々には稀に逢ふた快晴とて、好機逸すべからずと、久しく日光に曝さなかつた寢具を干し連ねてある。すべてが恧ふして長閑さうである。太平らしく見へる。

處が、此平和は、天候の劇變を以て名ある南極の海上とて、久しきに亘ることを許さなかつた。午後四時太陽が一片の雲中に其光を隠すと共に寒氣急に加はり、やがて午后十時に至るや、吹雪さへ襲來した。そして半雪半曇の天候は、翌三十日と、翌々三十一日とに續き、氣温は著るしく下降し、船の傾斜は絶えず三十五度位に達した。

併し此日の快晴は、何れ丈け總員の健康を増進したか知れぬ。殊に此日を利用して整へられた迎年の準備は、他の風雪の日の十日以上に相當するものであつた。

元旦は來た。希望多き明治四十五年の元旦は來た。總員は爽味より起出て、隊服隊帽整然として、隊長室に至り、先づ上兩陛下の御眞影

に禮拜し、次いで各員互ひに新春の慶詞を交換した。門松飾のない元朝ではあるが、前途に光明の輝やいて居る年の始めとて、一夜明くれば氣も變るの諺に洩れず、總員の顔には何となく元氣が溢れて居て、笑ひさざめく聲も、自から活氣を帯びて聞かれる。

午前七時三十分、雑煮の祝が始まつた。下戸も上戸も、一盞の葡萄酒を屠蘇の盃に代へ、さて祝ふ雑煮の椀數、餅の數、二年振の故郷の味を鱈腹賞翫し、厨夫の忙しげに餅焼くさまも、亦た新春の一畫題である。

午前十時から甲板上で、遙かに皇居に向ひ、遙拜の式を擧げる筈であつたが、南風猛烈を極め、怒濤甲板を洗ふといふ始末ゆゑ、已むを得ず一兩日延期することにした。

正午一同は祝儀の引出物を分配した。添付されたる目錄を披くと、鯛一枚、淡雪（餅米製菓）一箱、鯛一尾、ビスケット十五枚とある。一同は鯛一尾とあるのは、何れ滓漬か乾物の鯛であらうと思つた處が、豈に圖らんや、鯛と申すは立派な大鯛の焼物、驚くなかれ目の下八分といふ稀代

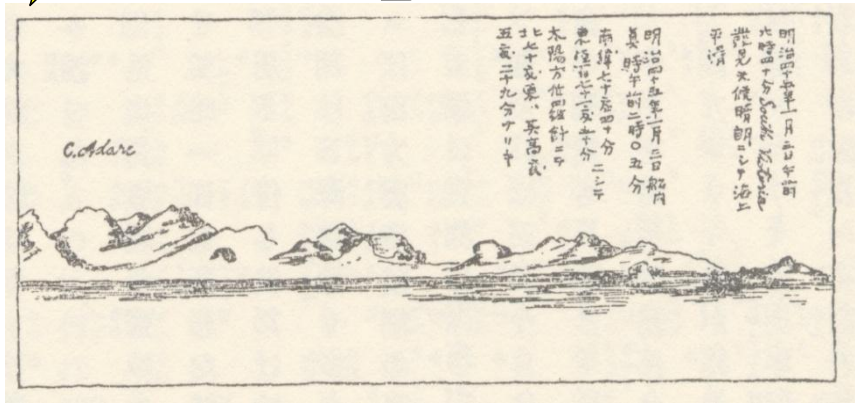
の大鯛、正體はぎすけ煮と知れたので、ドツといふ哄笑の聲は船内に漲り渡つた。

兎に角風波が荒いので、室内餘興も延期と決し、煖爐會議に花を咲かせて此一日を暮したが、翌二日に至つても、強風は依然として吹き荒んで居る。併し波だけは稍や和らいだやうである。甲板に出て見ると、空翔ける海鳥漸く多く、船の陸地に近づいたことが解る。夕刻花守アイヌは、南方雲烟糶糊の間に、山岳を認めたと云つたが、一天の曇色濛々として遂に實測は出来ずに終つた。

翌くれば三日、今日は快晴で、波濤靜穩、軟風徐ろに海面を吹き、飛ぶ水禽の羽翼も長閑さうに見える。

午前七時、島事務長は、

『陸だツく、陸が見えたぞツ』と、喜ばしげに各室へ觸れ廻つたので總員はドヤくと上甲板に集まり何れも萬歳々々を絶叫して景氣づく。取わけ隊長の喜面と船長の欣顔とは出帆以來の血色を呈した。



身に沁み渡る寒風の凜烈たる中に佇立して遙かに針路を見亘すと、巻層雲の切間から、白姿の連山糲糊として現はれ、針の如き高峰の絶巔奥へくと立並ぶ。此雄大なる陸影は、幾多日、水と雲と氷との外何者をも見なかつた總員の眼には又なく懐かしき景物として映じたのである。

『いよく南極の玄關口へ來たのだ群山は吾等を  
 出迎へて居るのだ』と思へば、心躍りて覺えず痛  
 快！を叫びたくなる。

是等の群山、連峰は、サウスヴエクトリア州の  
 西端に位するアドミラル山脈の一帯で、アドムミ  
 ント、ロビンソン等の峻巔、萬尺高く天を衝き、  
 壯觀無比、南極地方ならではの到底見られぬ絶景



である。

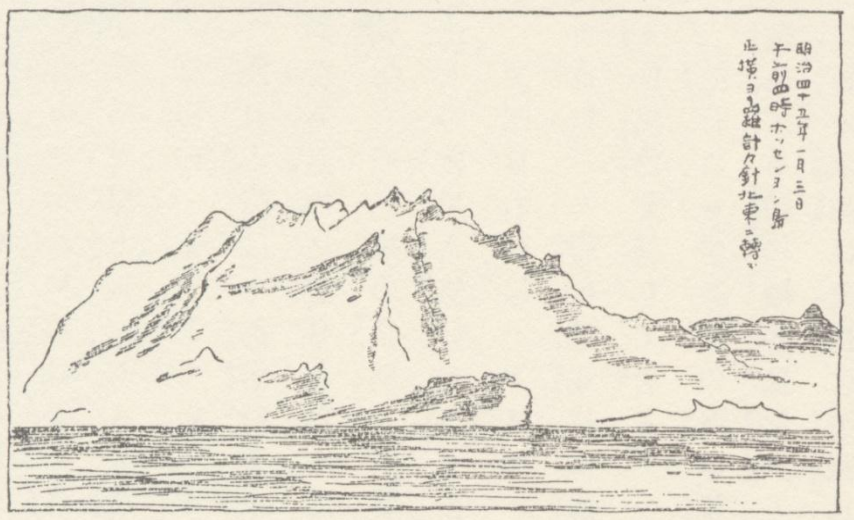
船の進むに随ひ、陸影漸く展開し、ロバートソ  
ン灣南岸の氷山、雪野は皓として、視界に入り、層  
雲中よりアデレー岬の高臺、屹として現はる。此  
邊は一帶の絶壁で三十度乃至四十度の傾斜を示せ  
る雪畦連亘し、處々の氷雪の融解部は班々たる黒  
点を露はして居る。試みに十五哩の沖から望遠鏡  
を透して見ると、一帶の丘陵は悉く氷岩より成つ  
たもので、光線の反射の爲めに岩石かの如く見ゆ  
るので、融解部の黒色を呈せる斑點は、全く火山  
岩の露出したものであることが知られた。

先きに見えたる連峰は、此半島の後方に聳立し、  
白雲層中に隠見出沒して居たが、やがて午前

十時に至るや、前年スコット大佐の地理研究分隊の上陸したる、アデレー岬も、既に船尾の位置に退き、針路にはホエウエルの白姿愈よ鮮やかに眼前に立ち、再逢のサビネ山も次第に後方に遠ざかり、淡く積層雲中に其白頂を露はして居る。

此風景を背景として、午後一時より學術室外上甲板に於て、延期中であつた元旦遙拜式は舉行された。各員は防寒服装にて整列するや、隊長は北方に面し、遙かに皇居に向つて式辭を朗讀し、終つて陛下の萬歳を三唱した。此式の爲めに特に掲揚せられたる帆檣上の國旗、隊旗は、軟かき波風に翻りつ、一波動かぬ疊の如き波間には、鮪の游泳かと思はるる態度して、ペングイン鳥の一隊巧みに波間を出没し、又遠近の岸邊には、ペグイギン鳥の奇聲斷又續折しも舷上萬歳を三唱の聲に和して、寂々たる天地に反響して居る。

やがて、夕陽斜めに針路を照すと共に、赤色の水平線上に帽子形の大小數箇の島影は、點々として視界に入り來つた。これはペングイン鳥



船泊四十五年一月三日  
 午二時ハッセンオン島  
 止揚ヨ品磁針ノ針北東ニ時

の巢窟さうくつとして名高ながかき、ボッセツシヨボッセツシヨン群島ぐんとうである。

船ふねは斯かく陸岸りくがん近ちかき航路こうろを進すすんだが、程ほどなくロツス海かいに突とつにせんとした時とき、水平すいへい線せん忽たちまち起伏きふくし、見みるく無數むすうの氷塊ひやうくわいは、船ふねを目蒐めがけて來襲らいしうする。こは大變たいへんと、船ふねは早々さうさう沖おきへくと轉進てんしんしたが、流氷りうひやうの群來益ぐんらいます々多ますく、何れも解殘いづりと見みえて、或は鼎あひの如ごとく、或は釣鐘つりがねの如ごとき、畸形きけい状じやうのものも打交うちまじり、深藍色しんらんしよくの海波かいはに隠見あんけんしつゝ、漂へう流りうして來くる。それが、時々ときぐ船端ふなばたに衝突しやうとつする毎ごとに、又た例れいの不ふ快くわいなる異響あきやうを發はつする。船ふねは速力そくりよくを早はやめて東北とうほくに轉針てんしんすること數すう刻こくの後のち流氷りうひやう漸げんく減げんじたので、再ふたび平穩へいおんな

る ロッス海かいの 碧波へきは上に 浮うかび出でることが 出で來きた。

此この ロッス海かいの 波なみは、全まったく外洋ぐわいやうと 區別くべつせられて 靜穩せいおんなること 油あぶらを 流ながせし如ごと

く、又またた海上かいじやう。ペングイン鳥てうの 繁殖はんしよくすぶ頗おほる多おほく、奇態きたいなる 遊泳ゆうえいの 態さまは、慥たしかに

極海きよくかいの 一景けいとして 數かずへる 丈ただの 價値ねうちがある。

此この 日ひ太陽たいやうは、午ご前ぜん零時れいじ五十四分ふんに、南水みなみ平線みすいへいせん三度ど三十分ぶんまで 沈下ちんかしたが、

後のち直たちに 旭日あさひとなりて 東方とうほうより 北方ほくほうにと 上昇じやうしやうした。併しかし夕陽ゆうひと 朝陽あさひとの

光線くわうせんの 強弱きやうじやくとか 變化へんくわの 模様もやう等は、普通ふつうの 日出ひので、日没ひのいりどきの それと、少すこしの 差さ

異あも 無ないやうである。

翌よく 四日か、右舷うげんに ハースチエール、ピーコック等とうの 諸峰しよほうの 聳立しやうりつするを 見みて 進す

む。一帯たいの 海岸かいがんには 斷岩だんがん起伏きふく連亘れんこんし、白雪はくせつの 爲ために 斷續だんぞくとして 處々しよしよに 黒色こくしよく

を 呈ていして 居ある。

流石さすに ロッス海かいの 波なみは、細波さいはも 立たてぬ 靜しづかさで、小流氷せうりゆうひやうの 極きはめて 稀まれに 散さん在ざい

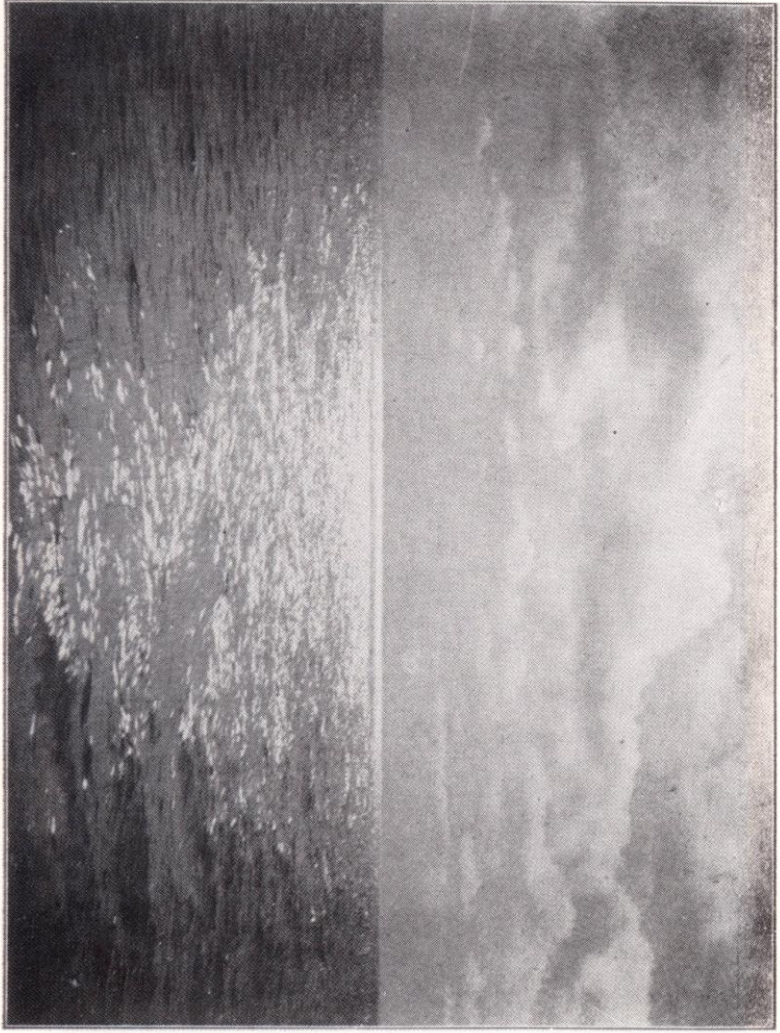
する間に、極鯨きよくげいは 悠然ゆうぜんとして 潮柱しほばしらを 立たて 連つらね、ペングイン鳥てう、海燕うみづばめ、海鴨うみかも

等などの 水禽みづどりは 縱横じやうわうに 飛翔ひしやうして 居ある。

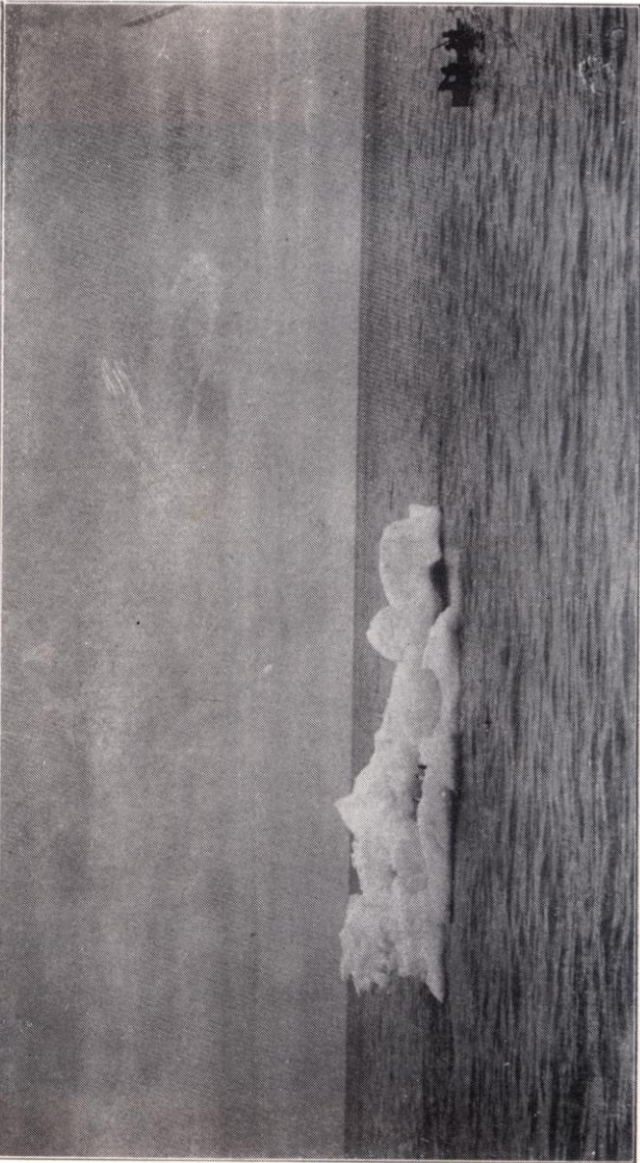




明治四十五年一月三日撮影



波と雲るけ於に園橋南



明治四十五年一月五日撮影

(よ見を鳥同の上山米也員隊四の(近)邊渡守花邊渡川西は行一)景先く赴に狩鳥ン一イグメンペの上山米



此邊海上に海流の存在することは、シドニーにてデビッド教授よりの注意もあつたが、果然船は其海流に乗じて居たことが知れた。海流の速度は四哩強で、陸岸近くを通過して西北に向うて居るが爲め、逆航せる船は當然、大に速度を減殺せられた。現に今朝通過したる、ダウンシヨア岬も數刻の後なほ船の右舷に見るといふ始末であつた。

そこで船首を東北に轉じて、只管陸岸を離れる工夫をして、正午漸く二哩沖へ出た爲めに先づ海流の範圍を脱出することを得た。

折しも陸影は既に眼底より去らんとし、只だ連峰の絶巔のみが水平線上に林立して見える。此時行手遙かに一點の黒子を認めた。隊長は、双眼鏡を手にし乍ら、島か、船かと、判斷に苦んで居たが、やがて高川舵手が帆檣上の見張櫓よりの展望によつて、慥かに一箇の冰山なることが知れた。

午後八時太陽が、西南方水平線上三竿の高さに至つた時、巻層の亂雲東北に長く立罩め、非常なる雲形美を現はした。又月暈の一部現はれ、



太陽より右方の雲外より青紫、黄、赤と、二尺許の幅員を以て六尺ばかり弧狀形に現はれ、光彩燦爛たる美觀を呈したが、三十分の後消滅した。午後十一時、右舷にコールマン島を水天髣髴の間に認めたが、時しも夕陽將さに地平線に近づかんとし、銀山の倒影は長く海波に映じつゝ、非常なる壯觀を呈した。

翌五日前八時、船の進行中、左舷約一哩の沖合を流れ来る十間四方位と思ふ一箇の氷塊の上に、大海豹の横臥して居るのを認めた。柴田船員と山邊、花守の兩アイヌとは、『こりや素敵な逸物だ、前回取逃した奴とは違つて、此れ位の奴になると、敵にしても手應へがあるツ』と云ふので、早速船長に交渉して船を停めて貰ひ、短艇を海上に卸すや否や、一挺の獵銃と二本の六尺棒とを用意し、三人の勇士は擢を急がせつゝ流氷目蒐けて一直線に漕ぎ進んだ。

斯くとは知らぬ氷上の海豹は、春眠曉を覺えず位の心持で、グーク寢込んで居ると急航した三勇士のうち花守、柴田の兩戰士は、ヒラリと



氷上に飛乗るや否や手の六尺棒に満身の力量を打籠め、バタくくと馳せ付けて、一人は眞向から、他の一人は横合から不意に一棒づゝお見舞申した。すると海豹の先生、ムクリと首を擡げたが變な敵の襲撃に聊か狼狽し、水中へ潜り込ふとして、のたりくと逃出さうとする、此方の勇士は、何を小癩な！ 逃がして溜るものかいと、柴田戦士が、一生懸命の腕力を集めた第三の棒を、「エーイツ」の懸聲と共に撃下した。と同時に、機こそ來れと銃口を擬して居た山邊戦士は、今だッ！ とばかり、轟然一發！、又一發！ 二彈の連發命中と共に、さしも巨大の海豹も、美ン事往生仕つた。

氷上の三勇士は、各々兩手を高くさし上げて、船へ戦捷の信號をすると船からは「萬歳々々」を連呼して立騒ぐ。

やがて黒く長き海豹は、氷塊側の短艇内に運入れられ、艚音勇ましく、凱歌を奏して歸船すると、船からは早速トモ綱を短艇に投げ、太綱にて滑車を利用しつゝ、エンヤくと五六人で、戦利品の引揚げを行ふ。

甲板へ引揚げて見ると、強か頭部に負傷して、既にそれが致命傷で絶命し居り、鶏卵大の大眼球は、無惨にも飛出して居て、淋漓たる鮮血は甲板を唐紅に染め成した。

此海豹は、身長七尺、胴の太さ四尺、重量四十貫、全身黄褐色を帯び、牝性である。隊長は花守、山邊の兩アイヌに料理方を命ずると、兩人は早速六寸ばかりの小刀を手にし、多年鍛へた海獸料理の腕の冴へ工合は、斯の通りでムいとばかりに、先づ海豹を仰臥せしめ、腹から眞一文字に刀を入れて、皮と肉とを剥ぎ初めた。流石、極寒の氷海中に棲息する動物だけに脂肪の厚さ一寸五分に達して居る。

指揮役の隊長は、豫て北洋の探検に於て、十分の経験ある事とて却々精しいものである。其説明に由ると、脂肪は燃料となり、搾汁にすると燈油の代用ともなる。肉は一種の臭氣を有するも、一度湯出して煮ると儼に食卓の上すことが出来る。又其犬牙は、細工物の材料に適して居ると。



切開された肉を見ると、其色紫黑色を呈し、體軀の割合に少量である。即ち臟腑が全身の三分の二を占めて居る。武田三井所、兩部長は、胃腑の解剖研究を試みたが、其結果食料は、烏賊、等の魚族であることが知れた。又た胃囊中には、約二吋大の帶褐黄色の寄生蟲約百箇の存在を認めた。又た一分乃至一分二厘位の無数の白球をも認めたが、之は食へる魚類の眼球なることが知れた。尙ほ十二支腸周圍の壁に一種の房状を成し、其形状ひるの如きもの五六十個、一塊となりて寄生し居るを發見した。且つ其鰭は、四足の退歩したもものなることは明白である。即ち前後四箇の扁平三角形の鰭の外面には、明かに五箇の爪を有し、陸上動物の如き、指骨、蹠骨を合生して居る。

約二時間の後、料理は終つた、四斗樽一杯の臟腑と脂肪とは、犬の食料にすることとし、最上肉は食卓用に供し、皮は鹽漬となして標本の一に保存し、甲板の血汐は、洗流す代りに、綺麗に犬に啜らせた。

同じ日の午後二時頃、コールマン島は既に背後に没し、水天相接する

ところひやうくわい、えんきん、ふゆう、  
處氷塊の遠近に浮遊するを見るのみなる時しも、突如右舷に當つて現はれ  
きた、めん、りうひやう、ほう、マイル、すいしようとうじやう  
來つた一面の流水、方一哩の水晶島上に、點々たる黑影を認めた。見張船  
員は。

『アレくペングインが居るッ』と叫んだ。其聲に應じて滿船の勇士は甲板  
じやう、たちあら  
上に立現はれた、そして異口同音に。

『ペングイン鳥狩をやらう』と、動議と決議とは同時に成立した。朝來の  
かいへうがり、いさ、たつ、をり、せんちやう、こころよ、ふたゝ、ていせんめいれい、くだ  
海豹狩に勇み立た折とて、船長も快く再び停船命令を下した。やがて、  
ボート、やうじやう、をろ、どうじ、のりこ、せんし、めんく、にしかわ、わたなべ、ちか  
短艇が洋上に卸されると同時に乗込んだ戦士の面々は、西川、渡邊（近）、  
わたなべ、おに、はなもり、にん、てう、てつぽう、ていない、ようい、ふなうたいさ、すいしよう  
渡邊（鬼）、花守の四人、一艇の鐵砲を艇内に準備し、欸乃勇ましく、水晶  
とうさ  
島指して、漕ぎ出した。

此時甲板には、隊長を始め總員一同、結果や如何にと、片唾を呑んで監視  
して居ると此方の短艇はやがて氷面の隆起部の背後に漕ぎ寄せて、先づ敵  
に悟られない方略、作戰計畫は却々巧妙なものである。と見る數分後、高  
しよ、たちあ、ば、てう、ひと、ちか  
所に立居たる三羽のペングイン鳥は、人の近づいたのを知つたと見え、



翼を擴げて聊か恐怖の態度を示すかと見た。次の瞬間濁つたガアくといふ鳴聲を立てた。それと同時に一方の氷の陰から、突如渡邊（鬼）戦士立現はれ、素早く一羽を手捕りにし、驚き逃ぐる他の奴を、追驅け廻して居るうちに花守戦士も上り來り、大活劇の後漸つと二羽とも小脇にかい込み、氷の陰に姿を消したが、程なく短艇は二人を收容し逃げ惑ふて居る、前方の他の二羽を攻撃すべく急漕した。

やがて短艇が氷塊の岸に近づくと、再び渡邊（鬼）戦士は、飛鳥の如くヒラリと身を躍らせて飛上り、手馴付ける如き仕草を以て、稍や近寄りかけたが、敵もさる者、何條沈黙を守らうぞ。例のガアくを連呼しながら、少々亂調子で飛廻り、跳廻り、容易に人手に入りさうも無い。其うち花守は、再び立現はれて助太刀に加はつた。

斯くて二人に二羽の好取組、鳥も人も立つたり轉んだりの大立廻り、滑稽とも何とも形容の出來ぬ活劇振には、見物役の甲板の連中は、各々腹を抱へて笑ひ倒れた。

やがて、此二羽も遂に捕虜となつて短艇に載せられ、凱歌高く母船へ漕ぎ歸つたが、又もや前方の浮氷上に、數羽の敵を發見したので、短艇は其儘船と共に駢進し、約二十分後に第二の活劇の幕が開かれた。

今回の乗組戰士は、村松、渡邊（鬼）、花守、吉野の四人、何れも輕装して漕ぎ進んだ。前回には鐵砲の必要が無かつたのに鑑み、今回は携帶せずに出發した。

短艇は間もなく浮氷の岸に着いた。見ると宛らの一小島、振り積む雪は結氷して、絶えず打寄る波浪の爲めに浸蝕せられ、宛ど船蟲の害を被つた木材のやうになつて居る。

先づ渡邊戰士が飛上ると、續いて村松、吉野、花守といふ順で氷上に立つ。と氷面上の水鳥特有の惡臭は、プンと四人の鼻を衝く。そこで四人は四方から、四羽のペンギン鳥を敵として、包圍攻撃を開始したが、其結果難なく三羽は生捕られた。即ち二羽は吉野戰士の手中一羽は村松戰士の手中に收められた。捕はれたペンギン鳥は、太くて短い嘴を開け、

黄色の口内を見せ、苦しきうな聲を張上げて鳴いて居る。

こゝに残念なのは、今一羽の敵の行衛を見失つたことである。何とかして捜し出し、是非とも其奴も捕虜とし、此水晶島の全軍塵滅を完ふせねばならぬと、手を分けて頻りに搜索したが、見當らぬ。

すると船から隊長が、右方の一角を指して、『アッ居るく、其處に居るッ』と注意呼ばりして居るので、早々眼を轉じて見ると、巧みに逃げたペン先生、一たびは水中に身を潜めたが、同志の面々の運命見届けの爲めとあつて、氷岸の一角に立つて、此方を凝と見て居る。

『ソレッ』と云ふので四人一齊に立向はふとしたが、何分其位置は、削つた如き危壁の彼方とて、氣は焦つても、足の踏場も無い地勢。そこで陸軍の方は斷念して、海軍の方に據ることゝし、村松渡邊の二戦士は、短艇で其方に出向ひ、麓から段々と高所に迫上げて、辛つと生擒の目的を達した。

一體此強敵を、何うして然う巧みに捕虜に出来たかと云ふに、ペンダイン鳥

は兎とは反對で、高所に登る事の拙劣さ加減は、何とも形容の出来ぬ不様な態度である。其代り低所に向ふ時の迅さは、却々侮り難き速度である。三十分に亘つた此戦鬪の後、短艇は船へと引返した。前後二回の戦ひに、八羽の捕虜を獲たので、珍客として特に捕虜室をば學術室外側の一劃に設け欸待至らざる莫き好遇を與へた。

是等の珍客は、アデレー岬附近特産のアデレー、ペンギンで、皆一様に變な所へ來たワイとでも思つたが、最初は甲板上は右方左方に飛び廻り、人を見て逃げるかと思ふと、犬を見ては例の駄聲を張り上げて大喝一聲威嚇する如き姿勢を示すなど、滑稽至極である。學術部では是非健全の儘で母國へ携歸らうと云ふので、食物に就て種々の研究を試みた。取敢へず蝦、蟹、貝の柱等を與へて見たが此文明の食物には目も呉れず、時々滑稽の態度をして、仲間同志で突合ひ、嘴と嘴とで接吻しては今日の不運を嘆ち顔なのも可笑しい。尾籠な話であるが、牛乳にココアを混へたやうな

脱糞だつぶんをして、船中せんちゆうの人々ひとぐの鼻はなを摘つまませた。

兎とに角かく、此日このひは愉快ゆくわいな一日じつであつた。殊ことに此場所このばしやは、前回ぜんくわいの航海こうかいに、惡戰苦闘せんくとうの末すへ、遂つひに退却たいきやくの已やむなきに至いたつた海上かいじやうである。斯かかる記念きねんの場所ばしよに於おいて、偶然ぐうぜんにも海獸かいじゆうと水鳥すいてうとの征服せいふくに大捷たいしやうを占しめたことゝて幸先さいさきよしと一同どうは、初獵祝はつれういはひとして隊長たいちゆうから出だされたブランドーの盞さかつきを舉あげつゝ、夜よを徹てつして笑わらひ興きやうじたのである。



翌よく六日朝かあさ、隊長たいちゆうは吉野臨時厨手よしのりんじコックに命めいじて、海豹かいへうの料理れうりに取掛とりからせた。前日ぜんの晚餐ばんさんに、海豹かいへうのスキ焼やきを試こころみたが、惡臭あくしゆうが強つよくて一箸はしも食くはれないので、今朝けさは隊長たいちゆう自ら料理場れうりばに出馬しゆつぱして指揮しきすることになつたのである。

先まづ海水かいすいにて丁寧ていねいに二度どばかり湯出ゆだし、後のち脂肪しぼうにて煎いるのである。試こころみに之これを食くふと牛肉ぎゅうにくの如ごとき味あじで、些すこしの臭氣しゆうきなく、却々なかくの美味びみである。

『此料理法このれうりはふは、砂糖さとうも醬油しやうゆうも要いらず、經濟けいざい的てきであつて、手數てすうも掛からぬ、而しかも美味びみであるから、先まづ理想的料理法りさうてきれうりはふと稱しやうしてもよからう』と御自慢ごじまんで

あつた。

尚ほ海豹の脂肪は、餅切大一箇で湯を沸すに足り、拳大に切つて用ふると、機罐の焚料に好適して居る。

ペンギン鳥は、其後食ひもせず又飲みもせず只昨日よりは餘程落着き氣味である。同時に疲勞は加はつたらしく、首を縮め、白き縁ある眼を閉ちて、三十度といふ角度にまで兩翼を擴げ重き身體の平衡を取りつゝ、時々坐睡の體である。が大體に於て別狀はない。相變らず惡臭は近づく者の鼻を撲つこと甚だしい。

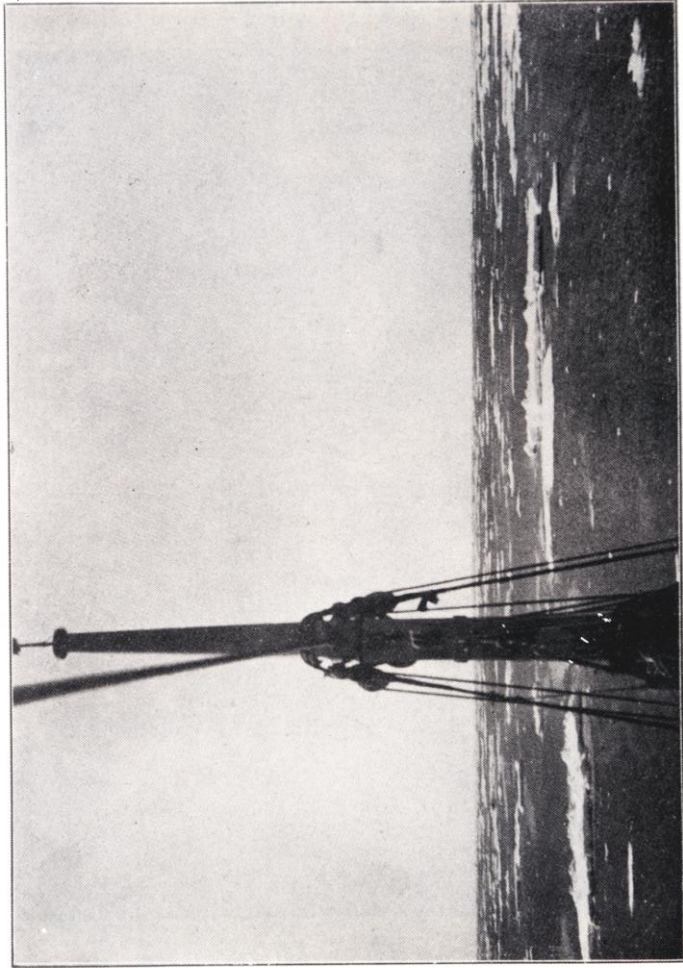
此朝一羽は、高川舵手の手により、本剝製とすべく絞殺し、皮を脱いで肉は早々料理せられた。味噌煮の爲めか一寸賞味に値した。従來の探檢家は、海豹並にペンギン鳥の肉は、到底食用に値せぬと云つて居るのは全く料理法の不適當なのに因る事を明かにし得た。解剖の結果、胃囊中に小石三個（徑二分位）を得た。之は消化を助くる爲めに呑んだものだらう。



明治三十五年一月五日撮影

、土轉運等二井酒、掛大邊山、員隊田多、夫火崎嶺、土學田池、夫火崎珍、土轉運習見宅三、夫蛇田釜列陵  
野吉、員隊邊渡 列二第、長船村野、長隊瀬白、長部新學田武 列三第、長務事島、長部並井三、夫水島福  
士羅磯平藤、掛大守花、夫蛇邊渡、書秘松村 列前、員隊川西、長關真水清、土轉運寄壺屋土、員隊





開南丸の檣頭より見たる流氷の來去

明治四十五年一月十四日撮影



ペンギン鳥の食料は研究の結果、生ける小魚である事が解つたが、到底其等の食餌を給すること不可能なので、全部絞殺に決し、コロ、ホルムを用ふることにしたが、却々絶命しなかつた。

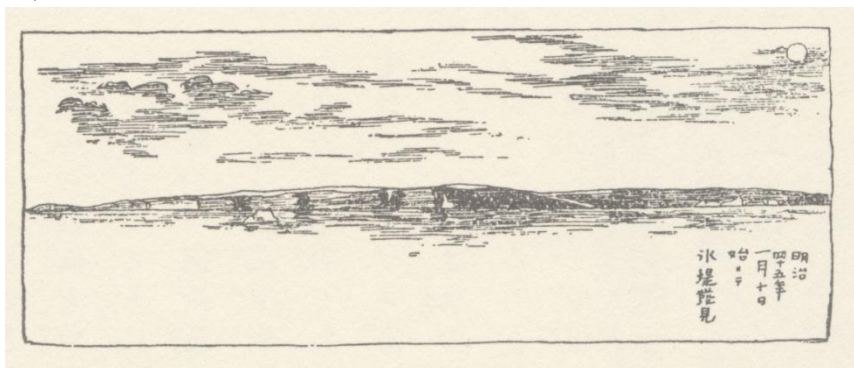
尚ほ海豹の臟腑及び脂肪を食した。輓犬は五日夜と六日とに亘つて、激烈なる吐瀉下痢を催ふしたが、之は食中りの爲めか、或は過食の爲めか、今猶ほ不明である。

十日、船はロツス海の碧波を截つて、東南の航路に進んで居る。朝來前方の水平線は氷の反射により、朦朧として白く輝いて居る。之は氷堤の視界に入ることの近き時間内に在るを證するもので、吹き來る寒風は凜烈として、甲板に立つ者の頬を裂かんばかりである。

午後二時、檣頭見張櫓より高川舵手は、

『氷堤が見えます！』と當直船員に報告を齎らしたので、總員は舷端に立並んで今かくと待ち受けて居ると、やがて、水平線の朦朧たる白輝は次第に其光度を増し、午後四時に至つて、目測二百尺位の一大氷堤は、

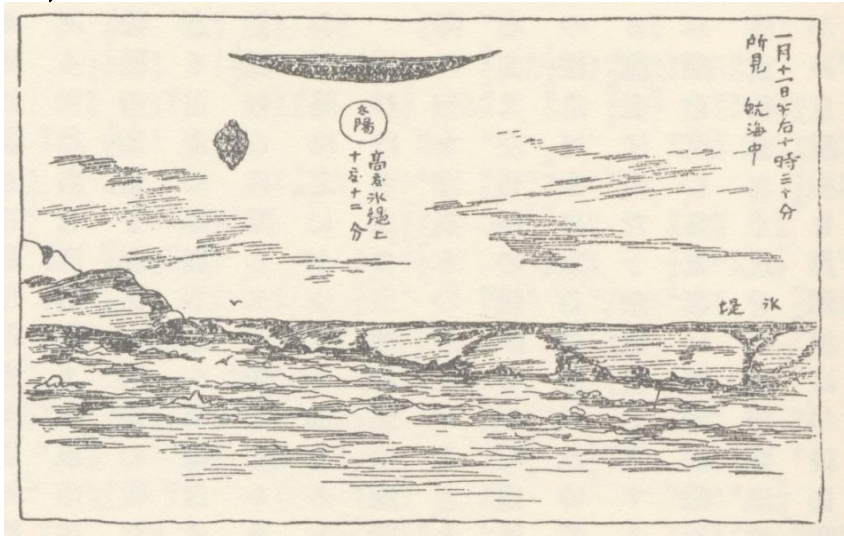




漸く眼界に入り來つた。

見亘せば船首より右舷の水平線に沿うて、約三十哩の延長を有する氷堤は、宛も一長白幕を張聯ねたるが如く連亘し、光線の反射は白雲に映じ碧波を染め實に莊嚴雄大の景致を示した。

風位の順を得ざる爲め、船は此氷堤に沿うて約十哩の沖を東東北に航し、夜はペンギン鳥の聲に夢幾度か亂されつゝ進んだが、翌十一日朝に至れば、氷堤は近く右舷三哩の邊に連亘し居り、折しも油風ぎの海上には、鯨群の潮柱林の如く立並び、吹き上ぐる遠近の潮の響は、寂たる天地の夢を破つて居る。夜中風位の西轉せるより船は氷堤に沿うて東航を急いだが、氷堤は次第に其延長線を長く



し、見亘す前後の水平線に連亘し、宛も雪霽れし晨、月白き夕、遙かに萬里の長城を望むが如くである。

午後十一時頃、夕陽西に斜めにして其周圍の白雲いとゞ密なる折しもあれ、太陽を中心として各々直角なる箇所に四箇の幻日を現はした。其幻日は目測三間ばかりの徑を以て、虹かと思はるゝ圓を描くのであるが、其光輪の色彩は、外部より青黄紫赤の順序で、却々の美觀である。

巻層雲の奇しき戯れも、四十分間の後消滅すると同時に、船は何時しか流氷海に突入したので、直ちに針路を

北々西に轉じ、二百尺許の氷堤に沿うて退いた。途上流氷の頂には、ペングイン鳥あり、海豹あり、甲板の勇士は、之を見て曩日の勇壯痛快なりし狩獵の光景を思泛べ、脾肉の嘆に堪へなかつたが、前途を急ぐ今の場合とて送りては迎へ、迎へては送り次第に氷圍を離れゆく。今日は日誌を認むるに際し、ペン先にインキ氷結して意に任せぬ。氣温の著るしき下降は之によつても知らるゝ。

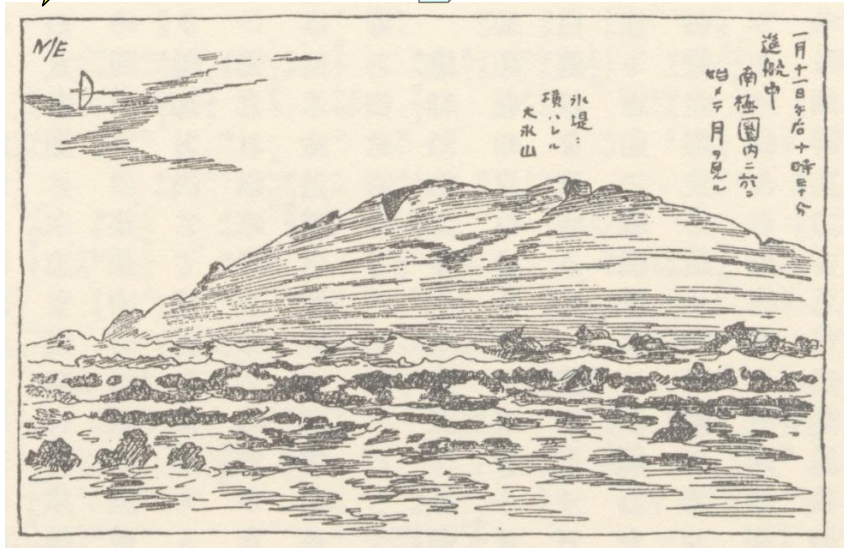
翌れば十二日、上陸地點の鯨灣は次第に右舷に近づいた。併し其中間に一大浮集氷の遊漂すると、大小無數の氷山の群立との爲めに船は右曲又左折、例の縫航を以て血路を開くべく苦心したが、帆走と汽走との緩急は幸い宜しきを得たので、一進一退の後辛ふじて氷塊の稀少なる海上に出た。深藍色を呈する右舷海上の水平線は氷群にて白色の一線を成し、其上部に連峯は岌々として聳立して居る。此上部の連峯は實物でなく、之ぞ一種の蜃氣楼、南極特有の幻嶽である。

一旦減少した氷塊は、午後に至つて再び針路を遮ぎらうとした。船

は其う幾度も阻遮せられては、際限もないので、進めるだけは進まんものと、前進に主力を盡したが、氷塊は進むに従ひ益々厚く、且つ密なる爲め開南丸の小馬力では、到底突破することの絶望なるより、遺憾ながら又々退却と決して轉針した。

去九日以來日夜、少しの怠りなく上陸準備を整へつゝあつた隊員連は、又もや退却と聞いて非常なる落膽をした。一同の心中は誠に左こそと察せられる。

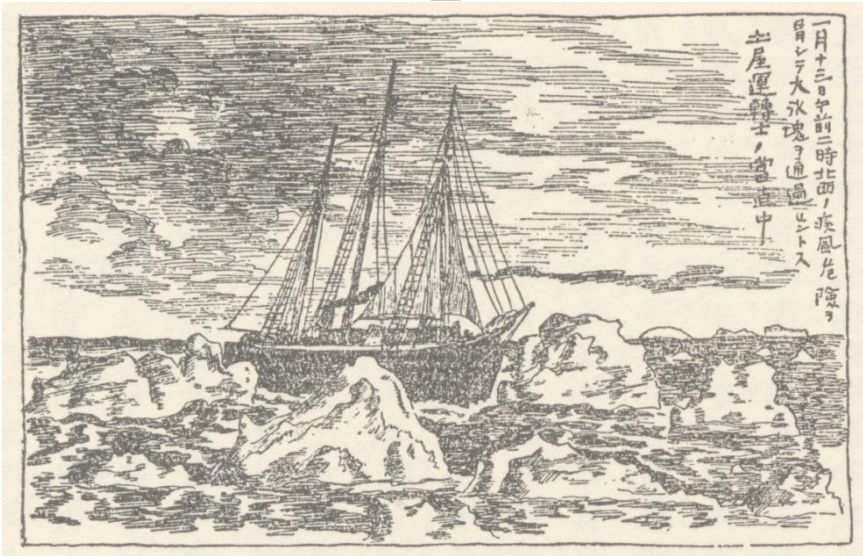
退却の途上、午后零時三十分頃、二十餘尾より成る一隊の鯨群は船を鯨敵と思ひけん、太さ各々一丈、長さ二間、頭部より背部に幅六七寸の白斑紋を有する此一隊は、各々三尺許、劍の如き鰭を水上に現はしつゝ、悠々と船の舷側近くに來襲した。最初一隊中の二三尾は右舷三四間の近距離まで迫り來り、艫より左舷へと廻つて、斥候の任務を全ふしたが正體が知れたと見えて、斥候が一隊に合すると共に、遂に落膽せるものゝ如く南方さして逸走し去つた。此時花守、山邊の兩アイ又は海上の鯨群に禮拜し、



一月十一日午後十時五分  
 送航中  
 南極圏内ニ於テ  
 始メテ月ヲ見ル

氷堤：  
 碩ハレル  
 大氷山

頻りに祈願を籠むる様子であつた。後に  
 て聞けば鯨といふ魚は、海の神使で、神  
 と同様に尊崇すべきものである。樺太に  
 於ては古來の習慣で、毎年二回鯨を捕獲  
 して、濱邊に繋ぎ置き鯨の神に御供とし  
 て捧げるのである。兩アイ又は斯ふ説明  
 して後。  
 『我開南丸も斯く鯨の神に守護され  
 て居る以上、前途は必ず大丈夫である、』  
 と云つて尙ほも海上を幾たゝび禮拜し  
 た。  
 十三日午前二時、又々群氷來襲し、同  
 四時に至つて最も多かつたが、同七時



一月十三日午前二時北西ノ疾風危険ヲ  
 冒シテ大氷塊ヲ通過セリトス  
 本屋運轉士ノ當直中

三十五分漸く氷圍を脱して漫々たる碧波上に出た。其時忽然山岳の如き大氷山右舷に現はれ出で、不意の事とて大に乗員の膽を寒からしめたが、併し船首を轉じて危険を逃れ得た處で、試みに舷頭より之を望むと、其絶景實に筆紙に盡し難く、坐りに畫筆の才なきを嘆ぜしめた。

見よ氷山の高さは數百尺に達し、周圍八九哩に及び、大小の群氷之を圍繞し、海燕は點々として其前後に群翔し、又なき雄大の景なるさへあるに、折しも一痕の半月は淡く橋頭に掛り加ふるに幻日出現して雲に映じ波に映じ、

また氷山に反映して、人をして南極の自然美の斯くまでに崇高なるかに驚嘆せしめ、恍惚たらしめた。

此天下の絶景に對し、總員しばし航路難を忘れつゝあつたうち、船は又もや大氷群に襲撃せられ、一進一退、轉針定めなき難航に陥あつた。一望瞭たる浮氷は、針路の海上より遠く水平線に連り、廣漠たる一大氷野を展開して居る。船は其縁邊に沿うて東方に、一大迂航するの外なきも、さりとして其縁邊の那所に至つて盡くるかを知らず。之には流石勇悍老練の船長も長大息を發し、隊長は眉を蹙めて航路難を嘆じた。

此時隊長は、船長と討議の末、取敢えず東方へ迂航のことに決したが、船の碎氷力の薄弱なるの一事は、返すぐも總員の遺憾とする所であつた。そこで隊長の決心は、迂航の上、能ふ丈け上陸地點最近の位置まで船を進めたる上、若し不幸にも其れ以上の突進、不可能と決した曉は、上陸隊はこゝに短艇を艤し、氷上行軍を執行し身命を賭して上陸の目的を達しやうと云ふのであつた。隊長の此決心は最早動かすべからざるものなので、



上陸準備は更に完全を期することゝなつた。船長も隊長の此賭世の大決心を聞いて感激し。

『船長不肖と雖も「人事の最善を盡して已まん」と誓うた。

船は豫定の航路に就いて進むに從ひ、氷堤は遂に視界を脱したが、測量によれば、目的の氷堤までは三十哩乃至四十哩の距離である。

翌十四日を迎ふるも、前面は依然たる氷塊の海であつたが、極力縫航に努めた結果、漸く南進の一航路を發見し、長時間の後ち聊か愁眉を開くを得たのは、天、全く決死的一行の切なる至情を諒とした爲めでもあらう歟。斯くて南進又南進、航しゆく海上、處々の流水上には、ペンゲイン鳥、海豹の群を成すもの夥しく、満船の勇士は腕を扼して。

『捕りたいなア、捕りたいなア』

午前六時、右舷數十歩を流るゝ氷塊上に、夢も圓かに睡れる一頭の海豹を發見したので、もう矢も楯も堪らなくなつた連中は。



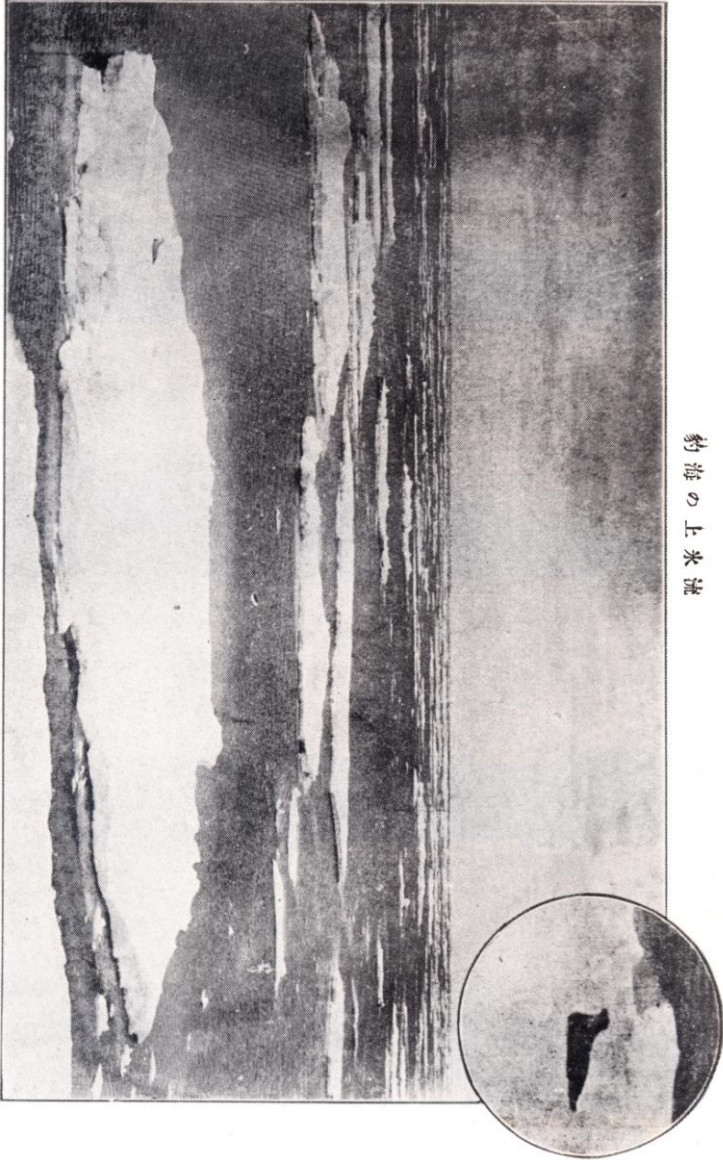
『ソリヤ海豹だ、捕らうく』と、早々短艇を海上に卸し、柴田、花守の二戦士は、之に打乗り、例の六尺棒を眞向に振翳して、難なく數撃の下に捕獲した。すると、又もや一頭他の氷上に横はつて居るので、

『序でにやつゝける』とばかり、之も約二十分を以て捕獲する。次いで、又一頭左舷に來り、續いて二頭又は三頭と、幾つでも氷に乗つて流れて來る。一體海豹は、氷上では活動甚だ遲鈍なる爲め、發見するに従うて此方の手中の物となる。宛ら遺ちたるを拾ふに異ならぬ。斯くて前後數回の討伐隊は、成績何れも良好で、遂に夕刻までに十二頭を捕獲した。物資補充には此上なき天與の賜物、拜領せねば反つて天罰が恐ろしい位である。

三井所部長、高川船員、の兩名は、試みに中帆檣の物見櫓に上つて沖合を見ると、白き流氷上に黒き海豹の數は、一寸數へたゞけで三十三頭にも上つた。

翌十五日は、捕獲した海豹の料理で、却々賑はつた。併し船の方は、又

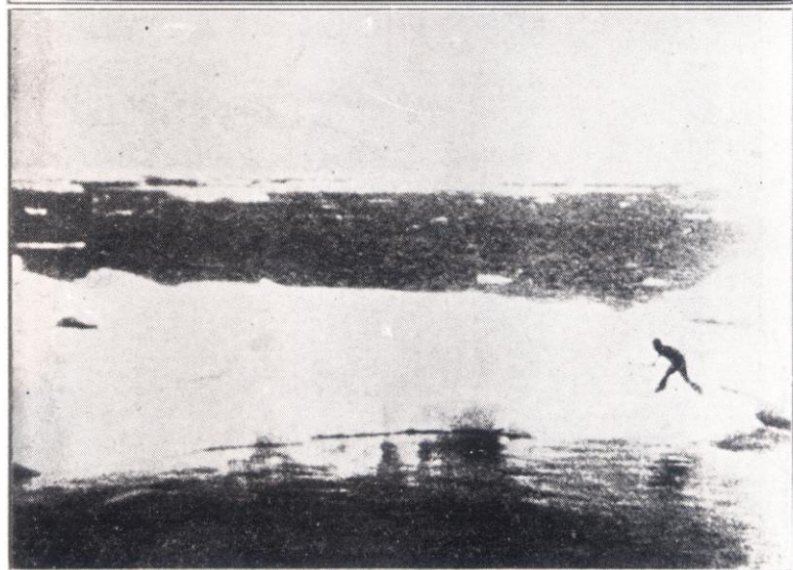
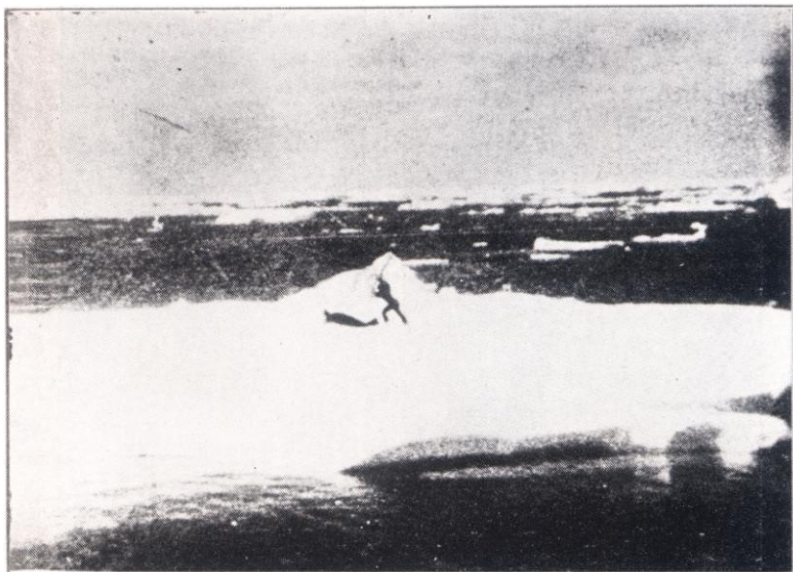
豹海の上氷流



大氷流の上の豹海を見よ上圖は見易きやうな大物也

明治四十五年一月十四日撮影





明治四十五年一月十四日撮影

戦奮大のと豹海は圖上 景光近按に豹海に靜は圖下 伐征豹海の上水流

もや氷圍に陥つたので、例の右回左轉に努力し、苦心慘憺の末辛ふじて、一條の血路を得たが、此日の氷群は何れも蝙蝠の羽翼状を成し、其上には數十の海豹點々として横はつて居る。前日の大獵で當分は十分なので別に捕獲はしなかつた。海豹を乗せた氷塊の、舷側を通過する時、折々甲板上から高聲を發すると、海豹の先生訝かしげに、首を擧げて四方を見廻す、其態度の悠々迫らざるところ、慥かに大英雄の面影がある。

十六日、一たび減少した群氷は又々船を包圍して、前進を阻止すること幾度かに及んだが、百方難航の末、漸く一方に血路を開いて突破した。午前二時左舷の水平線上に、雲か山かと思はるゝ一抹の淡灰色を認めしたが、やがて、同四時二十分に至つて、それは氷堤の連亘せるものと知れた。船の近づくと共に愈よ鮮かで一望半月形を示せる目測百五十尺位の氷堤は、白屏風を並べたるが如く、又大白蛇の横臥せるにも似て居る。見渡す海上、流氷は幸に片影なく、ロツス海の特徴とも云ふべき細波は、

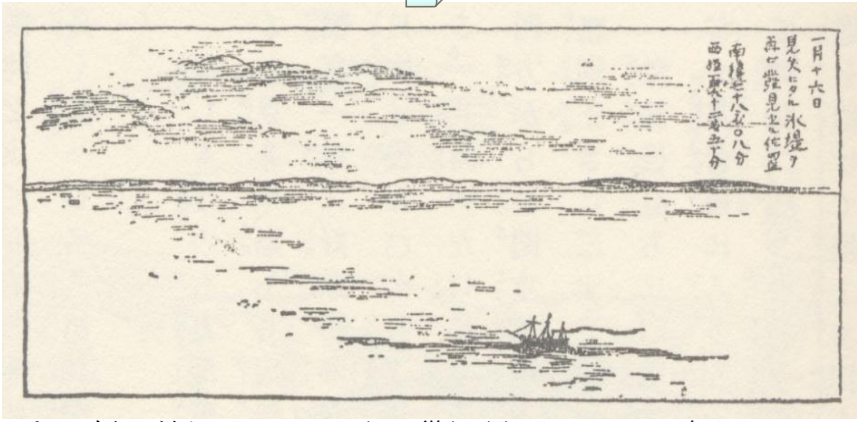
一碧油べきあぶらの如ごとくである。其上そのうへを船ふねは今帆汽兩走いまはんきりやうそうを以もつて、全力ぜんりよくを費つひやしつゝ、駛はしつて居ある。

此地點このちてんは鯨灣ホエールベイの東方とうほう三十哩マイルの海上かいじやうである處そころから上陸じやうりくはエドワード七世せい州ランドに變更へんかうする方かた、得策とくさくならんとの提議ていぎもあつたので、結局けつぎよくそれに一決けつし、氷堤ひやうていまで一哩マイルといふ近距離きんきよりに船ふねを進め、それより氷堤ひやうていに並行へいかうして上陸地じやうりくちてん點たんの探查たんさをなしつゝ、東航とうかうした。

右舷うげんを見みると、氷堤ひやうていには、洞穴どうけつ及び龜裂處きれつじよく々に在あつて、其近そのちかきものは海水かいに映えいじて深藍色しんらんしよくを呈ていし其遠そのとほきものは點々てんくとして墨痕ぼくこんを呈ていして居ある。又また凸とつたる斷層だんさうからは、宛あたかも硝子棒がらすぼうを無數むすうに、吊下つりさげしが如ごとき氷柱つらゝた垂れ下さがり、堤下ていかを奔はしる潮流てうりうは瑠璃るりの如ごとく、其氷柱そのつらゝに反映はんえいして居ある。

此時このとき、突如とつちよぜん前甲板デツキじやう上に一發ぱつの銃聲じうせい轟とろき渡わたつた。之これは武田學術部長たけだがくじゆつぶちやうが將まさに落おちんとせる、氷堤ひやうていの強弱きやうじやくを知らんが爲ために、射擊しやげきを試こころみたのであつた。其結果そのけつ件の氷柱つゝらは、頗すこぶる堅固けんこなる氷結物ひやうけつぶつであることを確證かくしじようした。

銃じうを杖つゑにした武田部長たけだぶちやうは、



『十二珊瑚一發あれば、ズドンと氷堤に穴を明けて、随意の箇所の上陸が出来るになア』と長大息！。

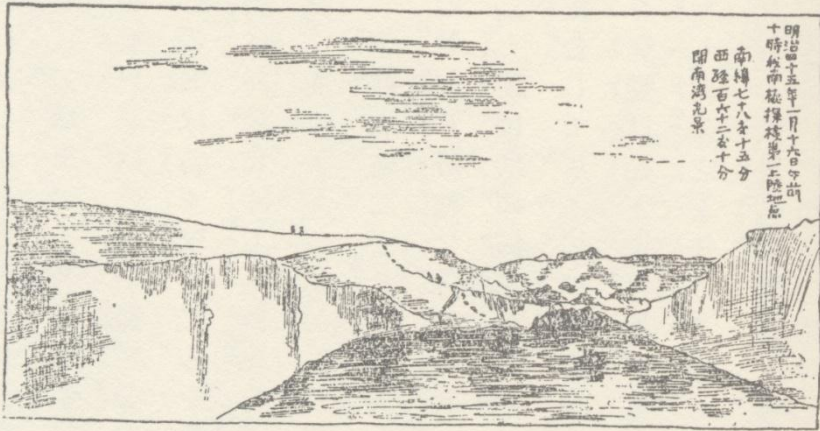
午前七時三十分、船は氷堤の一突角に沿うて廻ると、其處には一小灣の東西約二哩奥行約一哩に展開されて居るのを發見した。群峰は灣の奥に聳立し、岸邊は氷堤斷絶して、波打際は棧橋の如く低く且つ平かである。兎に角上陸には適當らしいので、船を灣内に進めることにした。

船の停止と共に武田學術部長、土屋一等運轉士、渡邊船員、花守隊員の四名は、船尾に卸されたる短艇に移乗し、隊長の命を含んで灣上の實地踏査を試みるべく漕ぎ進んだ。折しも太陽は



雲間を出て、左右の銀堤は燦然として碧波に映じて居る。短艇は赤旗高く  
翻へして、次第に灣岸に近づくと、船は徐ろに艇尾を追うて進みゆく。  
時しも、汀の右方深藍色を呈せる大氷洞の外邊に、一大海豹の横はれ  
るを見るや、船から短艇に注意すると艇上の四人は坐氷の一角に纜を繋  
ぎ、一齊に「好敵御參なれ！」と馳せ向うた。四人が手にせる四本の六尺  
棒は、幾たびか打下されたが、敵もさる者頻りに牙を怒らせて應戦する。其  
開いた口は、宛も大蛇の紅舌を吐いたやうである。やがて、遂に四方から  
包圍攻撃の末、滅多毆ちに打据ゑ、漸つとの事で敵を仕止めた。格闘正さ  
に三十分間、戦士は何れも血を浴び汗に塗れた。  
激戦後、直ちに四戦士は、萬歳を唱へつゝ直ちに、傾斜急なる、峻坂を  
攀ぢて其背後に入り、左方の堤上に向ふべく中腹に現はれ、一列縦隊を以  
て轉びつ起きつ益々前進して、程なく堤上に達したが、なほも四人は前進  
を讀けて、堤上奥深く進入した。





船上では四人の消息を待詫びて居ると、やがて、四十分後四人の影は高き氷堤上に現はれ、おし立てし赤旗の下に整列の上幽かに「萬歳！」を三唱し、八本の手は高く低く三たび動いた。終つて、一行は歸路に就いたが、此時先きの海豹は、俄然蘇生し、ムクリと頭を擡げつゝ徐かに四圍を見廻して居たが、敵影無しと見て取るや、ノソリくと岸邊を指して匍ひ初めた。甲板上からは、『ソラ海豹が生返つた！、アツク逃げて終ふぞ！』と口々に叫んで、騒ぎ廻つたが、歸路に就きつゝある戦士は、まだ急には現場へ歸着しない。

『無念だッ、残念だッ』と地段太蹈んで徒ら

に口惜しがるのみで、何うすることも出来ぬ。其うち海豹は早や岸邊近くに匍ひ寄つて、今や將さに水中に入らんとする途端、村松隊員堪り兼ね、銃口を向けて一發射撃を試みたが、不幸にして命中せぬ。すると海豹の方は益々驚いて歩を急がせ遂に水底深く姿を没して終つた。海豹は如何に陸上で負傷しても海水中に入ると、忽ち平癒するものである。さてく命冥加な奴だ。

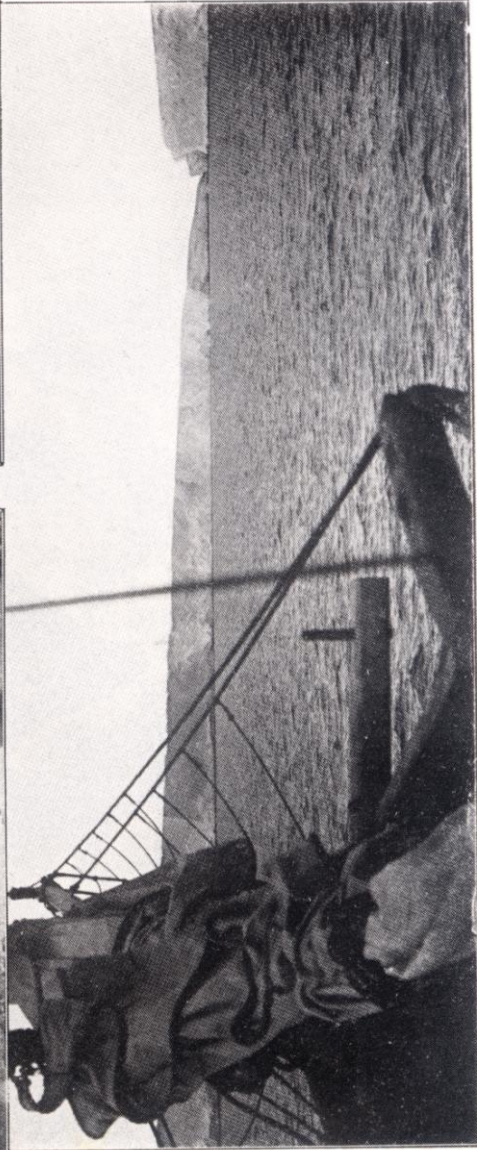
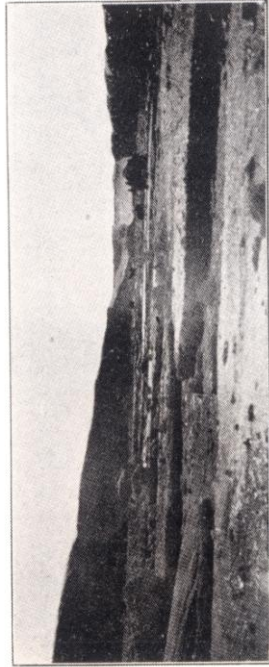
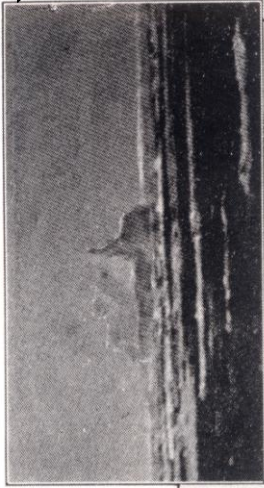
午前九時二十分頃、四人を載せた短艇は歸船した。武田部長は討査の状況を詳細に隊長へ報告した。それは左の通りである。

『上陸には如何にも適當ではあるが、見亘す如く、小山に似たる氷峰の集合して居るのは、何十里といふ延長を有する大氷河の終端であるから、突進は殆ど不可能である。殊に兩岸は急傾斜の上に、龜裂四方に散在し、薄氷之を掩うて居て、一見平地の如く、眞に危険である。現に先陣に立つた花守隊員は、一步を誤りて南より北に亘り、幾里とも判らぬ幅三尺程の龜裂中に陥落した。幸ひ土屋一等運轉士が助け上げたから



（掛犬守花員隊川西掛犬邊山夫水田紫員船隊と釣海しり來し獲捕

明治四十五年一月十四日撮影



(影撮日六十月一年五十四治明)堤米の近附灣南關及景光灣南關(形撮日四十月一年五十四治明)出氷るた似に屬家洋西

命は無事であつたが、兎に角危険である。そこで、吾等は上陸を断念し、隊長の名刺を氷底に埋めて歸航したのである』と述べた。隊長始め一同は大に落膽した。

武田部長は一同を慰め、

『併し此灣上の探検は、決して徒勞ではなかつた。象牙の如き彼の氷柱の研究を遂げ來つたゞけれども、十分の價値はあつた』と説いて、頻りに氷界の莊嚴を稱へた。

斯くて隊長は、其踏査したる大氷河に『四人氷河』と命名し、又此灣には、『開南灣』の名を命じた。位置は西經百六十二度五十分南緯七十八度七分である、命名終ると、船は再び灣外に出た。

上陸地點に關し、一同協議の上、突進隊だけは鯨灣に上陸し、船は沿岸隊を載せて、七世州の探検に向ふことに決議し、午前十時針路を逆轉して西方に凜走を開始した。

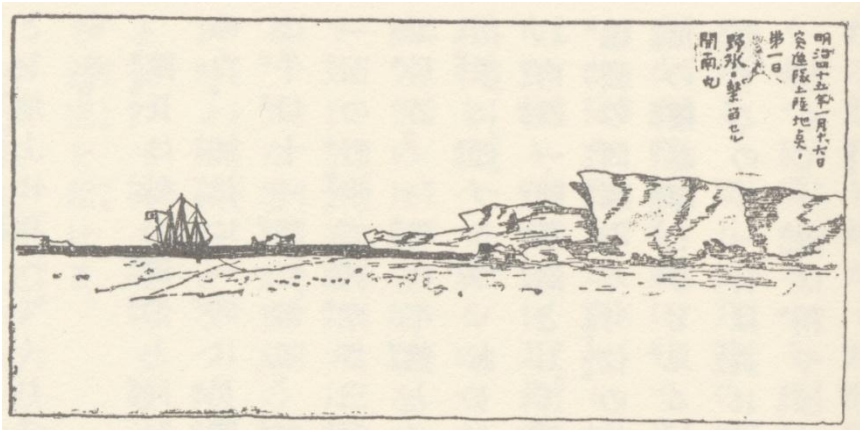
午后に入るや、一天次第に掻き曇り、暗風益々寒威を帯び、雪片は霏々



として甲板デッキを打つ。此時針路二十哩マイルの彼方かなたに、一隻の船影せんえいを認めた。船員せんいんは、折をりしも來合きあはせた吉野隊員よしのたいいんに。

『海賊船だ』と告げたので、サア大變たいへんだ。吉野隊員よしのたいいん驚愕きやうがくの餘り、船内せんないを觸廻ふれまわつたので、一同も眞逆まじかとは思へど、ドヤくと甲板デッキへ馳付はせつけた。やがて、進航しんこうするにつれ、一隻の帆船はんせんの氷海中ひやうかいちゆうに碇泊ていはくせるを確め得たが、果はたして何處どこの船ふねなるやは、もとより不明ふめいである。開南丸かいなんまるからは早速日章旗さつそくにっしやうきを檣頭高しやうとうたかく掲揚けいやうすると、彼も亦またた一旗きを掲げたが、距離きより遠とほき爲ためと、折をりしもの曇天どんてんとで、十分に其旗標そのはたじろしを認めることが出來ぬ。斯かくて船を進すすむるうち、彼我約五ひがやくご哩マイルの距離きよりに達した時、漸やうやく旗標はたじろしを明あきらかにするを得た。即ち旗は赤地あかぢに青十字あをじである。是に於て其船そのふねは、諾威ノールエーの南極探檢船なんきよくたんけんせんフラム號がうなることを確知かくちした。

程ほどなく船は目指す鯨灣ホーブル、ベイに入港にふこうしたが、灣内わんないは以前の『開南灣』とは違ちがひ結氷けつびやう夥おびたしくして深く突入とつにかすることが出來ぬ。そこで、已やむを得えず、灣口わんこうなる野氷やひやうの東隅西一哩半とうぐうにしに、マイルはん、フラム號がうを隔へだて、氷中ひやうちゆうに船ふねを突入つきいれて碇泊ていはく



した。時に午後十時であつた。

一望の氷堤は此處に灣入し居り、灣頭に當る氷堤の間は約十五哩もある如く目測せられ、灣内は一望廣濶として視界只渺茫たるを覺え、灣口を一直線に東西の氷堤を連絡せる堅氷は、坦として低く、滿目皚々たる上には、海豹、ペンギン鳥、點々として散在し、南極鷹、雪鳥、低く左右に飛翔して居る。又波靜かなる深碧の海上には、極鯨の幾群、此處彼處と泳ぎ廻り、舷邊近く現はれては、猛烈なる音響を發して例の潮柱を吹き立てる。

一時の雪模様も、やがて、暗雲の四散と共に陽光赫として輝き出でた。時刻は夜半に近きも、南極の太陽は終日終夜、恵みある光と熱

とを地上ちじやうに與あたへてくれるので、百般ばんの行動かうどうは幸さいはひにして理想りきやうの如ごとく進抄しんせうする。

隊長たいちやうは船ふねの碇泊ていはくと同時にどうじ、隊員たいいん全部ぜんぶに令れいして、陸上踏查りくじやうたふさの任にんに就つかしめた。總員そういんは一時じに勇躍ゆうやくし、準備じゆんびを嚴重げんじゆうに整ととのへ、船ふねを下くだつて出發しゆつぱつしたのは午後十一時ごである。船ふねより眞直まつすくに氷堤ひやうていまで約二哩やくの間あひだは、廣漠くわうばくたる一面めんの野氷ひやうで、其厚そのあつさ三尺じやくないし乃至四尺しやく、水面すいめん上じやうには僅わづかに五六寸すんを現あらはして居ゐる。一帯たいの平盤へいばんとして、行進かうしんには最もつとも適當てきたうであるが、目下もくかは野氷ひやうの流出りうしゆつ季きに近づちかきつゝありと見え、數條すうでうの龜裂きれつは岬疇はんちゆうの如ごとく四方ほうに走はしり、若もし南風なんふう一陣ちんぱく驀然ぜんぜんとして至いたれば、直たゞちに流出りうしゆつせんず形勢けいせいである。又また其龜裂そのきれつの間隙かんげき七八寸すん位の箇所かしよには、深ふかき海水かいすいの碧色へきしよくを湛たゞへ、目高めだかに類るゐする魚うをの樓息せいそく夥おびたゞしきを見るみる。兎とに角かく、危險きけん此上このうへなく行進かうしんには多大ただいの注意ちういを要えうするので、一行かうは眞しんに薄氷はくひやうを履ふむの心地こゝちである。

斯かくて、一隊たいは稍やや凍結たうけつ氣味きみなる雪路せつろに一歩ほ々々くギューくと氣味きみ惡あしき音おとを立てつゝ、眞ま一文字もんじに前方ぜんぱう氷堤ひやうていにと向むかつたが、途と中ちゆうに於おいて二



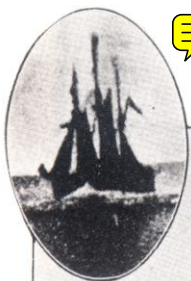
三の海豹を見た。其海豹の斑紋ある漆の如き深黒色の皮膚の艶々しく且つ肥滿せるより察して、此邊海中に魚族の棲息の夥しきを卜するに足る。而して其等の海豹は、北洋の産若くは從來捕獲したるものと、多少其種類を異にして居るらしく思はれた。

一隊の服装は、各々シャツ三枚、股引二枚、其上に隊服を着用し、防寒頭巾を被り、雪眼鏡に耳袋、手には手袋、足にはカンジキ付の絨靴を穿き、六尺杖を携へて居るのであるが、益々前進するうち、次第に照付く太陽の熱と雪の反射とで、少なからぬ高温を感じ、流汗淋漓として全身を濕ほす、それ故外套着用者は、脱いでそれを背上に負ひ、喘ぎく進むのである。又た雪盲病豫防の爲めの薄黒い眼鏡の玉は、皮膚より發する湯氣が、時々水蒸気となつて附着するので、甚しき鬱陶しさを感ぜしめる。と云つて外すこともならぬから、時々鏡面を拭うては、辛ふじて不快なる前進を續ける。やがて野氷上の行進約一時間の後、一隊は氷堤下に達した。仰ぎ見

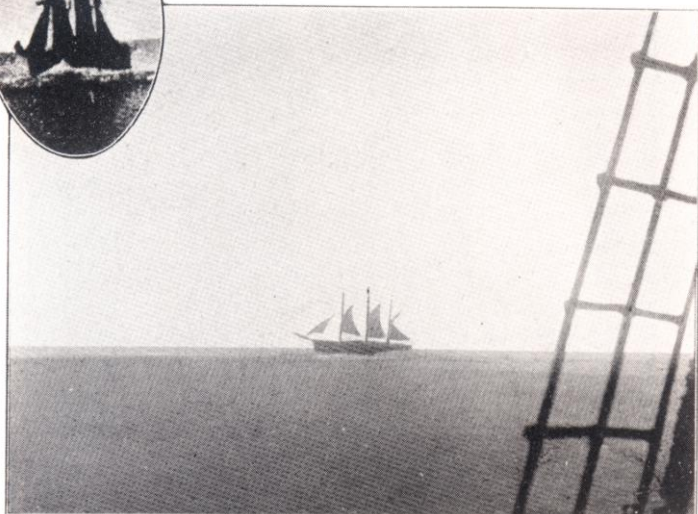
れば二百尺以上の氷の峭壁は、岬々として聳立し、紫青の氣は焰の如く燃え立ちて慄然肌上に粟を生ぜしめる。殊に其絶壁の面は、猛風の來る毎に脱落すると見えて、突角を成すあり、雪崩を示せるあり、危うく落下せんとする怪氷ありと見れば、磨立てし白堊の如き奇氷ありといふ有様で、野氷は絶えず落下し來る氷塊の爲めに破碎せられ、海水さへ見えつゝ、群氷重疊し、それが底部を洗ふ波濤の爲めに、フアくと緩漫なる上下動を起し乍ら、寂たる天地に、ギーツくと絹裂く如き奇音を發して居る。而して氷面と氷面との間隙よりは、時々海豹其頭部を現はし恐ろしき齒牙をむき出して深呼吸をなすなど、其等の光景は、極地ならでは到底見るべからざる凄壯の活畫である。

前項の如き光景であるから氷堤上に達せんには、其攀登の困難なるは勿論、既に堤下の野氷面徒渉の危険をも冒さねばならぬのである。

そこで、一隊は、三部に分れて進むことゝなり第一部は村松、吉野、花守、の三人組、分隊は先鋒となつて進み出した。稍や凍結して居る野氷上

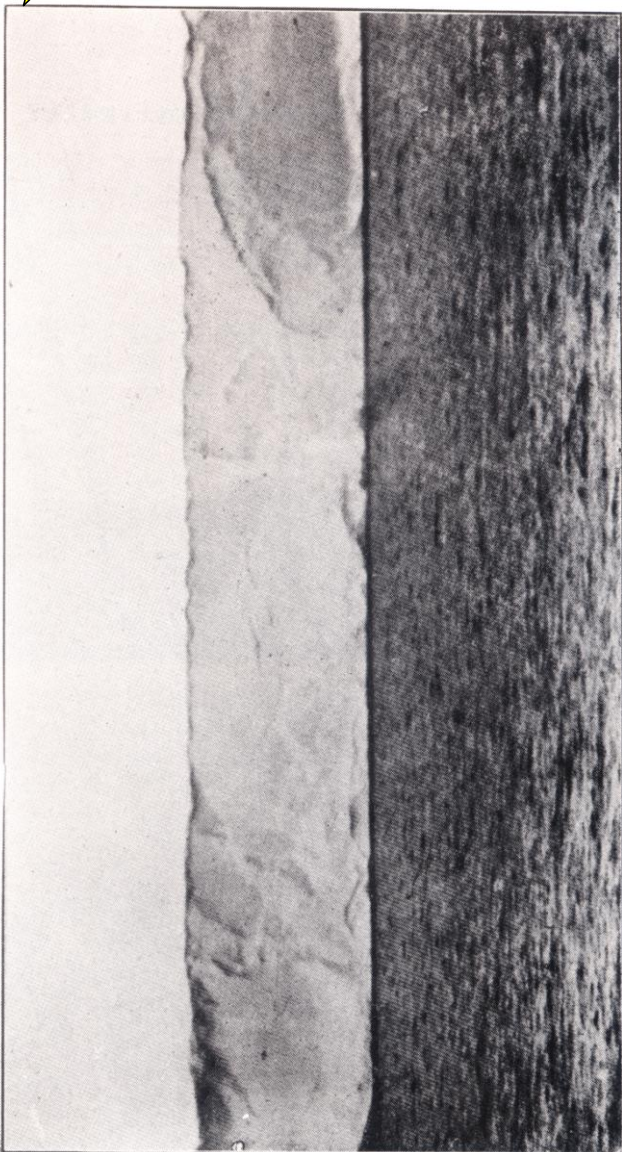


も望を號ムラフ船探感諾にて海鯨りよ板甲丸南開



明治四十五年一月十六日撮影

隊檢探感諾は圖下、也號ムラフも端左てつ向方上  
也景光るす影撮を丸南開りよ上氷野の灣鯨が員



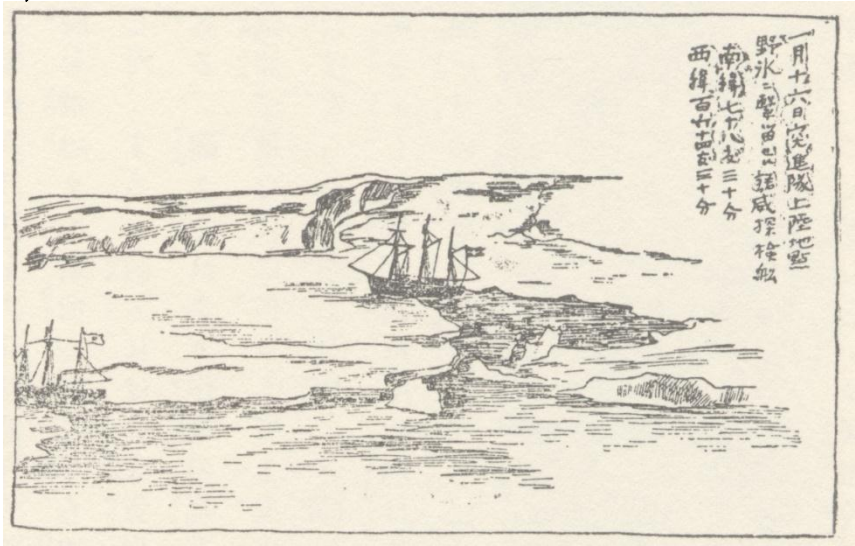
（寸法は尺白二サ高）堤水大の傍近灣灣齡

明治四拾五年二月十六日築部





を手の六尺杖を力に、注意深く打渡り、辛ふじて一大氷塊に這ひ上り、溪間を飛越えて右曲左折し乍ら、次第くに前進し、漸つと堤腹にまで達した。すると前方には一大雪崩あつて、如何にも物凄き光景を呈して居る。彌よ之れより作業の幕となるのであるが、此處は何分滑冰の傾斜面で、進むには何うしても其處に横はれる、深き龜裂の中間を過ぎらねばならぬ。頭上を仰ぐと、傾斜せる氷堤の一部は、將さに落下せんず勢を示して居り、其危険の状は全く言語に絶して居る。即ち若し此の際一寸の注意を怠つたならば、氷塊に壓せられるか、若くは深溪に陥るかの二途、其一の運命に坐せねばならぬ。併し此難關を通過せぬ以上、逆も前進の途がないので、もとより瞎生決死の面々として、各々大勇猛心を起して、手にスコープを振上げ、奮闘の限りを盡した。其作業の順序は、一人が先づスコープを以て雪を掻き除け、通路を開くと、後方に従ふ二人は、萬一を慮つて、先頭に立つ者の身を縛した命綱を曳き乍ら、守護しつゝ進むといふ風、斯くて高聲を發するさへ憚つて、所謂深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如き



一月十六日、夜、運上陸地、野水、船、雷威探検船、南緯七十八度三十分、西経百廿五度三十分

心地を以て、交代で作業の任に就いた。

併し遅々たる作業も、歩一步提上に近づき、間もなく平坦の氷面上に達して見

返ると羊腸たる隘路は、雪中に蜿蜒とし

て、開かれ、四顧すれば身は早や堤上の人である。ホツと一息吐くと共に、満身の流汗拭ひもあえず、三人各々双手を高

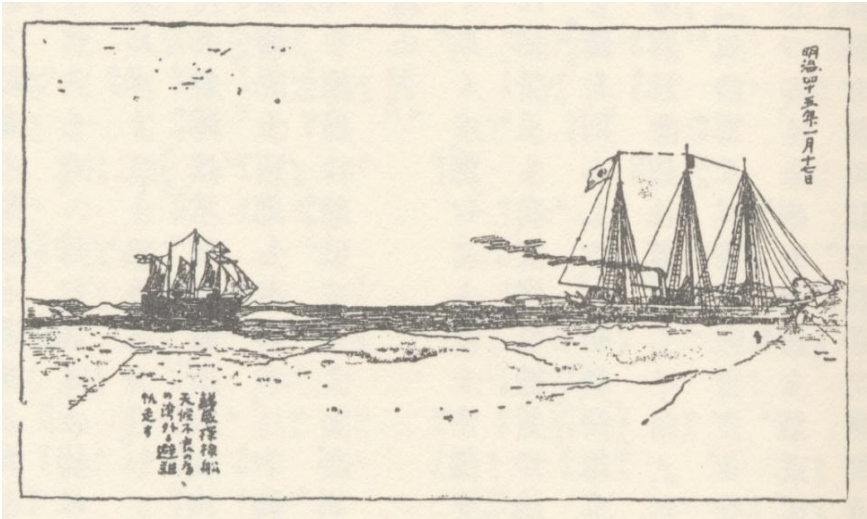
くさし上げて。

『萬歳！』と大呼すると、第二、第三

の分隊も脚下より『萬歳！』と和しつゝ、續々堤上に辿り着いた。時計を見ると丁度

午後十二時であつた。

やがて一分の後は、翌十七日の午前



零時である。氷堤の頂上に立つて、遙かに沖合を瞰下すと、碧波平らかにして流水處々に白く點在し、灣内一面の野氷盡くる處開南丸、フラム號の二隻は、寂然として墨繪の如く浮んで居る開南丸附近の氷上には、黒き人影點々として右方左方に動き廻り、時々銃聲も聞えて來る。之は船員連が長途の航海の勞を慰めんが爲め籠を出でたる小鳥の如く、野氷上を歩き廻つては、ペンギン鳥や海豹の類を狩獵して居るものと察した。

首を迴らして背後を見互すと、一白無涯なる氷原は、茫漠として碧空と相

連り幾多の秘密を其奥に藏せるかの如く想はしめる外、何一つの影も目に入らぬ。殊に輝く太陽は白雪に映じて、一種莊嚴の感は、一隊の胸宇に深く泌み入つた。

先鋒隊は、武田、三井所、西川、山邊の第二分隊と合して、皚々たる無人の清淨界を南進し初めた。大和男兒の鐵脚は、今より思うが儘に此別乾坤を縦横に踏破することが出来ると思ふと、各員共に心躍り、痛快此上なしだ。



斯くて、進むことなく南進すること約一哩、其途上氷質の研究を試みた結果、兎も角、突進に適當の地點なるを認め得たので、一先づ歸船せんと踵を回らした。折柄、平坦なる西方地平線に當り、岡陵の如く凸起する雪丘を望んだ。

『彼の雪丘は多分アムンドセン大佐の根據地であらう』など、取汰沙しつゝ、もと來し足跡を履んで以前の氷堤上に歸還した。此時隊長は、防寒シャツに毛皮のチョッキを着けて氷堤上に來り、先づ一白無涯の



乾坤けんこんに俯仰ふげふして非常ひじやうに満足まんぞくらしき微笑ほくそゑみを洩もちらしたが、南進なんしんから歸還きくわんした一隊たいを迎むかへて後のち徐おもむろに東方とうほうを指ゆびさし乍ながら。

『此處こゝよりも更さらに適當てきたうなる登攀とうはん地點ちてんを發見はんけんしたから、兎とに角かく、一旦たんふん船ふねへ引揚あげ暫時ざんじ休養きやうやうの上午うへごぜん九時頃じごろうから大活動だいくわつどうを開始かいしする事にしやう』と云いふ。そこで一同どうは、峻坂しゆんぱんを下くだり野氷やひやうを徒涉とじやうして歸船きせんの途とに就ついた。

歸船きせんして見みると甲板デッキ上じやうには卓子テーブルの用意ようい既に整とのへられ、入港祝にふかういはひのウキスキ瓶びんは、一隊たいの勇士ゆうしを待受顔まちうけがほに並ならんで居ゐる。時正ときまさに午前二時ごぜんじであつた。

午前九時ごぜんじより活動くわつどうを開始かいしする筈はずであつたが、夜よを徹てつした疲勞ひらうの爲ためめに隊員たいいんの起出おきでたのは午前十時頃ごぜんじごろうであつた。甲板デッキに出でて見みると一面めんの野氷やひやうは何時いつしか風波ふうはの爲ために幾分いくぶんの流出りゅうしゆつを示しめ、爲ために船ふねは餘程よほど深く進しん入にふして錨いかりを野氷やひやう上じやうに投なげて碇泊中ていはくちゆうである。前日ぜんじつ來野氷ひやうじやう上じやうに曳出ひきいだされた三十頭とうの輓犬ひきいぬは柵ますの如ごとき住家すまかから廣ひろい自由じゆうの氷上ひやうじやうに出でたので久々ひさびさで樺太かばふとの故郷こきやうへ歸省きせいした心地こゝちで、嬉々ききとして右みぎに驅け廻まわり左ひだりに飛び狂くるつてさも愉快ゆくわいに堪たへぬといふ有様ありさま。

絶えず雪を嘗めては鼻を鳴らして居る。

船員連は、今朝も亦た思ひくに狩獵に從うて居る。前日來の獲物の大海豹七頭、アデレー、ペングイン鳥數十羽に上り、何れも意外の大獵に、益々調子付いて居る。

やがて、隊員一同は、船員の手傳を受けて、船から氷上へ大小四十個の



荷物を卸した。之れは陸上隊員即ち、隊長と武田、三井所、兩部長と山邊、

花守、兩アイヌの五人の突進隊員の外氷堤上根據地觀測掛員吉野、村松、兩員以上都合七名分の被服及び糧食である。氷上に卸された是等の貨物

は山邊、花守の兩人にて、氷堤下まで犬橇及び手橇で運搬されるのである。

この荷卸しの事業開始と同時に、隊長並に武田部長は花守の馭する十五頭立の犬橇に搭乘し、道路開鑿豫定地點なる氷堤下に到り、實地踏査の上、荷物置場等の指定をなすべく赴くと、續いて道路掛たる吉野、村

松の兩員は、山邊の馭する十三頭立の犬橋に搭乘し、雪掻用のスコップや命索等の準備ばかり無く出發する。「トウクカイク」と、アイヌ語の犬追ふ聲も勇ましく、兩橋隊は約三十分の後氷堤下に到達した。

一同は橋を下り、甲乙の二隊に分れ、甲隊は先づ坂路を攀ぢて堤上に達し龜裂を避けつゝ、四十分間ばかり東方に進む。一方指揮役の隊長は乙隊に合すべく提下に來り昨日選定の開鑿地點を指示する。見ると險しい絶壁ではあるが、一丈許り下つた處からは雪崩になつて居るので、道路開鑿上には比較的容易の箇所である。殊に其下の野氷は極めて厚く鎖して居るので、少々迂廻ながら工事は案外易々たるものらしく思はれる。

開鑿地點の確定と共に大體の計畫をも立て、乙隊は先づ堤上の嶮崖より六尺許り後方から工事に取掛ることゝし、例の順序で雪を掻き除け氷を打碎き、掘下げ方に全力を盡す。此隊はつまり上方から下方に向つて開鑿するのである。一方、甲隊は提下を起點として乙隊とは反對に下方から



次第しだいに上方じやうほうに開鑿かいさくしつゝ進むすすので、隊長たいちやうも其隊伍そのたいごの一人にんで、武田部長たけだぶちやう、西川隊員等にしかわたいいんらを助手ぢよしゆとして、例れいの順序じゆんじよで交代作業かうたいさげふに取掛とりかる。垂下たれさがりたる氷角ひやうかくを打落うちおす者もの、提路ていろの隙けつげきを雪塊せつくわいで埋めうづる者もの、或あるひは斷崖だんがいを削けづる者もの、スコープで雪ゆきを搔かく者等ものなど、各々おのく命索ライフ、ロツプを取交とりかはしつゝ、奮闘ふんとう數時間すうじかんに亘わたつた後漸のちやうやくにして兩隊半途りやうたいはんとに相會あひくわいし、こゝに三尺幅じやくはくの崎嶇きくたる坂路はんろは氷堤ひやうていの上下じやうかに通つうぜられた。又また野氷やひやうの間あひだなる大龜裂だいきれつには、手橋てぞり二臺だいを架かけて橋はしとなし、通路つうろだけは、斯かくて一ト通ひとほりは出來上できあがつた。時ときに午後十時ごよじ。燒やくが如ごとき太陽たいやうの光ひかりは過激くわげきなる勞働らうどうに従したがうた一同どうの眞向まつかふから照てり付けつけ寒天かんでん乍ならも大おほいに時ときならぬ苦熱くねつを感じかんぜしめた。殊ことに一同どうの顔色がんしよくは雪燒ゆきやけの爲ために、黒くろきこと漆うるしの如ごとく、目齒めはのみ白しろく見ゆる様さまは、亞非利加土人アフリカどじん其まゝなので。

『之これならば、雪中せつちゆうで迷兒まいごになつても、大丈夫だいぢやうぶだ』と一同互どうたがひに打笑うちわらふ。道路開鑿作業だうろかいさくさげふの竣成しゆんせいと同時に船ふねから卸おろした荷物全部にもつぜんぶは二臺だいの犬橇いぬそり

すでに氷堤下の荷物置場に運び盡されてあつたので。残務は明日の事にしやうといふので、一同は船に歸り、翌朝まで休養することにした。

今朝、野村船長は、隊長の命を帯び、三宅通譯を伴うて、氷上からフラム號を訪問し、正午頃歸船した。同船は以前北極探検に令名を博せるナンセン博士の用船であつて、建造費十九萬圓餘に上り、氷海航行には理想的の船である。總噸數三百五十五噸、二十五馬力の石油汽罐付帆船で内部の構造は頗る完備して居る。なほ其堅牢は今日までの經驗に徴するも明白である。船長ニールソン氏（三十七）歳以下船員十一名、何れも豪傑揃ひで、氣焰却々高い。昨年十月五日南米アルゼンチン國ブエノス、アイレス港を出帆し、此地へは十日前に到着し、今は此灣口に碇泊して、只管アムンドセン大佐一行の歸來を待ちつゝあるのである。尙ほア大佐一行の突進隊の冬營地は、フラム號の所在地から約五哩の南方氷原上にあるといふことだ。本年の氣候は昨年比して暖かく、殊に此二三日は、此地方稀有の好晴續きであるとは、フラム號船員の語つた處であつた。

十八日午前四時、前日來の疲勞で、隊員一同グツスリ寢込んで居る最中。  
『大變だツく、荷物が氷と一所に流れて終ふぞツ』といふ聲が、次第に  
船房へ近づいて來る。一同は我先きにと枕を蹴つて甲板へ出て見ると、大  
切な荷物の置かれてある箇所野氷は、今しも一盤の浮氷となつて、ユラ  
くと波に浮み出さうとして居る。

今朝天候は相變らず快晴であるが、南風頗る烈しく氷堤一帯から吹立つ  
雪塵は、輝く太陽に映じて物凄く、船の帆檣はピューくと唸りを立て、寒  
さは身を切らむばかりである。突進隊用貨物は、昨日犬櫓の都合上成るべ  
く輕減し、陸揚げはしたものの、當座不用の分は淘汰して船から二十間許り  
の距離なる氷上に積置いたのであつたが、何分時期が時期とて、強風のま  
にく野氷の流出甚だしく、随つて貨物の在る箇所も既に浮び出て見るく奥  
の氷を離れ、一寸二寸と、次第に距離を増して來る。

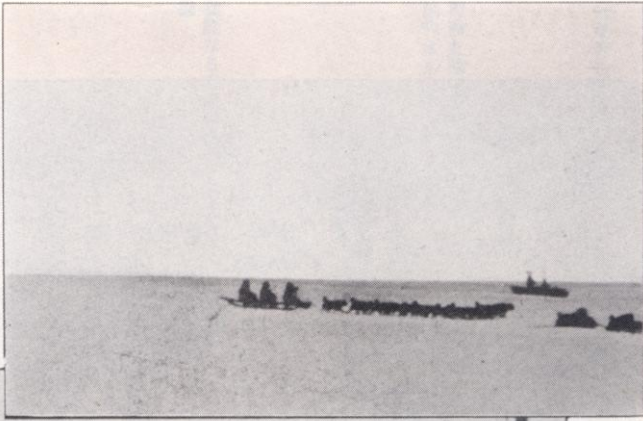


明治四十五年一月十七日撮影

鯨灣に於て大氷堤に登り荷物運搬の光景



樺太大隊員を乗せて野氷上を走る



船側より手楫にて荷物を運ぶ



野氷上の運(遠方に見ゆるは開南丸)



影撮てに灣鯨日七十月一年五十四治明共葉三



そこで隊員連は、當直船員の加勢を受け、敏捷なる活動の末漸く全部をば危ふき氷上から船内へ收容したが、此活動の終るや否や、貨物を取除けられて軽くなつた氷盤は、忽然として速力を迅め、見守るうちに沖へくと流れ去つた。其間眞に危機一髪であつた。

野氷の流出と共に、船は又更に前進して、奥の氷端にと着く。時に大なる二羽のペンギン鳥は突然氷上に立現はれ、例の鷹揚なる羽叩きをなしつつ、いと睦まじげに悠歩を運ぶ。之を發見した、吉野、渡邊、安田、柴田、の四勇士は、雄心勃勃々禁ずる能はず、船を下ると直ぐ、吹き荒ぶ寒風を冒しつつ、捕獲に向うた。斯くて現場に至るや、四勇士は二手に分れ一羽に二人づゝの手配で、難なく生擒の目的を達し、早々繩にて縛し、それを氷上に立てられたる棒杭に括り付け、凱歌を奏して歸船した。見ると其二羽は、初見參の帝王ペンギン鳥で、身長三尺五寸、重量六貫餘もあらうといふ逸物である。力量の絶大驚くべく、麻繩にて八重十文字に縛され乍らも、



尖つた嘴にて四邊を啄き廻る其が爲め一同は、萬一眼でも突かれては一大事と迂潤に寄付かず、何れも遠巻きでワイくと囃して居た。田泉技師は早速活動寫眞に撮影したが、活動寫眞助手兼務の池田農學士は、舷頭の鐵網から氷上に飛下りやうとして誤つて身を滑らし、強か背骨を撲付けて氣絶した。

『池田氏が氣絶したツ』といふ聲に、一同はペングイン鳥どころでないから、早速現場に集り、大勢で船内へ擔ぎ込んで、水よ薬よと立騒いだが、幸にして息吹き返したものの、一時は却々の騒ぎであつた。

其處へ、フラム號の士官二名が、我開南丸へ來訪したので、早速船内へ伴ひ、茶菓を供して種々談話を交へ、又た請ひに應じて船内を一順案内して見せた處、彼等は、

『恁んな船では我等は到底此處までは扱置き、途中までも來ることが出来ぬ』と云つて、頗る驚愕の色を示した。

烈風は却々吹き休まないが大切の場合とあつて、隊長始め隊員一同



は絶大の勇氣を鼓して、昨日の引續き事業たる、貨物の運搬に死力を盡した。今日は前日來の經驗上、絨靴の餘りに重くして、到底勞働用として不適當なのを認め、總員藁靴を穿用することとし、又た眼鏡も黒絹の掩布を用ゐることとした。

一行は二臺の犬橇に分乘し、野氷を走つて荷物置場に来て見ると、無念！残念！折角昨日苦心して開鑿した新道路も、粉々たる飛雪の爲めに諸所埋没し、交通はここに遮斷されて居る。そこで其箇所を再び開通せねばならぬので、隊長並に武田部長が其任に當ることとし、他は荷物の運搬方となつて、之れより氷堤を上下する困難なる役割に當つた。

猛烈益々威力を増し來る南風を眞正面に受けて、運搬の任に當つた各員は、エツサくと峻坂を攀ち登るのであるが、其困難は全く名狀すべからざるものである。只身體一つでさへ、一步に一端といふ稀有の峻路である上に、各員は背上に重い貨物をば、一々綱にて負ひ乍ら、六尺棒を杖とし、先づ富士の強力といふ姿で辿り登るのであるから、何れも臍の緒切つて

以来の難行苦役であつたに相違ない。殊に烈風に交つて来る吹雪は、喘いで開く口に當つて今にも息の根が止りさう、まだその上に足場が悪い爲めに、最も險峻の箇所では、五尺の身體も吹飛ばされんと危む位で、到底二本足での歩行が出来ぬ。その様な場合には、何れも双手を突いて馬となり、僅かに之に結付けたる鐵のカンヂキを力として匍ひ上るのである。其困難の状は、逆も形容の出来る話ではない。

斯くて、十人の輸送隊は蟻の如く氷堤を行きつ戻りつして、必死と立働く。又た一方道路方は、絶間なく降り積む雪を掻き分けて、間断なくスコップを動かして居る。斯くの如く總員が絶大の奮闘を繼續した結果早くも午後二時には、貨物全部を無事に堤上に運搬し盡し、一定の場所に整然と山積さるゝに至つた。

先づ之にて最難の事業たる氷堤上、荷物運搬の一條は、辛ふじて一段落を告げたので、氷堤を下つて船へと向ふ。踏ゆく野氷は數刻前とは

全く其形態を變じ強風、陣一陣、吹き來る毎に、野氷の一部は其結氷の薄弱なる部分から裂けて氷盤となり、次第くに流出する。我が開南丸も流氷の多き爲めに、危険を避けて稍や沖に出で、フラム號も亦た東方に徐航しつゝある。低く平らかなる氷片は、波立つ碧海に浮模様の如く、沖へくと連つて流出し居る。何氣なく見亘した流氷群の中の一片、氷岸から約二十間を離れたる、一氷片の上に取り入れ、残りの不用貨物が見える。

『アレく荷物が……』と一同指ざして騒ぎ廻つたが、さて救助の途がない、流れ出して、段々遠ざかるのを、見すく拋棄するの已むを得ざる無念さ！。其貨物は手櫓三台、罐詰一箱、大工道具の一部等であつたが、やがて、遠き沖へ一點の黒子となつて流去つて終つた。

此灣へ到着した當日には、投錨地點から氷堤まで三哩以上もあつた野氷が、今は早や其過半も流出し去り、残る部分も次第に流出しやうとして居る。其が爲め見亘す海面は非常な浮氷の數である。併し幸にも

一方ひがうに海路かいろが開ひらけて居あるから、一同どうは最端さいたんの氷角ひやうかくに立たつて大聲おほごゑを揃そろへつゝ。  
『開南丸かいなんまるーツク』と叫さけんだ、が雪針せつしんを含ふくんだ南風なんふう強つよく吹付ふけるので、應答おうたふの聲こゑは聞きへて居あるが、短艇ボートを浮うかべることの危険きけんを慮おもんばかつてか、容易よういに迎むかへに來くる様子やうすがない。

勞働らうどう中は流汗りうかん淋漓りんりとして居あたが、少時しばらくでも休息きゆうそくすると其汗そのあせが忽たちまちに凍こほつて終しまふ。防寒服ぼうかんふく上じやうには雪片せつぺんと流汗りうかんとが、共ともに凍結とうけつして、何れも銀いづの鎧よろひを着ちやく用ようして居あるやうで、其寒そのさむさつたら無ない。で、何れも端艇ボート待まつ間まを足踏あしふみして僅わづかに寒威かんゐに抵抗ていこうして居ある始末しまつである。

其そのうちに、現在げんざい佇立ちよりつして居ある氷こほりも、忽焉こつえんとして流出りうしゆつしやうとするので、驚おどろくまいことか、一同どうは「大變たいへん々々く」を連呼れんこして、辛からふじて他たの氷上ひやうじやうに退たい却きやくしたが、其間實そのかんじつに危機き一髮ぱつ、今一秒いまの相違さうゐで一同どうは飛とんだ俊寬しゆんくわんの二代目だいにめを演えんじる處ところであつた。

『實じつに危険きけんだなア、此調子このてうしでは寸時しばしも油斷ゆだんが出来できないぞツ』などゝ互たがひに

警戒して居ると、果して再び足許の氷が、グラくと動搖を起して、流れ出さうとする。

『ソラ又流れ出すぞッ』と叫んで『逃げろくで』退却しやうとする前方に見ゆる裂け目は早や八寸許も擴がり、海水も見へて、波に揺られて動いて居る。一同は驅け出したが、見るく其裂け目の幅が三尺餘に達し、瞬一瞬海水が幅廣く現はれて来る。氷は早や流れて居るのだ。

一同は身を躍らせて他氷に移った。途端氷と氷との距離は早や六七尺に達し、間一髪の危ふき場合であつた。見るとその氷は、東端より流れ初めて、一同の他氷に移った時は、僅かに西部に一角だけ連絡を保つて居た刹那であつたので、全く九死に一生を拾ひ得た譯なのであつた。すると又他の一方に、約三十間四方の、一氷盤が流出さうとして居る。其氷上には、山邊アイヌと三十頭の輓犬とが載つて居て、山邊は今如何にして犬群と共に無事他氷に移つたものであらうかと、餘りの急場に、救助を求むる聲も得立てず、心は周章狼狼の極に達し乍ら、右往左往して居る最中なので、



これを逸早く認め、た吉野隊員は、咄嗟に其氷盤上に飛移るや否、犬群を六尺棒で無闇矢鱈に安全なる方面へ追立てた。山邊も今少しで其六尺棒のお見舞を受ける處であつた。併し吉野隊員の此過激なる方法は最も機宜に適したるもので、幸にも山邊アイヌと犬群との生命を全ふせしめることができた。件の氷盤は之も前同様、最後に吉野隊員が一躍して他氷に移ると殆ど同時に、急速なる速力を以て沖合へ流れ出した。此大活劇の最初から最後までは、約二分間であつた。

是に於て一同は益々野氷の危険なるを知つて、佇立せる箇所から約二丁餘なる、荷物置場へと退却した。吉野隊員は早速有合ふ杭を打込み、菰蓆を半月形に張りて雪にて埋め、其前面に箱や蓆の類を積み北の寒地で旅人が、吹雪を避ける專賣特許の「雪除小屋」といふのを修らへた。一同は兎も角其中にもぐり込んで、迎への船の來る迄を待合すことにしたが、雪こそ直接に降り掛らね、寒氣は依然として激烈に身に泌み渡るのみならず



背後の氷堤は、時々百雷の一時に落つるが如き大音響を立てる。之は云ふまでもなく氷塊が缺墜するのであるが、其度毎に雪除小屋の一同は今にも頭上へ大氷塊が落下して、一ト壓しに潰されるのではあるまいかと、坐るに凄愴の感を催ふしつゝ顫えて居た。

斯くてあるうち、一時間の後開南丸は、全力を以て汽走しつゝ、最端の氷岸へと横付けになつた。雪除小屋の連中は、「お待兼」とばかり、舷梯を攀ぢて漸く入船したが、甲板へ出て時計を見ると午後正四時であつた。

今日は上來の作業の外に、氷堤上の天幕建設に着手の豫定であつたが、風力猛烈加ふるに海潮急迅の爲めに今日の作業は之で切上げとし、何れも船内で休養することにした。只だ山邊、花守、兩アイ又丈けは、輓犬保護といふ役目があるので、荷物置場附近で露營に決したから、船は直ちに流水の衝突を避けつゝ再度沖合へ出たが、午後十一時、潮流の工合で、氷堤に近づいて徐航した。

翌くれば十九日、灣内を見亘すと、野氷は始ど全く流出し去つて、深碧

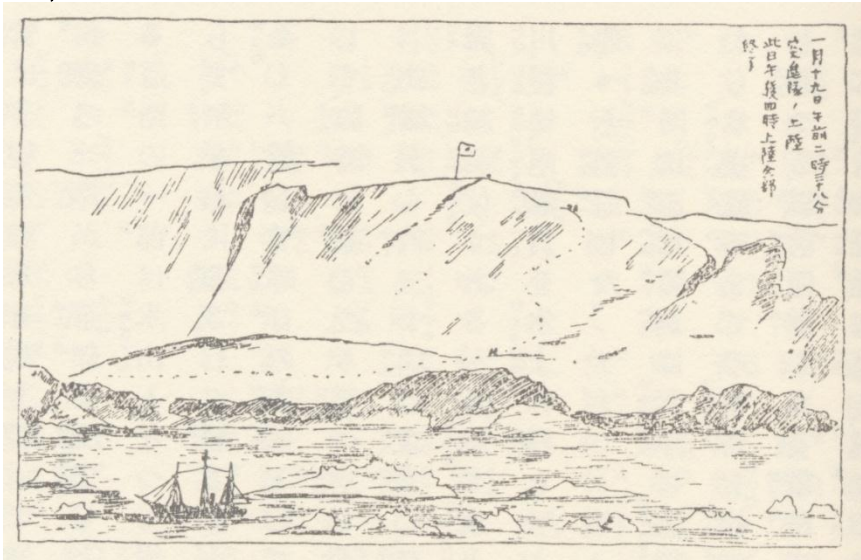
の海水は氷堤の直下にまで達し、巍峨たる白壁を潤然たる一大鏡面に映して、繪の如き倒影を描いて居る。小流水は處々に點々浮遊するも、其數極めて稀少である。空を仰げば巻層雲は魚鱗の如く、又昨日の烈風も何時もか歇んで、上陸には申分の無い詭向の好晴である。

陸上突進隊五名、根據地觀測掛員二名、都合七名の一隊は、愈よ今日を以て開南丸と暫時の訣別を告げ、氷雪界の探検に就くのであるから、朝來何れも其準備に忙殺せられて居る。

やがて、準備の終つた時、隊員船員一同は、船艙の蓋板の上にて、心ばかりの祝盃を擧げた。又隊長と船長とは、今後の打合せをした。其結果、開南丸は今日より上記の七名を上陸せしめると直ぐ、エドワード七世洲に向つて解纜し、沿岸隊員の上陸探検を終へて後、近海の測量を遂げ、豫定の日子を費したる上、再び此鯨灣に引返すことに決した。

斯くて午前七時、船は氷堤近く進入した。七名は勇んで船を辭したが、分袂に臨み各員と握手を交へつ。





一月十九日午前二時三十分  
 此日午後四時上陸全終  
 終

『しつかり頼むぞッ』

『ウム大丈夫!』などの勇ましき會話

も交換された。

野氷の流出と同時に、前日来、苦心

開鑿したる道路も、幾分は脱落して居る

ので、更に上陸地點搜索の必要を生じた。

そこで上陸隊員の出發に先だち、短艇の

卸されると共に村松、西川、高川、柴田の

四名は、下調査の爲めに氷堤に向うた。

櫂は時々氷片に當つて水中に入らず、舳

に立てる西川隊員は、フックにて氷塊を

推分け辛ふじて岸に着いた。

昨日來吹き荒んだ強烈なる南風は、

皆たゞに一帯たいの野氷やひやうを吹き裂さいて沖おきへ流ながし去さつたのみならず、氷堤ひやうてい下の大龜裂だいきれつの一岸がんから全部ぜんぶを流出りうしゆつせしめたのである。爲ために折角せつかく開鑿かいさくしたる道路だうろの一部ぶは氷山ひやうざんとなつて、堤下ていかに漂たぐよひ、其頂上そのちやうじやうには足跡そくせき猶ほ消えやらず、鮮あざやかに印しるされて居るといふ始末しまつ、桑田碧海さうでんへきかいの譬喻たとへも道理ことわりや、形勢けいせい全く一變べんして、昨日きのふの名残なごりとしては僅わずかに二臺だいの櫓そりと藁蒲團わらぶとんとを材料ざいれうとして、臨時りんじに架かしたる橋はしの、空むなしく落おちんとせるを見るのみである。



此橋このはしから約やく三十間けんの東方とうほうに、稍ややや低い岸きしが見える。早々さうく之これに向むかふと、宛てうど胸高むなだかくらゐ位であるから、漸やがやく氷上ひやうじやうに立つことを得た。そこで、短艇ボートは西川にしかわ、村松むらまつ、兩隊員りやうたいいんを氷上ひやうじやうに残のこし、いよく他の上陸隊員じやうりくたいいんを上陸じやうりくせしむべく船ふねへと引返ひきかへした。

其間そのまに西川隊員にしかわたいいんは氷岸ひやうがんに上陸足場じやうりくあしばを作り、又またた村松隊員むらまつたいいんは、上陸地點じやうりくちてんから氷堤道路ひやうていだうろまでの順路じゆんろを探索たんさしつゝ進すすむ。傾斜けいしゃの稍やや々ゆるゆる緩ゆるやかなる處ところを辿たどつて、以前いぜん開鑿かいさくしたる道路だうろの中途ちゆうとに達たつしたので、村松隊員むらまつたいいんは堤腹ていふくを攀よぢて、荷物置場もつおきばに至いたり、露營ろゑいちやう中の山邊やまべ、花守兩アイヌはなもりりやうを起おこさんものと堤上ていじやうに登のぼり、



約十歩を進むと、昨日までは平氣で歩行しつゝあつた一尺許の處は雪橋落ちて深き龜裂を表はし、試みに其内部を窺へば、紫色を帯びたる龜裂特有の青氣は焰の如く立罩めて物凄く、猶ほ處々に雪棚を架けて、底は知られぬが其危険名狀すべからざるものである。仍つて早々竹棒を樹てゝ危険の目標となし。更に進んで荷物置場に至つた。

見ると、兩アイヌは、アイヌ式に四本の竹を組合せ、南方に麻布を張つて蓆を並べ、其中で寢袋に纏まりつゝ、夢路安らけく猶ほ睡眠中である。村松隊員は早々兩人を呼覺して作業に従事せしめた。聞けば前航海の時の唯一生存犬たる「マル」の行衛が、昨夜不明となつたので、花守アイヌは八方搜索したが、遂に發見することが出来なかつたさうである。『多分龜裂へ陥没して、非業の最後を遂げたのだらう』と、悄然として語る。

船と氷岸との間では、短艇が數回の往復をして、隊長以下豫定員一同は上陸し、寢具、學術器械等全部の運搬を了し、いよく母船と上陸隊と



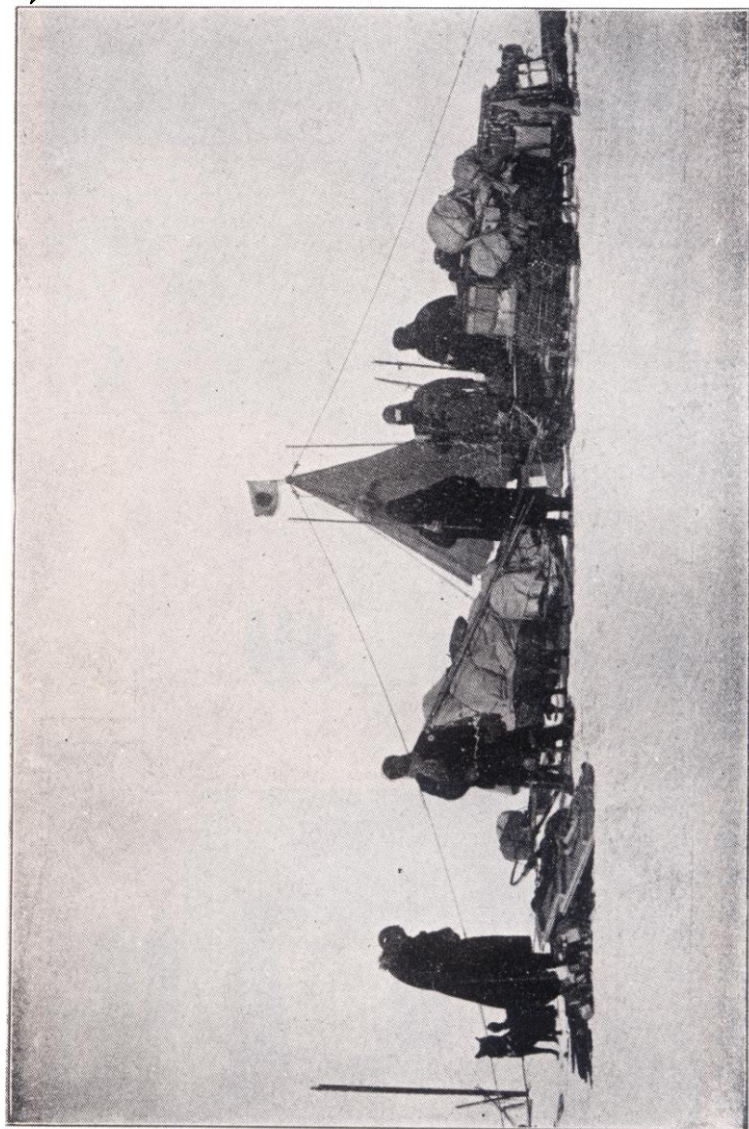
の聯絡は斷たれやうとした。隊長以下七名、輓犬三十頭は、晴れ渡る日光を浴びて氷堤上に並立し、開南丸の甲板の一同と相和して元氣なる「萬歳！」を叫び交はした。時に午前八時であつた。

やがて、開南丸は、悠々灣岸を離れ、灣口を出て、一條の黒烟、一聲の汽笛を残して遂に其姿は見えずなつた。



三葉共明治四十五年一月十八日撮影

狩鳥シーイゲンベの上氷野灣鯨



探檢本隊の鯨灣根據地出發

明治四十五年一月二十日撮影



### 第三章 陸上本隊の探検

開南丸は、隊長以下七名の上陸隊員を氷岸に見残して、先づ投錨地變更の爲めに汽走を開始した。氷岸上の人も犬も名残惜しげに母船の後姿を見送つて居るうち、船影は次第に遠ざかつて、殘烟一抹、雲と合して最早呼べど叫べど、答ふるものは物凄き氷塊と氷盤との相軋る奇響のみとなつた。

上陸員一同は、急に睡から覺めたやうに、各々活動を開始した。先づ海岸に無造作に積上げられたる荷物全部を氷堤上に運搬し、絶崖に傾斜して架け渡されたる例の橋までも、苦心の末取收めた。其材料に使用されてあつた上臺の櫓、二本の角材、一枚の藁蒲團及び綱の類は、手を分つて漸く堤上に運搬された。

運搬が済むと、早々犬櫓を走らせて堤上より南方に向ひ、氷堤脱落の



危険を怕るゝが爲め、能ふだけ氷堤の縁より距たりし箇所をトして、根據地に定めることにした。斯くて海岸より、約二哩の地點の處を、適當安全と認めた結果、其處に根據地築設の作業を起した。此地點は宛も南緯七十八度參十參分、西經百六十四度二十二分に當つて居る。

一刻を争ふ突進の場合であるから、根據地の天幕小舎築造作業は、氣象觀測の爲めに、殘留する、村松、吉野、の二隊員に一任し、一行は直にも進發する筈であつたが、何分肝腎の隊長は雪盲病に罹り居り、吉野隊員も山邊アイヌも同病に悩んで居る爲めに、他の一行の疲勞も其極に達して居る際として、旁々今日一日は休養と決し、天幕小舎の築設に、總員手を借して作業することゝなつたのである。

一望千里の雪野とて、猛烈なる南風を避くるに物影のない場所であるから、天幕小舎を築設するにしても、地形は少なくとも雪中四尺位は掘下げる必要がある。そこで雪穿り役は武田部長、三井所部長、村松、吉野、兩隊員の四名之に當ることゝなり、花守、山邊の兩アイヌは、犬櫓を以て、

堤上ていじやうに運搬うんぱんされたる先さききの荷物にもつを、此根據地このこんきよちまで移搬いはんする役目やくめに就ついた。  
隊長たいちやうは此等これらの仕事しごとの總指揮さうさしづ役やくたるは云いふまでもない。

雪ゆきは掘ほるに從したがうて次第しだいに堅かたきも、幸さいはひにスコープには掛かかり易やすく、而しかも土つちよりは輕かるきと、土つちの如ごとくに汚よごれないのとで、結句けつく一同どうは氣持きもちよしとばかりに、鼻唄はなうたさへ交まじへての作業さげか、工事こうじは案外あんぐわいに手早てばやく進捗しんしやうした。



縦横たてよこ三間げん、深ふかさ四尺しやくの雪せつちゆう中の開鑿かいさく工事こうじが程ほどなく竣成しゆんせいすると、一方兩アイばうりやう又またの運搬うんぱん仕事しごとも全部ぜんぶ終了しゆうりやうした。輓犬ひくいぬは次第しだいに慣なれて、八十貫目くわんめくらみ位くらいのものを容易やういに曳ひくやうになつたのは頼たのもしい。犬群けんぐん總數さうすう三十頭とう、其そのうち例れいの「まゝ」一頭とうは前記ぜんきの如ごとく行衛ゆくゑ不明ふめいで、今いま以もつて所在ありかが知しれず、又また他たの一頭とう、これは先頭犬せんとういぬであつたけれど、仲間喧嘩なまけんくわの末すへ、脚部きゃくぶに負傷ふしやうして、歩行困難ほかうこんなんで役立やくたたぬから使用しやうせぬことゝし、殘數ざんすう都合つがう二十八頭とうを二隊たいに分わかち、内十頭うちじゅうは花守組はなもりぐみ、内十三頭うちじゅうさんは山邊組やまべぐみとしたが、此兩櫓隊このりやうそりたいはナカナカの元氣げんきに見受みうけられた。先まづく好都合かうつがうである。

早朝さうてうからの勞働らうどうの爲ために、總員大そうみんおほいに空腹くうふくを訴うたへ出した。作業さげかの一段だん

落らくとなつた處ところで、七人にんは車座くるまざとなり、堀下ほりさげたる劃内くわくないを食堂しょくどうとして壯快さうくわいかぎ涯ぎり無なき奇拔きばつの會食くわいしょくが試こころみられた。極地きよくちの太陽たいやうは何時いつしか白鉛色はくえんしよくの雲くもに蔽おほれて、雪片せつぺんはバラくと降ふつて來くる。

やがて、再びふたたび作業さげふを續つづけたが、天幕テントの全まったく建設けんせつを終をつたのは午前ごぜん十一時じであつた。今其根據地いまそのこんきよち小舎こやの説明せつめいをすると、先まづ小舎こやの入口いりぐち正面しやうめんは北面ほくめんして、遙はるかに母國ぼこくに向むかひ居をり、天幕テントの頂上たかごじやうには、高たかく日章旗にっしやうきを極風きよくふうに翻ひるがへし、勇士いゆうしの夢ゆめも今宵こよひは暖あたかさうである。内部ないぶ中央ちゆうわうの柱はしらは、萬一まんを慮おもつて、雪中せつちゆうか深く埋うづめたので、外部ぐわいぶより望のぞむと、如何いかにも背丈せたけの低ひくいやうに見えるが、内部ないぶはナカク廣ひろく、四方共雪塊はうともせつくわいを以もつて、壘るあく々として天幕テントの裾すその風鎖ふうちんとしてあるから、大抵たいていの烈風れつふうの襲來しゅうらいを受けても、大丈夫だいじやうぶである。

先まづ暖あたかき休養所きゅうやうじよが出來でたので、一同どうは『マア一休ひとやすみだ、跡あとは明日あすの事こと』と云いふので各々おのくテントないに這入はいり、疲勞ひらうの軀みを雪床ゆきどこの上うへに横よこへた。

横臥わうぐわして見上みあげると、天幕テントは何分シドニーなにぶんシドニー滞たいざい在中半箇年ちゆうはんかねん間かんも使用しし



た物であるから、淡黒色に變じて居る。併し之れも客裏天涯の淋しく侘しい勇士の夢を護つて居た記念の品であると思へば、懐かしくもある。天幕の此變色に引代へ、床上の綺麗なることは言語に絶して居る。宛で白銀を張詰めたやうである。又た四面に積んだ雪の間からは、氷の年層も見えて、光線が屈折して射し込み、紫色勝つた青氣の現はるゝは、又なく美はしい。云はば自然の壁畫である。而も此世に絶對に無き一種神秘の繪具を以て、鬼神の描き成したる絶代の超人工の傑作である。

一同は驚異の眼を見張つて、四壁の美はしさに酔うて居る！。

さて天幕内では、入口よりの通路を中央にして、左に右に、三人四人と、各自莫座一枚づゝを下敷となし、毛皮の寐囊に潜り込んで眠に入った。就寢の時氣温を驗すると、攝氏零下十三度に下降して居た。

室の中央には、手製火鉢を置いてあるので、炭火の暖味は、稍や極地の雪中に臥する體軀を温むるに足つたが、雪床は何分凹凸の甚しい爲め

に、身體處々の痛みを感じ、まことに不快である。併し疲勞した身の、何時しか各々深睡に落ちて、やがて鼾聲は太古以來人跡稀なる荒寥の地上に起つた。

長時間酣睡を食つたと思ふ頃、武田部長は大聲を出して。

『オイ最う十時だ、今日は出發しなきやならぬから、起きやう！』と云つ



たので、一同は元氣能く起床し、鯛味噌の味噌汁に暖を取りつゝ朝食を終つた。處が朝食後に至つて何うも翌朝でないやうな氣がする。結局夜のないうち候として午前と午後とを間違へたことが自記機械によつて解つたので、哄笑しながら、一同再び就寢した。却々の奇寒で五體は凍結しさうである。

翌くれば二十日、

今度こそ間違なしの朝である。フト氣が附くと、犬が非常に鳴いて居る。一頭ならず二頭ならず全部の犬が鳴くやうなので、天幕外に出てみると、彼等は皆跼んだ儘口を揃へ空を仰いて鳴いて居る。其聲は如何にも



悲しげな、長く續いた調であるので、アイヌに其事を尋ねた所、永年犬は扱つて居るが、未だ斯んな鳴聲は聴いた事がないと云ふ。では寒いから早く出發さして呉れよとの催促だろうと、寝囊から跳ね起きたのは、午前七時であつた。一同は雪で口を嗽ぎ、手を洗ひ朝食を喫して武者振ひを爲し、スツクとばかり立ち上つた。所が武田部長三井所部長、村松隊員の外は皆雪盲病に罹つて居る。今朝になりても未だ治癒せぬ。併し一刻を争ふ場合とて、是非突進を決行しやうと、山邊、花守の兩アイヌは、食後先づ櫓への荷積に掛つた。荷は多く、兩アイヌも初めてぐはあり、却々迅速には扱取らぬ。のみならず何分極寒の地であるから、寸時と雖も手袋を脱ぐことが出来ぬ。手袋を着けての積荷は却々骨の折れるものである。併し鬼をも挫ぐ兩人の勞働とて、程なく全部豫定通りに進捗した。

正午十二時、愈よ出發することゝなつた。陸上員七名中、突進隊とも云ふべき五名の陸上本隊員は、隊長以下頗る元氣能く、又た根據地に留

まる村松吉野の兩隊員も、矢張元氣能く、此兩人は氣象觀測の重任を帯びて居るので、突進隊の出發から歸着までの間は、留守居の妻の役目である。渺茫たる氷野間として聲なく、南天眸を決すれば、孤雲飛ぶ。壯士此時の別離誠に無限の感がある。兩者は誠心の迸しれる眼に訣別の思を托し、握り交す手に熱烈の情を寄せ、『さらば』とばかり相別れたのである。

突進隊員の服装は、上はシャツ二枚、下はズボン一枚といふ元氣、わけて、武田部長は、一同の如く道中眼鏡を掛けた外に、手にコンパスを執り、胸にバロメーター、腰にホドメーター、といふ姿、天晴なる探檢家的服装であつた。

犬橿は二隊に分れ、前隊は十五頭曳、花守の橿で、隊長と武田部長。後隊は十三頭曳、山邊の橿で、三井所部長といふ順序。處が出發に際し、前隊の元氣よく、アイヌの發する「トウク」の懸聲諸共曳出すに引代へ、後隊は輓犬の弱い爲めか、少しも進まないものである。そこで、村松、吉野、の



兩隊員は、櫓の後押となつて五六町も押し出した。而も其間に櫓が三回も顛覆するといふ騒ぎであつた。

斯くて五六町後押しの後、もう走り出すだらうと思つても、押さぬと、矢張進まない。仍て已むなく鱒一俵と副食物と、重量約十二貫目ばかりを卸し、漸つと徐進するやうになつたので、愈々此處に三井所山邊、村松、吉野の兩隊員四名の最後の握手となり、櫓は前隊を追うて南東指して疾走を開始した。櫓の上から根據地の方を見返ると、殘留の兩隊員は、櫓の影の見えるまでとはと、何時までも其處に佇立して名残り惜しく見送つて居た。進み行く雪原の雪は、五寸、八寸、乃至一尺の深さで、櫓の進行なく、困難である。やがて、三時間餘も進んだ後、凹凸ある箇所にしたので、一先づ休憩して、時計を見ると四時〇五分であるから、今少し進んだ後、露營せんものと、更に進むと、右方に小丘數個と、龜裂の一帶とを發見した、何分初日の事ではあり、人も犬も疲勞の極に達して居るので、此處に

今宵は露營と決した。時に午後四時五十分であつた。

露營天幕は速座に張られたが、天幕内には雪上に、ツツク二枚を敷き其上に各自の毛皮の胴着を布き、座の中央に石油焔爐を置いて、暖爐と厨爐との兼用に備へた。

一同は、例の鯛味噌の味噌汁に舌鼓を打ち、手輕な晝餐を終つた後、武田、三井所、兩部長は、花守の櫓に乗つて、前に發見した小丘の研究にと出發した。處が往けどもく意外の遠距離で容易に到達しない。これは一白皚たる雪原、何等眼を遮る物無き處では、視界の標準が立たぬ爲めに、遠近の目測は兎角錯視に陥るものである。

漸つと一時間半餘を費した後、研究に十分なる箇所まで辿り着いたが、其結果件の小丘は、雪が吹寄せられて自然に作られた丘狀であつて、雪原の紆曲等より生ずる烈風の作用であらうとの結論を得、一先づ天幕に歸營したのは、午後九時頃であつた。

此夜一同の雪臥の夢を暖めたる天幕は、高さ五尺、上徑一寸二分、足五

本、幕の上部は水色の麻布で、裾三尺ばかりカーキー布で作られたものであつて、天幕の入口は、特殊の設計に成れる帆布綿製の圖筒状のものを装置せられ出入の時は其墜道を潜るのである。

此第一日の突進行程は、三里十八町、針路は東南南を指さした。

寒き雪中露營第一夜の夢が覺めて、時計を見ると、早や翌二十一日の午前

八時である。武田部長は早速觀測に取かゝる、三井所部長は撮影をする、

山邊、花守の兩アイヌは、炊事の傍ら頻りに輓犬の世話をする。やがて、

朝食を終ると彼は十一時となつた。隊長の眼症は追々と快方、何よりも結構である。

構である。

程なく出發した時は午前十一時十二分であつた。相變らずの泥雪は、ズ

ブくとして脛を没し、歩行頗る困難、橇曳く犬群も大に悩んで見える。併

し雪は南進と共に次第くに堅くなるやうである。兎も角輓犬の勞を少なう

せんが爲めに、成るべく乗員は橇を下りて徒歩する事にした。やがて、三

時五十分となつたので、晝食の爲め進行を休めたが、空を仰ぐと

雲の色は段々と險惡になり、雪片霏々として降り初めたが、天候の劇變著るしき極地の事とて見るく雪は風伯に伴うて吹雪となり、次第くに猛烈なる大風雪となつた。全く咫尺をも辨ぜざる光景、迎も此中を前進することは不可能である。そこで、已む無く露營と決し、匆慌と雪中に天幕を張つた。

此日輓犬は、前隊、後隊、各一頭づゝ隋氣を生じ、橇を曳かないので、列外に出して、一隊に隨はしめることにした。列外に出された犬は、ヨボヨボして橇隊から兎角後れ勝に隨いて来るやうであつたが、さて休憩して見返ると、犬の姿は見えない。何れも氣遣うて居ると、約一時間後トボくと歩いて來た。夜九時一同就寢した。此日の行程三里二十丁であつた。

露營の第二夜が明けると、二十二日である。午前八時一同起床した。『昨夕は非常な吹雪だつた』と隊長は語る。他の連中はグッスリ寢込んで居たので、夜中の大風雪には夢を破られなかつたのである。武田

部長例により朝の觀測に従事する。何うも吹雪襲來の模様があるので、出發を躊躇したが、幸に午前十時頃から天候恢復の兆を示して來た。隊長の眼症は今朝は益々快方に向つたので、一同大に元氣を得。

『今日は大に奮發して進行を急がう』と、異口同音に勇み立つた。輓犬も主人等の元氣にかぶれたものか何時になく元氣である。

今日までの經驗によつて、雪中露營に用ふる天幕に就いての智識を得た。即ち天幕は色止めしたる青色が最も良い。シャツクルトン氏の探檢隊の用ゐた天幕は、青色ではあつたが、色止めをしてなかつた爲めに天幕内の燠爐の火氣を受けて褪色した。すべて天幕の色は、褪色すると非常に眼の爲めに不良である。故に天幕は假令全部青色でなくとも上方だけは、是非褪色の憂なき青色を用ゐるに限るのである。それから天幕の柱は竹材よりも木材の方が遙かに適當して居る。又天幕を出る際は、必ず眼鏡を用ゐねばならぬ。是等は全く實地經驗上より得たる活智識である。



扱て愈よ出發したのは、午后一時であつた。處が前夜の吹雪の爲めに、滑る箇所頗る多く、加ふるに荷の重量が輓犬の牽引力に對して稍や過重なので、兎角後隊は前隊に比して後れ勝となる。そこで、二時間許り隊長と三井所部長とは、橇の後押を試みた。斯く二里許を進んで處で、犬も人も疲労を感じたので、臨時休憩をなし、評議の結果、前二日間の經驗に鑑み、荷物の大節減を行うことにした。隊長は毛皮の防寒服、武田、三井所、兩部長並に山邊、花守、の兩アイヌは、互に寢囊を共同にするに決し、其他の防寒服と、九日間の食糧と、其重量約四十貫目許を橇より卸し、其處の雪中を直ちに貯藏所となし、目標の爲めに三角形の赤旗を樹てた。

之れで橇も餘程軽くなつたので、午后五時再び出發した。併し輓犬の疲労は相變らずで、元氣頗る沮喪して見えた。進行中不圖氣が着くと磁針が時折變更するので、橇上の鐵器一切を取除くと、漸つと變化を受けなくなつた。これが若し長時間氣が着かずに進んだら、意外の方角違ひを

演じて居たに相違ない。

午後九時頃南西方に當り、山岳らしき物數點を目撃した。

『ソラ山が見える！』

『イヤ彼れは山ぢやない、蜃氣樓だ！』

と種々の議論が出る。そこで、針路を變へて其方向に進むべく急いだが、南極は水氣多き地とて、遠近の度頗る不明である。そこで、一先づ露營地を定めることとし、午後十時、とある雪上に天幕を張つた。武田部長は山邊花守等に命じて、其山の視察に向はせた。やがて、是等アイヌの報告によると、其地點は雪原ではなくして灣である。山の如き二百尺ばかりの氷堤が其處に聳へて居て灣内には野氷が張詰め處々に綠色の水も見えると  
の事である。先刻山岳と見たのは、此大氷堤であつたのだ。此大氷堤は、宛ら火山噴出の痕の如く見える此日行程は六里十二町である。

雪原突進の第三夜（夜と云ふも無論當時太陽は没せず、只時間の示す





所ところにより普通ふつう夜の時間じかんに當あたる時ときを便宜べんぎ上じやう斯かく云いふのみ以下いか之これに同おなじは、  
過すぎて二十三日にちの朝あさとなつた。曉げう來らい武田部長ぶちやうは、前ぜん夕せきの花守はなもりアイヌの報告ほうこく  
に基もとき、狀況じやうきやう視察しさつの爲ために單身たんしん露營ろえい地ちを出發しゅつぱつしたが、果はたして彼かれの言げんの如ごとく、  
此處こゝに一ついつの灣わんが灣入わんにうして居あて、其岸そのきしに大氷堤だいひやうていがあつた。此灣このわんは鯨灣ホーエルベールの灣わん  
口こうに於おいて見みらるゝ最終點さいしゅうてんから東南とうなんに屈折くつせつして、三十里りほど程いりこも入い込み居をるやう  
見みえた。此灣このわんの終點しゅうてんが東南とうなんに屈折くつせつして居ある事ことに就ついては、他たの方面ほうめんより見み  
ても充分じゅうぶんに證據しやうこ立てられる。それは最初さいしよ開南丸かいなんまるが灣口わんこうに到着たうちやくした時ときは薄うすい氷こほり  
が灣内わんないに漲みなぎり詰つめて居あたので、遙はるかに遙はるかなる此灣このわんの終點しゅうてんは屈折くつせつして居あ  
ものか、居あない物ものか、充分じゅうぶんには判わからなかつたが、同船どうせんがエドワード七世州せいしゅうよ  
り歸還きくわんした時ときには、灣わんの終點しゅうてんが東南とうなんに屈折くつせつして居あるやうに見みられた。此際このさい  
には最早もはや灣内わんないの氷こほりが解とけて、青々あをくとした水みづが漫々まんくと湛たぐへて居あたので、水面すいめん  
と氷堤ひやうていとの境等さかひとうも明白めいはくに見みられたが、灣わんの最終點さいしゅうてんの氷堤ひやうていは東南とうなんに向むか  
る事ことが明白めいはくに見みられた。尙村松なほむらまつ、吉野兩隊員よしのりやうたいいんはアムンドセン一行かうの海岸かいがん天幕訪問テントほうもんの際さい同





灣の最終點が東南に屈せる事を確かに目撃した。歸營すると、午前八時であつたので部長は日々の例に依り、天測に従事した。天測は毎日午前八時と午後四時との二回に經度を測り、正午に緯度を測ることになつて居る。此時人工地平儀を取扱はふとすると、水銀が全部酸化して居る。寒帶地では却々酸化を防ぐことは困難である。のみならず、豫て脱脂綿で拭いて置いた、其水銀が、デツキ、ウオツチ、に浸蝕して居るのを発見したので、部長は其修覆を試みやうとすると、手はセキスタントの凍結せる鐵器に附着して、あわや、凍傷しやうとした。此一例に見るも、如何に奇寒の烈しかゞ知られる。極地に於ける機械の取扱は、此くの如く、甚だ困難である。

午前十一時、露營地を出發し、南進の歩を急いだ。進路は一里二里位に亘る緩漫の紆曲を成し、極軸に向ふに従ひ次第に高き傾斜を呈するが如く感ぜられた。そは何故と云ふに、之を數里前方から見た時には、一の南走したる高原を明かに認め、互に之を指ざしつゝ、橈を進めたのであつたが、

さて二三時間の後に至り、其指したる位置に到達すると、案外にも平凡な  
縵曲の小丘に過ぎぬことを発見したからである。又た後隊の櫓、後れて、  
其小丘が前後兩隊を隔てて、挟んだ時には、後隊が前隊の姿を見失ふこと  
は屢次である。兎に角眼界は茫茫として際涯なき處へ、雪の反射の爲めに  
眼眩ゆくして前方を直視することが能きぬ。それ故に、其縵曲傾斜の角度  
などは、眞に想像に苦む譯で、只進行の難易の比較や、櫓の緩急から推し  
て之を知るのみである。



輓犬も今日は餘程曳き馴れて來たと見え、頗る調子が良い。此分ならば  
前途先づ安心であらう。進行中櫓の上<sup>うへ</sup>に在る時は、シャツ一枚で十分な位  
の暖味を覺える。併し寸時でも停止すると、奇寒は疾忽に肌を襲ふのは勿論  
である。

午後三時五十二分櫓を停めて晝餐を喫し、小憩の上、再び出發したのは  
午後六時であつた。此時雪片霏々として降り來り、前隊の先頭犬はともす  
ると道に迷うて、一向用を爲さぬ。そこで、三井所部長は櫓を下

り、犬いぬに先さきんじて道みち先案内さきあんない役やくとなつた。然しかるに間まもなく小飛雪せうひせつは大吹雪おほふぶきとなり、烈風物凄れつふうものすごきが中なかに、雪霧四面せつむ めんも掩おほひ、全まく三間先げんさきすら見みえずなり、呼吸いきも出できぬ位くらゐとなつた。三井所衛生部長みゐしよゑいせいぶちやうは左右さいうの手にコンパスを携たづへつゝ進路しんろを測はかつて進すすむのであるが、折々行路をりくかうろを誤あやまり、後方こうほうのコンパスから注意ちういを受けること屢次しばしばである。



此道先案内このみちさきあんないは、假令晴天たとひせいてんの時ときでも、一木一草ぼく さうなき雪原せつげんであるのみならず、一分間前ぶんかんぜんに目標もくひやうとした紆曲うきよくの丘頂きうちやうや、遙方えうほうの雲形うんけいなどは、進すすむと共に變化へんくわするから甚はなはだ困難こんなんである。却々實験者なかくじつけんしや以外の者ものでは想像さうぞうも及およばぬ程ほどである。一今日は、午後十時ごごじまで、強行きやうかうの筈はずであつたが、輓犬ひきいぬへは前日荷物減少ぜんじつにもつげんせうの際ときに少すこし許ばかり糧食りやうしょくを與あたへたのみであつたから、流石さすがの犬群けんぐんも大おほいに疲勞ひらうし盡つくして居あるので、吹雪ふぶきの何時歇いつやむべしとも見みえないのと、午後八時四十五分ごごじはつしごふぶん、第四の露營だいいろえい天幕テントを張はることにした。此日このひの行程かうてい八里三十町ちやう

天幕内テントで、今日けふの進行しんかうの困難こんなんを語かたりつゝ、一同打揃どううちぞろうて晚餐ばんさんを喫きつした



が、鯛味噌の濃い味噌汁は、雪中露營者に如何ばかりの體温を與へたことであらう、殊に其美味は終生一行の忘るゝ能はざる所で、他國探檢家の未だ曾て味ふことの出來ぬ、日本探檢隊のみへ天與された美味であつたことを特記して置く。

明くれば二十四日、午前八時三十五分、一同起床した。前日來の吹雪の爲めか、テント内の敷物に濕氣を生じて、其不快涯りない。前後四晝夜の露營生活の經驗により、陸軍用の毛皮胴着か、探檢用として最も適當品であることを知つた。朝來一天搔き曇つて居るので、天測不可能の爲め、その代りに三井所部長露營地の撮影をなし、而る後、人も犬も元氣よく南進の途に就いた。時正に午前十一時二十七分である。

一望萬里、眸底に收まる一白の世界は、實に莊嚴無比の絶景である。併し櫓の進行につれて、氷骨の處々に横はつて居ることを知つた。次第に進むうち、それが段々と多くなる。此氷骨は、降りたる積雪が、極の猛風に吹寄せられて、出來たもの宛も海豹の横はりたる程の大ききである。

それが凍結して氷骨となり、橇が其上に乗上げると滑る、滑つて橇が顛覆する、全く橇と氷骨との戦ひである。出發以來顛覆既に四五回に及ぶといふ騒ぎである。斯く橇は氷骨の爲めに劇しき上下動を起すので、遂にコンパスの安全枠が外れて終つた。武田部長は。

『大變だく、コンパスが破れては、それこそ盲目者が杖を失つたやうなものだ、』

と云つて、早速修繕に取掛つた。だが何分氷點下十八度といふ寒氣であるから、橇を停めての修繕は、逆も形容の出來ぬ苦痛である。宛ど其時は午後三時半であつたから、修繕の終ると共に晝餐を喫し、小憩の後、正五時再び出發した。

然るに、午後七時三十分に至り、矢張氷骨の與ふる激烈なる上下動の爲めに、磁針器に故障を生じた。此時の溫度は前回よりも降下して、氷點下二十二度といふのであるから、少許の油斷によりて武田部長は磁針器修覆中に凍傷を受けた。實に危険なことである。やがて、更に南進を

つゞ  
續けたが、餘りの寒さに辟易し、遂に午后九時五十分を以て、第五夜の露營  
テント  
天幕を張ることにした。其前、午后九時頃、後列の輓犬一頭、右足凍傷に  
罹り、歩行に堪へ兼ねて打臥し、曳摺られつ、悲鳴を揚げるやうになつた  
ので、列外に離して櫓の跡から従はしめた。

此日の行程九里半、空は終日曇り勝であつたが、吹雪の來襲を受けなかつたのは先づく幸ひであつた。

翌二十五日、白瀬隊長から喚起されて起床したのは午前八時である。毎朝、連日の疲労で、ともすると寢過さうとする、曰く觀測、曰く出發準備、それぐの任務を終つたのは午前十一時であつたが、空模様次第に曇色を増して來たので、暫らく進發を躊躇して居るうち正午となつた。

『今日の天候は怪しさうだが、進めるだけ進まう』と云ふので、正午露營地を出發した。處が輓犬先生は、段々ズルクなつて、人間が前方に居るとか、或は鳥でも居るとかでない、何うも進まない、背後から指揮した



位くらゐでは、歩あゆまなくなつた。そこで隊長たいちやうや武田部長たけだぶちやうや三井所部長みいしょぶちやうは、代かはるぐ  
櫓そりの前方ぜんばうに立つて、道先案内みちさきあんないになることにしたが、何分滿地なにぶんまんちの氷骨ひやうこつは壘るみく  
として、一步ぼに一滑かつといふ有様ありさま、滑すべつては轉ころぶ、仆たほれる。就中武田部長なかんづくたけだぶちやうが  
最ももつと多く滑轉すべりころげるといふのは、背丈せたけの高い爲ためだといふ三井所氏みいしょしの説せつは科  
學がくてき的でないが、結局つまり、學術部長がくじゆつぶちやうだけに、重量おもみなる機械きかいを身みに帶おびて居ある爲  
めであるといふ部ぶ長ちやう自身じしんの説明せつめいの方が合理がうりてき的である。恁こんな騒さわぎで、少せう々  
疲勞ひらうしたので、小憩せうけいしたのは午後二時半ごごにじはんであつた。

輓ひきいぬ犬いぬも、段々だんだん慣なれて來きたし、それに櫓そりの前方ぜんばうへ立つて、案内あんないしてくれる  
のもよいが、歩あゆむよりも顛覆てんぷくの方が多おほいといふ工合ぐあひでは、却かへつて櫓そりの進しん行かうの  
邪魔じゃまになるといふ山邊やまべ、花守はなもり、兩アイヌの言げんに、傘屋かさやの丁稚でつちと同様骨折どうやうほねを  
て怒しかられた連中れんちゆう、それでは乗のらうと云いふので、何いづれも櫓上そりじやうの人ひととなり、午  
後三時出發ごじしゆつぱつを始はじめた。斯かくて進すすむうち、見みるく氣壓計きあつけいの針はりは下降かかうし始はじめ、  
前方ぜんばうを見互みわたすと、雪ゆきは降ふるのでなく舞まうて居ある。之これは無論大吹雪襲來むろんおほふぶきしうらいの兆候てうこう  
なので、一同警戒怠どうけいかいおこたらず、雪中せつちゆうの強行きやうかうを續つづけて居あると、果はたして

大吹雪！。

ドーツクといふ猛風、猛雪、極地の寂寥々を破つて、物凄きこと限りなく、午後五時頃に至ると益々猛烈を極め、疾風さへ其度を加へて、全く咫尺を辨ぜずといふ光景。實際極地の大吹雪は、内地人の想像だも及ばぬ猛烈無比のものである。

此大吹雪は、端なくも一行に、大椿事を與へやうとした、といふのは他でもない。前隊後隊の聯絡が絶え様とした事である。ドーツクと一時に猛烈に吹雪の來た時、呎尺濛々となつたが、間もなく前隊の方で見返つて見ると、直ぐ數間の背後に在るべき筈の後隊の櫓の影が見えないのである。

『サア大變だ、後の櫓が見えないぞツ、荷物が分乘してあるから、若し此儘で長時間に亘ると、双方とも飢死だ』と叫ぶ。

恚ふ騒いで居るうちに、髭は凍り初める。寒暖計は零下二十五度を示し、竦々と肌に逼る寒威は、五體を凍結して終ひさうである。此時隊



長は、流石多年北方の寒境を探検した経験家だけに、一同が來し方を眺めて立騒いで居る隙に、素早く三四本の竹杖を雪上に立て、之にキャンバスを張り、應急の防寒準備を繕らへ、一同を其中に招いて。

『何うだ、恚ふすれば少しは凌げるだらう』と云ふ。這入つて見ると、ナル程多少は暖かい。隊長の此新案法のお蔭で、一同は幸に凍死の憂目を免かれることが出来た。

暖まったのはよいが、黙つて待受けて居るのも能ではないと、呼笛を取出して吹かうとすると、笛が凍つて居るので、口に凍着して、ともすると唇邊に凍傷を受ける、全く始末が悪い。氣は揉める、寒さは肌を襲ふ、加るに著るしく空腹を感じて來る。全く八寒地獄と餓鬼道とへ一所に陥つたやうな境遇、流石の花守アイヌも髯面を皺めて泣出しさうに爲つて居る。

さて待てどもく一向後隊の姿が見えぬ、一同聲を揃へて『オーイツク』と呼ぶのであるが、口を開けると、氷の如き寒氣が口中

へ流ながれ込んで、咽喉のんどの奥おくまでも知覚ちかくを失うしなひさうに寒さむい。併しかし寸秒すんべうも油斷ゆだんの出で來きぬ大切な場合ばあひであるから更さらに大聾打揃おほごゑうちそろへて。

『オーイツク』と叫さけんだ。斯かくて氣きを揉もむこと、約やく三十分間ぶんかんに亘わたつたが、一向應答かういらへがない。脚元あしもとを見ると輓犬ひきいぬども、吹雪ふぶきの中に全身ぜんしんを埋うづめ、寒さむさの爲ために嗅覺しうかくが鈍にぶつて居あるので、身動みうごきもせずおのくせうぜんに各々うづ悄然うづと蹲うづまつて居ある。人ひとも犬いぬも、心細こころぼそさに於おいては同一どういつである。さても後隊こうたいの橇そりは何處いづこの雪中せつちゆうに踏迷ふみまようて居あるのであらう？。

一方後隊ほうこうたいの橇そりの消息せうそくを述のべると、例れいの午後五時頃ごご、じごろの不意ふいに襲來しうらいした猛烈まうれつなる大吹雪おほふぶきの際さい、先頭犬せんとういぬは吹雪ふぶきの寒さむさの爲ために嗅覺しうかくの鈍にぶつた處ところへ、前隊ぜんたいの橇跡そりあとを、重おもい雪ゆきで消けされて終しまつたので、突然方向とつぜんほうかうに迷まようて歩あゆみを停とどめた。

山邊やまべアイヌは驚おどろいて、三井所部長みみしよぶちやうを呼よび。『前隊ぜんたいの橇跡そりあとが消きえて、大變たいへんだ』と叫さけんだ。三井所部長みみしよぶちやうは直たちに橇そりを飛とび下おり、毛布もうふをスポリと羽織ばおり、鏡眼めがねを外はずして、右方十間許うほうけんばかり半圓形はんえんけいに探索たんさくを試こころみ非常ひじやうの苦心くしんの末すゑ、漸やうや

くとある氷骨ひやうこつの上に一條の痕跡こんせきを留めあるを發見はつけんしたので、同時に其方向そのほうかうに向かつて大聲おおごえを揚げ。

『オーイツク』と呼んで見た。然るに何の返辭へんじもない。答ふるものは又の如き寒風かんふうの猛雪まうせつと戰つて荒ぶる音ばかり。

サア心配しんぱいになつて來た。若し前隊ぜんたいと接續せつぞくが出來ぬと大變たいへんである。此隊このたいにはコンパスがない、又た天幕テントの脚あしもない、只だ糧餐りやうしょくと石油せきいうとは此方こなたに持つて居るが、それでは何れにしても双方さうほうとも大困難だいこんなんである。そこで、三井所部みつみしよぶ長は、心窃こころひそかに。

『いよく樞跡そりあとが不明ふみいとなれば、徐ろに現場げんじやうに露營ろえいし、一日いちにちでも二日ふたかでも、天候てんこうの恢復くわいふくを待つの外ほかはない』とまで決心けつしんしたのである。

併し之しかは神祐しんいうとでも云ふべきものか、三井所部長みつみしよぶの心頭しんとうに、チラリと一點てんの光明くわうみやうが閃めいた。神かみの導みちびきとでも云ふべきものであらう。早速さつそく部長ぶちやうは歩み出した。足の向むくまゝに歩み出した。樞そりも部長ぶちやうの先頭せんとうに信賴しんらいして走り出した。

すると果して、前隊の輓犬が印した凍傷の血痕やら、糞尿などの痕跡が處々に見える。之には三井所部長は大に意を強ふし、道先案内となつて櫓隊を導いた。斯くて三十分間も進んで行くと前方幽かに暗影の一行を認め、たので、部長は山邊アイヌと相見て微笑、覺えず「萬歳」を叫んだ。

そして走りながら。

『オーイック』と連呼した。

一方前隊の方では、待てど暮せど後隊の姿が見えぬ。隊長も武田部長も殆ど絶望の極に達して、評定區々の處へ、何處からとも知らず、幽かに遠方から。

『オーイック』といふ聲！。

『ソリヤ來たツ、オーイック』と、此方は一齊に聲を揃へて答へた。併し生憎の逆風なので、後隊へは其聲が達しないやうだから、立上り伸上つて、狂氣の如く打叫んだ。

すると程なく一點の黑影が視界に現はれ來り、次第に近づいて來る。双方からは互に呼び交しく、漸くこゝに再會することが出來た。あゝ此時の嬉しさ！筆にも言葉にも盡せない。唯だ讀む人の想像に一任するの外はない。兩隊無事に相合すると間もなく、天候險惡の度は、層一層に加はつて來た。そこで、露營と決し、隊長の例の新案防寒壁の下へ、天幕を張つた。其時の寒さつたらぬ、手足の指は殆ど切れむばかりであつた。



さて天幕の張られた處で、一同其中にもぐり入り、人間の方は一先づ安全になつたが、輓犬の消息如何にと、雪上を見互しても、一匹の姿も見えぬ。試みに雪に向つて呼と、雪中の其處、此處から、黒い鼻先をヒヨコリくと現はした。一同も之には驚いたが、犬は斯る極寒の地へ來ては全身を雪中に埋めて頭丈出して眠るものと見える。そこで、考へた、兎に角、極地の探検用としては犬は最も便利である。犬は人間一人の糧食で、一人半の量を曳くと云ふのだから之を馬匹に比すると、其輕便同日の談ではない。

一行の此突進の成功も全く犬のお蔭であるのだ。

天幕を張つたのはよいが、吹雪の烈しい時には、天幕を持つて往かれる。

それから用便に立つ者があると、天幕を突上げるので、残る者は天幕無しに我慢をせねばならぬ、のみならず、出て用便をして歸ると、雪片を附着して来る、そこで。

『若しも雪を入れたら、天幕から、三間の退却を命ずる』と云ふ規約が成立つた。その結果、用便は天幕内の其場で用達しをする事になつた。すると尾籠な話であるが、一人が一方の雪上で、チャーくと小便をすると、他の一人は其雪に隣つた雪を掬つて湯を沸かすといふ始末、一寸聞くと穢いやうであるが、併し塵つ氣一つない天地だから先づは清淨極まるものとして置かねばならぬ。

夜の更くると共に吹雪は益々烈しくなり、疾風物凄く、ともすると天幕を吹き飛ばすので、糧食箱を天幕内に入れ、天幕の頂上から繩をかけて、件の箱に結び付け、更に各自の身體を其箱に結び付けた。人間も天

幕吹飛ばし豫防の道具と化しては中々骨が折れる。

此夜武田部長は、コンパスの修繕をなし、他は翌朝突進の準備を整へて、就寝したのは夜の十二時であった。攝氏零點下二十二度の寒氣は、毛皮の寝囊を襲うて、寝ても當座は、非常に寒冷を覺へたが、やがて、暖まつて來ると、漸く凌げるやうになつた。

夜半過ぎ眼を覺すと、針の如き最も微細なる雪粉は天幕を通して幕内に入り、各自の寝囊の上に白く降り積つて居た。四圍皆雪の銀世界中に、一同は此の如き有様で露營第六夜の夢路を辿つたのである。

此日行程八里半！。

翌二十六日、午前五時、一同眼覺めたが、天候依然として險惡、吹雪は益々烈い。依つて何れも起床を躊躇し、寝囊から顔だけ出して眺めると天幕を通して、入り來つた粉雪は寝囊を白綸子の夜具の如くにして眞白く、囊内から吐く呼吸は、顔の邊りの毛皮に凍結して、霜の如く、天幕の裾の一大部は、一尺ばかり雪に埋もれ、宛ら雪山のやうである。

午前十時、氣壓示度十五度、風は南南西で、吹く毎に肌を刺すやうに感ぜられる。

午後二時、氣壓示度十八度、やがて、吹雪は漸く衰へたので、起き出たのが夕刻の五時頃であつた。空を見ると太陽の位置が餘程變つて居る。直ちに食事を喫めたが、何分二十六時間に亘つた大吹雪で、其間飲まず食はずであつたので、一同は腹の減つた事夥しい。丁度繪に書いた餓鬼のやうに貪食した。

やがて、一同出發の仕度に取り掛つたが、天幕の内部に焜爐を焚くと、天幕内面に附着した居た雪が融けて、ポトリくと雫して落ちるには少なからず閉口した。

糧食を調べて見るとソロク缺乏を告げさうなので、協議の末。茲に『今、明兩日間出來得る丈進んだ後、引返さう』と云ふことに決し。其豫定で、天候の恢復を待つて進發したのは、午後九時三十分であつた。途上は相變らず氷骨壘々として雪中に横はり、橇旅行には頗る困難であ



る。

かくて、約三十分許り進行して来た時、これまで最も能く働きし斑犬、前右足に凍傷を受け、悲鳴して打臥し、曳摺られゆく故、三井所氏診察の末、列外に離してやると、背後より鳴きながら従いて走つて来たが、見る中に十五六町も後れた。實に愍然の至りであつた。

『何れ橿跡を見て、次の露營地へ來着するであらうから』と、其儘見棄て、進行した。此日夜半までの行程五里二十二町である。

翌二十七日、午前二時半、一先づ休憩して、食事を取つた。食事中果して病犬はびっこ曳きく到着した。やがて、再び出發したのは午前五時半であつた。今曉二時頃から東方に當つて、島か山か、四箇の峰頭を認めたので、針路を其方に取つて二時間餘も進んだが、少しの變化もない。距離にして十里餘を進んでも少しの變化を見ない。全く不得要領に終つた。

そこで、之れは多分蜃氣樓であらうと云ふので、其方向に進むことの

徒勞を悟つて、午前八時半、一先づ天幕を張つた。靱犬も今日は餘程疲勞して居るので、日中は休憩することゝし。各々寝囊に親しんだが、夕刻に至つて、曩きの蜃氣樓を見ると、何時の間にか位置を更へて居る。之が所謂幻岳と稱せらるゝものであらう。

前夜午前零時以後の行程十二里十四町。

午後六時半、再び出發することになつた。又素との正南針路に轉じて進出したが、靱犬の疲勞益々甚しいので、總員交代で、徒歩するに如かずと、雪上を、トボくと辿つたが、例の氷骨は相變らず一同を苦めた。此時溫度、攝氏零下十二度であつた。

廳で、進行を續けたが、氷骨壘々として櫂の進行を妨ぐることに甚しく、殊に坂路のこととて、兎もすれば顛倒しさうになる。喘ぎに喘いで、前進を強行した末、櫂の進行を止めたのは、翌二十八日の午前零時三十分であつた。昨二十七日午後六時半より同日夜半までの行程十一里夜半より二十八年午前零時半迄の行程壹里である。

此地點が即ち我が突進隊員一行が到達したる、最終の所である。氣温を驗すると正に攝氏零下十九度半、なかくの嚴寒であつた。

晚餐の後、隊長は寢に就いたが、三井所部長は尙ほ眠らず毛皮の胴着の綻びを縫ひつゝ、花守、山邊、兩アイヌに犬の世話などに就き何呉となく話して居た。斯くて、三井所部長並びに兩アイヌの寢に就いたのは午前二時である。唯、武田部長のみは夜を徹して觀測に従事して居た。

經度は毎日午前八時に測定する筈であるから、武田部長は、時計の午前八時を報ずると共に觀測を遂げた結果。此地點は西經百五十六度三十七分であることを知つた。然し緯度は正午にならなければ分らぬのである。

廳て、一同起床したのは、午前十一時であつた。程なく朝食の後、時計の正午を指すのを待つて、武田部長は緯度の觀測を遂げた結果、南緯八十八度五分なるを知つた。一行は此處まで來つて、此地點を最終點とした。それは此隊の主たる目的なる學理上の觀察を略ぼ爲し得たと考へた



からである。是に於て先づ天幕の傍に穴を掘り、携へ來れる芳名簿を入れし銅製の箱を埋め。其傍に一間許りの竹竿を樹て、其上に豫て用意の大國旗を翻へし、更らに之に隣つて赤ペンキを塗つたる三角形ブリキ製の回轉旗を樹て、其等の旗の下に突進隊員全部整列した。此時、白瀬隊長は國旗の下に嚴かに一般同情者諸士に感謝する旨の式辭を述べ、謹んで陛下の萬歳を三唱し奉つた。一同は之に和して續いて萬歳を三唱したが、それが終ると、隊長は此露營地を中心として、目の届く限り、渺茫際なき大雪原に『大和雪原』と命名した。時正に午後零時二十分であつた。

其間三井所部長は、此莊嚴なる光景の撮影を爲した。

小憩の御、此記念すべき、最終點を出發したのは午後二時三十分であつた。途すがら橋の上から幾度となく記念の最終點を振り向いて見ると、漠々たる此雪原の中央に樹てられたる國旗は、翻翻として極風に翻へり、其眞紅の色は皚々たる千古不滅の氷雪に映發して壯觀無比であつた。



嗚呼大和雪原よ！今より以後千歳、萬歳、地球の存續せん限り、永遠に我が國の領土として榮えよ。今は無人の陸として知らるゝ此の南極の大陸も、幾千歳の後には必らずや、人烟揚り車馬來往するの街衢と化せん。希くは光榮あれよと、感慨は誠に無量であつた。

さて、前方の櫓には隊長と武田部長とが搭乗し、花守アイヌ馭者となつて、犬を急ぎ立て歸途に就いたが進む時に骨の折れたる反對に、歸途は一般の地勢が傾斜して下り坂と爲つてるので、犬の歩が非常に早く、午後五時三十分頃には既に前夜の露營地に到達して居た。三井所部長は後方の櫓に乗り、山邊アイヌ馭者となり前隊を追うて歸路を急いで居たが、絶えず背後を振り回つて見ると、懐しき國旗の影は、懸て、雪か空か、白雲漠々たる地平線下に没して終つた。最早眼に見ゆる物は雪の野原のみ、耳に聽ゆるものは、風の音のみ。悄然として歸路を急いだ。

斯くて、午後七時二十分、後れ勝ちの後隊は前夜の露營地に休憩中の先隊と合したが、今日は是非共次の露營地まで強行を繼續しようと思ふので、

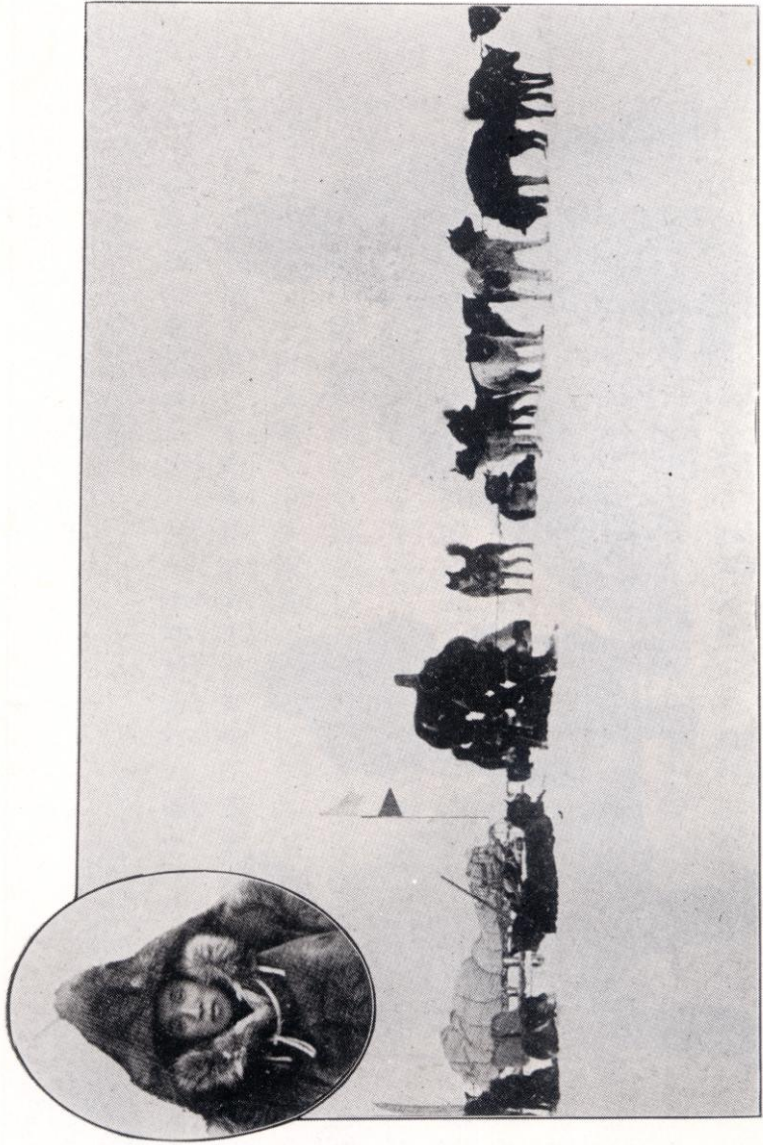


間もなく兩橋共進行を始めた。所が雪霧が烈しく程なく之れが吹雪となつて襲來せんず徴候を呈したので、橋は眞一文字に一生命懸命！烟の如く吹き送る粉雪を突いて進行した。全速力の結果夜半十二時には貳捨里七町を込んだので、天幕を張つて其處に休泊した。翌くれば、二十九日である。午前九時、一同起床、同十一時三十分出發した。徐行の後更らに午後二時三十分から大強行で進んだが、第一番に疲れたのは犬である。一度休憩して更に出發と云ふ時になると、先頭の犬を始めとして全群容易に立上らない。依て一同掛聲勇ましく、彼等を勵ましたが、中々立上らない。是に於て出發時間は大に延引したが偕其後犬の機嫌も少しく回復し、イザ出發と云ふ時になると、四方俄かに暗澹として、密雲低く垂れ、西方より風に伴ふて雪片が頻々と襲ふて來た。其雪を衝いて、此邊特有の下り氣味なる平原を行し、午後零時五十分第五露營地を後に見て、小時間進行の後、一ト先づ休憩することゝした。

探検本隊の最終出発準備



明治四十五年一月二十八日撮影



白 瀬 隊 長 と 終 點 引 揚 中 の 犬 群

明治四十五年二月二十八日撮影



茲こゝに氣きの毒どくなのは、鞆ひきいぬ犬いぬの糧りやう食しょく缺けつ乏ぼうである。犬いぬ奉行ぶぎようたる花はな守もり、山やま邊へ、兩りやうアイアイ又何なによりも是これを心しん配ぱいし、流さす石が、犬いぬ奉行ぶぎようだけに密ひそかに自じ分ぶんの糧りやう食しょくたる、ビスケビスケット、を割かつ愛あいし、彼かれ等らが食しょく料りやうの不ふ足そくを補おぎなふたのであるが、情なさけは却かへつて仇あだとなり、之これが爲ため鞆ひきいぬ犬いぬは頻しきりに下げ痢りを催もよふした。然しかし後あと鞆そりは前まへ鞆そりの犬いぬの下げ痢りの爲ために案あん外ぐわい道みち標ひら目めを得えたので、此この點てんから言いへば好かう都つ合がであり、又また滑こつ稽けいであつたと言いはねばならぬ。

程ほどなく、又また前ぜん進しんを繼けい續ぞくし、午ご後ご六じ時じ十ふん分ふた再きうび休けい憩ゑい、餓うゑをビスケビスケットに凌しのぎつゝ二十ふん分のちの後のち進しん行かうを始はめたが、午ご後ご八じ時じより前ぜん隊たいの鞆ひきいぬ犬いぬは非ひ常じやうに疲ひら勞うした。そこで山やま邊へ、花はな守もり、兩りやうアイアイは鞆そりを下おりて前ぜん方ぽうに進すみ隊たい長ちやうと三み井あし所しよ部ぶ長ちやうとは鞆そりの馭ぎ者しよとなり、武たけ田だ部ぶ長ちやうは折を々り兩りやう人にんの交かう代だいを勤つとめつゝ進すんだが、其その進しん行かう中ちゆう鞆ひきいぬ犬いぬの吐と瀉しゃが甚はなしいので、一とう頭また又一とう頭とうと次し第だいに病びやう犬けんを列れつ外ぐわいに離はなし、鞆そりの後うしろから從したがはしめねばならなかつた。所ところが病びやう犬けん共どもは後のちには血ちを吐はき始はめたので、其その血けつ痕こんが斑はん々くとして雪せつ上じやうに印いんし、誠まことに憫びん然ぜんに堪たへなかつた。午ご後ご十じ時じ三ふん分ぶんに至いたり案あん内ない者しやたる花はな守もりアイアイも疲ひら勞うしたと見みえて



一語も發せず、櫓に腰を掛けた儘、如何に勵ましても動かなくなつた。三井所衛生部長は、此體を見るより直に焔爐を櫓から下して、雪上で湯を沸し、それを花守、其他に與へ、暫らく休憩と決したのは午後十一時三十分であつた。此日の行程貳十四里十一丁である。

晚餐の後出發したのは翌三十日午前零時三十分である。途中何事もなく割合に早く進行したが、露營したのは同四時三十分であつた。斯くて、午後四時迄休憩したが、應て疲勞も幾分休まつたので、正五時露營地を出發した。花守アイヌと三井所部長とは道先案内者である。交代に之を勤めて進行すると、午後十時頃に至り右方約二三十間の所に當り、霧を通して鷹の如きもの二三を認めた。其物は右方、左方に飛んで居るので、一同は偕こそ何者か現はれたり！未だ嘗て人間界に知られざる、怪鳥にてもあらば早速に捕へ呉れんと現場へ馳けつけ見るに、こは如何に、それは新聞紙の風に舞ふて居るのであつた。最初、突進隊の一行が途中で棄てし新聞紙は、如何なる風の吹き廻しか飛び來つて此處に舞つて居たのである。



これ  
之はくとばかり尙も進行を續けて一時間程往くと、前面の少し左方に當り  
一個の氷堤を發見した。そこで、一同考ふるに、最早根據地迄一里内外の  
地點には相違ないが、左りとて外洋に面する氷堤としては、少しく早きに  
失する感がある。けれども高原性の氷原を滑りつゝ歸つたのだから道は案  
外に進捗つたには違いない。今は濃霧だから充分の判別も着かぬが、兎も  
角研究して見やうと、テントを立て小憩の後、氷堤の上に立つて眺むるに、  
ホエールズわん  
鯨灣の内灣か外灣かは知れないが、兎も角一つの灣があつて、其灣内か  
ら物凄き音が聞へて居る。寂々寥々たる此天地も其物凄き音の爲めに寂寞  
を破られつゝある。耳を傾けて之を聽けば幾多の鯨群が潮を吹揚ぐる音な  
のだ！。萬里人影を絶する、此南極大陸に來つて、然も幾分道を失した  
る危懼心に捕はれつゝ、白濛々たる濃霧の中にあつて、此異様な音響を  
聽く一行は、唯々凄惨と壯大との感に打たれて居たが、兎も角、氷堤に沿  
ふて進まうと、西方に向ひ約十四町程も進んで見た。所が、少しも得る



所がない。霧の幾分晴れた場所より見るに、外灣としては、餘りに波が靜かである。内灣としては少しも對岸が見えない。勿論遠距離は霧の爲めに雲か對岸か、判然せぬのであるが、兎に角、此地點は一行の記憶になき地點たるは疑ひなき所である。一同は大に失望して居ると、武田部長は聲を高め『僕が今少し西方へ往つて見届けて來るから待つて居玉へ』と云つて、ズンク西の方へ進んで往つた。此時又も濃霧が襲來して、五六間先きも見えない程となつたので、根據地の研究は武田部長一人に任せて置き、隊長と三井所氏は、一先づ此處に天幕を張り霧の晴るゝを待つ事とした。そこで、前に天幕を建て置きし場所に花守を遣り、山邊アイヌと犬群とを此方へ連れ來るやう命じたが、出發後、相當の時間を経ても歸り來らぬので、其方面に向ひ花守イ！くと呼んだが、中々やつて來ない。只遠方の霧の中に犬の聲が微に聽へるのみである。そこで、又も絶叫を續けて居たが、すると二十分ばかりの後に漸く到着した。雙方は大に喜んで天幕の前で握手した。此後暫くを



經ると地獄の底からでも呼んで居るやうな、最も微かな呼聲が傳はつて來た。何かと思つて能く聴くと、之は武田部長が濃霧に包まれつゝ一行の所在を發見せん爲めに呼んだ聲なる事が知れた。そこで、オーイくと答へると、先方でもオーイくと呼ぶ。漸々其聲が接近すると、竟に霧の中から臙氣なから部長の姿が見えるやうに爲つた。

「やアく大變く」と言ひつゝ、天幕に入來りし武田部長の姿を見れば全身は全然汗に濡れ、頭からは盛に湯氣が立つて居る。其話も途切れくで呼吸が急しい。濃霧中の搜索が如何に困難であつたかは、之に因つても推察せられる。所が結果は依然として居る、根據地の所在は少しも判らない。そこで、其儘露營と決したのは翌三十壹日午前二時十分である。斯て何時晴べしとも見えなかつた、濃霧は午前四時頃に至つて、名残なく晴れた。悦んで天幕外に出て見ると、嬉しや前方に氷堤が現はれて居る。是に於て一行が露營した地點は疑ひもなく、鯨灣口に於ける一地點である事が知れた。それと同時に眸を凝すと遙に西方に一個の黒點が見える。



望遠鏡を取出して、之を眺めるに、何うも己等が根據地に建てし小屋らしいのである。是に於て武田、三井所の兩人は花守アイヌを先導として、急ぎ其方向へ探究に往つた所、果して然り！果して然り！、己等が前夜來尋ねに、尋ねた小屋なのである。萬歳！萬歳！と聲を揚げつゝ、三井所氏は歸つて此事を隊長に報告すると、今や眼病に悩まされて居た隊長も喜び勇んでニコく顔、山邊アイヌをして直に天幕の取片附を爲さしめ、ヘコタレたれども、歸途を急ぐ輓犬に鞭を加へて、其方向に向つて橇を馳せた。

隊長と山邊は前橇に、三井所氏は後橇に乗りつゝ、進んで往くと、聽て、午前五時五十分根據地の前へ來た。留守を預り居たる村松書記は、之を認めて迎へて呉れた。吉野隊員も雪下駄を穿きつ、惶惶走り出で、迎へて呉れた。噫、此時の喜び！生涯忘るゝを得ざる喜びであつたとは、一同の語る所である。

斯くて、一行は隊長の命に因つて、根據地の前に整列し、紀念の爲めに



撮影した。歡喜の情に充ちて、手を携へて躍らんばかりである。けれども、此時まで忘れて居た事がある。それは何ぞと云へば犬の事である。今まで嬉しい餘りに話のみして、夢中に爲つて居たが、此旅行で非常に骨折つた。輓犬の事は全然忘れて居た。そこで、山邊花守に命じて残存せる二十六頭へる事とした。所が犬も久しぶりの御馳走に尾を振り、鼻をクンクン言はせて喜んで居た。

所で、人間の方は何うかと云ふと、村松吉野の兩人が何呉れとなく世話して呉れ、温情實に掬するばかりである。先づ一行の爲めに温い柔かな雑炊を煮て呉れた。其美味さは又特別である。八百膳植半の料理も物かはある。

久しく、此様な物に有りつかなかつた一同は腹も張り裂けんばかり詰込んだが、偕其後は如何と云へば、睡くなつた事である。晝夜の別なく、雪や氷と奮戦すること十二晝夜であつた一同は、今や食事を終ると



共に、其疲勞が一時に發し『何れ話は後刻として少こしく睡らして呉れ給へ』とて小屋内へ横になつた。吉野、村松の兩人は、寢囊の世話までして呉れる。隊長を始め一同グツスリと寢込んで終つた。其後折々食事の時に起されて夢現で箸を執り、食つては寢ね、寢ねては食ひ、又起されては箸を執ると云ふ風に、何時迄寢られるか寢飽くまで寢續けやうと、遂に五人は一日半の睡眠を繼續した。然し未だ一行の疲勞は止まなかつた。五人の睡眠中、吉野、村松、兩隊員は相變らず、八時間交代で觀測を勤めて居る。然して交代で非番になつた方が湯を沸かしたり、食事の支度などもするのである。

突進隊員が、根據地へ歸來して、グツスリと寢て居る隙を利用して、少く爰に根據地に留まり居たる、測量部員の生活を述べて見やう。曩に一行の出發したる日、即ち一月二十日の午後、村松、吉野の二測量部員は無限の感慨に打たれつゝ寂とした天幕内に休憩して居たが、吉野隊員は尙ほ眼が悪く、今日は特に甚しいので、凍つた眼薬を解かして

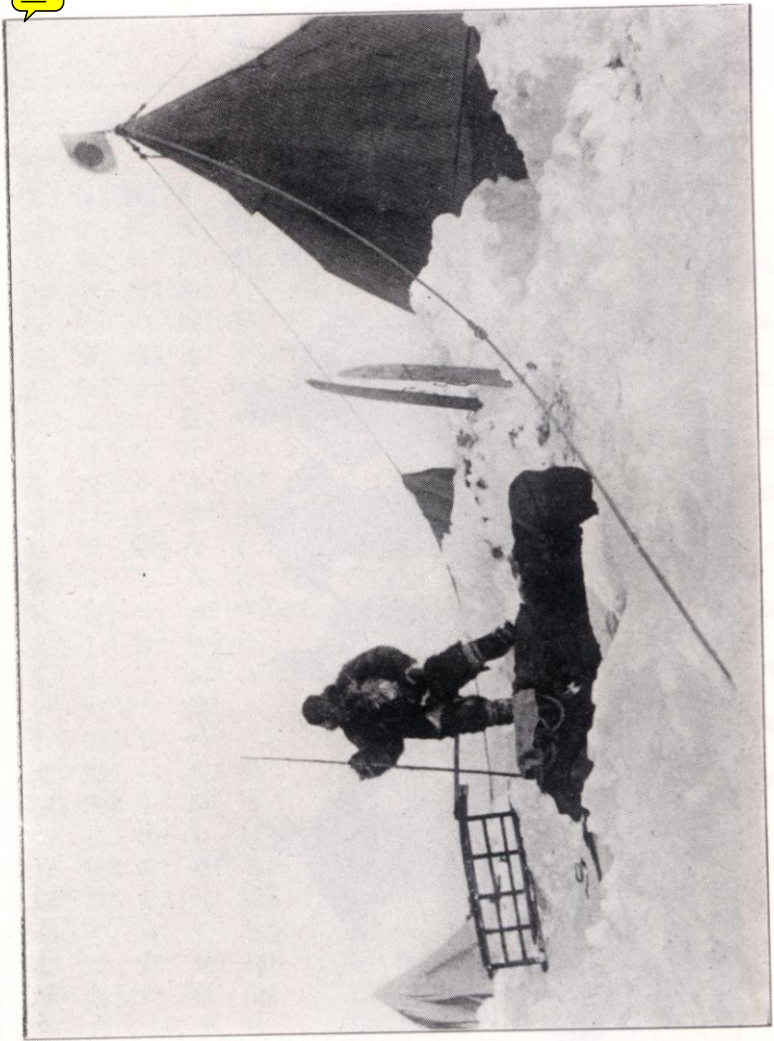




明治四十五年一月三十一日撮影

還 障 地 據 根 の 本 檢 探  
田 武 掛 穴 邊 山 長 隊 瀨 白 掛 犬 守 花





鯨 灣 根 據 地 天 幕 外 於 吉 野 隊 員

明治四十五年二月二日撮影



点眼の後、寝囊に這入つて寝て終つた。後に残つたのは、村松隊員のみである。獨り罐詰を温め、ビスケットを噛みつゝ、兎も角形ばかりの中食を濟まし。それから氣象觀測用の箱を建てる事に取掛つた。高さが七尺もあるので、土臺は是非共埋めなくてはならぬ。そこで、スコップを以て雪堀を始めた。傍らを見れば、之も取残されたる犬一頭、自分の體温の爲めに少しく窪みし雪の中に、頻りに負傷したる足を嘗めて、悄然として居る。

諸村松隊員は柱を建て桁を入れて、釘を打つ段と爲つたが、其釘が見附からない。百方搜したが見つからない。多分運搬の際、氷堤上に置忘れたに相違ないと、其方に足を運んだ所、其序に何となく開南丸の消息が知りたくなつた。同船は最早出帆したに相違ないとは思つて居たが、そう思つても若しやと考へるのは人情である。で眸を凝らしめて眺めた所それらしい物は少しも見えない。多分昨夕か今朝頃、目的地に向けて出帆したのに相違ない。フラム號は如何と見渡すに、同船も居ないやうである。

灣内の野氷が風の爲めに殆んど流れ去つたので、多分奥の方へ這入つて碇泊したのだらう。

此時、凝と海面を見て居ると、所々に水柱が立つて、それから懐しい響きが聽える。何であるかと注視すると、驚くべし、之は幾十となき鯨群が彼方にも此方にも居て、波を蹴立て、其背より潮を吐いて居るのであつた。鯨灣の名は誠に偶然でない事が知られる。

此時、又空中で雪鳥の鳴く聲を聽いた。其聲は丁度蟬の兒の鳴くやうな聲で、それが斷續しては聽えるのみである。斯る閑寂な地で、斯る異禽の聲を聽くと、寂さは益々増して来る。其時又も釘の事を思ひ出した。そこで心當りの場所を搜した所、又少しも見當らない、非常に困つて居たが、フト薪として用ゐんと毀した鐘詰の箱の事に心付き、根據地に歸つて其釘を抜き始めた。すると漸く釘も出来、氣象觀測の箱も建てられた。箱の内には最低寒暖計、普通寒暖計が置かれ、屋根にはロビンソン風力計が据ゑられた。



斯くて此日は臥床に入つた。翌日は一月廿一日である。午前七時頃、村松、吉野の兩人は、一齊に眼を覺した。前夜の爐火は早や消え果て、火鉢は元のブリキ罐となり、其寒さは一方でない。殊に吐く息は眞白く、液體は直ぐ凍ると云う風であるから、兩人の五體以外の物に熱氣のあらう筈がない。觸るゝ所皆氷で、其冷さは格別である。二人の會話は『何うも寒いね』から始まつて、話は動もすると、突進隊一行の噂となる。豫定は今日一日で、天幕内外の整頓を濟さうと云ふのであるから、早く火を燃き炭を起し、朝飯を終り、八時半より防寒の仕度(しやく)に身を固め、兩人各々分擔の作業に就いた。金城鐵壁と頼む天幕も、時々吹く風にバタリくと叩かれるので、南極特有の猛烈なる朝風が何時お見舞に來るも知れずと、先づ天幕の支柱とも云ふべき、十八本の小綱を引締めた。それから周圍五尺高の所に標目旗の棒を繼合はせた。それより天幕一パイの竹の輪を作つて、内側より取付け、緩みのなき迄張合せて、要所要所に同じく竹の筋違ひを入れ、頗る丈夫に出來上らせた。

勿論地下は一樣に、四尺程の深さに掘下げてあるが、これで天幕内は先づ五坪ばかりの住居となつたのである。入口から左手に寢室、書齋、食堂、勝手、兼帯の室と云ふ順序にそれく整頓する事と爲つた。其三方は胸高に席の圍を作つた。仕切の方は菰を吊して出入口となせる外、竹骨に麻布を張つて戸の代用とした。寢床の上は、六尺の高さへ麻布を用ゐて吊天井を造つた。先づ和洋、折衷最新式の建築と謂ふべきである。

奥の一坪餘の所には、何人が運び來りけん、幸にも一枚の藁蒲團が轉がつて居たので、其中の藁を取り出して、地上に蒔き散した。其上に筵二枚を敷いて寢囊二個を並べて見ると立派な床が出來上つた。尙傍らに、衣類箱二個を並べて見ると、それで、新式輕便の卓子も出來上つた。これで寢室及書齋の體裁は先づ備はつたと謂ふべきだ。

入口の一坪には罐詰、ビスケット、炭、米袋、味噌其他の雜品を積み重ね、中央には例のブリキ箱の火鉢が置いてある。これにて兩人が畢生の

知慧を絞(しぼ)り、有らん限りの材料を利用して造り上げた苦心の氷上小屋は、  
出來上つた譯である。

此日は朝から曇であつたが、午後四時頃より降雪霏々として襲ひ來り。  
廳(やが)て八時に至つて霰となつた。それが天幕に當つて碎くる音は、芭蕉葉に  
雨の訪(おも)ふよりも、悽(ものす)ごく轉々極地風物の荒涼たるに驚いたが、廳(やが)  
て、程(ほど)な  
く雪も晴(は)れて、日現(ひあら)はれ、續いて南風吹起り、稍々好天氣の徴を示した。  
去(さ)れど、之も瞬間(しゆんかん)、又々一天暗黒の雲に鎖(とざ)され、風は颯々として吹起つた。  
灣内に見えたフラム號も、此雲に恐れをなしてか、何時の間(いつま)にやら沖に出  
動(どう)して、程(ほど)なく姿を消したのである。

此空模様は廳(やが)て雪を降らしたので、天幕外の物品取込は明日の事となし、  
二人は一切の作業を中止して、晚餐を喫し、例の火鉢を取圍んで雑談に耽つ  
た。昨日送り出した、突進隊の安否などを氣遣ひながら、愉快に寢囊に潜  
り込んだのは午後十時である。

明(あ)くれば、廿二日である。前日の作業で大體の取片付を終つたので、

愈々本職の氣象觀測を始めた。其觀測の條項は、天候、氣溫、風位、風力、晴曇等であるが、之は二時間毎に測量することに極め、兩隊員は八時間交代とし、先づ午前八時より午後四時までの當直は村松隊員より始めることにした。今日は月曜日であるから、天幕内に据ゑある、自記寒暖計、同湿度計、晴雨計等の用紙を受換へ、又經緯儀の螺旋卷をなした。

白皚々たる雪野には、旭光鮮やかに風も収まり、四邊寂寞として南極と  
しては、甚だ閑かなる天候である。昨日の南風に、灣内一面の野氷も大部  
分は流失し盡し、フラム號の檣は氷堤近く見えた。午後に至り、雪曇りの  
氣味を呈し、北西の和風は西に轉じ、更に又南東に轉じ、程なく又北方に轉  
じた。

其翌二十三日午前四時より濃霧深く、全く咫尺を辨せざるに至り、氣溫  
は氷點下十度に下降し、天幕の張綱は杉の葉の如き垂氷一面に附着したが、  
午前八時より、霧晴れ、凍れる雲も漸く動き始むると共に薄き日光も時々  
漏れ射した。露營以來時間の早きことは、實に驚くばかりで、八時間の



當直も八時間の休憩も空々裡に去來する如く感ずる。遠く世塵を離れたる、深山幽谷の仙者も斯くやと思はるゝ程である。晴天なれば、沿岸探検を行はんものと豫期せしも、晴雨計の微候面白からざるに躊躇し居るうち、果して午後二時より雪模様となり、雪片霏々として降り、やがて吹雪にも變化せんずる状態を呈した。兩員は今雪中行軍中なる突進隊の勞苦も左こそと推しつゝ、當直交代の時間を利用して各々睡眠に就いて居た。

二十四日は前日と同じく曇つて居て、氣滯も氷點下十度より十一度に下して居た。然るに午前十時頃より晴天となり、空に一點の雲もなく晴れ渡つた。元來今は永日の時期なれば、交代に喫する食事も常に晝餐の如き心地がせられ兎もすれば、晝夜の界を忘れて時日を誤まらうとすることが屢々である。此日の暮方に至り南極鷹が珍らしくも此天幕を見舞ふて來た。村松隊員は手早く村田銃を持ち出し、實彈一發美事射止めたが、南極に始終住み慣れた黑鷹も、今日の寒氣の爲めに腹部の毛は硬く氷結して居た。

突進隊出發の際負傷の爲め留守居を仰付けた黒犬は此時まで天幕外に繫  
であつたが、今日は如何にも寒さうなので此日から天幕内に同居せしむる  
ことゝした。

犬を天幕に入れてから、食事時間後は吉野隊員の睡眠中であるので、相  
手なきまゝ村松隊員はコトくと時を刻む時計の音の高さを聴つつ出帆の  
際有志者から贈られた雑書を繕いて居たが、不思議や此時天幕の外に微か  
に人の話聲らしいのを聞いた。此無人の極地に人聲のするは、不思議の事  
よと四邊を見廻し、尙も耳を澄して居ると、又もや人の話聲！さては、フ  
ラム號の船員でも無聊の餘り、來訪したのであらうと天幕の外に出やうと  
すると、何のことだ、馬鹿々々しい。先程の黒犬が炭俵の側で頻りに咽喉  
を鳴して居たのであつた。村松隊員は獨り苦笑したが、一時は飛出して見  
やうとまで思つたのである。

二十五日午前二時氣温は零下二十三度に達し、猛烈なる寒氣である。吉野  
隊員は此の日沿岸視察に出掛けて往つたが、程なく天幕に歸り來





たつた。午後六時晴雨計七百四十九示度に下り、湿度計百以上に昇つて居る。猛烈なる北風吹雪を催し、天地は暗瞻凄愴なる光景を呈したが、此際北方に入口を設けある此天幕は少なからず風雪の襲撃を受けた。是に於て、種々防禦の策を講じたが、此日は中々の大雪で、降雪は天幕外に小山を築き、天幕内も隙間よりの粉雪の爲めに、白色と化した、果ては寢室迄も雪中に埋もれんとしたので、二人は大騒で活動した。外套を擴げるやら、風呂敷を張るやら、漸くにして事無きを得た。廳で防禦法も終へて、觀測の爲めに出やうとすると、入口外の積雪は堆く行路を妨げて居る。スコップを以て掻き退け、漸くにして幕外に出た。幕外に出て見れば、吹く風も餘り強くは感じないが、天幕は廣原に於ける唯一の障害物なので、盛んに吹付けられるのである。此日一日は吹雪に鎖されたが、二十六日朝になると一天カラリと晴れ渡り、稀なる好晴である。けれども、寒冷なる南風は肌を刺し、氣温は氷點下十六度に下つて居る。フト海岸を見るに、昨日迄は灣口一體に青波より外眼に入らなかつたが、今朝は小島の如き氷山が



二三個屹然として沖に流れて居る。多分昨日の大荒れの爲めに、海岸の水が壞れて流れ出でたのであらう。

今日は二十四時間一片の雲だに起らない。太陽は常に嚇々として輝いて居る。觀測には此上もない天氣である。先づ大體の目測では今日此頃の太陽は、正午より午後二時に北方四十五度許を昇り、それから、西を過ぎて南に至り、午前一時より同二時の間は最も低く凡十五度許り下り、又東に向つて環狀運動をなすので、恰も此天幕の十二通りの縫目を二十四時間に一週する都合である。必竟縫目の間一間の巾を二時間を費して運動する譯なのだから、此天體時計さへ見て居れば、夜の無い此南方の世界（但し冬は殆ど夜ばかり）に居ても、午前午後を間違ふやうな事はないのである。

翌二十七日は天候依然として快晴である、豫てより宿望の灣内探検を試みると、兩人打連れて天幕を出た。各自の肩には散彈を裝填した



銃が懸つて居る。先海に沿ふて西南方に歩みを運んだ。旭日は青空に懸つて満目の風光皆白く、時々何處かの氷堤の缺落する音であらう、遠雷の如く悽ごく響いて來る。又強き南風が常に雪野を荒れ狂ふものと見え、種々な模様が雪上に印してある、恰も洪水に押流されし砂地を水の去つた後眺むるやうな感がある。二人は過日一行の登攀したる地點を眺めつゝ三哩程も進みしに、臙氣ながら櫂の跡、板カンジキの跡、犬の足跡等が己等の進路を横切りて海岸よりS字形に走るを見た。孰れアムンドセン大佐一行の何者か遺した跡に相違ない。二人は己等の天幕を見返りく懸て日章旗を視園外に遺して、灣内へ突出する氷堤上へと出た。灣内の氷堤は龜裂が多いので、其縁に迄は進めないが、目測に依ると高さは確かに百五十尺以上である。對岸一體の氷堤は之よりも餘程低く、北より南に走つて居り、兩岸の距離は漸く五哩位のものである。今や灣内の野氷流失し盡して碧波動き、兩人の立てる直ぐ左方の灣口から十哩を隔て、其正面に立つ氷堤の東端は低く



陥没して、海水も餘程深く浸入して居る。灣内水面の形は丁度長靴のやうに見える。

數日前吉野隊員は此氷堤まで來り、沿岸を視察して歸りしが、其際、長靴形の灣の踵に當れる地點に、一大氷山の存在せし事を語つて居た。然るに今來つて之を見れば、既に跡方も無く消え失せて居る。思ふに變化多き南極氷海の事とて、沖に向つて流れ出でたのに相違ない。

試に雙眼鏡を取つて眺むると、其氷山ありしと云へる地點の後方に空高く黒き物が見える。或は是れ諾威探検隊の旗にてはなきや、兩人の好奇心は大に動いた。若し然りとすれば是非共之を視察せんければならぬと、足は直に之に向つた。往くく氷上を注視するに五寸乃至一尺位の龜裂は幾條となく前程を遮り、然も雪が之を掩ふて居るので危険言ふばかりなしである。携ふる所の竹杖を以て安全なるや否やを確かめつゝ進む光景は宛然按摩の橋渡りである。注視するに此龜裂の大動脈とも云ふべきものは、大なる環圓を爲して、東方より來り、而して南西に奔るものゝ如くである。

其衝路に當つた雪は、異様に隆起し又は缺落ちて裂目を生じて居る。兩人は此動脈の中心に向つて進むのだから、其危険は言ふばかりもないが、進むに随つて雪野は次第に高まり漸く安全の地點へ出た。斯くて氷堤を右に沿ひて曲り、灣口を正面に見た地點まで往くと、今まで見えざりしフラム號は、遙か沖より灣内に向つて進行して來る。是れ必竟風も和いたので、灣内で冰山に衝突する惧れもないから入來つて碇泊するものに相違なしと考へた。

斯くて又前進を續けて居ると、一度見失つた彼の黒き物は確に飄々たる旗である事が知れた。それと同時に後方に更に一個の黒い物のある事も知れた。是に於て兩人は愈々アムンドセン一行の露營地なるに相違なしと、勇を鼓して突進すると聽て、諾威の國旗が立ち天幕の建てられてある地點まで着いた。其天幕は樺色の褪せたキャラコ地の如き麻布製の天幕で、中央に柱一本を立て、細き多數の控綱を以て龜甲形に張られてある。入口は矢張北向きで袋式に造られ、頗る携帶に便なものである。我が根據地を

距ること七哩なる此地點に同一研究に従事する人間が住んで居ると思へば、誠に心強い感がある。

英語を以て『今日はいく』とやるが、誰も出て来ない。能く注視するに何うも一人も居ないらしい。多分海岸へでも用があつて往つたに相違ない。此様子で見ると、之は諾威隊の根據地ではない。只見張所位に過ぎぬものだ。此處より見るに、海は靴の踵と見し處を頂點として更に三角形の如く東西に擴がり、今日も尚ほ氷解けずして一望漠々只氷堤の聳ゆるを見て海かと思ふ位である。尚ほ思ふに、此氷の解けずして東に入込みし地點は或は前見し龜裂と連絡し、今兩人の立てる地點の如きは日ならずして漸次缺けて流出し、灣内は頭なき瓢の形を爲さずやと推察せられた。

斯くて尚ほ此地點にあつて、眺望を擅まにして居ると、三十分ばかりの後、此灣内に向つて諾威探検船は突進して來た。それと共に、此海の東岸を沿ふて來る人のあるのを見た。是に於て此天幕は陸上隊と船



との連絡を取る爲めの物である事が推察せられた。待つ間程なく一個の壯漢が現はれた。ジャケットを以て身を固め、頭には防寒頭巾を冠り雪眼鏡を懸けた探検家らしい男である。諾威式の六尺もあらうと云ふ細長き板カシキにて雪上を滑走しつゝ、目前に現はれた。知らぬ外國の人ながら斯る無人の境に於て面會するは、雙方共無限の感あり、熱情籠れる握手を交換して後、彼は船中に於て白瀬隊長の肖像を見たりし事など喜ばしげに語り、尚ほ昨年冬營中には寒暖計非常に降り、犬も爲めに凍死して甚しき危険に陥りたりし事、己れは他の一人と共に目下此天幕の留守居を爲し居るが、先日來二個月に八百哩を踏破して此地に歸り來りし事、及此カンジキを以てすれば、一日に四十哩乃至五十哩の旅行は爲し得べき事など語つた。村松、吉野の二人は尚ほも語り續けんとしたが、折しも附近に來るフラム號と信號交換の用事ありとの事に、再會を期して立別れた。歸路に雪とも思はるゝ程白き雪鳥及海燕等を獵り、緩慢なる波のウネリの如き高低ある雪野を辿り

無事我が根據地へと歸つて來た。

翌二十八日は引續いて晴天で、氣温も十度乃至十一度を示し、見渡す空は拭ふが如く、唯北西水平線とも思ふ邊り、墨を流したる如き低き層雲の棚曳くのが見ゆるのみである。

其黒雲の東方面の氷堤は以前より一行に危険を豫測せしめた脆きものであつたが、今朝見れば最早諸所脱落して、新らしき斷壁が一層目立つて見えた。午後四時から暗雲空を蔽ふて雪催ひとりとなり、氣温八度許り上昇したが、これも暫時にして濃霧となり、やがて、又晴れた。

二十九日、午前八時、自記器械の用紙取換をした時、其示す所に依ると前週最低温度は二十五日午前二時の氷點下二十三度である。湿度は二十五日の午後六時より、二十六日の午前十時の間に渉る百以上、又同氣壓は二十七日の正子の七五八<sup>ミリメートル</sup>を最低として居る。風位は重に南風にて二十五日の一六九六〇を最強風力とする。先づ概して平穩の天候である。さて今日は朝から曇天で氣温高く風無く、午前十時頃より濃霧を生じた。

間もなく晴れて北方に巻雲が現れたが、其雲より洩る日光が海を照す爲め、海上一面金色を呈し、驚くばかりの近距離に見えた。尙又水平線上には、南極特有の暗黒なる巻層雲長く棚曳きて、其頂きと思ふ所は、矢張光線を受けて白く見える。言はゞ一條の瀑布を遠望すると云ふ状態であつたが、それが程なく消えると、今度は白鉛色の雪曇となつた。極地天候の變化は實に此の如くである。此日午前四時頃寒暖計は氷點下三度まで昇つた。

翌三十日氣温は依然として温かく、根據地に留守役の身に取つては何よりの幸福である。然し何分にも變化激しき極地の空とて、或は此反動は慘憺たる荒れの天候を生ずるにあらざりと危ぶましむる。突進隊も出發以來大分に、時を要したが、目出度目的を達して歸つて呉れ、ば善いがと、兩人は祈つて居る。午前十時頃より空は一様に灰色を帯びた雲に蔽はれ、午後に入り寒暖計が稍や下ると濛々たる霧、此白大陸を包み、四顧暗憺風力計も一時停止した。翌三十一日氣温は氷點下十度を示し、空は相變らず



薄暗く、風は珍らしく東南方より吹き來り、天幕の旭旗を弄んで居る。午  
前四時の交代時刻に觀測所より天幕内に入り來つた村松隊員は頻りに味  
噌汁の料理中、天幕外に人の來つた氣色がした。近來黒（犬の名）も餘程  
快い方で頻りに天幕内に入出し得るのである。最初は犬であらうと思つ  
て居たが、雪を踏む音が犬よりも高く勇ましいので、何うも今度は人らし  
い、それにしても、吉野隊員の足音にしては早過ぎると思つたので、試み  
に『吉野君！』と云つて天幕の外を見ると、彼方からまだ容易に歸るまい  
と思つた花守アイヌが黒い顔の眞中に兩眼を光らかして『ホーク』とアイ  
ヌ流の挨拶をしてやつて來た。全く夢では無いかと思つたが、それでもな  
い。

すると其處へ、吉野隊員も飛んで來た、で二人揃つて花守を捉へ一行の消  
息如何にと聽いて居ると、程なく、黒ジャケットの武田部長が兩手にコン  
パスを抱へた儘、雪を踏鳴らかして急ぎ駆付け來た。白瀬隊長三井所衛生  
部長も喜ばしげに櫓に乗つてやつて來た。かくて突進隊の五人と殘留隊の

二人とは、茲に十有二日目に無事根據地に於て顔を合はする事と爲つた。其悦びは到底筆紙の盡すべき所でない。

午後より北風烈しく、一天搔曇り程なく吹雪と變じて來た。突進隊一行は長き疲労に、二三談話の後、忽ち夢路の人と爲つた。

二月一日、隊長以下突進隊一同の高き躰きの間に村松、吉野、兩隊員は相變らず交代に觀測をなし、又小屋内の世話に従事した。午後六時頃より雪片霏々として、降り南風吹荒むと共に、廳て、猛烈なる吹雪となり、凄愴なる光景を呈した。然し風位が悪くないので、天幕内は左程にない、只出入口を雪で鎖された丈であるが、天幕の外は非常なる光景である。二列に繋がれたる犬群は、雪中に深く身を没し、體を縮めて吹雪の中に熟睡して居る。其状は白銀世界の黒一點で、僅に毛の一部分を外に現はして居るのみである。餘程の疲労と見えて、打つも蹴ると平氣にて、殆ど死せるが如き深き睡眠に耽つて居る。僅に一頭の頭を擡げしを見れば頭より背部に至るまで、宛然銀の鎧を着けたやうである。

寒國かんこくの犬いぬでなければ、斯かくの如ごとき寒氣かんきに堪たえ得えないであらうと感心かんしんした。

午後八時頃ごごより、空そら幾分晴はれ、雲間くもまより太陽たいやうを見ると同時どうじに、日暈にちうんが現あらは

れた。吹雪ふぶきは尙なほ時々來きつたが、風位ふうみが西にしに轉てんずると同時どうじにハタと止やんだ。

此日このひの晚餐ばんさんは隊長たいちやう初はじめ總員そうゐん七名久方振めいひさかたぶりにて食卓しょくたくを圍かこんだ。此夜このよ一同どうは今

後の行動こうどうに就ついて、協議けふぎした結果けつこ、先づ天候てんこうの定さだまると共に第二だい根據地こんきよちを去さ

つて、アムンドセン大佐たいさの根據地こんきよちを訪問ほうもんし、鯨灣ホエールスわんえんがん沿岸たんけんとうの探檢等たんけんとうを試こころむる事こと

となつた。又一方またには我開南丸わがかいなんまるの着船ちやくせんも今數日いますうじつの内うちと見て、それ迄までに是非ぜひ

共全部設計ともぜんぶせつけいし、然しかる後能のちあたふ丈迅速だけじんそくに乗船じようせんを了れうし、豫定よていの如ごとく、コールマン

島とうに向むかはんと決けつした。

曇くもれる空そらも漸やうやく二日午前八時頃かごぜんより晴はれ渡わたり、天候てんこう全まく恢復くわいふくしたらしい

ので、天候てんこう甚はなしく變かはらぬ内うちにと、第二だい露營地ろえいちより三哩計マイルばかり先ふきに殘留ざんりうせ

る突進隊とつしんたいの荷物にもつの收容しうようの爲ために樞二臺そりを仕立したてた。其同勢そのどうぜいは四人ほんである。前まへ

樞そりには武田部長たけだぶちやうと花守アイヌと乘のりて十三頭との犬いぬに曳ひかせ、後樞あとそりには村松むらまつ、

吉野よしの兩人乘のり犬十五頭いぬをして曳ひかせ、午後三時二十五分ごごに出發しゆつぱつした。

はうかう 方向は 武田 氏の 示す 所に 随つて、 南少東 に 取り 「トウトウ」 「カイク」 の  
かけこゑいさ 懸聲 勇ましく 馳せて 往く。 所が 前櫓 の 犬は 後櫓 の よりも 強しと 見えて 稍々  
ともすれば 距離 を 生ずる。 村松、 吉野 兩人は 憤激 に 堪へず、 頻に 勵まし 責  
きたつれど 犬には 格別の 効もない。

このとき 此時 二羽 の 南極鷹 あり、 後方 より 飛び 來つて 後櫓 の 上を 過ぎたが、 犬群  
は之を見て 追往 かんども 思ひしか、 疾風 の 如くに 駈け 出した。 櫓上 の 二  
人は 振落 されんばかり である。 けれども 頗る 得意 である。 根據地 の 留守 居  
のみした 勞も 今一時 に 償はれた やうな 顔して 乗つて 往く。

前程 は 只 茫々たる 雪野 である。 けれども 處々に 高低 もある。 恰も 海上 の  
濤畔 の 如き 状の 高低 がある。 犬は 此間 を 馳せて 往く。 一時間 ばかりの 後砂  
丘に 似たる 雪の 吹き寄せ を 右方 三哩 ばかりの 地點 に 見た。 又 同方面 の 地平  
線上 に 氷堤 の 聳え 立つの を 見た。 此氷堤 は 鯨灣 と 連續 し 居る 物に 違いな  
い。

犬は頻に突進する。馳て午後八時三十分、首尾能く十七哩の道を走つて荷物の残留しある地點に着いた。或は屢々此邊の氷野を掠むる吹雪の爲めに埋没せらるゝ事なきやと心配したが、荷物は何等の異變なく立て置きし赤旗さへ依然として翻つて居た。けれども外面は總て厚い氷に纏はれて居た。

荷物は全部で十二個である。之を二臺の櫓に載せて走るに其重量は總計四十貫、來りし時よりも重量多きに係らず、犬は根據地に向ふ嬉さに疾風の如くに駆け出した。馳て寒氣は氷點下十五度に下降し、雪を捲く雄風颯々として吹起りに拘はらず、犬は驀直に馳せて、午後十一時五十分根據地へは歸還した。行程は往返三十四哩、一時間の速力四哩餘である。靛犬の速力は實に侮るべからざるものである。

吉野、村松等の不在中、氣象の觀測は三井所部長其任に當つた。すると微に汽笛の音を聽たので、若しや開南丸が目的を達し、エドワード七世州の方から歸着したのではあるまいかと、山邊アイヌを連れて視察



に往つたか、何うも其姿は見えなかつた。若しや氷堤の蔭に碇泊して居るのではないかと眺めたが、船らしい影は更に視界に入らぬ。併し尙ほマイルばかり奥に進んだが結局要領を得ずして引返した。途中犬の鳴聲を聞き、其方を見ると今しも荷物收容の櫓隊は、將に根據地に達せんとする時であつた。



此時、太陽は漸く南西の空に低く懸り、氣温も大に下降した。其夜は開南丸の姿は見えず、汽笛のみ聞へると云ふ事が話題となり。今は一刻も早く乗船せんと思ふ故、今日の汽笛も我母船にてあれかしと心々に祈らぬは無かつた。

翌三日午前二時半より南々東の吹雪盛んに來襲した、天幕入口は風雪防禦工事の爲めに、吉野隊員と三井所部長と力を併せ、必死と爲つて働いた。やがてそれも一時にて收まり、午前七時には一天曇りながら雪を見なかつた。朝餐の最中花守アイ又は慌たゞしく天幕に入來り『船が見えた開南丸らしい!』との御注進である。偕は、昨日の汽笛も空耳ではなかつたかと、



早々双眼鏡を取出して見た。遙か沖や空なる彼方に南風に船旗を軽く翻へし、海上に浮んだる姿は疑もなく懐しき我開南丸で恰も氷堤より十哩許りの沖合に浮んで居る。

そこで、兎に角、海陸相互の連絡を附けるに如かずと、一同は氷堤に赴いた。然し風波荒き爲めか、船は一向灣内に入來らず、見渡すと船は非常に傾斜動揺して居る様子、何分相互の距離が遠いので、定規信號もならず、唯徒らに外套を振るやら、二三の發砲をして相圖をするやら思ひ思ひの信號を試みた。所が船では汽笛一聲微かに此方に應えた、斯くて氷堤上に待つ事一時間に及んだが容易に船の入來る様子もないので一ト先づ根據地に歸る事にした。途中雪鳥、南極鷹を狩り、二三羽の戦利品を獲つゝ天幕に歸つたのは、午前十一時であつた。

折しも、空晴れ渡り風止み、小春日和とも云ふべき日光と氣温とになつたので濡れ物を乾すやら、其他各自部署を定めて根據地引揚げの準備を整へた。午後十一時頃船は氷堤に沿いつゝ灣内に突入した。そこで

四日午前一時、武田部長、村松隊員、山邊、花守兩アイヌの四人は、櫓に乗り船とも連絡を取り乗船地點の搜索に従事した。

櫓隊が乗船箇所の仕度を終へた結果、何分にも一刻も早く乗船せんければならぬ、寧ろ瞬時を争ふ此地の状態であるから迅速に乗移らねばならぬと一同荷造りに着手した。全く火事場騒ぎである。

斯くて準備を終ると共に、櫓は幾度か氷上を往還しつゝある隙に、或は荷物を運ぶ者、寫眞を撮る者など、各々必死となつて活動した。又船の方よりは土屋運轉士の外、渡邊、柴田、西川の三船員を應援隊として上陸助勢せしめたので、爰に上下相和し、荷物運搬の道付けを終つた。斯くて午  
前六時二十分に入船を初め八時三十分を以て全部の收容を終つた。引揚を了すると共に一面の濃霧海上に立籠め咫尺迷濛たる光景と爲つたのである。

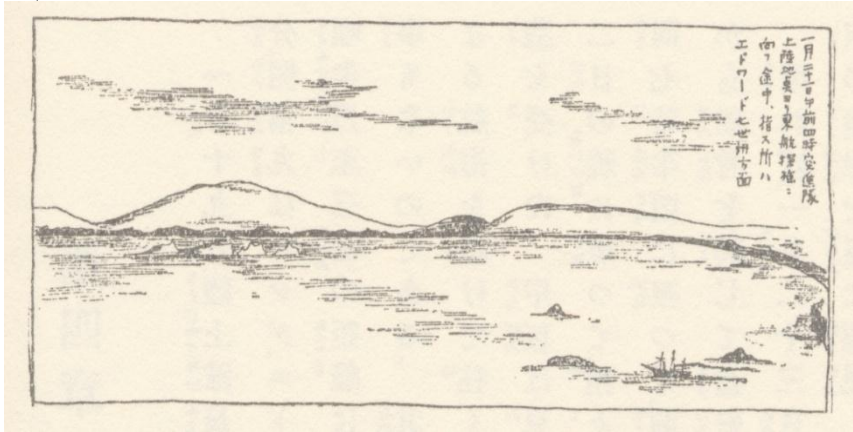




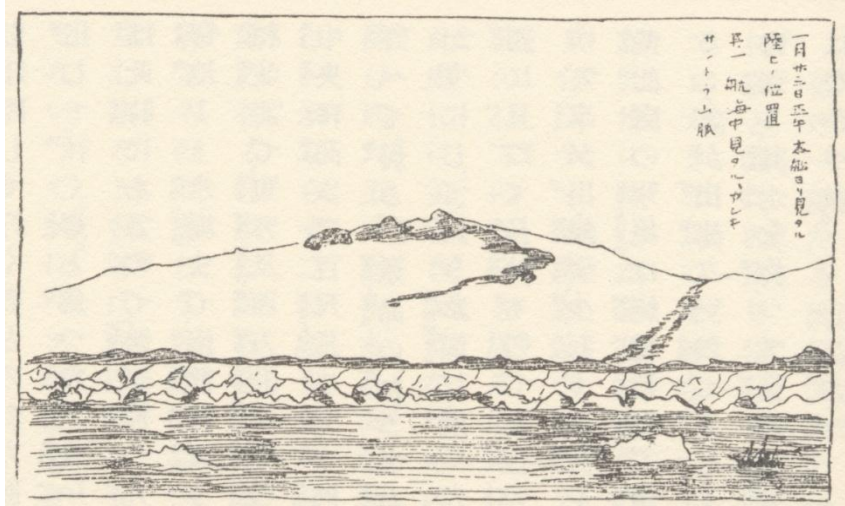
## 第四章 エドワード七世州の探検

一月十九日、陸上隊員七名を鯨灣上の根據地に殘して、午後五時三十分、開南丸はキング、エドワード七世州に向け出帆した。氷堤を右舷一哩半、乃至三哩の距離に見つゝ進行したが、天氣が靜穩なので、海上は何事もないのである。其翌廿日も、廿一日も、頗る靜穩な天候なので、安全なる航海を續けて往く。然るに午後八時頃に至り、猛烈なる吹雪の來襲を受ける。甲板は見るく中に積雪に埋められた。此雪は、翌二十二日の曉に至つて、稍々稀薄となつた。午前四時より汽帆兩走とした。同七時半頃に至つて、前日來の天候の爲め、少しく吹流されて居た航路から船首を轉じて舊針路に復した。

明れば、一月二十三日である。午前七時、目的地たる、エドワード七世州の陸岸を遙に望見した。此時右舷の方を眺めると、長さ二十哩幅三



マイル ひとり、陸岸一帯鋭く尖つた氷が林を爲して  
 哩に亘り、陸岸一帯鋭く尖つた氷が林を爲して  
 生じて居るのを見た。遠方から之を望めば、宛  
 然百方の白衣兵が呼吸を凝らして潜んで居る  
 がらひやくまん びやくえへい きこ  
 やうに思はれる。船は此處を過ぎて、注意深く、  
 えんがん ちか 午後四時、南緯七十六度五十六分、  
 沿岸に近づき、西經百五十五度五十五分なるビスコー灣の野  
 さいけい ひやうじやう 氷上に碇を卸した。前面には、アレキサンドラ  
 せんめん ばん 氷脈が神々しく聳へて居る。萬古の氷界史を語  
 さんみやく かうく そび ばんこ ひやうかいし かと  
 らんとするものゝ如く聳へて居る。打見たる所、  
 ここのやま こんき このみね うちみ ところ  
 此山の根基は一ツであるが、其峯は三ツに分れ  
 ゐ 居る。根基の一ツであることは例へば、富士山  
 ほんこ 三つに分れ 居る。根基の一ツであることは例へば、富士山  
 ほうえいさん と寶永山との關係のやうなものだが、特に中央  
 みね おほ そのせいはう みね これ つ ちうあう  
 の峯が大きく其西方の峯は之に次ぎ中央の峯の  
 とうほう そび 物は又之に次ぐ。以上  
 もの またこれ つ い じやう



一月廿三日五平本船ヨリ見ケル  
陸ノ山腹  
其一組海中見ケルカサレキ  
サントウ山脈

三個の峯の山腹八合目邊には何の峯にも黒いものが見える。之は山皮の露出に相違ない。其中最も西端にある峯は、船の位置に最も近いので、其黒點を研究するがため、隊員船員の中より多數の者を上陸せしむる事と爲つた。其隊は二個に分れ、一隊は土屋運轉士之を率ゐ、島、渡邊（鬼太郎）、多田柴田の四人が従ふことゝなつた。他の一隊は西川渡邊（近三郎）兩隊員及田泉寫眞技師の三人を以て組織することゝなつた。先づ二隊共開南丸の繫留しある前面の大海氷を通過して氷堤に上らねばならぬが、此氷堤に上るには、眞直に南に向つて往くのと、西方



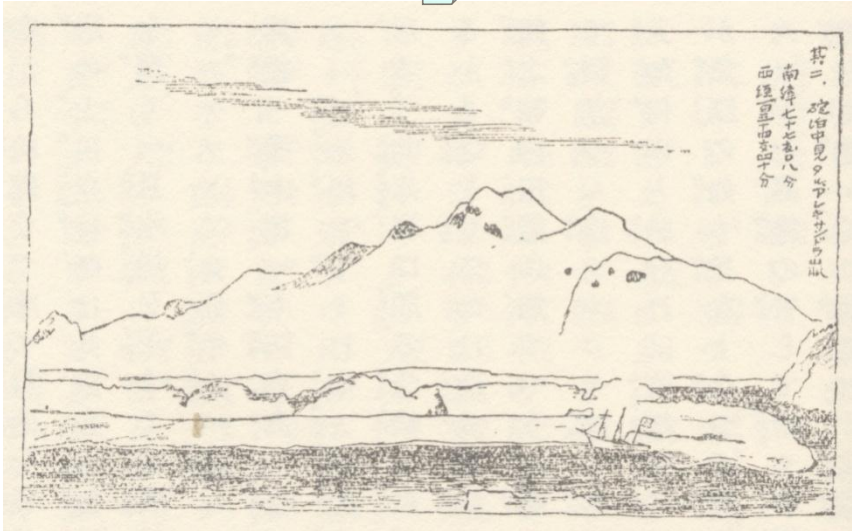
を迂回して行くのとの二方面がある。土屋、島等の一行は眞直に南を指して往く事と爲つた。長い間待ちに待つた沿岸支隊の任務を果すは此時にあるので、勢ひ籠つた眼に前方を見るに、此處の野氷は船の繫留地より氷堤まで、南北に亙りて幅二哩半ばかりもあり、長さは氷堤と相並んで、東方及西方共氷堤の屈折する處まで續いて居るが、此野氷の中央に高さ二百尺長さ五十間位の氷山が三個程も屹然として青空に聳へて居る。水晶の如き其英姿を仰ぎつゝ進んで往くと、約二十町ばかりにして、長き水溜に遭つた。此水溜は幅二十間位長さ二哩位で、東西に亘つて長いものであつたが、河の如く其處に横はつて居るので、越ゆる事が出来ず、少しく東方を迂回して氷堤の下に達した。が、悲しい哉、此處の氷堤は絶壁の如く險しい。其高さは二百尺もあつて、到底登ることが出来ないで、止むを得ず歸路に就いた。歸途試に前の水溜に到り、其水を掬つて嘗めて見た所、幾分鹽氣はあるが餘り辛いものではなかつた。





他の一隊たる、西川、渡邊、の一行は如何と云ふに、手櫓を曳きつゝ、田泉技師と共に、西南を指して氷提に向つて往つたが、往くこと二哩許りで、フト、大きな鳥の足跡らしいものを発見した。大に勇み、如何なるものが此地に住むか、若し前世世界の巨動物にても住まば、最も面白しなど、語り合ひつゝ、其跡を辿つて往くと、麴て、東西南の三方、高き氷壁に圍まれ、北の一方のみ開き居る地點に達した。試に其中を窺ふに、驚くべし。此處には美しき大きな、ペンギン鳥が居た。頸に黄色の輪を掛け、其丈け四尺五寸程もある美しき帝王ペンギン鳥が居た。然も其の數は一羽ならず二羽ならず、六羽程も居たので、三人は大に喜んだ。今や毛の替る時期だから、北だけ開いて居る此暖かい場所へ来て温まつて居るものであらうと想像しつゝ三人は、之に近寄り往くに、人間の顔を見し事なき彼等は、友達にても來りしものと思ひてか、少しも驚ひた風もない。で試に一ツ、拳骨をお見舞申して見た處、愚物の彼等は、人間の毆つたものとは少しも思はず、隣りのペンギン鳥がつゝいたものと心得て、其細長い嘴を

以て、直ぐ隣なるペンギン鳥をつゝいた。すると、隣に居たペンギン鳥は、又、其隣のペンギン鳥をつゝいたので、到頭最終の六羽目まで悉くつゝかれて終つたのである。三人は大笑着、之を何しやうかと相談した。此儘置けば他へ逃げて行く惧もない故、今は捕へずに措き、歸途挽犬の代りに橇を曳かせて歸らうなど戯れつゝ、此地點を去つた。斯くて尙も進んで往くと、其處に大氷堤が聳へて居る。高さは約二百尺。偉觀實に形容の辭なき程である。仰視して、倩々天工の偉大なるを感嘆し、通路もがたと索むるに、この氷堤に約三十度位傾斜し居る點がある。其處には無論水は少しも流れて、居ないが、極地氷河の實質を備へた氷河がある。底部に滑かな氷の凸凹があつて、明確に氷河たるを證明して居る。其兩岸には、又大なる氷柱が垂れて居る。光彩實に眼を奪ふばかりである。此氷河を左方に見つゝ、傾斜せる氷堤を攀づること、一時間許りにして、漸く氷堤上に達した。すると、此處には前方一面肉眼の達し得る限り幾多の龜裂が縦横



に走つて居た。其状態を譬ふれば龜甲の  
 劈痕とも云ふべく、龜裂なる文字が最も  
 適當して居た。此龜裂の幅は何程ぞと  
 云ふに一尺より三尺、四尺五尺に及び中  
 には三間五間の幅の物もある。試に縁に  
 接して覗くに幾十百尺とも知れざる深  
 さで、青い物懐い光を發して輝いて居る。  
 一度之に陥れば永劫浮む瀬の無いのは  
 判りきつて居る。龜裂の研究には此上な  
 い場所であるが、去りとて、危険は之よ  
 り甚だしいものがないので田泉技師は  
 前進を躊躇した。西川、渡邊、兩隊員も、  
 此儘前進するは不可能と考へた。然し



ながら此處まで来て、目的を達せず歸るは遺憾だから、此地點で三人合議の上、田泉技師は此處から歸り、西川、渡邊、兩隊員は荷と爲るべき手櫓を棄て、一旦氷堤を下りて後、更に進路を索める事とした。其携帶品は、ピスケット二食分、牛肉一罐、ミルク一罐で、それに鑛石用の金槌一挺、寫眞機一臺、木標一本、防寒衣二着である。

一旦氷堤を下りし兩人の左方には、高さ百五十尺位の氷堤が聳えて居る。其氷堤は頗る急峻で、殆ど七十度の角度を爲して斬然として居るから、之を登るのは容易な業でない。けれども、勇氣凛々たる兩人、何條之等の困難に屈すべき、連絡を失はぬやう雙方の腰を一條の繩を以て繋ぎつゝ鐵カンジキ固く踏締めて、エッサとばかり登り始めた。足元如何にと眺むれば、直径五寸四方もあらんと思はるゝ幾多圓形の氷が魚鱗の如く重なり合つて堤側に生じて居る。それを踏めば、カランカランと異様の音して恰も音楽を奏する如く碎け散るが、兩人は斯る音をも聽いては居られず、尖端を有する杖と鐵カンジキとを唯一の伴侶として一心不亂、專念一意、

機を織る如く縦横に傳ひ。二時間の後漸く氷堤上に達した。

辛ふじて攀ぢ登つた兩人は甚しく疲労を覺えたので、一ト先づ堤上に腰を据え、十分ばかり休憩した。見れば前面には、アレキサンドラ山脈が嚴然として聳へて居る。千古未だ曾て此方面より人類の登りし事なき此山は何萬年の間待ちたりしか、人待顔に嚴然として聳えて居るので、可し！我等日東男子、此方面より先登して、神秘の寶庫を人間界に開き呉れんと、二人は、キツト見渡した。極地とは言ひながら太陽は煌々として照りつけ、それが雪に反射して來るので、中々に暑い、兩人は背部に荷物を負ひつゝ、汗を流して進んで往つたが、其進路には處々に寛かなる窪地のある爪先登りの氷原が白く横つて居る。で疲るれば雪上に大の字形に仰臥して休憩しつゝ只管進行を續けたが、二十三日の夜半十二時になると、天候が俄に一變して、非常の寒氣を加へて來た。暫らくすると、それが大なる吹雪と爲つてやつて來た。斯る氷原に霏々として降る雪は、最も征客をして

寂寥じやくりやうを覺おぼえしむるものである。兩人りやうにんは悄然せうぜんとして進すんで往いつたが、すると、雪ゆきは益ます々烈はげしくなり、冥朦めいもうとして一間けん先さきも見みえぬ程ほどとなつた。斯かる際さいに進すめば方向ほうこうを誤あやまり、又は龜裂きれつに陥おちい恐おそれもあるのです、兩人りやうにんは進行しんかうを中ちゆう止しし、外套とうを被かむつて暫しばらく雪中せつちゆうに蹲居うづくまつて居あた。すると、大おほに空腹くうふくを感じかんじて來きたので、大切たいせつに携たづさへ來きたれるミルク一罐くわんを出いだし、その場ばで啜することゝした。けれども其儘そのまでは冷つめたくて仕方しかたがないので、時ときに取とつての機轉きてんで氷原ひやうげんに深ふかさ一尺しやくばかりの穴あなを掘ほりミルクに雪ゆきを混こんじた罐くわんを上じやう部に置おき下したへは古綿ふるわたに、アルコールをふく含くませ、それひに火てんを點てんじたのを置おき暖あためる事ことにした。ジハリあと暖あためた所ところが火氣くわきの微弱びじやくな爲ためか、容易よういに暖あたまらなかつたが、然しかし丁度ちやうどミルクセーキのやうなものが出來でき上あつたので之これは大層たいそうな御馳走ごちさうと、大おほに喜よろこぶで之これを味あじふ事こととした。約やく一時間じかんばかりの後のち、吹雪ふぶきも歇やみ元氣げんきも回復くわいふくしたので、又々また前進ぜんしんを續つづくる事こととした。所ところが前方ぜんぱうに見みゆる山峯さんほうは進すめば進すむ丈峯だけみねも進すむかと思おもはるゝ程遠ほどとほいのである。容易よういに達たつし得えなかつたが、

竟に氷原を進むこと十哩、廿四日午前六時に至つて。辛ふじて爪先上りの地域を終り、急峻に聳え居る地點の下まで到着したのである。二十三日の午後四時半開南丸の繫留地を出發してより數ふれば、正に十四時間を費した譯なのだ。

急峻に聳ゆる地點の下まで到着せし兩人は、漸くにして、此處まで來り得たので、暫らく休憩すべしとて、氷上に腰を下ろし、少しく雑談に耽つて居たが、此時突然背後の方に當り、非常なる物凄い音がしたので、思はず之を振り返ると、今しも千丈の白絹を干したる如き大雪崩が猛烈なる勢を以て半天から落下するのである。之はとばかり驚いて、兩人は後方に飛去ると、其途端、ドドドドドド！とばかり、天地も張裂けん程の音響を立て、百間ばかりの間、大雪崩が落下した。雪煙は爲に朦々として立上る。暫くは前方白き雪煙に鎖れて何物も見ない程であつた。

兩人は危く一命を取らるゝ所であつたが、幸にして免れたので、頭上遙に望んで見ると、山の上部には、己等が目指して來た黒色の巖石が露



出して居る。周圍が白いので、それが明白に見られる。今は猶豫すべきではないと、直に前進を開始したが、非常に急峻の坂なので容易に、其處に達することが出来ない。喘ぎく往くと、數刻の後、一大龜裂に遭遇した。其龜裂は幅二間許、長さは山腹一帶に亘りて、其端を見る能はざる程長いものである。試に縁に手を掛け下を覗けば、龜裂の深さは、五十尺ばかり、底には、青色の物懐き光が漂つて居て、腥風地を捲いて襲ひ來るの感がある。地獄の道とは斯る處を云ふならんと、坐ろに悽愴の感に打たれて居ると、折から吹き來る一嵐、煙の如き雪粉を我に浴せて後の溪へと吹去つた。此様な龜裂に遭つては、如何なる勇士も到底前進が出来無いので、記念の爲め、此地點に木標を樹て、上方約七十尺位の處に露出せる岩石も、一望の裡に收めて撮影した。

此露出せる岩石は、花崗岩より成りて、上層は薄墨色を呈し、又赤土の如き個所もあつた。記念の木標には、左の如き文字が書いてある。

表面



大日本南極探検隊沿岸隊上陸記念標

右横面 隊員

池田政吉、西川源藏、渡邊近三郎、多田惠一、田泉保直、

左横面 船員

野村直吉、土屋友治、酒井兵太郎、高川才次郎、安田伊三郎、

渡邊鬼太郎、釜田儀作、柴田兼次郎、福島吉治、三宅幸彦。

清水光太郎、藤平量平、杉崎六五郎、濱崎三男作



裏には明治四十五年一月廿四日建之と書いてある。

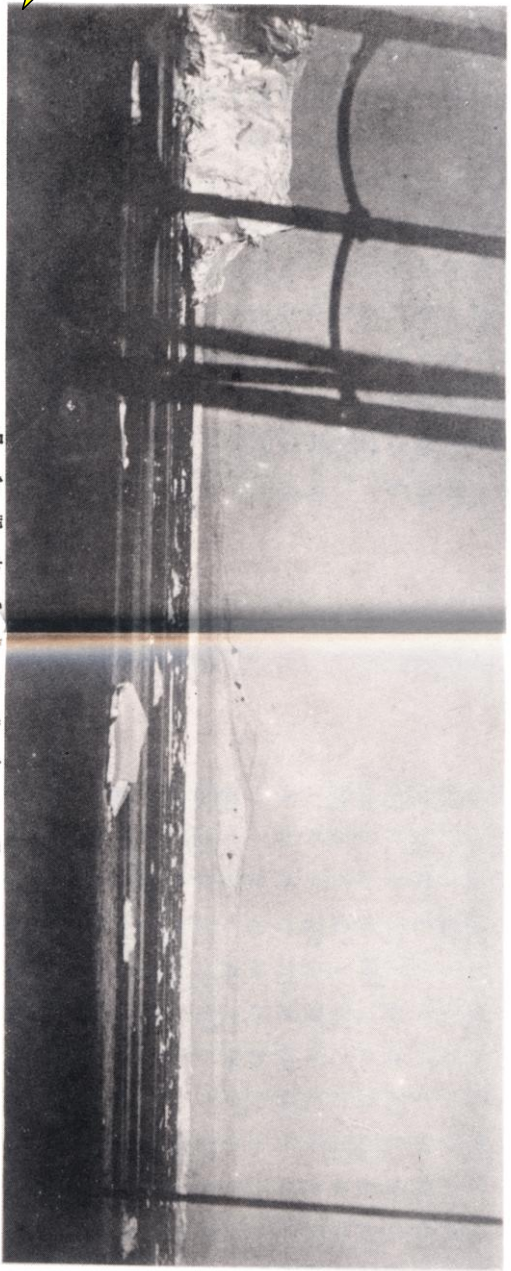
西川隊員は此地點にて、渡邊隊員と別れ、更に右方に向つて進んで往つた。其登つたのは、此山の背部八合目とも云ふべき場所である。此地點より眺むると、今日まで人間世界に知られざりし此山脈の背後の光景が幾分見られる。此處まで来た甲斐もあり、喜悅の情は限りないので、試みに眼を放つて展望すると、上部で別れて居る此アレキサンドラ山脈の三個の峯の中比較的大なる中央の峯の山脚が南々西に向つて、六哩許走つて



盡つきて居ある。其その他たは此この地ち點てんから眺ながめた所ところでは、大おほ概むね氷ひ原やうげんで、一ばう望たご只是ただ多おほ
  
 くの起伏きふくなき氷ひ野やを見みるが如ごとくである。其その狀じやうは恰あだかも佛ぶつ典てん中ちゆうの瑠る璃りの世せ界かいを
   
 見みるやうなもので、殆ほとんど一べん片ぺんの塵ちりだにない。西にし川かは隊たい員ゐんは此この光くわう景けいに見み惚とれて、
   
 獨ひとりり茫ぼう然ぜんと立たつて居あたが、最も早はや此こゝ處こゝまで來きた土み産やげもあるの、下くだり來きたりて
   
 渡わた邊なべ隊たい員ゐんを呼よび、歸き途とに就ついた。すると憐あはれむべし、西にし川かはは一つの龜き裂れつに陷おち
  
 つた。雪ゆきが積つもつて普ふ通つうの表へう面めんの如ごとくなつて居あたので、何なんの氣きなしに踏ふむと、
   
 其その幅はく貳に尺じやく位ゐの龜き裂れつに陷おちつたのである。けれど幅はくが狭せまいので、背せに負お
  
 居あた外ぐわい套とうが龜き裂れつの縁ふちに懸かり、漸やうくにして陷かん没ぼつだけは免まぬかされて居ある。所ところが前ぜん面めん
  
 は雪ゆきが高たかく積つもりて搔かいてもく滑すべり、後こう方ほうは幾いく何なん丈ぢやうとも知しれざる崖がけで、危き險けん
  
 此この上うへなく、底そこは例れいの底そこ無なし穴あなの龜き裂れつなので、如い何かんともすることが出で來きず、穴あな
  
 の中なかで手て足あしを突つ、張ばり眼めをバチツカせながら應おうイく！と叫さけぶと、其その中うちに渡わた邊なべ
  
 が飛とび來きたつて助たすけて呉くれた。で更さらに左さ方ほうに向むかひ素もと來きし道みちを尋たづねて歸き路ろに
   
 就ついたが、此この失しつ敗ぱいより一そう層けい警かい戒げんを嚴げんにして歩ほを進すすむる事ことと爲なつた。軀やが



景全照山ヲトシテサキレテ







て大雪崩ありし場所より一哩ばかりも歩みしと思ふ頃氷原の一段隆起して、最も遠距離の展望に便利なる地點があつた。其地點に達せし際、渡邊隊員はアレキサンドラ山の背後を望みて前に西川隊員が認めたる南々西に走れる六哩ばかりの山脚の外更に同山より南々東に向ひ雪を戴ける二十哩以上の山脉（高さ約千尺位）走り、其端が灰色せる雲に入れるを見た。此時同隊員は若し此山脉を傳ふて往かば南極の中心に達する事も難からざるべしと語つた。此際眼を轉じて同山の表面たる北側を望みしに東方の海岸に島の如き形の物あり、電光の如くピカリくと光つて居るのを見た。其光線が山腹の氷に反射して、四方を射る光景は誠に偉大壯嚴の極であつたが、後に至つて之は此近海の氷島である事が知れた。兩人は此の如き壯嚴なる光景を目撃しつゝ疲れたる足を引きづりく下り來るに、何れに往きしや懐かしき開南丸の姿が見えない。何うした事ぞと尋ぬるに、何うも野氷上の氷山の蔭になつて見えないものらしい。けれども同船のあるべき

位地より少しく東方に當り恰好なる入江を見たので、此入江より登らば却つて近かりしなるべしなど語り合ひつゝ歸路を急いだ。此時二人共唇を傷め咽喉を荒して頗る困難した。之は水の代りに雪を口にした爲である。元來雪はアンモニアを多量に含んで居るから決して登山者の口にすべきものではないが、飲料水の無き爲め止むを得ず之を食ひ、斯る困難に遭遇したのである。



之より前、船の繫留地では西川、渡邊の兩人が午後十二時に至るも歸船せぬので、之を搜索の爲め、池田、多田の兩人が出發する事と爲つた。先づ道を西南に取り、足跡を辿りつゝ進行したが、すると、田泉技師が先方より一人歸り來るに遭つた。同人が言ふには、二人は既に前進して追付けないから駄目である。けれども、大きいペングイン鳥が數羽、彼方の氷の蔭に居ると云ふた。そこで、其方面に急いだ處、果して、首の黄色い、丈の四尺五寸もあるうと思ふ、立派なペングイン鳥が六羽程遊んで居た。そこで之を生擒しやうとしたが、生擒するも生魚の食料が無くては駄目ゆゑ

一層殺して持つて往かうと考へ、携へたる竹棒を以てペンギン鳥に打つて掛つた。ペンギン鳥は不意を喰つて、吃驚仰天周章狼狽て逃げ出したが、さはさせせじとお面お胴と打伏せたので、流石のペンギンも閉口頓首、半死半生の體となつたのである。そこで、兩人は西川一行の棄置きし櫓を近傍より持來り、之れにペンギン鳥を積載して歸ろうとしたが、其目方最も重く、到底兩人の力では動かかねるので、其儘措き、二人走りて、船の繫留地に歸り船員一同の助勢を請ふた。すると船よりは、酒井、柴田、高川、藤平、杉崎等一騎當千の武者揃ひにて『コリヤ面白し』と宙を飛んで駈けつけたのである。

駈付け見れば、果してペンギン鳥の大きな奴が六羽とも半死半生にされて、櫓に積まれて居たので、先づぐ安心と獲物は其儘にして氷堤の上に上り、四方の光景を眺めた者もあつた。處が突然高川船員は氷堤上の龜裂に陥つた。陥つて、頭丈出して叫んで居る。一同は驚ひて駈付け之を助けたが、其騒ぎは實に一通りで無かつた。



是に於て益々案じられるのは西川、渡邊の身の上である。到底生死不明と判断するの外はない。けれども之が爲めには、一大搜索隊を組織せんければならぬので、兎も角、一旦船まで歸ることゝした。勿論ペングイン鳥は持つて歸ることゝする。けれども、手櫓に積んで歸つては面白くない。一つ珍案を行つて見やうと云ふ事に爲つて、兩翼の下に綱を付け引張りながら歸る事とした。其無恰好な姿で、氷上を滑りながら歩んで来る光景は實に奇觀であつた。

斯くて評議の結果、愈々搜索隊は組織せられた。其人名は、島義武、渡邊鬼太郎、柴田兼次郎、多田恵一の四人である。廿四日午前八時三十分愈々出發することゝなつた。光づ行衛不明なる兩人の雪上に印した足痕を辿りつゝ進んで往つたが、なかく彼等に邂逅はない。廳て氷堤を登り、更に氷原を指して進んで往つたが、途中より吹雪の爲めに西川等の足跡が消えて居る。如何に尋ねても少しも知れない。之には殆ど困却したが、尙も屈せず、進んで往くに、只眼に映ずるは、漠々たる氷原のみ、何等の消息も



知れないので、止むなく船に引返した。其歸還したのは午後の十一時だから、搜索の爲めに費したる時間は殆ど十五時間である。

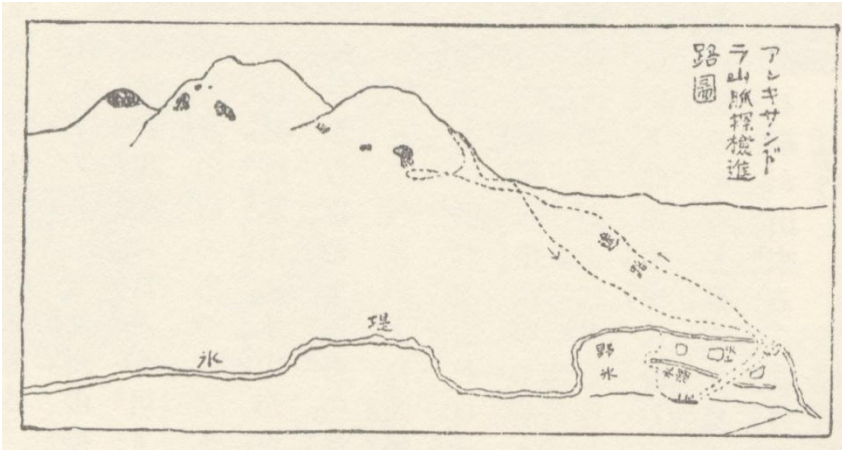
一方行衛不明の當人たる西川渡邊は如何と云ふに、東方に光る物を見てより以來、五歩に一休、十歩に一憩、辛ふじて疲勞したる身體を運びつゝあつたが、遙か後方より、オーイと呼ぶ聲がするので、偕は己等の歸船が遅ひので、迎ひに来て呉れたのかと見渡すと、遙か彼方の氷原上に、四個の黑影が點々として數へられる。で、テツキリそれに相違なしと此方の兩人も能ふ限り大聲にて答へたが、聽へないのか、何の返事も無い。注視すると其中に四個の黑影は窪地の方へ没して終つたので、多分安心して歸船せしならんと考へながら、此方でも歸船を急ぐ。すると、進路に當つて多くの足跡を發見した。是に於て此足痕こそ、彼の四人の者か印せしに相違なしと、それを便りに以前の氷堤を下り、それより櫓を置きし處に到りしに、不思議や櫓は無い。之も多分彼の四人が持ち去つたものであらうと



考へつゝ尙も下つて曩にペングイン鳥の居た處に到ると、此處にも鳥は一羽も見えぬ。そして多勢にて雪を踏み蹂りし如き跡が印されて居る。では之も彼の四人の仕業に相違なく、ペングイン鳥も捕へ去つたに相違なしと断定した。之より兩人は益々道を急ぎ、船を去ること約一哩位の點に至つた所、濱崎、福島の二船員が、此二人を迎へに來たのに出會した。濱崎等は、兩人の空腹を察し、温飩の冷えたのを持參したのである。一晝夜半の間、少量のビスケットと雪の外口にしなかつた、兩人は、非常なる珍味として、此贈品を味はつた。斯くて幾分か勇氣を恢復し、出迎人の肩に扶けられつゝ歸船したのは、廿四日午後十時三十分である。

船よりは行衛不明であつた兩人が、歸船したので、其喜びは非常である。萬歳の聲は寂莫たる天地に響いて繫留地の氷原を撼すばかりだ。船長は喜ばしさに、涙さへ流して無事を祝して居た。

西川、渡邊、兩隊員が、此探檢に於ける行程は日本里程約拾五里之に要



せし時間<sup>じかん</sup>は丁度<sup>ちやうど</sup>三十時間<sup>じかん</sup>であつた。

元來<sup>ぐわんらい</sup>、此<sup>この</sup>エドワード七世<sup>せいしう</sup>州<sup>しゅう</sup>は、西曆<sup>せいれきせん</sup>千九百二  
 年<sup>ねん</sup>二月<sup>ぐわつ</sup>、英人<sup>えいじん</sup>スコット<sup>スコット</sup>が第一<sup>だい</sup>探検<sup>たんけん</sup>の際<sup>さい</sup>發見<sup>はつけん</sup>した  
 もので、英國<sup>えいこく</sup>皇帝<sup>わうてい</sup>陛下<sup>へい</sup>の御名<sup>おんな</sup>を取つて之<sup>これ</sup>に冠<sup>くわん</sup>し  
 たものである。然<sup>しか</sup>るに、此<sup>この</sup>附近<sup>ふきん</sup>の氷堤<sup>ひやうてい</sup>が非常<sup>ひじやう</sup>  
 高<sup>たか</sup>くして、登攀<sup>とうはん</sup>に便<sup>べん</sup>ならず加<sup>くは</sup>ふるに海水<sup>かいすい</sup>が氷結<sup>ひやうけつ</sup>  
 し始<sup>はじ</sup>めたので、海上<sup>かいじやう</sup>より陸地<sup>りくち</sup>上の山脈<sup>さんみやく</sup>を眺<sup>なが</sup>めた  
 丈<sup>だけ</sup>で之<sup>これ</sup>に命名<sup>めいめい</sup>し、上陸<sup>じやうりく</sup>せずして歸<sup>かへ</sup>り去<sup>さ</sup>つたので  
 ある。爾來<sup>じらい</sup>此地<sup>このち</sup>は上陸<sup>じやうりく</sup>不可能<sup>ふかのう</sup>と目<sup>もく</sup>されて居<sup>あ</sup>たが、  
 我<sup>わ</sup>が沿岸<sup>えんがん</sup>隊<sup>たい</sup>が此地<sup>このち</sup>へ來<sup>き</sup>た時<sup>とき</sup>には氷堤<sup>ひやうてい</sup>下の海水<sup>かいひやう</sup>  
 が離散<sup>りさん</sup>せず、野氷<sup>やひやう</sup>を形成<sup>けいせい</sup>して居<sup>あ</sup>たので、直<sup>ただち</sup>に船<sup>ふね</sup>  
 を横附<sup>よこつ</sup>けにする事<sup>こと</sup>が出來<sup>でき</sup>、遂<sup>つひ</sup>に古<sup>いにしへ</sup>より以來<sup>いらい</sup>、何<sup>なに</sup>  
 人<sup>ひと</sup>も上陸<sup>じやうりく</sup>し得<sup>え</sup>ざりし、此<sup>この</sup>方面<sup>ほうめん</sup>より、上陸<sup>じやうりく</sup>

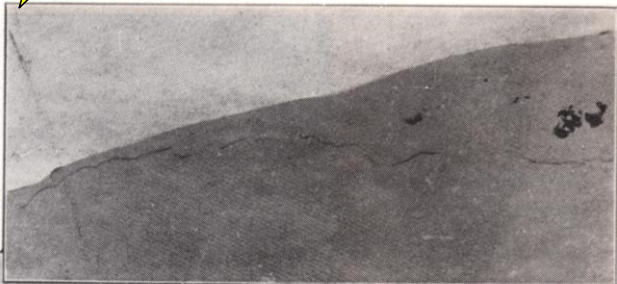
探検を行ひ得たのである。

此エドワード七世州の探検に於て、特に喜ぶべきは、此地域が最も多く極地の現象に富んで居り、殆ど氷界に於ける各種の標本を集めし南極博覽會の觀のあつたことである。先づ沿岸には廣く野氷が張詰め居るに、其野氷上に氷山が突兀として聳へて居る。海上に流るゝ氷山は珍しからざるも、原野の如く張詰め居る斯る野氷上に氷山を見るは、最も珍とすべきが上に、此野氷に接して、絶大なる氷堤があつて、人の眼を驚かし。其れを登れば、氷界に於ける最も注意すべき現象の一なる龜裂が縦横に横はつて居る。氷堤の側面には氷河があつて學者の研究に便なるが上に、其近傍に鱗形の氷（之は多分氷堤が龜裂の爲めに顛覆し其下部の水中に没し居りし部分が現れ斯の如く鱗形となりて澎漲し居るものと推定す）及大なる氷柱があつて、極地に於ける氷の結晶を知る事が出来る。其外起伏せる爪先登りの氷原があり。大龜裂を有せる山脈があり。其山脈の上部に地質を

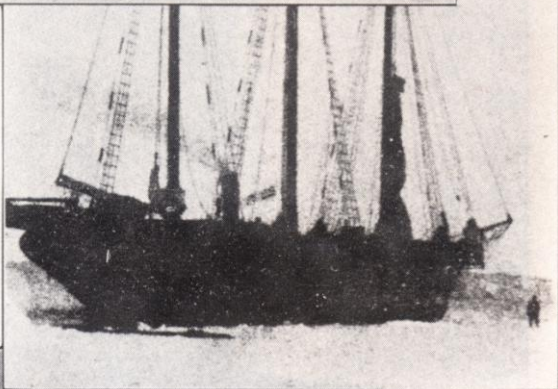




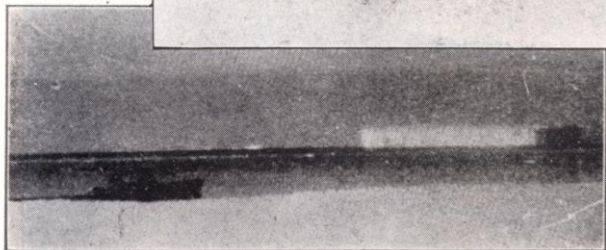
アレキサンドラ山の龜裂、  
横線は龜裂、黒斑は露出  
の岩石



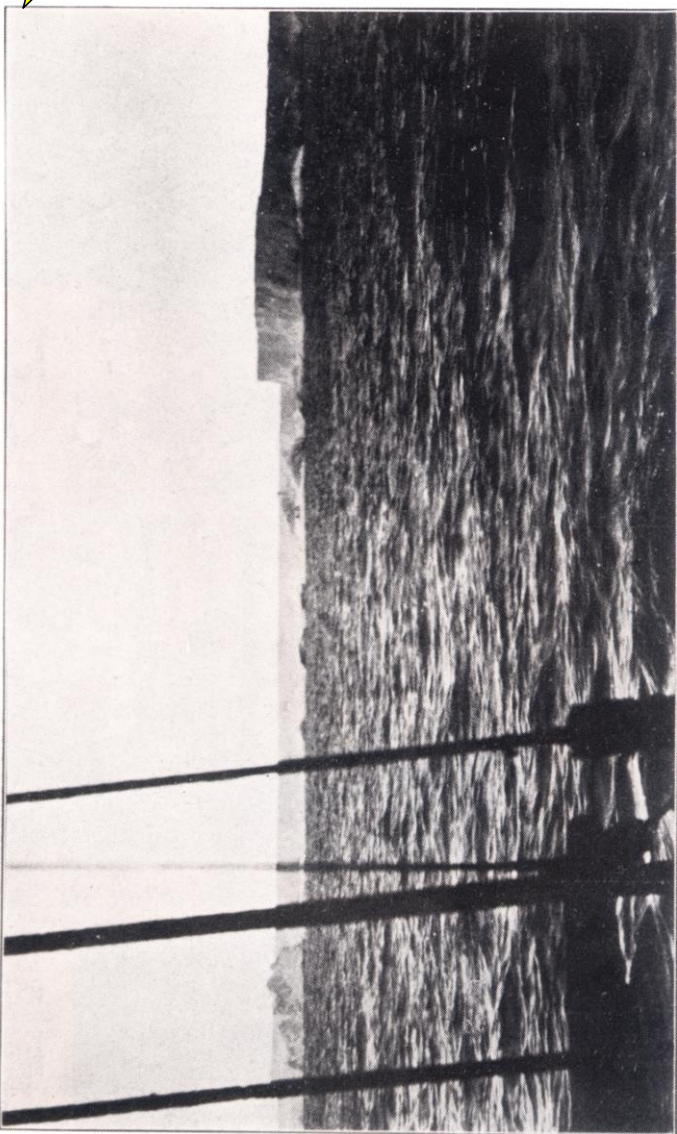
エドワード氷堤  
上の龜裂、横線  
を見よ



エドワード回航當時の開南丸



開南丸の投錨せし灣  
にて見たる氷山、



山米及堤氷るた見に後しき就に途の還歸りよ州世七七ドワドドエ

明治四十五年一月二十六日撮影



知るの便ある黒色の山骨の露出があり。歸路に於て眺めし氷島があり。而して又野氷の中央には細長き形を爲せる水溜あり。繫留地に接近せる西方の沿岸には、上部の尖り居る氷の林あり。最も各種の現象に富んで居る。幸にして斯る場所に上陸し得たのは、我が探検隊の一大幸福であつたと謂はねばならぬ。

繫留地に在つてアレキサンドラ山脈の高さを測るに、其最高の峯は海拔壹千六百尺あつた。又此灣の深さを測るに百四十尋あり、海底の地質を調べしに細かき灰色の粘土なる事を知つた。



# 第二次計畫探檢隊員姓名

## 上陸隊員

隊長	白瀬轟
第一學術部長	武田輝太郎
第二學術部長支隊長	池田政吉
衛生部長兼寫真班長	三井所清造
被服係	吉野義忠
糧食係	西川源藏
隊長秘書	村松進
學術部其他助手	多田惠一
炊事專務	渡邊近三郎
活動寫真技師	田泉保直
輓犬係	山邊安之助
同上	花守信吉

## 船員

船長	野村直吉
一等運轉士	土屋友治
機關長	清水光太郎
事務長	島義武
二等運轉士	酒井兵太郎
木工	安田伊三郎
水夫長	高川才次郎
機關士	藤平量平
運轉士見習	三宅幸彦
舵取	渡邊鬼太郎
同	釜田儀作
油差	杉崎六五郎
水夫	柴田兼次郎
同	福島吉治
火夫	濱崎三男作



## 第五章 開南丸の東方沿岸探検

一月二十四日午後十二時、開南丸は繫留地點を出發した。午後十二時と云へば本邦に於ては夜半であるが、此地に於ける二月二十四日の午後十二時は夜の景色らしい物は微塵も無い。午前とか午後とかの區別は僅に時計と太陽の位置とに依つて知るのみである。此時分、南極は太陽が何時も斜に頭上を廻つて居り、少しも地平線下に入る事は無かつた。只太陽最低の時を以て其地に於ける夜半（正子）十二時とする。最も高く上つた時を以て正午とするのみである。斯くて開南丸は、同地を出帆して東方に向つたが、其目的とする所は、同方面に前人未航の海があり、海上常に游氷に満ちて居ると云ふ説があるので、之を確かめん爲めに航海するのである。此方面には、スコットも嘗て進んだ事があるが、其航路は非常にエドワード州の沿岸に接近して



氷島の内側の方を進んだので、竟に氷に閉ぢられて、進行不可能と爲り引返したのである。開南丸は此の如き運命に陥らざるやう、スコットの航路より少しく北を東に向ひ、氷島の外を通過して航海せんとしたのである。二十五日午前零時三十分、船は多数の氷山に遭つた。同八時又一个の大氷山に遭つたが、天氣は幸に快晴である。同十一時四十五分、左舷に轉じた。午後八時右舷に當りて數個の氷島を見た。此氷島は周圍八哩より二十哩位のものだが、形は楕圓形で上部は扁平である。其水面上に表はれて居る高さ、普通の氷堤と同じく百五十尺乃至二百尺位のものである。殆ど島と思はるゝ程大きく、定着して動かない氷と考へらるゝので、氷島と呼んで居る。同十時頃少しく雪降りしも暫らくにして歇んだ。スコットの探検記には、此邊に於ける陸の存在に就き、下の如き記事がある。『熱心に陸はなきやと凝視し結果、高き雪の坂を有する少しく起伏状ある線を見た。然れども只薄暗き白き空を見るのみにて、岩石の露出等は認めず、尙ほ、此の如く見ゆる山脈すら太陽

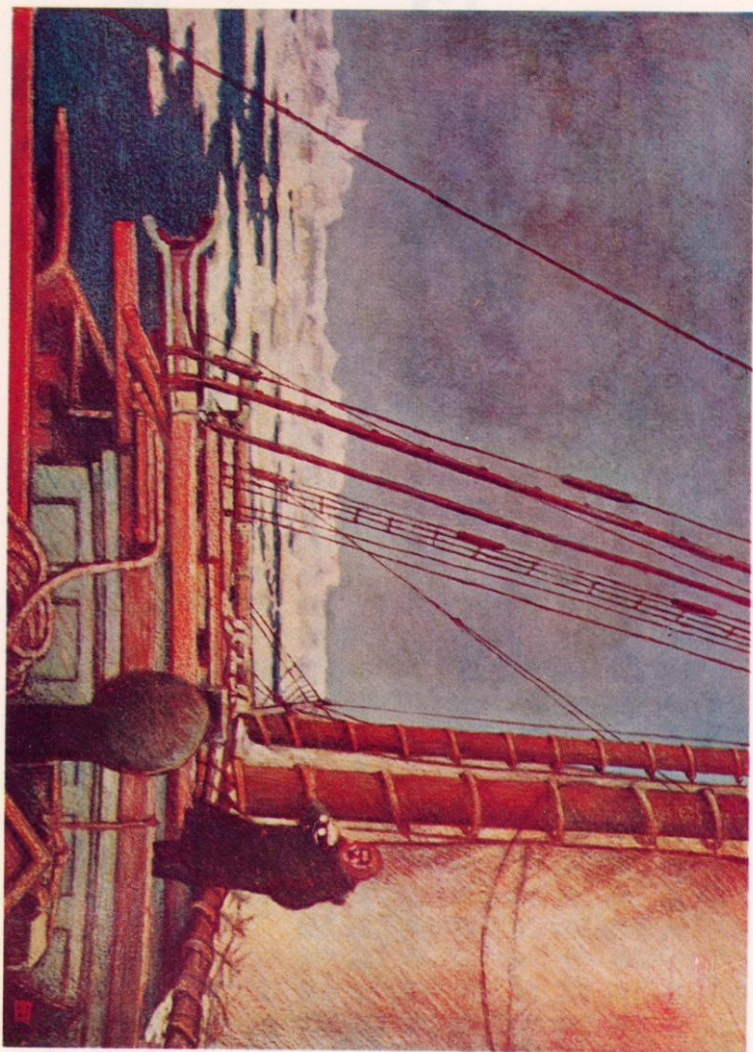
が南に低くなる際には消失した』と書いてあるが、開南丸の船員等はアレキサンドラ山脈が一行の記念標を建てし地点より東方に向ひ約三十餘哩の間、連互して氷堤に至つて盡くるを見し外、同山脈が更に東方に延長して居るのは認めなかつた。只山脈の見えずなりし後も尙暫くの間に氷堤だけは東に向つて走るのを見た。之は開南丸の航路がスコットの航路に比して北方を通過した爲でもあるが、同船員等は此以外には何者も認め得なかつたのである。十二時半頃高さ百五十尺周圍一哩位の氷山に遭つた。直径五、六間乃至十間位の流氷にも多く遭つた。其流氷は頗る猛烈に海を壓して來るので、之には少なからず困難した。

是等の流氷、冰山等を警戒しつゝ氷島を右舷七哩に見て尙も航海を續けて往くと、廿六日午前三時三十分、前面一帯は流氷及積氷（之は幾多の氷が密集して積み重なり殆ど堤防の如くになり居るを云ふ、然れども沿岸に聳ゆる百尺乃至百五十尺の高さの氷堤とは異なるを以て茲には單に

積氷と云ふと爲つた。で之を避けつゝ汽帆兩走を以て氷海を縫つて往つたが午前四時に至つて雪がチラチラ降出した。波は積氷の多い爲め、比較的静かである。同八時に至つて右舷一帯積氷のみと爲つた。それを避けつゝ尙も勇氣を鼓して進むに正午に至りて右舷一帯又もや積氷を認むるのみならず、大氷山も其間に少くないので、船は非常の困難に陥つた。試に檣頭の見張臺より東方一帯を見渡すに前方約貳十海里は眼裏に映じ來るも只是れ、氷山流水の密集にて一望際なく、白皚々たる光景である。殆ど進行不可能である上、開南丸がシドニーより積來りし石炭及水は最早残り少なく爲りて五十五噸の石炭は十六噸に四十五噸の飲料水は、十五噸にも減じて來たので、止むなく船首を返す事にした。此地點は西經百五十一度廿分、南緯七十六度六分である。スコットが先年進みたる西經百五十二度に比すれば丁度四十分丈多く東方に進み、更に檣頭より東方二十海里を展望し得たのである。此點より見れば慥に既往に於ける記録を破つて居るの



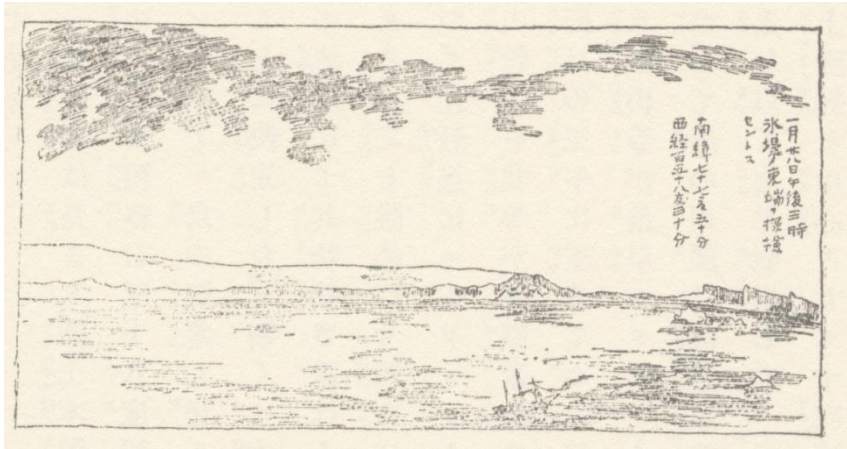
む 望 を 海 氷 の 方 東 に 達 ほ 尙 て し 達 に 分 十 二 度 一 十 五 百 經 西 長 船 村 野





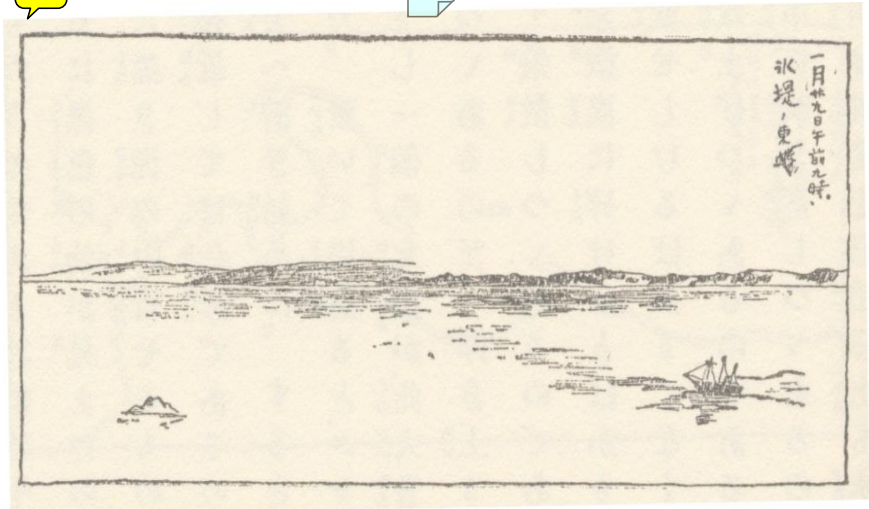
である。

開南丸は是より、陸上本隊根據地たる鯨灣に向はねばならぬが、其途中に於て、西經百五十八度四十分、南緯七十七度五十分の附近に、帝王ペングイン鳥の群集し居る小灣あるを聞いて居たので、其灣に立寄ることに決めた。斯くて方向を其方面に取り航海すると、右舷は一帶の流氷にて、其物凄さ言はん方なし、左舷には遙に、氷島、冰山、流氷等が見える。之を眺めつゝ西方に向ひて航海すると廿七日の午前四時に至つて左舷遙に、エドワード七世州のアレキサンドラ山脈を望んだ。此山脈こそ、我等が苦戦奮闘の跡なので、一同相顧りて感慨無量であつた。同日の正午に至るも右舷は尙一帶の積氷であつた。午後四時には流氷冰山等が最早ポツリくと來るのみと爲つた。同日夜半十二時に至りて船の周圍は流氷及冰山に依つて取圍まれた。けれども汽帆兩走を以て之を脱出した。元來エドワード七世州の海は日本沿岸隊の上陸點を中心として十哩ばかりの間、海水が藍色を爲して居る外、皆薄き茶褐色を帯びて居る。



これ  
 之が影響を受けてか流氷中にも往々茶褐色の  
 物が見える。此日流水上に幾多のペンギーン  
 鳥が快げに眠り、其中一頭が立つて見張をして  
 居るのを見た。廿八日午前一時三十分船首を東  
 南東に向けた。又も時々多くの氷山流水等に遭  
 遇したが、午後二時に至つて、目的地に於ける  
 氷堤の東端に近き地點に到つた。所が又も時々  
 吹雪があつて、風波も尠なくないので漂溺を續  
 けて居ると、臆て、廿九日午前五時天候快晴と  
 なつたので、船首を灣内に向け、午後二時目的地  
 地點に到達した。最初此地點を探検せんとせし  
 目的は無論多數のペンギーン鳥を捕ふるに



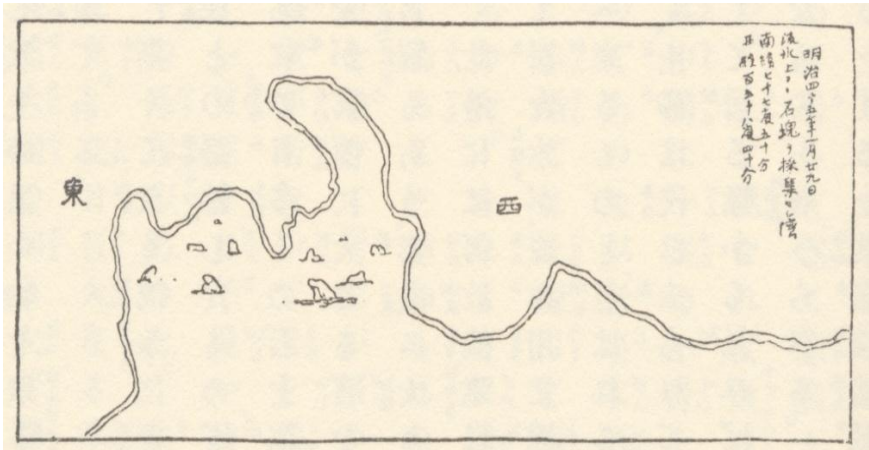


一月廿九日午前九時、  
氷堤ノ見物

あつたが、来て見れば少しも鳥類は居ない。  
只灣形が種々に出入して、其縁に氷堤が高  
く聳え、頗る美觀を呈して居るだけである。  
試に灣内を視るに、灣内には今や三個の  
氷山と無数の流水とが浮いて居る。其浮い  
て居る流水上に、少しく點々たる黒色の物  
が見えるので何者ならんと、研究に出掛け  
る事にした。其指揮役は土屋運轉士である。  
釜田、渡邊の兩水夫に短艇を漕がしめて接  
近して往くと、高さ三十間周圍四丁ばかり  
の巍然たる氷山の傍らに、長さ三間幅二間  
位の流水がある。其流水上に黒色の土に  
混じて石塊が多く附着して居る。之を取  
りて短艇中に收めた所、重量は孰れ

も六百匁位あり、其數は十個以上もあつた。尙左方大氷堤の下を眺むるに、黒色の物が見えたので、それを研究せんと進んで行くと、之も流水に黒き泥の附着せるものであつた。けれども、未知の海へ來て氷堤に接近しては、危険であるので、其物の何かを確かただけで、少しく本船の方へ漕ぎ始めた。すると其一瞬、天地も碎けよとばかりい一大音響がした。驚いて振り返ると、タツタ今自分等が石塊を取つた流水の傍らにありし一個の氷山が、此大音響と共に、突然海中より天を指して浮き上りつゝあるのだ。浮き上りつゝ水中より大小幾百の氷塊を空中に向つて飛散しつゝあるのである。近傍に在るものは、人も船も氷も石も、木端微塵に碎けよとばかり飛散せしめつゝあるのである。只氷塊を飛散せしむるばかりでなく、猛烈無雙、龍卷の如き勢を以て、海水を中空に吹上げつゝあるのである。氷山の頂にあつた白雪を雲かとはかり海中に吹き落しつゝあるのである。見る間二分間に三十間ばかりの氷山は、其姿を三倍以上も水上に現はして、百間許りの氷の姿！悠然として青空に聳えたのである。





其壯！其悽！誠に塵畏に於ける現象とは想像されぬ程であつた。熟視すれば氷山は高さが増したと共に、其體は著るしく右方に傾いて來た。殆ど六十度の角度位に傾いて來た。本船では此光景を見て、三人は必ず殺されて終つたに相違ないと思つて居たが、幸にして歸り來つたので、大喜びであつた。互に今日の無事を祝し、且未曾有なる奇現象を評論し合つた。

端艇の指揮役であつた土屋運轉士は此灣に向つて大隈灣と命名した。此日は天候の都合で近傍の海上を漂溺して居た。翌三十日午前十時又々端艇を下ろして、前日實見せし氷上の

黒い物を取りに往つた。其人名は、酒井、西川、渡邊（鬼太郎）柴田等である。

斯くて又も流氷に近づいて調べて見ると、昨日見たる、黒き泥は、氷と泥との凝結したもので中に小砂利を含んで居る事を發見した。其傍らに昨日多くの石を取りし流氷が昨日とは異りたる面を現はして居たが、其面に大なる石を含んで居たので採收した。此石は目方が三十貫程もあり、素敵に大きいものであつた。

此邊には何故流氷に石が附着し居るぞと云ふに、之は海底に氷結して居た氷が、或作用に因り海底を離るゝ時、それと共に巖石土砂等を銜へ來るものと思はれる。若し遠くより來れりとすれば、石は銳角でなく、土砂は洗ひ去られて居る筈だが、それが細粉狀を爲し、石が銳角を爲して居る點から見れば、此地點のものが或る作用により流氷に附着したものと考へられる。此珍らしき標本を得たので喜んで、本船に歸らうとすると、其途端、端艇の傍らへ一頭の大鯨が現はれた。ニュットばかり黒色の背を表はして、

尙ほも潮でも吹き出しそうなので、驚いて眺めて居ると、懸て悠然として、其拾間ばかりの雄姿を海中に没して終つた。上を眺むれば數百尺の氷堤聳え、下を望めば氷海横行の極鯨潜む。其中間に一葉の小舟を浮べて活動する危さは、殆ど風前の燈の如きものであつたが、無事本船に歸る事が出来た。

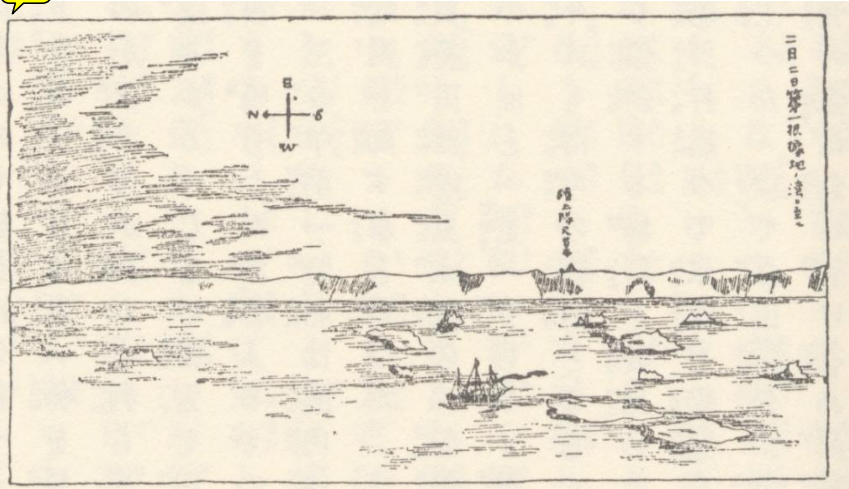
本船では此灣口を測量し見たるに、口径東西參哩半南北約貳哩程もあつた。それより又深さを測量し見るに、百三十尋あり、底は皆硬い石であることが知られた。此灣内の海水は開南丸の到着當時より茶褐色を帯びて居たが何の原因に基くかは不明である。海上には小さき海老が居たので之を採取した。

一月三十日午後一時十五分此灣を出て、鯨灣に向つた。午後四時若干の降雪があつた。左舷約一海里半乃至三海里に氷堤を望みつゝ進んだ。此日巨大なる氷堤の海中に落下するを見た。氷堤の方に當り突然大砲の如き大音響を聞いたので、何事ならんと眺めると、非常なる水烟が立て、

其後から長さ五十間もあらんと思はるゝ大きな氷山が浮いて来た。之は氷堤が缺けて落たのである。何の氷堤にも大抵上部には亀裂があるが此亀裂が初めは一寸位の幅なのが晩方には五寸と爲り翌朝は一間と爲ると云ふ風が増加して、竟に長距離の間が缺けて落ち、それが氷山と爲つて流れ出すのである。其光景は實に懐しいものである。三十一日午前二時頃より濃霧襲來し時々晴れて又霧となつたが、正午に至つて全く晴れた。



午後零時三十分、嘗て一度上陸せんとせし事ある開南灣の灣口を距る二海里半の地點を通過した。灣は元の如く存在して居たが、一行が上陸の時踏破せし野氷は悉く流れ去つて居た。彼の海豹と戦ひたりし所なぞは、無論影も形も無くなつて居た。只切斷したるが如き氷堤が斬然として高く峙てるのみであつた。此時風位悪しく、船は徒に開南灣と鯨灣との中間の洋上を漂ふのみであつたが、二月一日も同様の天候で殊に降雪さへあり、咫尺を辨ぜざる事も少なくなかつたので、前日と相似たる位地を



一進一退して居た。二月二日も或は風浪高  
 く、或は吹雪あり容易に灣内へ入り得な  
 かつたが、午後十時愈々鯨灣内に突入した。  
 然るに灣内の光景は前に己等が此灣を抜  
 錨せし後、著るしく變化した。拔錨の當時  
 は灣内全部、野氷を以て張詰められて居た  
 が、今歸つて見ると、流石に廣き灣内の野  
 氷も概ね海上、遙に流れ出で、船も深く入  
 り込み得るようになつて居た。拔錨の當時  
 灣内に碇泊して居たフラム號も、何時の間  
 にやら、何處へか往つて終い、今は其影さ  
 へ見られないのである。灣口の光景が斯く  
 變つては、根據地の位地が判定されない

ので、船員は午後十一時檣上の見張臺に上つて見た處、左舷氷堤上に、ポットした黒い物を見た。之は天幕には相違無いが、それが諾威のか、日本のか、少しも判らないのである。けれども、大體日本の物に相違なかるべしとの推定を附けたので、其方面に進み、氷堤に接近し。汽笛を鳴らしたが、答ふるものは、氷原に吹荒む風の音のみであつた。

三日午前一時、船は灣内適當の地に到りて陸上隊と聯絡を取る爲め端艇を卸す事と爲つた。之に乗込みしは、西川、多田、渡邊（近三郎）の三隊員釜田、渡邊（鬼太郎）の二船員である。彌が上に荒れ狂ふ海上も何のものかはと一上一下しつゝ進んで往つたが端艇の危険は此上もない。今にも海中の藻屑とならんと思はれる位であつたが、漸くにして少しく傾斜する場所を發見したので、漕手をして、其處に艇を繋がしめ、隊員、船員、打揃つて氷堤を攀登らうとした。西川隊員は第一に氷上に踊り上つた。續て多田隊員が船を出でんとする途端、西川隊員の立てる足元の氷は急に裂け初め、異様の音響を發して二坪程の氷塊となり渡邊諸共海中に落込んだ。





其氷は憐むべし、フカリくと流出したので一同之には驚いた。其際西川隊員は兩足海中に没し、兩手のみ氷塊に取付きつゝ、『助けて呉れッ』との聲も出し得ず只管藻掻いて居たのであるが、渡邊隊員は之を見るより急ぎ同隊員の頭を押へた。それが爲め頭は全く雪中に没したが時しもあれ、氷の裂けし反動にて、五六間後方に押遣られた端艇は、此處へ漕ぎ來り急ぎ兩名を收容したので、同隊員等も漸く極海の鬼となるを免がれた。此時全員は氷の裂壞が、何時如何なる範圍まで、危険を及ぼさずとも知れないので、警戒の結果、短艇の準備を完全にし、いざと言はば危急を救ふべき充分の手筈を整へた。兎角する中、一大吹雪は突如として襲ひ來つた。天地は爲めに冥濛として前方僅に十五六間しか見えない。是では暇令上陸が出来るも、到底根據地までは進む事が出来ぬ。それ故寧ろ雪の晴るゝを待つて、作業するに如かずと云ふ者もあつたが、西川隊員はそれを肯んじない。吹雪何かあらん、折角此處まで來りながら。目的の根據地に達しないと云

う法あらんや。尙も前進を續けやうと主張したので、一同も之に従ひ前進を續けて居た。然るに吹雪は益々烈しくなり、最早一步も進むことが出来なく爲つたので流石の勇士も竟に進行を思ひ止まり、一旦本船にまで引返す事とした。すると天候險惡の爲め本船は一旦灣外に出る事と爲つた。

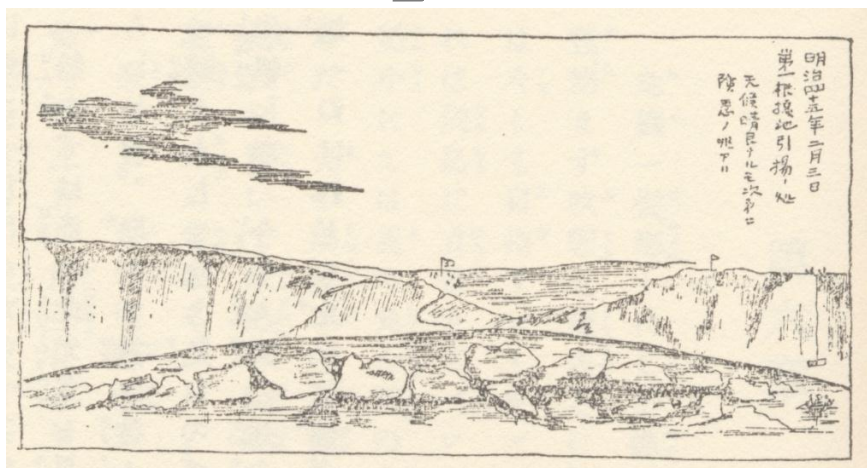
午前十一時頃幾分天候も回復したので、遙か氷堤の上を眺むると、五個の黑影が蟲の如く氷堤上に見えて居る。船員は之を見て、是は「畢竟探檢本隊員の根據地に歸還し居るに相違無し」とて大に喜んだ。其理由は根據地に留り居たるは、僅に二名なるに今此黑影は五個あるからである。午後一時半、天候は殆ど回復したので、船は氷堤近く進んで往つた。此時陸上にて開南丸の姿を認めしと覺しく、前の黑影は氷堤の端に歩み寄り、出來得る丈船に接近せんと試みつゝある。暫くにして氷堤上と本船の橋上との手眞似の挨拶が始まつた。全然莧蕪屋の六兵衛問答のやうな態であつたが、それでも意思は通じたと見え、本船は間もなく灣内深く入込んで

往く。すると陸上でも之に遅れじとも思つたか、多數の犬に橋を曳かせ、本船と並行して氷堤上を疾走しつゝある。正に是れ一幅南極の好書圖とも評すべきであらう。其光景は實に見事なものであつた。午後八時に至り一隻の短艇を卸して土屋運轉士之に乗じ、隊員三名船員貳名と共に今朝登攀を試みし地點に向つた。一方は短艇上他方は氷堤上で談話を爲し、双方の無事を語り合つた上、海陸兩者の聯絡を附けた。其地點は氷堤の高さ約五十尺であつたが、それより繩梯子を以て、人間と荷物とを卸さんことを約束した。氷堤の上では、山邊花守の兩アイヌが氷を搔いて荷物を卸す場所を作つて居る。本船では更に傳馬船一隻短艇一隻を卸して、氷堤の下へ到らしめたが、風と潮との加減で、灣の奥より續々氷塊が流れ來り、到底小船を繋ぎ得なかつた。で少しく沖へ傳馬船を遣り荷物を積まうとしたが、此處の氷堤は前のよりも高い。六十尺も綱を下さねばならぬのである。けれども荷物は大抵此場所から卸した。荷物ばかりでなく人間も一人此場所



から降りた。それは船員柴田である。柴田は何！日本男兒が此位の處を降り得ない事があるものかと、己れの身體に麻繩を確と結び附け、此銀壁の如き大氷堤を降りんと企てたのである。氷堤上には船員渡邊鬼太郎、木工安田伊三郎の兩人が氷上に除雪鍬を立て麻繩の端をそれに巻いて持つて居る。柴田は我が勇悍なる氷堤降りの光景を見よやとばかり、六十尺の絶壁より身を踊らしスルりと下に降る。其勇悍さは人か鬼か日本男兒にあらざれば爲し能はざる所である。聽て無事降り終るや堤上と堤下とは期せずして萬歳の聲が湧いた。

他の一方では出来る丈奥へ短艇を遣つた。すると氷堤の壞れて斜に爲つて居る場所があつたので其處より陸上本隊員を乗船せしめた。大體此の如き有様で船員隊員共殆ど晝夜兼行の姿で此引揚事業には働いたが、其間には屢々肌に粟を生ずるやうな危険を冒した事もある。或る時の如きは數十尺の氷堤が傘の如く海上に覆ひ懸り今にも壞崩れんとする大危険の



明治四五年二月三日  
 第一根拠地引揚<sup>ル</sup>地  
 天候<sup>テ</sup>悪<sup>ク</sup>ナルモ此<sup>レ</sup>モ  
 陰<sup>ク</sup>心<sup>ノ</sup>胆<sup>ヲ</sup>下<sup>ス</sup>

場所<sup>ばしよ</sup>を急<sup>いそ</sup>ぎ小<sup>こ</sup>船<sup>ぶね</sup>に乗<sup>の</sup>つて通<sup>つう</sup>過<sup>くわ</sup>した事<sup>こと</sup>などがあ  
 る。

此<sup>この</sup>やうな困<sup>こん</sup>難<sup>なん</sup>に遇<sup>あ</sup>ひつゝ、二<sup>に</sup>月<sup>がつ</sup>三<sup>さん</sup>日<sup>にち</sup>の午<sup>ご</sup>後<sup>ご</sup>八<sup>はち</sup>  
 時<sup>じ</sup>から四<sup>し</sup>日<sup>にち</sup>の午<sup>ご</sup>後<sup>ご</sup>十<sup>じゅう</sup>時<sup>じ</sup>まで諸<sup>しよ</sup>般<sup>はん</sup>の物<sup>もの</sup>を運<sup>はこ</sup>び  
 終<sup>を</sup>つたが、天<sup>てん</sup>幕<sup>まく</sup>と氣<sup>き</sup>象<sup>しやう</sup>觀<sup>くわん</sup>測<sup>そく</sup>臺<sup>たい</sup>とは記<sup>き</sup>念<sup>ねん</sup>の爲<sup>ため</sup>  
 に陸<sup>りく</sup>上<sup>じやう</sup>に遺<sup>のこ</sup>して措<sup>お</sup>いた。處<sup>ところ</sup>が天<sup>てん</sup>候<sup>こう</sup>が漸<sup>ぜん</sup>々<sup>ぜん</sup>悪<sup>あ</sup>く  
 なり始<sup>はじ</sup>めた。流<sup>りゅう</sup>氷<sup>ひやう</sup>が續<sup>ぞく</sup>々<sup>ぞく</sup>流<sup>なが</sup>れ込<sup>こ</sup>んで來<sup>き</sup>た。人<sup>ひと</sup>を  
 乗<sup>の</sup>せた場<sup>ばしよ</sup>所<sup>じよ</sup>、荷<sup>にもの</sup>物を載<sup>の</sup>せた場<sup>ばしよ</sup>所<sup>じよ</sup>も所<sup>じよ</sup>嫌<sup>きら</sup>はず氷<sup>こほり</sup>  
 が張<sup>はり</sup>詰<sup>つ</sup>めるに至<sup>いた</sup>つた。其<sup>その</sup>變<sup>へん</sup>化<sup>くわ</sup>の迅<sup>はや</sup>い事<sup>こと</sup>は實<sup>じつ</sup>に  
 驚<sup>おどろ</sup>くばかりである。で止<sup>や</sup>むを得<sup>え</sup>ず六<sup>ろく</sup>頭<sup>とう</sup>の犬<sup>いぬ</sup>に  
 端<sup>ぽう</sup>艇<sup>てい</sup>を曳<sup>ひ</sup>かせて新<sup>あたら</sup>に張<sup>はり</sup>詰<sup>つ</sup>めたる氷<sup>ひやう</sup>上<sup>じやう</sup>を走<sup>はし</sup>ら  
 せ、而<sup>しか</sup>る後<sup>のち</sup>急<sup>いそ</sup>ぎ小<sup>こ</sup>船<sup>ぶね</sup>へ飛<sup>とび</sup>乗<sup>の</sup>つたのである。此<sup>この</sup>時<sup>とき</sup>  
 に當<sup>あた</sup>つて南<sup>なん</sup>方<sup>ほう</sup>の風<sup>かぜ</sup>は強<sup>つよ</sup>く雲<sup>くも</sup>を捲<sup>ま</sup>いて起<sup>おこ</sup>り、殊<sup>こと</sup>に盛<sup>さか</sup>ん



に雪さへ加はつたので其物懐きは一方でなかつた。  
船中では遙に此光景を見て急ぎ端艇を扶けしめ、辛ふじて本船に入らし  
めた。斯くて雪は益々烈くなりて咫尺を辨ぜず、風は頗る強くして颯々と  
して吹き荒むので、竟に灣内に留まる事が出来ず、急遽此地を出帆した。  
今や人間の生命の危い場合であるので、甘頭の犬は可憐に堪へぬけれども、  
止むを得ず此處に措いて立去つた。

## 第六章 南氷洋の再航

危機一髪、漸くにして逃れ出でし開南丸は、二月四日午前十一時出帆後、絶えず吹雪と流氷とに襲はれつゝ進んで往つたが、明くれば五日、船は今しも目指すクールマン島方面に向つて、氷海を駛走して居る。之れは同島に立寄りて、ペングイーン島及鑛物を採取せん爲めである。船中にては兎も角、今回の成功を祝さん心にて、甲板上に於て、祝杯を擧げた。先づ兩陛下の萬歳を唱へた上、探検隊の萬歳を唱へた。其聲は海波に響いて氷海の鯨鯢を驚かしめたが、前日來の疲勞の爲め折角の馳走も味ふ者なく、ソコくにして各々寢室に急いだ。

翌六日。午後四時頃より降雪頻に至りて咫尺を辨ぜず、甲板上に寸餘も積んだ。海上にはチラホラと流氷も漂ふて居た。

翌七日も。翌々八日も。氷山海上に漂ひ、點々として碧波と水晶と

相映發する状は、實に又なき美觀であつた。

八日船内眞時十一時三十分太陽の高度は零度五十九分四十秒であつた。

其方位は羅盤方位西東である。最低高度は二月九日午前零時二十分にして、

其高度は殆ど水平に近き零度四十分であつた。此第二次航海で、太陽の水

平線下に没せざるを發見したのは、明治四十四年十二月二十七日の夜半で

あつたが、それより南に進むに随つて、太陽の最低高度も次第に高く、南

緯七十八度三十一分なる鯨灣附近に於ては其最低高度は十二度以上で、

殆ど晝夜の區別も判らない程であつたのだ。然るに今や歸途此地點まで來

ると、太陽が正に水平線下に没せんとするに至り、一晝夜中に夜と云ふ物も

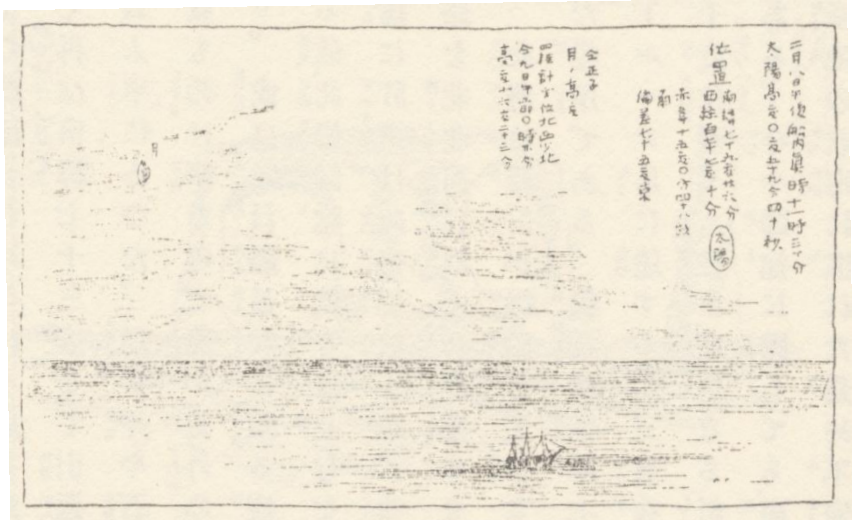
少しづゝ生ぜんとするに至つたのである。

九日朝來雪降り來り、又霰の甲板を打つ音を聽いた。十一日、午後十一

時半頃、コールマン島の影が船の行手に現はれた。隊員船員は是非とも船を

適當の個所へ寄せたいと思つたが、此附近一帶には非常なる流水ある上、





二月八日使館内風時十二時三分  
大陸島を〇とす九分四十分  
位置 南緯七十九度六分  
西経百五十分  
赤緯十五度四分  
偏差七十五度

金正子  
月、高、長  
四種計字位北緯分  
合九分中計の時分  
高、長、十六分三十分

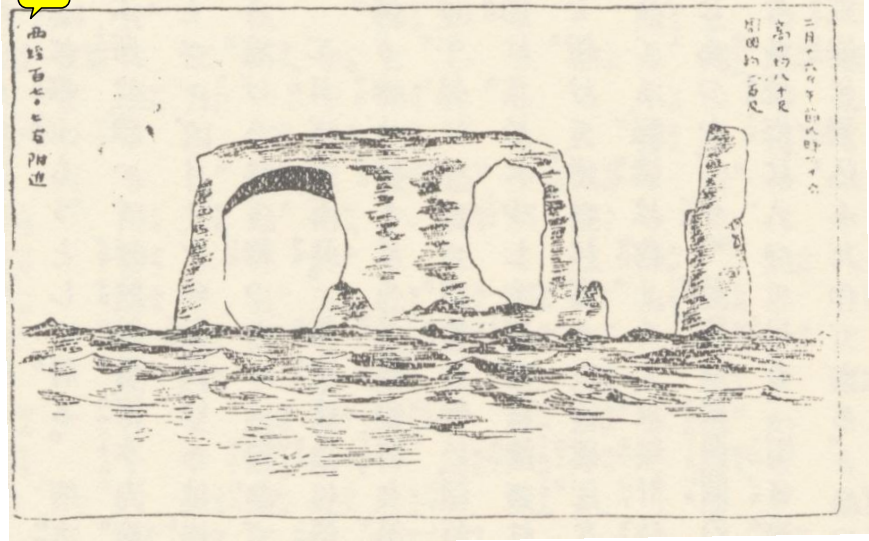
風は烈しく吹雪は起り、船を寄する事は  
頗る危険であるので遙か沖の方へと出  
た。

翌十二日は。風益々烈しく、波愈々荒く、  
船の傾斜は二十五度乃至三十度を示して  
居る。是れ船足の浮ける爲め、傾斜が特に  
甚しいのである。此暴風怒濤は翌十三日  
に續き、更に猛烈なる吹雪を伴うて盛ん  
に襲來したが、十四日に至つて探檢行動  
の將來に就いて幹部會議が開かれた。  
隊長、船長始めた隊中の重なる者皆列席  
の上學術室に於て會議が開かれた。議題  
の主なるものは、十一日來の東南風の爲  
め、船は今や南緯七十一度附近



まで漂流せしめられて居るが、此處二三日天候回復を待つて、豫定の如く、再び南緯七十三度まで引返し、コールマン島に上陸すべきや否やと云ふ事にあつた。所が今や石炭及水等が非常に缺乏し居る上、烈風濃霧も頻に來るので船が意外の危険に遭遇せずとも限らずと云ふ者あり。或は隊員、船員、共に頗る疲労し、中には神經衰弱に罹り居る者もある故、此儘歸途に就くは止むを得ざる事なりと云ふ者もあつた。結局遂に評議は此儘歸航と云ふ事に決し。船長は直に帆走を開始して、進路を北北西に取り、再び襲來せる吹雪の中を進航した。

此邊は羅針が微動して少なからず横に向ひ、往航の際非常に困却した場所である。磁極は南緯七十二度餘の地點にあるので、開南丸がコールマン島に達する二三晝夜前より磁針は絶えず微動して兩側へ二十度位づゝも往き、完全なる針路を取るに尠なからず困難した場所である。今や歸途に際しても、磁針の微動は同様だが、船の操縦者は餘程極地の航海に慣れた爲め不安の念が少ないのである。



二月十六日。午前九時。左舷半哩の邊に、  
 高さ五十呎、周圍二百間餘の盤狀氷山を見  
 たが、更に同十一時三十分に至り、右舷四十  
 間許りの海上に、高さ十五呎周圍五十間餘  
 の異形の氷山を發見した。今後暫くは尙多  
 くの氷山に遭遇する事であらう。

二月十九日。午後十二時近き頃、日暈が現  
 はれた。一同甲板の上に立つて是を眺めたが、  
 頗る美觀を呈した。

二月二十二日。至り、氣温著しく昂騰し、  
 外氣既に三四度に昇つた。

翌二十三日。午後三時頃。非常に大いな  
 る一羽の帝王ペンギン鳥何

れより迷まよひ來きたりけん頗すこぶる疲ひらう勞らうしたる様やう子すにて船せん側そくに來きたり、頗しきりに甲かん板ばん上じやうに飛とび上あがらうとして居いる。清しみづ水みづ機き關くわん長ちやう最さい初しよ之これを發はつ見けんし、ヤやーくと叫さけぶ所ところに、續つゞいて杉すぎ崎さき、釜かま田だ、兩りやう水すい夫ふ來き合あはせ、力ちからを協あはせて投なげ網あみを被かせた。するとペングイーンの首くびだけへは掛かつたが、餘あまり舷げん側そくに近ちかい爲ため、遂ついに甘うま々と逃にげられて終しまつたのは殘ざん念ねんであつた。

二月二十五日。氣き壓あつは急きふに斜しや角かくを爲なして降くだつた。波なみ強つよく、微び雨う更さらに降ふり來きたり何なにとなく暴ぼう風ふうの徵ちゆうを呈ていした。と思おもふと間まもなく北ほく西せいの暴ぼう風ふうは、午ご後ごに至つて正ま西にしに轉てんじ、傾けい斜しや三十度。怒ど濤たう幾いく度たびとなく甲かん板ばんを洗あらひ、船ふねは爲ために少すこしく東とう方ほうに流ながされたが、辛からふして此この急きふ激げきなる天てん候こうの怒いかりを避さけて、幸さいひに遅ち々々たる速そく度どながらも進しん航かうを續つづけた。翌よく廿にち六ろく日にちに至いたりても、怒ど濤たうは尙なほ止やまず、氣き壓あつ計けい益ますます下か降かうし、總そう員ゐんは頗すこぶる不ふ愉ゆ快くわいなる状じやう態たいにあつた。今いまや航かう路ろはニワジーランドの東とう部ぶ、寒かん暖だん潮ちゆうの相あひ合がつる處ところとして有いう名めいなる荒あらう海みに入いつて居ある。頃この日にち來こ荒あらうれ續つづきの爲ために、船ふねは全まく有いう名めいなる荒あらう海みに飛とび込こんだのである。

越<sup>こ</sup>ゑて二十八日<sup>にち</sup>に至<sup>いた</sup>るも暴風激浪<sup>ぼうふうげきらう</sup>は尙<sup>なほ</sup>止<sup>や</sup>まず。前<sup>ぜん</sup>日の西<sup>にし</sup>及び北<sup>きた</sup>西<sup>にし</sup>の風<sup>かぜ</sup>の爲<sup>た</sup>めに船<sup>ふね</sup>は少<sup>すく</sup>なからず流<sup>なが</sup>されて居<sup>ゐ</sup>る。船員<sup>せんゐん</sup>は晝<sup>ちゆう</sup>夜<sup>や</sup>是<sup>これ</sup>等の風浪<sup>ふうらう</sup>と闘<sup>た</sup>つて居<sup>ゐ</sup>る。此<sup>この</sup>暴風怒濤<sup>ぼうふうどたう</sup>は三月<sup>くわつ</sup>一日<sup>じつ</sup>午後<sup>ごご</sup>に至<sup>いた</sup>つて漸<sup>やうや</sup>く收<sup>おさま</sup>り、二日<sup>か</sup>は頗<sup>すこぶ</sup>る平穩<sup>へいをん</sup>なる海上<sup>かいじやう</sup>となつた。

然<sup>しか</sup>るに其<sup>その</sup>翌<sup>よく</sup>三日<sup>か</sup>午前<sup>ごぜん</sup>、西方<sup>せいほう</sup>より驟<sup>スコール</sup>雨<sup>きた</sup>來<sup>き</sup>り、一天<sup>てん</sup>暗<sup>あん</sup>雲<sup>うん</sup>に閉<sup>と</sup>ざれ四<sup>し</sup>顧<sup>あん</sup>暗<sup>たん</sup>瞻<sup>たん</sup>なりしも、やがて雨歇<sup>あめや</sup>み星光<sup>せいこう</sup>燦<sup>さん</sup>として輝<sup>かが</sup>き、始<sup>はじ</sup>めて文明<sup>ぶんめい</sup>界<sup>かい</sup>に入りし心地<sup>こころ</sup>がした。怒濤<sup>どたう</sup>は遠慮<sup>えんりよ</sup>なく空<sup>そら</sup>を拍<sup>う</sup>つて白龍<sup>はくりう</sup>の縦横<sup>じゅうわう</sup>に驅馳<sup>くうち</sup>する如<sup>ごと</sup>く、空<sup>そら</sup>と海<sup>うみ</sup>と相映<sup>あひえい</sup>發<sup>はつ</sup>する壯觀<sup>さうくわん</sup>は誠<sup>まこと</sup>に壯絶<sup>さうぜつ</sup>凄絶<sup>せいぜつ</sup>であつた。

今<sup>いま</sup>や船<sup>ふね</sup>は南緯<sup>なんゐ</sup>五十七度<sup>ど</sup>附近<sup>ふきん</sup>の海上<sup>かいじやう</sup>に入<sup>い</sup>つて居<sup>ゐ</sup>る。今<sup>いま</sup>五<sup>ご</sup>六<sup>ろく</sup>日の後<sup>のち</sup>には第一<sup>だいい</sup>寄航<sup>きかう</sup>地<sup>ち</sup>と目指<sup>めざ</sup>す新西蘭<sup>ニウジーランド</sup>に到着<sup>たうちやく</sup>する豫定<sup>よてい</sup>である。

三月<sup>くわつ</sup>四<sup>か</sup>日<sup>か</sup>、又<sup>また</sup>もや激<sup>げき</sup>烈<sup>れつ</sup>なる風波<sup>ふうは</sup>の爲<sup>た</sup>めに、船<sup>ふね</sup>は大傾斜<sup>たいけいしや</sup>を爲<sup>な</sup>したが、翌<sup>よく</sup>五日<sup>か</sup>に至<sup>いた</sup>るも同様<sup>どうやう</sup>風波<sup>ふうは</sup>荒<sup>あ</sup>らく、六<sup>か</sup>日<sup>か</sup>又<sup>また</sup>同様<sup>どうやう</sup>、翌<sup>よく</sup>七日<sup>か</sup>午後<sup>ごご</sup>に至<sup>いた</sup>つて漸<sup>やうや</sup>く風浪<sup>ふうらう</sup>が收<sup>おさ</sup>まつた。

翌<sup>よく</sup>八<sup>か</sup>日は終日<sup>しゅうじつ</sup>、平和<sup>へいわ</sup>の天候<sup>てんこう</sup>であつたが、其<sup>その</sup>翌<sup>よく</sup>九<sup>か</sup>日に至<sup>いた</sup>り又<sup>また</sup>もや、暴風襲<sup>ぼうふうしゆう</sup>

來し、然かも風位頻りに變更し。船は爲めに或は南航し、或は西航し、若くは西北航すると云ふ風に、頗る航海難を感じたが、これも十日朝に至つて和いだのである。

十九日。朝來船員、隊員一同は或は髪を刈り或は入浴を爲し。或は衣服を着更へ、其他行李などの整理を爲し頻りに立働いて居る。是は船が追々と新西蘭に近付いた爲めである。極地無人の郷に長らく生活して、身體の裝飾を閑却した連中が、此日の晝飯の食卓に就いたのを見ると、全く別人種になつた様な心地がした。

翌二十日。午前十時。待ちに待つたる新西蘭南島の影を左上舷遙かに認めた。全員急

に多忙を極めた。

翌二十一日。午前。左舷五海里許りの處に、四分の一以上雪を戴だくるイカー山脈を認めた。十二時頃海豚群は船側に來襲し、甲板は銃を持つ射手の群に滿された。其結果一頭を銃殺したので、直に鉤を懸し網にて引上げ、豫て腕に覺えのある山邊、花守兩アイヌに執刀を托し、肉を取り

皮かはは鹽漬しほづけとした。高川たか水夫はすめの料理れうりで肉にくを味噌料理みそれうりとして、味あじつたが、久ひさしく生肉なまにくに饑うえたる一行かうは、此海豚このいるかの肉にくに舌鼓したつゞみを打ち南極海豹なんきよくあざらしの肉にくよりも更さらに美味びみなりと評ひやうし合あつた。此海豚このいるかは長さなが五尺しやくに餘あまり皮かはの色いろも頗すこぶる美麗びれいであつた。

船ふねは今日こんにちカイコーラ沿岸えんがんに沿そふて進航しんかうを續つづけて居ゐる。

翌よく二十二日にじふににち。午前ごぜん五時ごじ。右前方みぎぜんぽうに北島ほくたうのシーバリサーを認みとめたが、昨夜さくやより北西ほくせいの風かぜにて進航しんかうを妨さまたげられて居ゐた船ふねも、今夕中こんせきちゆうには灣内わんないに入いらんとし居ゐる。

翌よく二十三日にじふさんにち。午前ごぜん三時半さんはん。開南丸かいなんまるは長途ちやうとの航海かうかいを終をへ、久ひさしぶりにてウエリントン港かうに錨いかりを卸おろした。全員ぜんゐんは最もつとも多忙たぼうを極きはめた。

朝てうらい來南東なんとうの疾風しつふうは細雨さいうを伴ともなひて波なみが高たかい。午前ごぜん九時じふく水先案内みづさきあんない船來ぶねきたり、檢疫所けんえきじよまで導みちびかれて進すすむ。十一時じふいち四十分しふぶん檢疫けんえきを了りやうし、檢疫官けんえきくわんの好意こういにより、尙棧橋なほさんばし五丁ちやうちつか近くちかくまで進すすむ事を許ゆるされた。其到着そのたうちやくした時ときは丁度ちやうど午後ごご一時五分じふぶんであつた。

そこで檢疫官けんえきくわんのランチを利用し、白瀬隊長しらせたいちやう、武田部長たけだぶちやう、池田學士いけだがくし、西川にしかは、村松むらまつの諸隊員しよたいみんは手別てわけをなし、或は領事館りやうじくわんに赴おもむく者ものもあり、又は電信局でんしんきよくに赴おもむく者ものもある。それく任務にんむに就ついた。三井所部長みみしよぶちやうは山邊やまべ、花守兩アイヌはなもりやうを督とくして船内整理せんないせいりに従したがふた。

此朝このあさは一般ばんに上陸じやうりくを禁きんぜられてあつたが、夜よに入いつて一同上陸どうじやうりくを許可きよかされた。で隊員たいみんは思おもひひくくに市中しちゆうに出掛でかけて其夜そのよを過すごした。翌よく二十四日か、相變あひかはらず市中見物しちゆうけんぶつに費つひやしたが、其間船そのあひだふねには當市たうしの領事館員りやうじくわんみん、新聞記者しんぶんきしやなどが續ぞく々と押掛おしかけて來きた。

二十五日にちも同様どうやう、有志婦人いうしふじんれん連などの訪問ほうもんを受けた。

二十六日にち、朝來疾風てうらいしつふうに微雨びゆうを伴ともなひ、何となく不穩ふをんの天候てんこうである。昨今さくこんの大洋たいやうは兎角とかくあ荒れ勝がちにて船ふねより波止場はとば迄の短艇ポートも波高なみたかき爲ため往還わうわんに屢々しばしば飛沫まつを受けた。

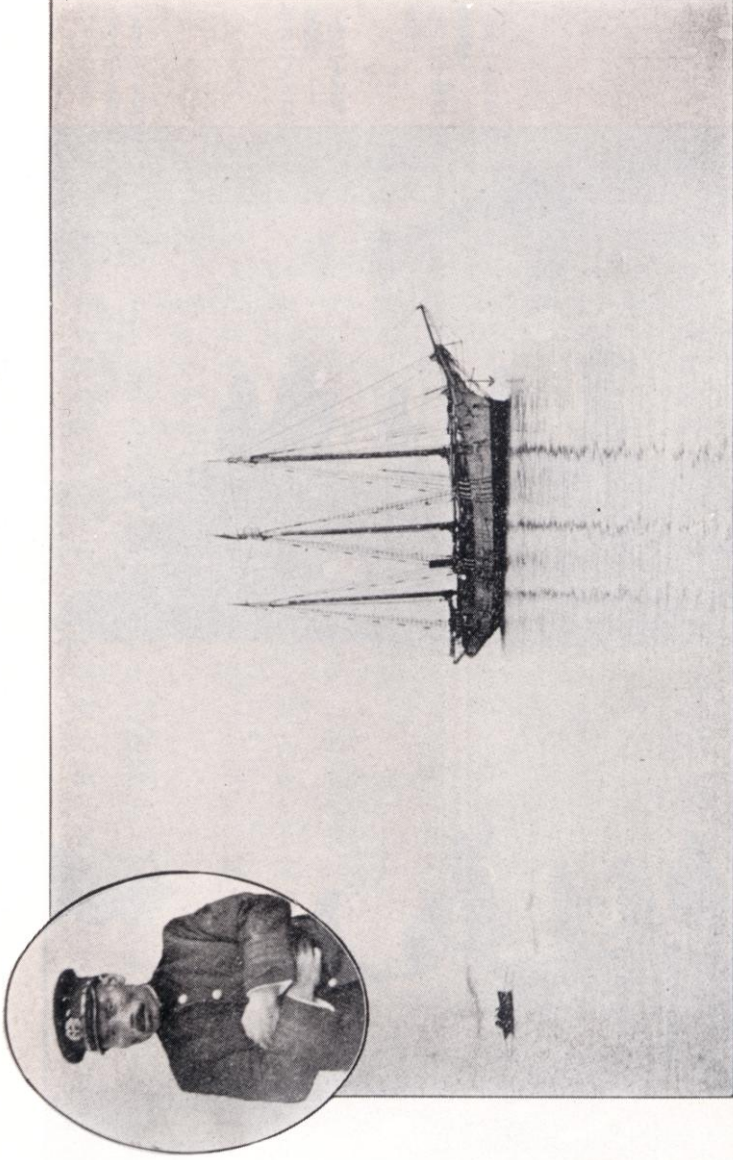
二十七日にちも滞在たいざいした。翌よく二十八日にち、隊長たいちやうは一先ひとまづ此處このところにて開南丸かいなんまると袂たもとを分わかち、郵船いうせんにてシドニー經由けいいう、歸國きこくの途とに就つく事ことになつた。其理そのり由いう





明治四十五年二月四日撮影

景光揚引灣鯨てに艇端、つけ避を氷流る來ひ襲  
(土轉運屋土はる居け掛腰に尾船圖下)



新西蘭ウエリントン港に凱旋しし丸南と長船

は、能ふべき丈速かに歸國して後援會を援助し船員給料、隊員手當等を作り置かんとするにある。此歸國人員中には武田學術部長、池田學士、田泉寫眞技師、安田木工等も加はつて居たが、前三者は、學術報告及活動映畫調製の必要より、後の一人は病氣保養の必要より歸る事と爲つたのである。汽船の都合にて前記數人の歸國はいよく三十日と決定した。

翌二十九日。は副食物の買入等にて船は多忙を極め、其翌三十日は隊長以下の歸國日とて一同其準備に忙殺された。同一行の乗船はユニオン會社のアオレンヂ號であつた。出帆は午後十時三十分に行はれた。明れば三十一日。隊長其他不在となりしより、寢室の移轉等に終日を費し、又船長以下船員は明早朝出帆の爲め、其準備に取掛つた。所が翌四月一日に至り、尙一日滞在する事と爲り、二日出帆と變更した。聽て二日と爲ると近來稀なる快晴である。灣内殆ど油を流した

ごと、水禽が愉快さうに遊んで居る。港の内外には快走艇の群が漸々と多くなり、纏て、開南丸の周囲を取圍んで見物して居る。如何にも長閑な出帆日和である。正午に至つて愈々出帆の汽笛を鳴らした。

此日は海上極めて穩かであつたが、翌三日に至り北西の風がソヨソ吹初めた。けれども幸に強風ともならず、四日も終日極めて長閑であつた。五日午後に至りポツク又不良の天候となつた。然し幸に船の進行を妨ぐる程ではなかつた。

久し振りにて船は次第に進航して、早くも四月十四日となつた。今日は傾斜頗る烈しく、折々船側に打上げる激浪は、甲板に躍り上り凄まじき音を發して居る。風は南西位にして、船は北北西を指さし、五海里乃至六海里の速力で駛んで居る。時々刻々船は三年振の懐しき故郷に近附きつゝあると思へば、今尙三千九百餘海里の南方に漂ふて居る一行も、聊か意を慰むるに足るものがある。

翌十五日。午前十一時頃より南方に大鳥の純白色を呈せる者一羽

を見たが、翌十六日は烏賊の五寸許の物が甲板に飛込んだので、早速刺身にして食卓に上した。

翌十七日。船は快く帆走して居る。船長は今宵若くは明拂曉は東經百七十度弱、南緯二十度十分の地點に在る佛領アネリウ島を見る筈であると言つた。で、船長初め見張りの船員等は、眼を放さず前方を注視して居る。然し今日は朝より霧深く、氣温蒸熱く、湿度は九十度以上に至り、海上は一海里以上を透視する事も出来ぬので、甚遺憾であつた。

翌十八日。午前六時、果して船長の言の如く彼の島を認めた。島は右舷一哩の距離にあつたが、依然として霧深き爲め三分の二以上の頂は見えない。然し其形状は鈍鋸齒状をなすのを見ると、疑もなく是は火山岩より成れる島である事が知られた。

十九日午前八時頃より、氣壓計は斜角を示したが、十一時四十分、七五三を示し暴風雨は間もなく來襲した。午後二時頃に至り異様な音響が甲板の上に響いたので、何物ならんと赴き見れば、帆桁が暴風の爲め

に破碎したので、船員一同應急工事の作業をして居るのであつた。兩三日來の天候を危み夜も帯を解かず、唯海圖室にて、腰掛の儘、假睡中の船長も此物音に夢を覺し、今や必死に應急修理を爲しつゝある。

昨今船室の温度は華氏八十四度二分である。襯衣又は浴衣一枚にても尙蒸熱く覺える。

四月二十一日、室内温度華氏八十六度である。一同は昨今室内の餘りに暑きに窮し、甲板上に出て來りて涼を取り、睡に就くは、概ね午後十一時過ぎであつた。

二十四日、船は南東の風を受けて快走して居る。速力四海里乃至五海里である。午後船長は海圖を示して一島嶼を指さし、是は佛領サンタクルー島である。島内には所々に部落あり、酋長ありとの事なるが、住民の性質不明なれば、迂濶に上陸は出來ぬと云ふた。之より以後海上は毎日無事にて、船は只豫定の航路を豫定の速力を以て進航しつゝあるのみである。

五月一日は來つた。此日猛烈なる驟雨が來たので、隊船員は皆裸體になつて甲板上で水浴を試みて居た。六頭の犬も久しく洗滌しないので積れる南極の垢を洗落して呉れて居た。然るに突然霹靂一聲耳を劈き眼を射る如き雷鳴が起つたので、一同思はず臍を抱へて室内に馳込んだ。尤も船には不完全ながら避雷針の設備もあるが、數回に涉り電光雷鳴の凄じきには少なからず一同喫驚した。

今朝より西南の輕風吹來り、船は遅々として帆走して居る。回顧すれば去年の今日は恰もシドニー、ジャックソン灣入港の記念日であるから多少の感慨なきを得ない。今日は近來にない好い風であつた。翌二日は東の輕風であるのと潮流等の關係で、船は殆ど現位置を保つて居る。帆船の身に取つては近來の如く風力の尠いには困る。日没より南南東の方位に當り、奇怪なる黒雲起り。聽て驟雨の來襲となつたが、二時に至り、雲忽ち散じた。此日午後四時、三尺ばかりのレーラー魚四五尾宛各々群をなして、船側に現れたので大勢の者は、或は銛、或は釣針などを持出して、

百性一揆の如く騒立つた。然し何物も獲なかつた。

廿二日。午後一時十分『船だく』と叫ぶ聲が甲板に聞える。一同何事ならんと出て見ると、遙か北方の水平線上に、何物かが黒烟を吐きつゝ往く。船長は、

『あれはマリアナ群島方面に赴く定期船であらう』

と言つた。海上で船に遇ふ事は尋常茶飯の事ながら、水や空なる渺茫たる海上に何一つ眼を遮ぎるものもなき時にあつては、平凡なる汽船の影も一つの慰みである。

爾來無事の航海を續けて六月四日となつた。船は北北東の風を受け、東方に向つて汽帆兩走を續け、午前十時、小笠原群島の母島、外二三の島嶼を七哩許り左舷に見て進航して居る。午後に至り母島は益々眼界に近づき來り、西の方に手に取る如く見える。明朝此島に寄るべき由を語りつゝ船長は船員を獎勵して居る。其中に父島も遙に現れた。



母島と父島の間は、十八海里である。

翌五日。午前七時父島と開南丸とは三哩許りの距離となつた。斯くて次第に徐行を續け、遂に午前十一時四十五分、二見港内に投錨した。午後一時半檢疫を終り、第二虎丸に導かれて、それく部署を分け、上陸して、島廳に往く者もあり、買物に往く者もあり、中くの多忙であつた。夜半頃より二回驟雨來襲したが、久方振りに上陸して睡眠し、非常な安眠を貪り得た者もあつた。

翌六日は雨であつたが、小笠原島青年會の代表者並に、同島小學校長職員等來船し、盛に謝辭を述べし上、探檢隊の萬歳を三唱して呉れた。此日は雨中ながら上陸を試み、熱帶果實の新鮮なるを味ひ、一同は絶えて久しき野菜の缺乏を補ひ得たので胃腑は、大に満足を表した。

翌七日は船長並に隊員、船員、一同、同島の有志者より招かれて扇ヶ浦の小學校に赴き、南極探檢の講話を爲せし上、同島有志者主催の歡迎會に出席して各自十二分の歡を盡した。

翌八日も又講話若くは港内の見物に費された。

九日の午前十時愈々此島を出帆する事と爲つた。同島の有志は、三艘の船を艤して送つて呉れたが、此日は風位の爲め竟に出帆を翌朝まで延期することゝなつた。

明ければ十日午前八時十分。漸く眞に出帆し得る事となつた。其時濱邊に小學校の職員生徒、島廳の吏員、有志等數百人數旒の旗を押立て整列し、一齊に開南丸の萬歳を祝した。開南丸は汽笛を以て之に答禮し徐々と港口に向つて進んだ。萬歳の聲は尙止まぬ。斯くて船は進んで正午過ぐる頃島を離れたが、夕刻には父島より約四十海里、兄島を東五海里許りに見る地位にまで到達した。

夕刻よりは風が凪だので船が殆ど現地地を離れない。此時は西北の微風であつたが、十一日漸く西西北に轉じ兄弟島の中央二哩附近の處を通過した。此頃より風位の爲め汽走を開始した。

十二日。東南風吹き、午後より氣壓計少しく下り始めた。バラくと

微雨降り、廳て風位は正東に轉じ、更に東北に轉じ船は傾斜甚しく、天候頗る危ぶまれた。然し十三日に至り風位變じ拂曉より一天名残りなく晴れて、東並に東北の風に送られて駛走して居る。然し全體から云へば船の進航が餘り捗々しくない。

朝七時。七八哩の前方に鳥島を見たが夕刻には東方約四哩許りの地點に之を見た。

翌十四日も依然として船は進まない。漸く鳥島が四五哩許り後方に見える位地に進んだに過ぎぬ。

其頃より全體の船員はペンキ塗替、其他の裝飾に着手した。

元來鳥島は岩石を以て蔽はれし島にて海岸は頗る險阻なる斷崖である、其斷崖より赤褐色の土質が見えて居る。西側は頂上より海面まで草木なき秃地であるか、是は重に前年噴火の際溶岩を流した痕跡のやうである。

十五日矢張り東の輕風で青ヶ島を望んで進んだが、夕刻同島を東一哩の

方向に眺めた。熟視するに此島は全島殆ど草木を以て蔽はれ、宛然青毛氈を敷詰めたやうである。青ヶ島の名は之から起つたものであらう。唯西方の一部が開拓されなだけで、其他は草木が井然として栽培されて居るやうに見える。人家も其間に点在して居る。

時刻より一天俄に搔曇つた。今迄鮮かに眺められて居た青ヶ島は南方の雲に鎖されて終い。唯左方に八丈島の三原山、西山、小島等が微かに青黛色を呈して、北方の雲上に聳えて居るだけである。

十六日は南東の輕風である。昨夕八丈島が八哩許りの東にあつたが、此方位には今や御倉島が恰も盆に載せた餅の如き形をなして見えて居る。

午後四時半より三宅島を右に、新島を左に各々呼べば應へん許りの距離に見て進んだ。午後六時此處を通過した。前方には雨中の大島が朦朧として見えて居る。今日は午後四時頃より降雨と爲り、夜に入つては盛に降り頻つて居る。

午後八時十分、船は猛雨の爲めに大島沖を通過することが出来ないので、一旦船首を同島の東南隅に向け、内海から通過することに定め、而して同九時、針路を西南西に轉じた。此夜密雲天を鎖し、細雨肅々として降頻り、黒白も分かぬ眞の闇である。斯かる時、航海上唯一の頼みは燈臺であるが、其生命とする燈臺の光は更に見えぬ。爲めに船員の苦心は一ト通りではない。



明くれば十七日、午前六時頃、甲板は俄かに騒々しいので、總員は急遽として驅付けた。見ると、右舷密雲の隙に現はれ居るのは、正しく沿岸である。併しそれは島嶼であるか陸地であるか不明である。而して其一方は灣形を示し、其灣邊に二三の黑影、それが人の影の如く見えて居るが、何分遠望であるから何うも判然しない。

今海上は、山陰の爲め無風なるのみならず、三角波頗る高く、推進機は、ともすれば、空轉する。斯くて船體は、刻一刻波に揉まれ、沿岸の方へと運び込まれやうとする。即ち船體の危険は、次第くに急を告げるや

うになつて来た。此時船長は、最早避難の策盡きたりと見て取り、火急に投錨の準備を整へしめた。太き錨綱は、何十尋となく錨の傍に束ねられてある。開南丸の運命は最早寸秒の間に決せられやうとした時、其刹那！天公未だ我を見棄てず、神風とも云はんか、今までの無風に引變へ、一脈の微風は忽然として吹き起つた。

『ソレ帆だツク』と、船員は急に活氣付き、直ちに帆を張り、同時に之に應じて汽鐘は全速力を出し、こゝに帆力と汽力との有らん限りを盡し、遂に二時間の悪戦苦闘を経て、辛ふじて船體坐礁の危難を免かるゝ事を得た。全く九死に一生を得た次第である。

斯くて、船は沖合に出たが、漂流すること約十時間に亘り、漸く深霧の中に、一髪の陸影を認め得た。之は伊豆の東岸であると認定せられたが確定が出来ずに半信半疑の處へ、宛も午後六時二十分に至り、懐かしき山頂——それは三年振に見る富嶽の絶頂——を天半に仰いだので、之れで始めて凡ての位置を確然と知ることが出来た。



後に船長の發表せる調査報告によると、今朝危険に遭遇したる彼の地  
點は、伊豆の稲取岬であつた。それにより一同は、扱ては前夜闇中の航海  
に於て、潮流の爲めに流されたのであつたかと、今更の如く竦然とした。  
船は進航中ではあるが、海霧密にして、船首の位置も判明せず、寔に寒  
心の至りで、船長殆め船員等は、窃かに眉を蹙めて、不安の前進を續けて  
居るうち、午後三時半に至り『島だツク』と叫ぶ聲に、一同蘇生の思を爲  
した。此れは即ち上記の伊豆東岸であつたのである。

此日氣壓計の最低度は、午前九時半の七百五十三耗で、全十二時頃より少  
しく恢復の兆を示した。而して午後六時に至り、風のみは和らいだ。唯だ  
波浪は依然として荒れ狂うて居る。

翌十八日に至り、前日來の暴風怒濤は、大に平穩に歸し、曇天ながら時  
折日光は雲間を洩れた。今朝船は大島を東方に近く見、相模の陸影を西方  
に遠望しつ、館山港に向ひ、汽帆兩走を以て急航して居る。併し

生憎あやにくの逆風ぎやくふうなので、船ふねは已やむなく連針航法れんしんかうはふを執とつて、午後四時十五分ごじふ五分、漸やうやく館山灣外たてやまわんぐわいの鷹島附近たかしまふきんに投錨とうべうした。

だが何分檢疫未了なにぶんけんえきみりやうの爲ため上陸じやうりくを許ゆるされず、唯ただ船長せんちやうと、館山出身たてやましゆつしんの藤平ふちひら機關士きくわんしとの二名めいのみ、上陸じやうりくの特許とくきよを得えた。此時陸上このときりくじやうより、堀内事務長ほりうちじむちやうは後援會代表者こうえんくわいだいへうじやとして出迎でむかへ、武田部長たけだぶちやうは、隊長代理たいちやうだいりとして出迎でむかへ、其他出迎人そなたでむかへにんは、北條町有志ほうでうまちいうし、澤安房郡長さはあはぐんちやう、加藤北條町長かとうほうでうちやう其他そなたであつた。

翌十九日よくにち、東方とうほうの微風びふうは追手おひてであるが、三海里ノツトの汽走きそうとて、殆ど帆ほとんほの用ようを爲なさぬ、午前九時船長歸船ごぜんじせんちやうきせんするや、間もなく拔錨ぼつべうに際さいし、陸上りくじやうより訪問ほうもん者相次しやあひついで至りいた、互たがひに一別來べつらいの健康けんかうを祝しゆくし合あふうち、定刻ていこくとなつたので、汽笛きてき一聲船せいふねは、横濱港よこはまみなと指さして進航しんかうしたのは、午前九時三十分ごぜんじふ十分であつた。

此際このさい、全灣碇泊中どうわんでいはくちうの「第一報効丸だいいほうかうまる」より、萬歳ばんざいは叫さけび出いだされた。開南丸かいなんまると此船このふねとは、以前報効義會いぜんほうかうぎかいの姉妹船しまいせんであつたので、非情ひじやうの船舶せんぱくも心こころあらば感かん慨がいを催もよふした事ことであらう。

午前十一時五十二分ごぜんじふ二分、港口かうこうを出いでんとする時とき、軍艦鞍馬ぐんかんくらまの檣頭しようとうに、信號しんがう





を掲揚した。船より望遠鏡を透して凝視したが、風弱き爲め旗布垂下し、其信號判明せず、斯くと知りたる鞍馬は、態々船に近づいて迂回し、總員登舷して帽子を打振り、勇ましき萬歳の聲を浴びせた。

午後一時十分、觀音岬の燈臺より、「汝は運び得るや」の信號旗は掲揚せられた。此時逆流頗る強く、進航遅々として居たのである。全燈臺よりは、次いで再び信號旗を掲げた。其文字は、「汝の成功を祝す」と云ふのであつた。



開南丸の着陸が遅いので、之に先だつ數日前より後援會幹事村上濁浪氏は、横濱の西村旅館に出張して待つて居たが、丁末俱樂部の寺田四郎、粟山博、加藤正人、猪毛利榮、都筑懋鎮、の諸氏も又來つて大に斡旋する所があつた。然るに今や開南丸は無事館山に到着して、本日横濱へ入港と確定したので、午後四時舢に乗つて迎へに出た。田中捨身佐々木照山等の後援會幹事も又港務部の汽船に乗つて迎へに出た。午後四時三十分、開南丸の英姿は堂々波を切つて、港内に入り來つた。檣頭高く探檢旗と日章旗とを

翻しつゝ入り來つた。萬歳萬歳の聲は海を動かして起る。波止場は皆人を以て埋まり、其人々の口よりも雷の如き萬歳の聲は叫び出された。午後六時、船は港内第一區に投錨し一行悉く西村旅館に入った。茲には野村夫人、土屋夫人、東京各新聞記者諸氏等も居て絶えて久しき對面に互に無事を祝し合つた。探檢勇士の面上には一種言ひ知られぬ喜悦の情が動いて居た。出迎者の顔にも無論満足の念が漲つて居た。

三  
廳で、十九日は暮れて、廿日の朝は來た。此日は愈々芝浦埋立地に於て歡迎の式を行ふ日である。午前十時開南丸は徐ろに碇を捲いて横濱新港を出帆した。日本郵船會社の汽艇は防波堤まで見送り呉れた。此時恰も汽船が春日丸は歐州に向つて同港を拔錨する時であつたが此偉大なる使命を果せし開南丸が同船に近く進みし時、同船の甲板には身に綾羅を纏へる美人が數名現はれて此方に向ひ紅のハンカチを打振り萬歳を唱へて呉れた。斯くて開南丸は南十字星の探檢旗を折からの朝風に翻しつゝ懐しき

東京の天を指して進行した。

船中には、佐々木、田中、村上等の諸幹事及び此事業に最も同情厚き東京其他の新聞記者諸士が乗つて居たが談は知らずく一昨年十一月出發の際の事に及んで、最も痛快に當時の事を談論して居た。廳て甲板上では南極圏まで往復せしと云ふ米の響應があつて。同上の注釋附の牛肉罐詰、鯛味噌等の馳走があつた。一同不味いながら舌鼓を打つて食ふた。廳て羽田の沖に達するや、汽艇一隻矢の如く進行し來り、紅白の旗を打振り開南丸の安着を祝すと信號した。之は水上署の快進丸であつた。第三臺場の傍より十二の櫂を有するカッターは勢鋭く此方に向つて、漕ぎ寄せた。萬歳の聲は海に響いて、時ならざるに鷗を驚かした。之は是れ商船學校の生徒である。廳て又早稻田大學の歡迎船來り。水難救濟會の歡迎船、攻玉社の歡迎船、其他數十隻の歡迎船が來つて各々萬歳を絶叫して呉れた。やがて芝浦埋立地なる歡迎式場の前に到れば、ズトンと一發勇ましき音が空に聽へて

美事なる煙火は一行が無事の到着を祝した。それと同時に船は陸岸を距る五間位の地に碇を卸した。

三井所衛生部長はウエリントンより品川灣まで隊長代理として、開南丸に留まりし關係より、幾多の苦闘に色も褪せし探検旗を先頭に、陸上隊員を引率して上陸した。之に續いて野村船長は百折不撓の面貌に喜悅の情は掩はんとして掩ふ能はず、高級部員及船員等を引率して上陸した。雲か霞か、人を以て埋みし幾萬の群集より萬歳の聲は百雷の一時に落つるが如く地を揺かして起つた。南極探検後援會長大隈伯は是等の群衆に擁されつゝ此處に出迎へ居られたが、一行の無事歸り來るを見て喜悅の情禁ずる能はず、其不自由なる體軀を運んで熱心なる握手を與へた。野村船長、三井所衛生部長、其他一同歡極まつて覺えず涙を垂れた。其中に又も萬歳くの聲は起つた。廳て一同高く設けられたる式場に向へば、同所には肝付中將、頭山滿氏、徳永博士、及後援會幹事、三宅雪嶺、押川方義の諸氏も集まり一行を待つて居る。

群衆中特に目を惹きしは早稲田、慶應、明治、日本、中央、法政、の各大學生、攻玉社、高、輪、芝、錦城等の各中學生、一萬有餘の列であつたが、今一行の場の上るを見るや手に手に南星の小旗を打振り聲勇ましく探検隊歓迎の歌を謡つた。蠻音を帯びじ其聲は、本邦男兒の意氣を表はして壯烈鬼神を泣かしむるに足るものがあつた。

一同席に着くや大隈伯は立つて群衆に演説した。『國民が久しく憂慮したりし我が探検隊も兎に角大略の目的を遂げて歸國した。此舉たる當初に於ては尠からず世人の嘲笑も買つたが僅々二百四噸の小船を以て海路三萬哩の大航海を遂げ、船として達し得べき最南の地點まで達し、氷海の航海に於て少からざる經驗を得て歸つて來たと云ふことは日本航海史上に特筆大書すべき事であると共に陸上に於ては鯨灣と、エドワード七世州との兩所より上陸し能ふべき丈の探検を遂げ歸つて來たと云ふ事は我國の歴史に於ては嘗て無かつた極地探検なる事を爲し得たもので誠に喜ばなくてはならない事である。殊に此遠征たる一人の生命をも損せず

無事此處に歸着し得たと云ふ事は實に人間の體力と精神力との偉大なるを示すもので、事の茲に到りしについては誠に此事業に同情し呉れし日本國民に向つて感謝せねばならぬ次第である』と演べ少ならず群衆を感動せしめた。之に續いて三宅雪嶺、田中舍身、村上濁浪、佐々木照山、粟山博諸氏の演説あり、最後に白瀬隊長、野村船長等の答辭があつた。斯くて大隈伯の發聲で天皇陛下の萬歳を三唱し數萬の群衆は之に和し歡呼聲裡に式を閉ぢた。

それより隊長、船長等は隊員船員一同を率ゐて、二重橋外に至り整列して最敬禮を行ふた。

隊長は此時恭しく奉告文を朗讀した。時正に午後五時半であつたが、此時一方では栗山丁末俱樂部幹事の幹旋で提灯行列が催された。集るものは早稲田大學、中央大學、法政大學、明治大學、早稲田中學其他の五六校で午後六時より續々日比谷公園に集り、準備せし五千五百個の赤提灯は日比谷公園の空に映じて美しく、其れに従ふものは無慮一萬餘人、探檢隊歡迎の



歌を謠つて練り出した。向ふ所は二重橋外の大廣場である、同所に着するや學生群衆は恭しく其所に整列して提灯指揚げ謹んで天皇陛下、皇后陛下の萬歳を三唱し奉つた。其聲雲の上にも達せしにや、今まで點じあらざりし二重橋外の大アーケ燈點せられ忽ち秋夜の名月の如く照り輝いた。一同は深く大御心に感涙を流しつゝ最敬禮の後、順路鍛冶橋疊町新道路を経て京橋電車通りを進み行く。折柄降り出せし雨は探検歌を謠ひつゝ進む此一行を少からず悩ましたが、それにも屈せず、提灯差揚げ雨を衝いて進行する光景は最も勇しきものがあつた。行列は廳て日本橋、今川橋を通り須田町、廣瀬中佐銅像の前まで來たが此處にて一同勇ましく萬歳を唱へて解散した。

翌廿一日は、白瀬隊長、野村船長等隊員、船員一同と共に大隈邸を訪ふて無事歸朝報告の式を擧げた。三宅、田中、村上、佐々木等の諸幹事も參集した。此時伯爵は既往滿二年間に於ける非常なる苦辛は昨日の國民的大歡迎に因つて報ひられたる感がある。國民も此事業によつて、探檢の眞価を



了解するに至りしは喜ばしきことなり、只今後に望む處は更に奮勵努力して有終の美を濟すに努むべきであると述べ、田中舎身氏は人間は逆境の時は過失少くして順境の際は反つて過失多し、今日の盛名が持續するや否やは諸君が今後順境に處する心掛の如何によつて決す、深く身を慎みて名を汚す勿れと訓戒した。白瀬隊長は誓つて伯爵閣下と田中幹事等の訓戒に背かざるべき由を述べて答辭とした。此時伯爵夫人は此席に入り來られた。すると隊長等は出發の際賜はりし御守及びチョッキ等に就きて深謝せしに、夫人も喜びの顔色を以て一同に對せられ、之より各神佛に御禮詣りに往くつもりですと語られた。此席へは樺太アイヌ花守新吉山邊安之助等も列して居たが、花守は大きな手に南極鷹の片羽を新聞紙に包みたるを持ち之は自分が極地にて得たるものなればとて恭しく伯爵夫人に贈呈した。夫人は限りなく此無邪氣なる贈物を喜んで受納せられた。廳て庭内に於て記念撮影後伯爵の萬歳を唱へて散會した。



## 第七章 最初の探検

抑も南極探検の事業が普く社會に紹介されたのは、實に明治四十三年七月五日錦輝館に於て發表演說會を開いた時に淵源するのである。其の詳細は卷末に附した南極探検後援會の經過に述べてあるから、茲には略すが兎に角、此前古未曾有の事業は白瀬中尉が再三の懇請に因り、同事業の爲め錦輝館に於て發表演說會を開き、田中弘之、佐々木安五郎、櫻井熊太郎、押川方義、三宅雄二郎、の五氏は後援會幹事に村上俊藏氏は同専任幹事に任じ、大隈伯爵は、南極探検後援會長の位置に就き白瀬轟氏探検隊長に任じ、始められたのである。其より後、滿天下幾多新聞社の同情、朝日新聞社の募金上に於ける盡力等に依りて急速力を以て發達したのである。最初用船問題に就きて幾多の苦心を嘗むるも得る所なかりしが竟に郡司大尉より第二報効丸を買入れ（東郷大將之に開南丸と命名す）





これもち之を用ゆる事と爲り、十一月末を以て出發し得るまでの運びに至つたのである。

之より前、探検隊の支部を深川區熊井町に設け、白瀬中尉は此處にありて、隊員の募集携帶品の買入等に從事して居たが、之が狹隘を感じたので、更に芝區なる芝浦埋立地に移つて盛んに出發準備を急いで居た。用船の修繕工事も濟んで愈々出發の期日も決定したが、其決定した出發期日は十一月二十八日である。

十一月二十六日正午より後援會長大隈伯の厚意に因り早稻田の伯邸に於て、南極探検隊員一同の告別式が行はれた。白瀬中尉以下之に赴いた。式場は庭園に面せし日本室の大廣間、玄關前で告別記念の撮影を終ると直に式は開始された。隊長は陸軍中尉の制服であるが他の隊員は新しい制服制帽である。二人のアイヌ人が偉大なる體格だけに一番目立つて立派に見える。一同の席が定まると、大隈伯は令夫人綾子女史を隊員に紹介された。夫人は鬼とも取組み兼ねまじき面構への連中に向つて温情籠る

送別の辭を述べて後、豫て用意せし三崎稻荷の守札を縫込みたる眞綿のチ  
ヨツキを渡された。伯爵は續いて松木男爵より特に依頼し來りし伊勢太神  
宮の神御衣の守札を一同に手渡された。今度は夫人がスルクと各隊員の前  
に進み朱塗の木杯に満々と酌をされた。流石頑健無類な隊員も、伯爵夫人  
自らの厚き待遇に感激したが、鐵の如き手に支へ持つ其木杯がブルくと震  
ふた。中にも二人のアイヌ人は生れて始めて祖國の貴婦人に接して、而も手  
づからの酌に驚き恐れて、さらぬだに大きい兩眼をキョロクさせて居たが、  
感極まつてかハラくと落涙した。此アイヌの感涙を見たる満堂何れも引き  
入れられてか、密かにハンケチを取り出す人もあつた。殊に血氣盛りの丁未  
俱樂部學生諸士は悲壯の光景に胸迫つて顔を背けて居た。斯くて伯爵は一  
同へ向つて一場の訓示的告別の辭を餞し白瀬隊長答辭を述べ、萬歳聲裡に  
式を了つた。之より日比谷公園に催さるゝ送別式があるので、一行は名殘  
り惜しくも、直に伯邸を辭し去つた。



同日午後三時、日比谷公園音楽堂前式場に於て、熱烈なる國民的送別會は催された。大隈伯爵邸を辭したる一行は、此處へ直行したのだ。見渡す所音楽堂の前には南面して式場が設けられ、青々たる杉葉、紅白の幔幕が小春日和の柔らかな日光に輝り榮えて、見るからに平和な此の式場も、愈々三時の開會と共に悲壯の凄氣に滿された。隊員は白瀬中尉を前にして廿七名、ズラリと式場の正面に腰を下す、待焦れた群集は一時に『萬歳！』と動搖めき渡る。後の方からは『ヤー素敵だ、豪いぞッ』と一行の新しい制服制帽姿を祝ふ蠻聲も響く。一同の席が定まると佐々木照山君の巨軀が壇上に現れ、例の蠻聲一番『諸君！一行が此度出發せんとする廿八日は恰もマゼランが太平洋を横斷した首途の日である。此目出度い日に吾が白瀬中尉以下の壯擧を送るのは實に幸先きが好いではないか』と吼ゆるが如き開會の辭を了れば今度は、五分間の飛入演説を許した處、忽ち登壇したのは早大の稲田直道日本力行會の南波秀雄等の青年諸士で



何れも熱烈悲壯の氣を吐いた。之が終ると、次は小川運平、田中舎身の二君が萬丈の氣焰を吐いて此行を壯にする、其次に一風變つた人物が現はれたと思ふと、之は魚河岸に今一心太助と謳はるゝ名物男、坪野房次郎と云ふ江戸ッ兒である。今一心太助は五つ紋の袖を捲りく小氣味好い江戸ッ兒式の氣焰を吐いて壇を下つた。夫から幾人かの演説あつて後、午後四時三宅博士は會長大隈伯の代理として南極に埋没して歸るべき銅箱と、極地の天に翻すべき日章旗と探檢旗とを白瀬隊長に渡す。銅箱は一尺五寸に八寸位の堅固なもので、中には義金者の姓名を記入した物を入れてあるのだ。二旗の大旗が群集に向つてバツと廣げらるゝと萬歳々々と、さらぬだに熱狂した人々は喚呼狂奔する。伯爵の告別の辭は、櫻井熊太郎氏が讀上げた。白瀬中尉は答辭を讀んだ。隊員も群集も來賓も一種悲壯の感慨に打たれて謹聽した。夕陽の光りは物凄く此光景を斜に射て、熱したる人々の顔には送る者にも送らるゝ者にも一種の相關聯したる感情が脈々と相通つて

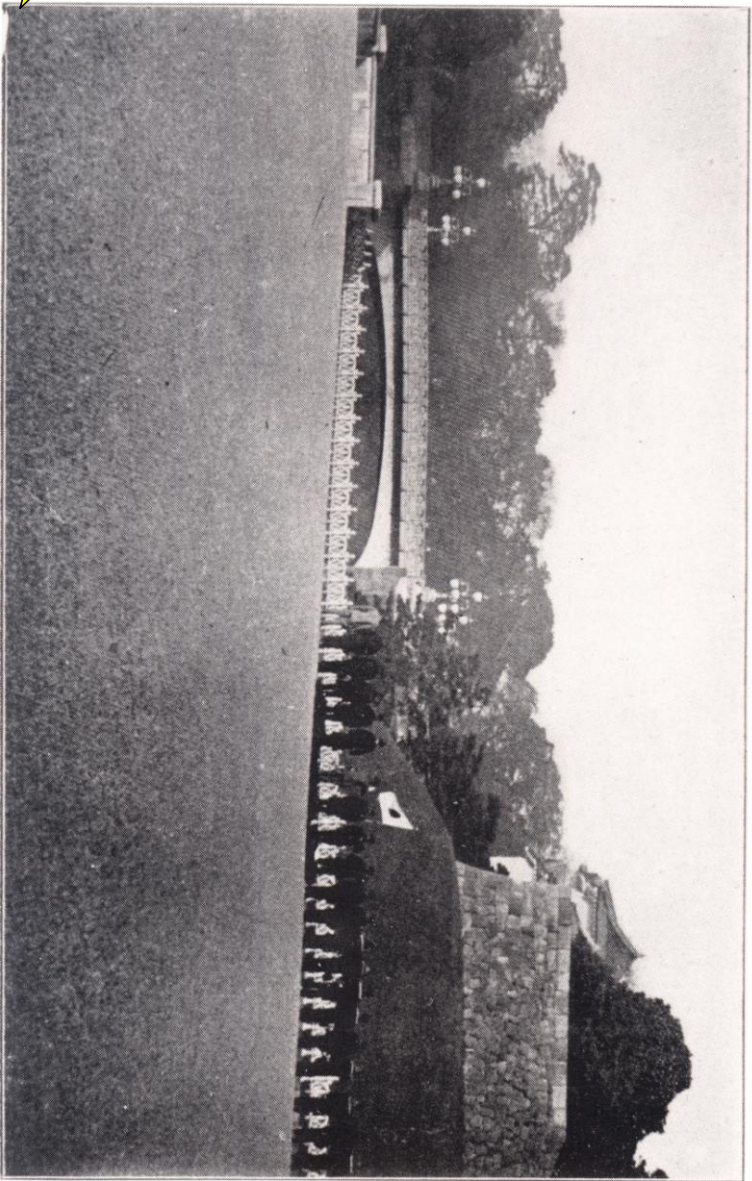
居る様に思はれた。越えて二十八日午前七時隊員一同は凜然として歩武肅々、白瀬隊長に率ゐられて丸の内二重橋前に伺候した。先づ整列して恭しく最敬禮を終ると、隊長白瀬中尉は列を離れて三步を進み、奉告文を捧げて朗讀した。



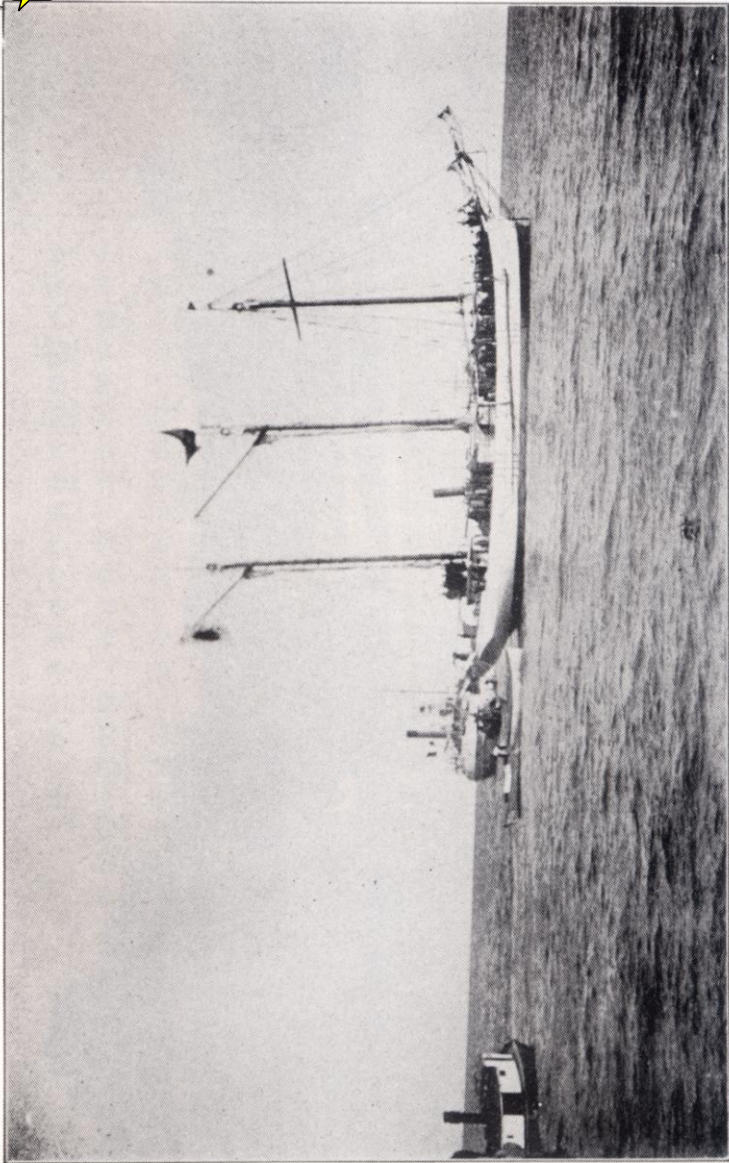
臣白瀬臺誠恐惶頓首百拜して今上陛下の闕下に伏奏し奉る臣臺茲に今日を期し南極探検の途に就かんとし今や一行の部下を率ゐて今上陛下の闕下を辭するに當り一は以て鴻大無邊なる聖恩を謹謝し奉り一は以て臣等一行の素志を貫徹せん事を誓ひ奉らんとす今上陛下克く臣等の微衷を嘉納し給はらん事を誠恐惶頓首百拜して白す

豫備陸軍輜重兵中尉從七位勲六等 白 瀬 臺

言々句々悲愴を極めた。やがて白瀬中尉が奉告文をすらくと捲いて懷に納めた時一同は二度三度宮城を伏拜みて底徊去り難き狀健氣にも轉た涙を催さしむるものがあつた。



式告奉發出の員船隊るけ於に外橋重二



開南丸の品川灣出碇光景

明治四十三年十二月二十九日撮影





同日午後一時から後援會其他有志主催の送別式は芝浦埋立地に開かれた。式場の入口なる芝橋には、紅白の布を以て包める大門を作り鉤玄闡幽の額を掲げ兩方の柱には、推倒一世之智勇。開拓萬古之心胸と大書し、場は大天幕を張つて人を入れ、其前に高壇を設けて、隊員來賓新聞記者等の席に充て數百旒の萬國々旗は潮風に翻り、沖合遙かに日章旗と探檢隊旗とを掲げたる白塗りの開南丸は待遠しさうに浮かんで居る。やがて午後一時半、專任幹事村上濁浪氏幹事一同を代表して開會の辭を述べ、各新聞社を初め國民の熱誠なる同情を謝し、東京藥學校長は、同校出身の三井所氏に送別の辭を呈し、其他早稻田、明治、中央商業の代表者等、皆熱心に一行を勵まし、大隈伯は拍手の中に立つて、此有史以來の大遠征は先人未發の秘密を露くものなるが、宜しく空砲でなく實彈を發射すべしと快辨を揮ひ、又前南禪寺派管長勝峯大徹和尚は八十三歳の老軀を運んで一行が船中の安全を祈る爲め、大般若經轉讀のお守を授け、次に白瀬隊長は吾等一行は天神地祇の冥護に依り、



四十五年ねんの六月くわつか七月くわつには間違まちがひなく此品川灣このひながはわんに歸帆きはんし得うべしと信しんずと述べ、後のちに佐々木照山氏ささきせうざししは白瀬中尉しらせちうゐ一行かうが血判けつぱんの誓書せいしよを示しめし、諸君しよくん是これを見みよくと絶叫ぜつきうして悲壯ひさうなる一場ちやうの演説えんぜつをした。

其他そのた福本日南ふくもとにちなん、嘉悦孝子女史等演壇かえつたかこぢよしらえんだんに立たち、終をはりに大隈伯おほくまはくの音頭おんどで陛下へいの萬歳ばんざいを三唱しやうし、三宅博士みやけはかせに依よつて南極探検隊なんきょくたんけんたいの萬歳ばんざいは唱となへられ、之こにて閉會へいとなつた。式場しきちやうには白瀬中尉夫人安子しらせちうゐふじんやすこ、長女ちやうぢよ文子ふみ列席これつせきし、尙なほ大木伯おほき、伊澤修二いざはしうじ、頭山滿とうやまみつるの諸氏しよしを初はじめ、野村船長のむらせんちやうの紹介者せうかいしやなる秀島海軍大佐ひでしまかいぐんたいさや、矢島船長等やじませんちやうらも來會らいくわいして居ゐた。

送別そうべつの式しきが終をはると、隊長たいちやう白瀬中尉しらせちうゐ以下いか二十七名めいの一行かうは、大隈伯爵おほくまはくしやくを中央ちゆうに擁えうし、後援會幹事諸士こうえんくわいかんじしよしに圍かこまれ、南極星なんきょくせいを染出そめだしたる小旗こばたを打振うちふる數萬すうの學生團がくせいだんに取卷とりまかれて乗船場じやうせんばたるロセツタ棧橋さんばしの附近ふきんへ來くると、此處こゝには一行かうを本船ほんせんへ送をくるべき大傳馬船おほてんませんを始め、其他そのた二十餘隻よせきの各團體かくだんたいの見送船みをくりせんが居ゐて、國旗彩旗こくきさいき美しく飾かざり立たて、中尉ちゆうゐの乗船じやうせんには福寶堂寄附ふくほうだうきふの樂隊樂手がくだいがくしゆを早はやめて頻しきりに行かうを壯さかんにした。廳やがて一行かうは岸頭がんとうに整列せいれつして



茲に見送者に對して最後の訣別の挨拶を述べ、傳馬船へと乗移つた、と見  
た船夫は直ぐに繫綱を解くと、傳馬船はスルクと岸を離れた。樂隊の奏樂  
水上に起れば、天上には數發の烟火打揚げられ、其隙に陸岸數萬の見送人  
が、一齊に旗を振つて、フレク白瀬！を絶叫する、捧ぐる帽子、打振る旗數、  
群集監督の警部は正に五萬人以上だと語つたのにも其盛況以て知る  
べしであらう。此間白瀬隊長は一齊に唱ふる萬歳の聲する方に脱帽の答禮  
をなし、最後の挨拶に忙しい。傳馬船は次第に岸から沖へ出やうとする、  
そこへ競ふて端艇で艚ぎ寄せ來る大學生等は、中尉を圍んで記念の筆蹟を  
乞ふ、中尉は乞はれて一々書き與へる其文字は何れも己が決心を示す者な  
らぬはない。曰く堅忍不拔、曰く百折不撓、曰く千挫不屈、曰く開南萬里、  
曰く何、曰く何、かくて暮色何時しか海上を包んで、四顧暗憺たる光景と  
なつた。

之より前、開南丸は芝浦埋立地を距る數町の沖合に繋がれて居たが、潮  
の關係上長く留まる事が出事ないので、午後四時半頃、臺場外へ出て

往つて、そこへ碇泊した。一行を乗せた傳馬船は之を目がけて來るのだが、何分荷積の都合も二十八日中には充分運ばなかつたので、已むなく、此日の出發は中止し廿九日に帆出する事とした。

翌くれば、十一月二十九日。此日一天晴渡り誰言ふとなく『探檢日和』と叫ばれた。白瀬中尉を始め後援會幹事新聞記者其他隊員の近親、有志見送人等を乗せた艇は、午前十一時ロセツタの棧橋側から纜を解いて本船に向つた。岸を離ると、萬歳の聲を陸上と船中から送みに交はしつゝ、波を蹴て一哩餘の沖合に假泊せる開南丸の舷側に達し、爰でも一頻り萬歳を絶叫しつゝ本船に乗り、少時の程は見送る者も見送らるゝ者も盡きぬ名残を惜んだが一行の意氣は天をも衝かんばかりで、希望の色は其面上に輝き渡つた。斯くて出發の時刻も迫り、正午となるや見送人の一部は再び元の艇に乗り移り綿々として盡ざる名残の情を包みつ本船を去る。開南丸後部の錨鎖は忽ちにして數人の船員に依てキリくと捲揚げられ、午後零時十分開南丸は黒烟を揚げて徐ろに動き初め、艇と本船とは

刻々に遠ざかつた。船名を示せる萬國信號旗エルエフピーエム、南十字星を描出せる探検隊旗及び船籍の儀表たる爛々たる日章旗は開南丸の檣頭高く翻へる。

此時水上署の八重洲丸から、貴艦の成功を祈ると別れの信號をして呉れたので、開南丸は好意を謝する信號を返し、斯くて羽田沖に差し蒐るや、第五辰丸に遭遇し、謹で成功を祈るとの信號を受けたので、之にも好意を謝すと答へつつ船は進んで横濱港外に達した。間もなく同港を出帆したのは午後五時頃であつた。船が横濱港外に出ると、其處に碇泊して居た巨艦がある。それは軍艦津軽である。我が船が其舷側を通過するや。一聲の喇叭は劉亮として響いた。それと共に艦員全部は舷上に整列し、我が船に向つて萬歳を三呼した。我船では隊長白瀬中尉が出て之に答禮し、且つ一同萬歳！を絶叫した。夫れから本牧沖を通過すると、横濱英國領事館員は本船の前途を祝せんと小蒸氣を疾走し來つたので、速力を緩めて館員を迎へ、其祝詞を受け、斯くて靜かなる鏡の如き海を南東を指して進んだが、



夕陽正せきゆうまさに没ぼつせんとする際さい、遙はるかに西にしの空そらに當あたつて神々かうぐしき富士ふじの姿すがたが見みられ  
た。一同どうは之これを見て喜よろこび、富士ふじは是これ本邦秀麗ほんぱうしうれいの氣きの化くわして山やまと爲なりし物もの、  
我等われらが前途ぜんとを祝福しゆくふくするの佳瑞かずみなりと勇いさみ立たつた。萬歳ばんざい！の聲こゑは又またも海波かいばを  
搖うごかして起おこる。

斯かくて機關きくわんの音滑おとなめらかに砥との如ごとき海上かいじやうを進すすんで往ゆくと數時間すうじかんの後無事のちぶじ  
館山灣たてやまわんに到着たうちやくした。時正ときまさに夜十一時三十五分よじいちじふぶんである。

此地このちは遠征勇士えんせいゆうしと見送人みおくりにんとの告別こくべつの場所ばしよである。眺ながむれば鏡かざみヶ浦波靜うらなみしずかに  
して、星斗せいとの影かげを宿やどし風肅々かぜせうくとして別離べつりの情切じやうせつなり、今別いまわかれては何れの時とき  
にか又相見またあひみん、誠まことに生別死別せいべつしべつを兼ねかぬるの思おもひがある。『願ねがはくは健康けんかうにして  
萬里ばんりの遠征えんせいを遂とげよ』『一意只進いただしすすんで目的もくてきを貫徹くわんてつせられよ』一語ごは一語ごよ  
り沈痛ちんつうである。熱ねつせる手ては熱ねつせる手てと握にぎり合あひ、涙なみだは落おちて兩者りやうしやの頬ほを傳つた  
ふ。『さらば』とばかり一同どうは舷げんを下くだり去さらんとする。外面ぐわいめん暗黒あんこく、咫尺しせきを  
辨べんせざるの有様ありさまである。隊長たいちやうは燭しよくを執とつて階段かいだんの上うへに立たつた。火光くわくわうはポツ  
ト赤あかく照てらして兩者りやうしやの頬ほを染そめた。仰あほぎ見て又また『さらば！』。

りやうしや、あひわか、このときなにももの奏しけん一聲裂帛悲しき尺八の音は起つた。此音悲壯萬里遠征を送るの人をして腸爲めに寸斷せしむるの思ひがある。懸て岸邊に達せし時紙片に火を點じて飛ばすものがあつた。其狀花火の揚るに似て、暗中に一道の光明を示した。船中の者は之を見て萬歳を叫んだ。見送の者又岸にあつて萬歳を連呼した。其聲海に響いて暫くは鳴りも止まなんだが、竟に鳥羽玉の暗の海に消えて終つた。



翌くれば三十日午前五時開南丸は、汽笛一聲館山灣を解纜し、同六時灣内大賀村沖に一先づ投錨の上、貨物短艇等の整理に着手した。それが終了すると直ちに出發の豫定であつたが、天候頗る險惡の狀を呈したので、遺憾ながらも午後三時十二分、再び館山港に引返して投錨した。

處が天候は、翌一日に至るも依然として不良で北位の強風吹き荒み海上の物凄きこと云はん方なき光景、併し一刻を争ふ大切の場合であるから、午前七時二十分に至り、野村船長の英斷に依り、斷然出帆と決し、

船首を數千哩を距る新西蘭ウエリントン港の方位に向けて拔錨した。さて出帆後は以前に増したる強風にて激浪數次甲板を洗ふ。普通船ならば斯かる天候には出帆を見合すが當然であるが、我開南丸は遠征當初の腕試しとして先づ冒險の征帆を張つたのである。

之に反し、他の船舶は一時航海を中止し、先を争うて館山へ入港避難し、爲めに通航の船舶一隻も其影を認めない。やがて沖合に乗出すと、激浪怒濤の爲め我開南丸の船體は傾斜十五六度を示したが、兎も角滿帆に風を孕ませて、南へくと航走した。午後六時前後より海風は、一時收まりかけたが、浪は尙ほ高くして、豫定の針路を航走することが能きなかつた。同十一時頃に至り、野島崎燈臺の警火を左舷正横約十海里北東の距離を望見て漂泊しつゝ夜を明した。

夜來晴雨計は依然として降下しつゝあつたが、翌二日午前四時頃に至り、西北の和風が吹き初めたので、目的の針路に向つて南進を初めた。同八時頃には再び降雨を見、船體は高浪の爲めに激しき動搖を起すの



で船員は上甲板に在る燃料石炭及び食糧貨物の取片付に多忙を極めた。同十一時頃に至り、西方遠く伊豆の大島を認めた。隊員は斯かる小帆船にては何分初航海の事とて、大多數船暈に悩み、食事を喫することも出来ぬ様子なので船員等は多少の懸念の無かつた譯でもないが既に箭は弦上を離れたやうな今日の場合、一刻一瞬の猶豫も出来ず、氣遣ひ乍らも極力南進を急いだのである。

午後六時頃よりは強風全く西位に轉じて吹出した爲め、航海は極めて愉快となった。

翌三日、八丈島を遙かに見て、針路を加減し、全帆に西風を受けて進航した。隊船員の大部分は前日來の船暈猶ほ全く癒えないと見えて、終日食堂は寥々たるものであつた。

夜來の海風漸く靜まり、四日の空には灰色の曇雲密に打鎖して居たが、風位は北西であつた爲め、航海には最も都合が好かつた。此日の朝餐には船暈者の爲め特に粥を調理したが、その粥さへ二三人が箸を執

つたばかりで、多くは猶ほ食を斷つて居た。午頃から朝來の密雲漸く薄れ、程なく日光は雲間を洩れ、全員をして勇氣を恢復せしめた。そこで夕餐の食卓は航海後初めての珍味を以て飾られたが厨夫の心盡しも豫想ほどに酬みられなかつた。

前日午后に續いて、五日の朝は快晴で、加ふるに南進に都合よき風位であつた。氣候も輕暖を覺え、日光も吹く風も、人の肌に快く、總員は珍らしくも甲板に集うて閑談を交ふるほどの元氣となつた。併し一利一害は數の免がれざる所で、氣候が溫暖になるに従ひ、艙内から異臭の瓦斯を放散するので、乗組員一同は殊に衛生上に注意を拂ふことになつた。

晚餐の卓上では、漸く隊員の食事の小言が洩れ出して、炊事方を困らせるようになつた。以て船暈者の胃腑の回復されたことが知れる。

翌六日頃より時々驟雨が襲來するやうになつたので、乗組員は甲板上に裸體のまま飛出し、奇抜なる驟雨浴を試み、又慾の深い連中はシャツを

洗つたり、犢鼻褌を濯つたりして嬉々として騒いだ。

船は箭の如く征南の針路を取つて、七日の海上を駛走した。暑氣は一日に加はり、乗組員の多くは、甲板宿泊を好んで試みるやうになつた。元來甲板宿泊は直接外氣に觸れるのであるから、非衛生的のもものではあるが、暑氣と例の室内の惡臭とを避くる爲め止むを得ず實行することゝなつた。殊に北寒の地に育つた樺太犬と、花守山邊の兩アイ又は暑さの嚴さを他一倍感じたらしい。

折しも八日午後一時頃のこと鰹の一大群が隊伍を組んで船首に出現した。花守アイ又は習ひ覺えた銛を執つて、大に手腕を示さんものと之が捕獲を試みたが、惜いかな皆水際を離れると同時に銛から墜ちて、一尾も手に入らなかつた。

九日朝來大空雲影を認めぬが、風位南方に轉じたので、針路を東に轉じて航海を續けた。風位は次第に南進の帆走に不適當となるのであるが、征途猶ほ遼遠であるから、今より汽走なぞと云ふ贅澤は出來ない。

目下航進中の海上は回歸線近傍とて、暑熱は極めて甚しく寒暖計は日中八十度を示して居る。船室内生活の苦痛は益々加はり、晝夜大部分の時間は、甲板上で過す工夫をすべく餘儀なくされた。船艙内から洩れて來る臭氣は、魚油と硫黄とより發散する瓦斯の混合したもので、眼に多大の害を與へる。

前日船首に現はれた鯉の大群は、今日も亦た再現して來たので、甲板からは吾れもくと釣を試みた。すると釣は頗る容易で、瞬く間に船上は忽ち鯉の山が築かれた。晚餐には久振に鮮魚の馳走に一同舌鼓を打つことが出來た。

翌十日も昨日と同じく快晴であるが、風位は極めて不定で、且つ輕風である爲めに、海上は頗る靜穩だが、暑熱は一層烈しさを加へ、隊員等は殆ど丸裸で日陰を追うて甲板上の隅々に坐を移し巡る程であつた。

昨日釣つた鯉の臟腑を釣針に附けて、船尾に流して置いたら、何者か來て、それを一噓に嚙んだものと見え、苦しさに藻搔いて曳く力に、繪

の切れむばかりの様子、之を發見した連中は、聲を揃えて曳上げて見ると、長さ一丈に垂なんとする二十五貫目以上も有らうと思はるゝ大鱧であつた。萬歳々の歡呼は、暫し甲板上に鳴響いた。厨夫は早速執刀した。太平洋の珍珠は、意外にも此夕一同の腹の蟲を驚かせた。

翌十一日の天候は東北東の輕風吹き、海上極めて靜穩、涼氣自ら爽快で、昨日捕獲した三十二尾の鯉鯖に舌鼓を打つて愉快なる一日の航海をした。

十二日は黎明よりマリアナ群島の東端一孤島附近を通過した。午後二時五十五分視界遙に火山を見る。其狀恰も摺鉢を伏せるが如く山頂噴烟盛也。白瀬隊長を始め隊員連中は甲板上に集まつて、左眊右顧しつゝ、『之が南極の陸影であつたならば・・・』などと歡語しつゝ、頗る元氣であつた。

十三日は、天氣好晴、東南東の和風吹き、波高く、船體は動搖して、左右約十一二度の傾斜を示した。隊員中には猶ほ船暈に惱まされて居る者

もある。中には南洋群島への寄航を希望する者も出たが、豫定の航程を急ぐ爲め船長は之を聞流して一直線に針路を進んだ。赤道も近づいたので、彈藥の爆發や、食糧の腐敗などが起つては大變と、注意に注意を加へた。天氣は極めて麗らかではあるが、時々驟雨の來襲がある。例の天然浴や洗濯などの盛んに行はれたのは云ふまでも無い。

館山港出發以來、今日で南東への航程正に九百〇六海里半に達した。天氣は今日も快晴である。驟雨も日課の如く時々襲來する。驟雨襲來の際は午睡の夢涼しき隊員等は遽かに目覺めて、大狼狽の滑稽を演出し、又た船員の方も帆の始末に忙殺されて、甲板は何時も火事場のやうな混雑を呈した。

十五日の午後、始めて鐘詰果實を開いて總員に分配した。暑熱も餘程加はつたので、各自衛生の注意を怠らぬやうにした。白瀬隊長は常に洋服で居つたが、他の隊員は和服姿で居た。船長は船員に對しては一切和服を許さぬ事に定めた。此日輓犬一頭病死した。



翌十六日より十七日にかけて、天氣は、或は晴、或は曇、風位は逆風に船の進航は思はしくなかつた。十八日は朝來殷々たる遠雷が聞えた。風は不定、浪には南東の颯りがあつて、船體は頗る動搖した。船は午前七時汽帆兩走で南東の針路に急駛を開始し、午後より風順位に復したので、夕暮から汽走を休止して帆走を續けた。

十九日も例に依つて朝のうちは涼しかつたが日の冲天と共に暑氣加はり、季節冬至に近き今日此頃、母國では炬燵を擁する時季なのに、船中は裸一貫で居ても暑さ焼くが如くである。

二十日の風位は東北東で、風波極めて靜穩である。午前六時船長は汽走の用意を命じた。同七時頃から風力を借りて、汽帆兩走を試みた。此日も隊員の中には南洋群島に寄航せんことを申出た者もあつたが船長は豫定の航程の遅延して居ることを陳べて、其要求を容れなかつた。

乗組員は此夜涼を趁うて甲板上に集り、一輪の皎月を仰ぎつゝ互に打語らうて居ると、何處の舷端よりか、尺八の低音は濤聲に和して傳は

り來つた。

二十一日は北東の好風で、稍や強く吹き、船體の傾斜左右七八度に及んだ。午後三時頃、犬一頭病死した。之が二頭目である。直に水葬に附した。今後、犬の健康に就ては大に心配せざるを得なくなつた。

翌二十一日は、午前中より頻りに雷鳴を聞き、驟雨の襲來も時々あつた。之が爲めに船員は必死となつて帆の操縦に忙殺せられた。正午には快晴となり、午後一時十五分よりは汽走を止めて帆走のみに由ることにした。二十三日は、朝來天氣晴朗、海上極めて平穩である。風位も亦た北東に定まつて帆走には好都合であつた。

翌二十四日午前五時に至り、海上風全く死したので、帆走を中止し、唯だ汽走するの外はなかつた。此日頃より益々暑氣が加はつて來て、到底汽罐室に長時間の就業は困難であつたから、船長は水夫二名を火夫の助手として汽罐部に送つた。此頃は毎夜甲板上で、餘興として蓄音



機を聴いた。

二十五日。天氣は快晴であるが、風位は不順なので、全く帆を撤して汽走した。此日は朝來蒸暑いので、船艙から洩るゝ臭氣殊に烈しく船室に居ると殆ど眩目昏倒せむばかりであつた。而して船中装具の金物類は總て灰色に變じたのには全く一驚の外はなかつた。午後四時頃に至つて風位定まつたので、汽走を罷めて帆を張つた。

二十六日は、天候も良く、風位も好いので、船は箭の如く目的の方向に向つて駛ることが出来た。二十七日の午前に至つて風死し浪に東北から推寄する蜺りが出来て、左右各々七八度の動搖を起した。同九時頃から全帆を徹して汽走に代へた。午後九時頃には又多少の風力を見たので、總帆を展開することにした。

二十八日、例によつて驟雨が時々來襲するので、其度毎に帆の上下に忙殺せられた。船員の中には此多忙を厭うて、『隊員になればよかつた』と愚痴る者もあつた。之と云ふも隊員中の甲乙は、此多忙な操帆の



作業を呑氣に寝轉んで見て居たからである。

二十九日は天候半晴で、西位の輕風である。海波に前日來の北東の颯りが矢張り高かつた。船は漸く赤道の眞下に近づいたので、乗組員は隊員となく船員となく『赤道は何の邊だ』と云つて騒ぎ出した、そこで一行中の惡戯者は望遠鏡の鏡面に赤の横線を引いて、之を此處彼處へ見せ廻つた。此日午前六時二十分、東經百五十三度五十八分の子午線より愈よ赤道を通過したのであつた。午後七時頃海鳥が船尾へ來たので水夫の一人が之を手摺にしたのは一興であつた。今日は母國を出帆して宛ど一箇月目であるといふので、船内は出發當時の回顧談で持切つた。

三十日は、風位風力が極めて不定であつたので、勢ひ針路も不定ならざるを得なかつた。船長の意思ではソロモン群島のギンゲインヴィル嶋と、コイゼウル島との中間を通航する目的であつたのだが、風の都合も思はしくないのと、天候險惡の兆が見えた處から、針路を東方に向け、

横帆とヂブと二枚を用ゐて航走した。此日何れの方向から来たものか無数の流木を認めた。

翌日は十二月三十一日。記念深き今年も今日で愈よ終焉を告げることゝなつた。天候の險惡益々甚しきを加へたので、船は荒天航走の準備を整へた。昨日赤道を通過した計りなので、炎熱猶ほ焼くが如く乗組員一同はシヤツ一枚になつて、元旦の晴の馳走を用意すべく、例の臭い艙内から品々を取出した。浴衣一枚で大晦日を迎へた一同は、少なからず奇異の感に打れた。

翌くれば明治四十四年の元旦である。夜來の風雨次第に烈しさを加へ、午前二時前後は、迅雷轟き、最も凄惨なる光景を呈し、満船の勇士も聊か荒膽を冷した。船長機關士等は最も針路に注意を拂つて航走を續けた。

午前九時新年を祝福すべく、總員一同は前甲板に集つた。隊長は先づ祝辭を述べ、總員一同、遙に母國の空を拜して、天皇陛下の萬歳を三唱

した。式終るや否や、制服制帽に窮屈を感じて居た隊船員は、忽ちシヤツ一枚の無禮講となつて、葡萄酒の祝盃を舉げた。此日の馳走は乾餅の雑煮、韶陽魚、數の子、鮭、鯨、鰯、蛤蜊等の罐詰を原料としたるものであつた。就中最も一同を喜ばしたのは、平素衛生上用ゐ來つた麦飯に引代へて、雪の如き米の飯であつた事である。

二日から三日に亘つては、殆ど間斷なき降雨の爲めに、海上には南の波動を起し、船體は頗る動搖した。其爲めか測程器に故障を起したので止むを得ず、手用測程器を用ゐて之に代へた。三日夜十時頃猛烈なる驟雨襲ひ來り、風位は西に轉じた。

四日は朝來の半晴で、目的の南方指して進航を續けることが出来るやうになつた。

五日午前九時頃に至り、東方水天髻鬚の邊に、雲か山か、一髪の青螺を認めた、それは無名の一小島であつたが、實測の結果、海圖とは其位置に少しく相違があつたので、他の方法に由り測量すると、全く時辰儀の

日差ひさの異ことれるに因よることを確たしかめ得えた。其島そのしまの位置あちは、南緯なんみ七度ど二十五分ふん東經とうけい百六十二度ど四十分ぶんである。

此日このひ乗員じやうあん一同どうは汁粉しるこに舌鼓したづみを打うつた。

六日かから八日かまでは、天候てんこう不良ふりやうであつたが、九日にちに至いたつて、連日れんじつの密雲みつうん漸やうやく薄うすれ、風位ふうゐ南東なんとうに轉てんじたので、船體せんたいは頗すこぶる動搖どうえうしたけれども、航走かうそうには頗すこぶる都合つがふが好よかつた。此邊このへん海上かいじやうは、赤道せきだうを離はなれて早はや南緯なんみ十五度どにも達たつして居あるが、暑氣しよきは猶なほ却なかく々に烈はげしく、驟雨スコールも毎日まいにち時々ときぐら々ら來襲らいしゆうした。

十二日にちの午後ごごに至いたつて、征襟せいきん漸やうやく一掬きくの涼味りやうみを覺おぼゆるやうになり、又また此邊このへんの海水かいすゐの色いろは、一種しゆい異様やうの薄白色うすはくしよくを帶おびて居あることを認みとめた。而しかして南東なんとうの波動うねりは、高さたか十五六ふいつはゞや呎幅けん約五間けんぐらゐのものがあつたが十四日かに至いたつて、波動うねりは漸やうやく減少げんせうし、随したがつて船體せんたいの動搖どうえうも鎮しづまり、隊員連たいゐんれんは爲ために非ひ常じやうに喜よろこんで居あた。併しかし船長せんちやうは、風力ふうりよくが不足ふそくなので、大おほいに濫面じふめんを造つくつて居あた。此日このひ高川水夫たかがすゐは、見張所みはりじよの中なかで、ボーシボーションと名なづくる一羽いちばの海鳥かいてうを生擒せいきんした。尙なほ此日このひ厨房ちうぼうに蔬菜そさいが缺乏けつぼうを告つげたので、以後いごライムジュースを

代用することにした。

十五日から十八日までには近來稀有の快晴で、森茫たる海洋上も、宛ら青疊を敷いたやうで、絶好の航海日和であつた。併し風力が不足なので、多くは汽走を以て駛り、時に又た帆走をも試みつゝ、南へくと豫定の針路を南進した。此頃は乗員一同海上生活に慣れて、晝は船尾の甲板に集り、蓄音機などを持出して大に興じ、夜は皎々たる月下に打寛いて、得意の隱藝を演じなどして夜の更くるを忘れる程であつた。

十九日には、汽罐に故障を生じたので、一刻千金の貴き時間ではあるが、止むなく一時航進を中止して、之に修理を施した。一方船體を檢するに、連日連夜の暴風怒濤の迫害の爲めに、白帆の一面は灰白色となり、又た船の外板水平面は、多くの水垢、海草、貝類などの附着物が生じて、爲めに流石の鋼鐵板も、水鏽を生じ、殊に留釘の箇所は腐蝕して將に離れんとして居るのを發見した。

二十日、二十一日の兩日は風位が不定なので減帆して多くは汽走を

用ゐた。又た時々遠雷殷々として轟き、驟雨も亦た來襲して、大に船員を忙殺せしめた。

二十二日に至つて、天候は漸く平調に歸し、風位も東方に定まつたので、總帆を展開して南方に急駛した。此日は風清く氣朗らかで、坐ろに人の心を樂しましめるので、船長は一等運轉士に對して、『今日は天氣も好し、風位も申分のないお祝に、御馳走を奮發しやうぢやないか』と諮つた。之を洩聞いた隊員の一人は、鬼の首でも捕へたやうに、『號外くツ』と全船に觸廻つたので、食はぬ先から歡呼の聲は其處此處に起つた。

二十三日の天候は恰も母國に於ける彌生の花曇りのやうで、風は東方より吹いて頗る航海には便利であつた。船長は朝來飲料水や食物などの検査をして、一同に衛生上の注意を與へた。連日來輓犬が相尋ゐで八頭病死した。其原因を調べて見ると、乗組員の殘飯のみを食しめた爲めではないかと疑つて見たが、後日に至つて其死因は縊蟲の寄生した結果であることが知れた。三井所衛生係も手當の盡し様はないと云つて匙を投げた。

夜十時頃船尾遙かの海上に、漁火の如き二箇の光を認めた。之は汽船が航海しつゝあつたのであらう。

二十四日から二十五日へかけては、内地の五月頃の氣候で、頗る心地よく、海面上東南の波動の爲めに船體は左右七八度の傾斜を示したが東位の和風甚だ帆走に適し、目的の方向に向つて航進を繼續することが出來た。殊に二十五日は、天神の祭日に當るので、遙に母國郷里の祭典を思ひ型ばかりの馳走が卓上に並べられた。船長は一刻も早く寄航地たる新西蘭に到着せねば、後援會では大に心配するであらうと考へて少なからず急駛の方を講じた。

二十六日は風位不順の爲め、殆ど東方に向つて航走した。船體の動搖は昨日にも増して激しく、船の進程遅々として頗る不愉快であつた。二十七日から二十八日へかけて、風は益々強くなつて、氣温は急に涼しくなつたので、今朝から食卓を甲板から室内食堂に移した。副食物としては奈良漬、鮭、福神漬等が其重なるものである。





翌二十九日も、風位依然として帆走に適せず、汽力を以て東方に航走を續けた。涼氣は益々加はつたので、此日から青天井の甲板寢を禁じて、室内に起臥することゝ定めた。折しも午前十時頃遙か東南方に當つて新西蘭北島の西北端を發見したので、乗員は拍手喝采して歡呼の聲を擧げた。思へば我開南丸が品川灣頭を辭して以來、陸影を見ること之で僅かに第三回目である。

三十日早朝白瀬隊長は起出づるや否や、船長に對し新西蘭寄港の豫定を訊ねたが船長が『風位の不良の爲め、昨夜半から沖に向つて船を回轉したので、ウエリントン方面に直航することの出来ないのは頗る遺憾である』と兎に角此場合、風位の順調に向ふを待つより外に良策がない』と答へた。夜來の天候は依然として險惡であるが、三十一日の午後一時頃から風雨が稍や穏かになつたので、針路を南に轉じ滿帆に順風を受けて進んだ。午前十時頃再び陸地が視界に現はれ初めたので、一時は落膽した隊長を始め

総員は手を拍つて大に喜んだ。併し船長を初め船員等は南方の波動の激しきを氣遣つて居た、と云ふのは陸岸附近であるので暗礁などの危険が無いとも限らぬからである。

翌くれば二月一日、昨日に變らず風波高く、船體の動搖随つて甚しく隊長初め隊員等は、『全體船の針路は新西蘭の方向に向つて居るのか』と云つて訝り出した。船長は之に答へた、『風位の不順と夜來屢々來襲した狂風驟雨の危険を避ける爲め、多少進程に加減を加へて逆航したから諸君の訝るのも無理は無い』と云つた。

二日午後二時頃エグモント山の山頂を認めた。此山形は宛ら我が富士山に髣髴たる死火山である。海拔八千二百六十呎、山頂には白雪を戴いて居るのが見える。一同は地平線遙に此山を望見て、遠く母國の懐かしき風景を回想した。船はエグモント岬附近に向はうとしたが風位不調の爲め、危険を避けて中止するの已むなきに至つた。夜の十時頃に至り、エグモント岬を左舷に見て進航した。

翌三日午前一時、エグモン岬の燈臺前を通過して、同三時半の頃から、ウエリントン港指して針路を取った。隊員の幹部連は味爽から上陸準備に多忙を極めて居たが、船長は晴雨計が次第に降下して刻一刻天候險惡の兆を示すを見大に懸念はしたが兎も角汽力と風力とを能ふ丈け利用し港口を指して急航した。

此日、日没の模様は最も危険なる暴風の前兆を呈したので、船長初め船員一同は大に警戒して居った。すると果然夜の九時頃に至つて、一陣の旋風來るよと思ふ間もあらせず、波濤怒りて船を弄すること木葉の如く爲めに傾斜二十度に達し、ウエリントンへの入港は、一時絶望に終つた。

加之。海上は一面濃霧に鎖され、濛々として咫尺を辨ずることすら出来なかつたから成るべく沖合の安全なる海上に漂泊しつゝ夜の明くるを待った。

圓かなる夢を結び得ざる不安の一夜は明けたが、翌四日も風波は更



に收まらず、加ふるに午后一時半頃非常なる豪雨來り、同六時まで降續いた。翌五日も昨日に變らぬ強風怒濤で汽罐の全力を使用するも、一切進航の効を奏さなかつた。此邊の海はクーク海峡から流來る潮流が驚くばかりの迅速であつた。そこで六日から七日へかけて、船は同海峡内を斜走して目的地に接近する方法を講じたが、遂に無効に歸した。

八日も亦た前日來の斜走を續行して辛ふじて目的地に近づくことが出来た。午前八時頃ペンカロー燈臺に並航して、サムス島燈臺を指して進入した。サムス島附近水路誌に據れば同島には檢疫所があると誌されてあるが、正午頃同島に近づくも、更に檢疫の模様が無いので直路ウエリントン港内さして進航した。午後二時頃に至り、檢疫の小蒸汽艇が我開南丸を目標けて近づいて來たので、直ちに錨を投じ各員は檢疫を受けた。幸にして船員中一名の故障者もなく、同二時三十分終了したので、再び錨を抜いて港内に向つた。此際檢疫船に白瀬隊長武田學術部長三井所衛生部長、

島事務長外一名便乗して先きに上陸した。開南丸は同三時四十分頃、港内西南部英國商船棧橋の附近に碇泊した。

此邊の風景は、洵に美で、久しく海上に怒濤とのみ闘つて居た總員の眼には言ふべからざる快感を與へた。海濱近き陸上には、教會堂らしき大建築物があつて、多數の青年男女の運動嬉戲するさまは、宛も人形のやうに見えた。電車も海岸まで通じて居る。

乗組員は甲板上に集つて、喜び勇んで陸上を指顧しつゝ語合つて居ると、同四時三十分頃、港務員が來船して、碇泊地を移すべく請求した。そのして其指定された碇泊地は英國軍艦コンピオン號の艦尾近き箇所であつて、此處に投錨を許されたのは、ウエリントン政廳の多大なる好意であつたことを後に知つた。

此夕英艦乗組員や新聞記者や港務官吏等の來訪が續々あつた。

翌九日午前八時、港務官來船し間もなく税關吏も來り、他に四名の來客





もあつた。今日政廳と領事官との命令によつて、開南丸を棧橋へ横付けにせよと云ふ事であつたが、種々都合もあることで、其命令に従うことを辭した。同九時三十分頃船長は税關、領事館、港務部等への用事と、船用の買物とを兼ねて上陸した。各乗組員も半數づゝ交互に上陸を許されることゝなつた。

上陸後船長は、石炭三十二噸、飲料水三十六噸、其他重要な船具購入の約束を了つて歸船した。此日は石炭飲料水などの積入で、船では非常に多忙を極めた上、更に領事館員や新聞記者等の來訪者が多數で、一々之に面會せねばならぬので、幹部連は品川出帆當時の多忙よりも、更に多忙であると云つて愚痴つた位である。

翌くれば十日は、一天拭ふが如き好晴である。彌よ明十一日には氷海指して出發する豫定なので、今日は十二分の休養をとるべく總員に交代の上陸を許した。領事館よりの通知によるに、前日白瀬隊長との打合せの通り幹部一同上陸せよとの事であるので短艇を艤して海岸に到着すると

わがめいよりやうじ  
我名譽領事ヤング氏は自動車を用意して一行を待受けて居た。一行は得意  
然として打乗ると、ヤング氏は自らハンドルを把つて市内各所の案内をし  
てくれた。領事館、公園、公會堂の三箇所には數多の貴婦人打集うて、一  
行に手篤き響應をして呉れた。又た會衆中の花の如き令嬢は、一行に勸め  
て庭球の競技を強いなとして款待してくれた。花の如き是等の美人と、赤  
道直下の炎熱に、眞黒々に焼付けられた荒くれ男とが、一つコートに相對  
球したのは、一種の奇觀であつた。凡て客を待遇することに就ては外國婦  
人は實に優れた手腕を有つて居る。到底我日本婦人などの遠く及ぶ所では  
ない。之が爲めに我一行は連日の辛苦を一掃し去つて、新に南征の勇氣を  
保つことが出來た。

きとしゃしんざいれう  
歸途寫眞材料などを買つて、市民の好意による特別無賃の電車に搭乘し  
て夕刻歸船した。此夜多數の學生が來船した。彼等は日中は日課の嚴なる爲  
め止むを得ず夜間の休暇を利用し來訪したのであると語つて居た。シドニ  
ー日本人會と、新西蘭北島に居る唯一の本邦人三宅幸彦氏とから、

我壯擧の成功と、一行の健康とを祈るとの祝電があつた。

二月十一日の紀元節、此好箇の記念日を以て、我開南丸は愈よ其目的とする極地向つて、ウエリントン港を抜錨する事に決した。母國の後援會から送金があつたので、午前八時三十分、白瀬隊長は、四五名の隊員と共に之を領收の爲め上陸した。同九時船は全く出帆の準備が整つた。此時領事から書面があつて、出發期を翌日に延期することは出来ぬか、出發の際は盛大なる送別式が催したいから、能ふべくば明日の日曜にしては如何との事であつたけれど、一行は瞬時も早く南極に達せんことを急務として居たから遺憾ながら其申込を謝絶する旨を答へた。すると第二回の申込に出帆は午後まで延期してくれよとあつたので、之は謝絶も出来ないので、承諾の旨を答へた。

正午から見送の快走艇は、陸續として春の野の胡蝶の群が、花を目蒐けて集ふが如く開南丸を取圍んだ。中には四百噸にも餘らむばかり



異様な四階造りの汽船もあつて欄干には綺羅を飾つた男女が歡呼しつゝ見送つて居た。總員は手巾を振り又は帽を振つて之に應へ、船は徐ろに錨を上げて出發した。やがて碇泊中の英艦の傍を過ぐるや艦内より『貴隊の無事成功を祈る』との信號があつたので、開南丸より『貴艦の同情を感謝す』との信號を返した。船が灣口を過ぐる頃から、天候は見るく不良の兆を現はし、波高く、風強く豫定の進航が困難になつた。

明けて十二日も、天は曇り、風位も不定で、船は南へ直航することが出来ないで斜走した。殊に不愉快なのは潮流の早いことである。十三日に至つて風力が餘程減じたので、専ら機關を使用して進航した。

十四日は、山成すばかりの波濤が殆ど間斷なく襲來して、船長をして多年の經驗中此くの如く大波濤を見たるが無いと絶叫せしめた程で、船體の動搖は甚だしきものであつた。

十五日に及んで、波濤の大波動は餘程減じたが、朝來非常なる濃霧が

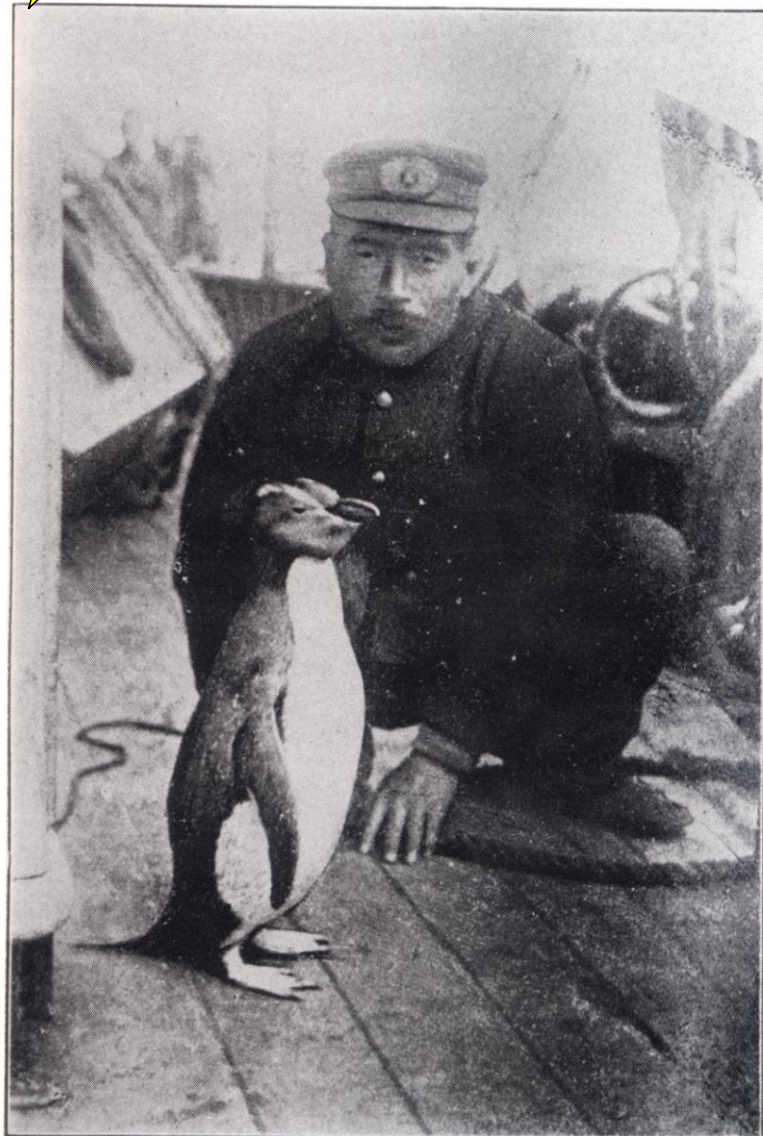
立ちこ立罩めたので、航海上昨日に優るの困難を感じつゝ、汽走を續けた。新西蘭碇泊中、元と一商船の船長を永年勤めて居たといふ某英國人から此沿岸の天候の概略を聞いたが、其人の話に據ると、西海岸の冬期には變化が多いが、東海岸の方は何時も天候が良好であるとの事であつた。併し事實は之に反して居ることを經驗した。

十六日は、空は曇つて南東の高大なる波動があつたが、乗員はウエリントンで買込んだ新鮮なる食品に舌鼓を打つた。風は餘程輕減したが、漸く順風となつたので目的地に向つて航走するに好都合であつた。

翌十七日の午前二時頃から、非常なる濃霧立罩めて打見る海上は白濛々たる世界と化した。船長は此状を見て、南太平洋の霧の豫想以上に深きことを新に經驗した。此頃に至つて天候の然らしむる所か、乗組員の中に頭痛に悩む者續出した。同八時三十分頃、海獸類に似たる水禽が船側を目標けて遊泳して來た。三井所氏は長竿の尖端に袋を着けて之を取押へた。熟々視ると、新西蘭の博物館で見たことのあるペンギン鳥に相違なき



翁天信の翔飛中雲



(擒生日七十月二年四十四治明)鳥ンーイグンベ、ーレドアと長關機水清

ことを確め得た。此鳥の姿は宛も人間が外套を着て立つて歩く如き風采で歩むのであつた。仍て直ちに船工に命じて鳥箱を作らしめ、之に食物を與へたが、一向に食はないので、麵麩を粉末になし、之を丸めて嘴口中に入れ與へた。

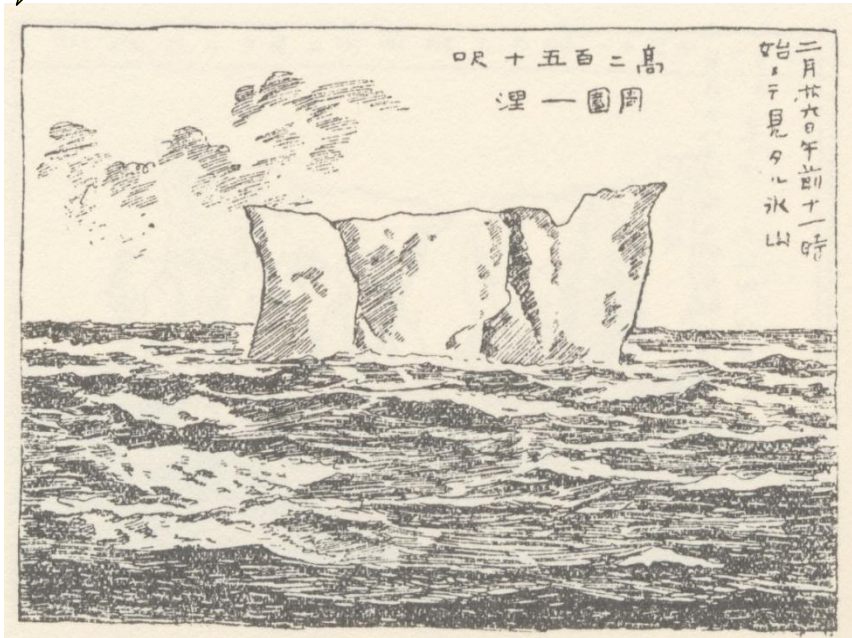
十八日は幸にも前日來の濃霧霽れて、半晴の澄める天氣となつた。海上東南の波動は相變らず、船體を動搖せしめた。此邊から寒氣が漸く強烈になつて來た。上陸隊員は此寒氣で、往くく身體を鍛へて往けば極地に向つた際に困難を感じることが少なくなるであらうなぞと云ひ合つた。

十九日は天候不定で、波動の高きこと前日の如くであつた。二十日は荒れ模様で、時々驟雨が來襲した。風位は北西で頗る強い、二十一日に至り、夜來の荒模様愈よ甚しくなり、波濤は益々狂怒し、船體は木の葉の如く揉まれた。午後には恐るべき三角波が來襲したので、船では急遽漂躡法を施した。

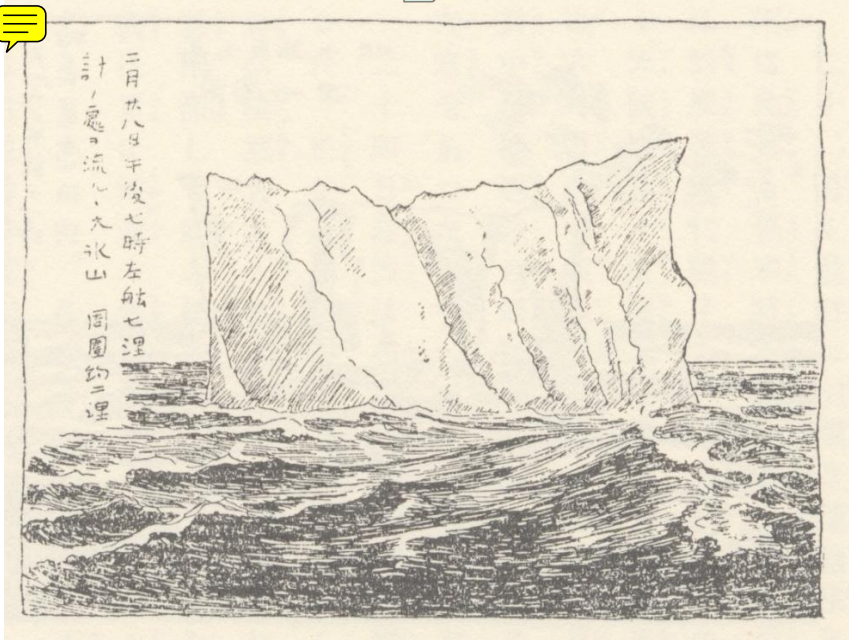


二十二日も前日に引續き漂蹶法を施しつゝ進航した。猛烈なる驟雨は此日も朝來時々襲來した。風位が突然變化するので、航海の困難は到底筆紙に盡すことの出來ぬものがあつた。而して二十三日に至り、天候は益々險惡となつたので、船員は極力避航安全法を講じたが、午後六時頃から俄然天候恢復の兆が見えたので、展帆して快進した。隊員中には檣柱の周圍を飛廻つて居る無数の信天翁を捕へんと工夫した者もあつたが、すべて徒勞に終つた。

二十四日激浪は相變らず高く、船體の動搖も亦た相變らず甚大であつた。正午近く晴雨計は急に降下した。而して午後に至つて天候は再び險惡となり、船は揉まれに揉まれつゝ、翌二十五日を迎へると、朝來風雨激しく船の傾斜は左右二十度を示すに至つた。午後に及ぶも天候は更に恢復の兆が無かつたが、時々飛雲があつて、半晴の狀を呈することもあつた。此夜一時半頃、中天の雲間に細き線狀を爲せる赤色又は白色の奇雲が現はれ、一消一現して美觀云ふべからざるものがあつた。



之と同時に我南極探檢旗に現は  
 してある南十字星が、南八十度  
 の高さたかに其燦然たる光ひかりを放はなつて居  
 る。又た三光星くわうせいを北五十度位どくらゐの高  
 さあをに仰あをいだ。  
 昨日なかつに引續ひきつづき二十六日にちも晴曇相  
 半なかばして、はつきりせぬ空模様そらもやうであ  
 る。風は餘程かぜ穩よほどをたやかになつたが、暴風  
 後の事こととて激浪げきらうは未だ全まく收おさま  
 らず、船體せんたいの動搖どうえう甚はなはだしく帆面はんめんへの  
 反動はんどうが激烈げきれつであつた。それが爲ため  
 に主帆しゆはん及びガフおよに故障こしやうを生しやうじて、  
 之これが修理しうりに手間取てまどつた。夕刻ゆふこくの六  
 時頃じごろ、始はじめて降雪かうせつに遭遇そうぐうした。



二月廿八日午後七時左舷七哩  
計ノ急流、大氷山 同圍約二哩

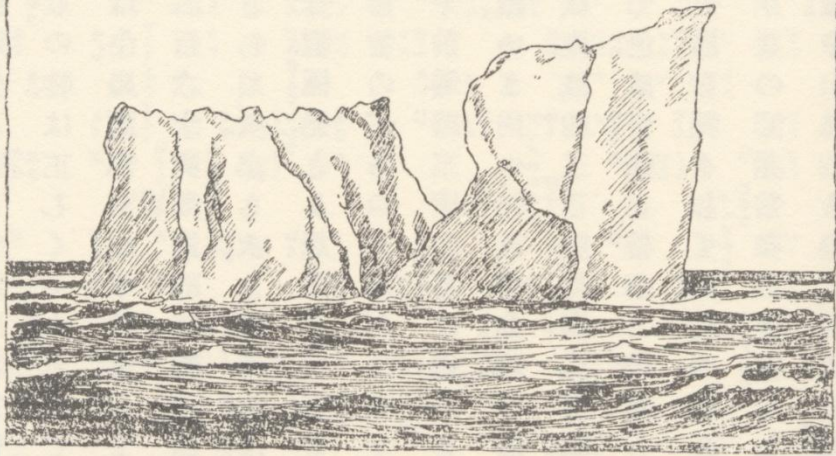
二十七日も亦た降雪で、海上の激浪も昨日に異ならぬ。正午から一層天候不良になつて、霧雨を催ふし、寒威が一時に加はつて來た。船員等は何時流氷に逢ふかも知れぬと、各々深き注意を海上に拂つて居た。

二十八日の天候は夜來の霧雨で加ふるに北西の風強く、險惡な日和であつた。船の動搖も昨日の如く烈しく、船尾から逆巻き來る怒濤の爲めに、備附の寒暖計一箇を破壊流失せられた。帆は半ば以上





三月一日午前十一時半石船西三方見ル大氷山



減じて、多くは汽走によつて、南進した。進むに從つて寒氣は益々加はるので、常に流水に注意を怠らず拂つて居た。折しも左舷甲板側に當つて、前方の航路に白色の島嶼とも思はるゝ物を發見した。次第に近づき進むと波濤の爲めに破壊されたる二三の小流水に出遇つた。之が我開南丸が流水に出遇つた抑々の初めであつて、時に午前十一時四十分であつた。此時海水温は非常に降つて来たので、前方に見ゆる島嶼状の物は、慥かに氷山であるといふ

斷定を下すことが出来た。やがて、午後零時四十五分に至り、曩の島嶼状の物は正しく一大冰山であることが、更に確實に判明した。其形状は牛の頭部を水中に没して、背部のみを海面に現はしたやうで、高さ約二百六十呎、周圍約一哩位あらうと思はれた。此日は此大冰山を最初として、次から次と、續々大小の冰山や流水に出遇つた。此夜九時三十分頃極光とも思はるゝ光を認めた。其状宛も探海燈の光の薄いやうなものであつた。

一日午前零時三十分、再び極光を見た。其光景は宛も花火の様であつた。續いて同一時五十分、昨日出遇つた物に優る大冰山に遭つた。其冰山は高さ約三百呎、周圍は三海里にも達すると思はるゝ様な雄大なる姿で色は青味を帯びて居た。船で之を注視して居ると、冰山は右に左に位置を轉々して動ともすると船體に衝突するかの如き危険が生じさうなので非常なる警戒をして居つた。併し冰山の流るゝ速度は頗る緩やかなるもので、潮流に乗じて流れて來るのであるから、注意さへ怠らなければ、

大抵の場合には危険を避けることが出来るものである。此附近の潮流は、幾條もあつて、すべて針路は東北方に向つて居る。

午前八時頃から海上一面の濃霧となつたので、見張番の當直者は、一層流水に注意を拂はなければならぬことゝなつた。之に加ふるに午後から飛雪霏々として來り晴雨計は頗る險惡の兆を示した。此日出遇つた重なる大氷山の數は四個である。

前日來の降雪は翌二日に亘つて降りしきり、時々疾風が吹起つて、時ならぬ吹雪となるので、船は名狀すべからざる困難を感じ、船員等は甲板上の積雪を掃去る作業に多忙であつた。又時々激浪が甲板上に打揚げるのは物凄くもまた怖ろしい。

此日遭遇した大氷山の數は三箇であつたが、すべて氷山に出遇つた場合は汽力風力を巧みに利用して、注意深き避航を以て進むことにして居た。

三日も朝から雪で、非常に寒く、甲板上は一面に氷結した。船では雪





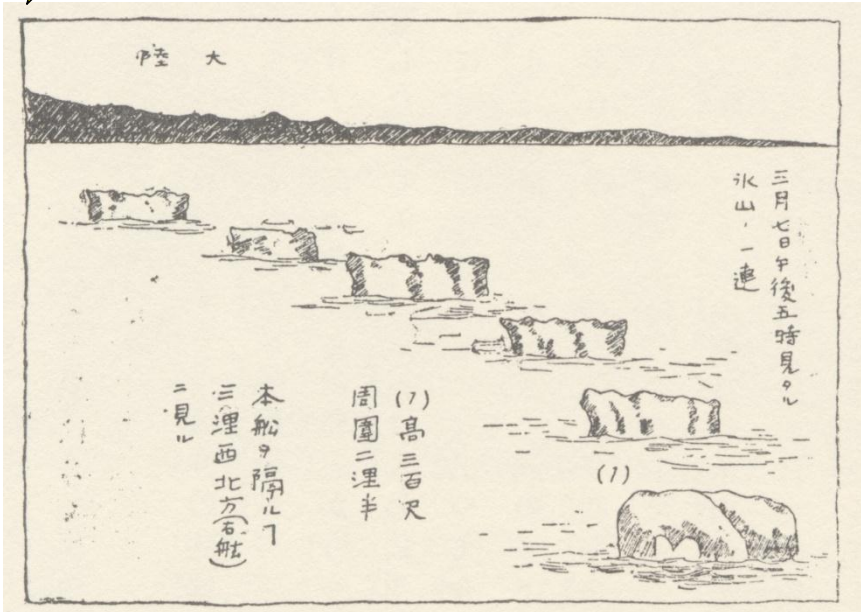
の途斷とたえた間まを見て天測てんそくを行おこなうた。夜よの八時じ三十分ぶん、風位ふうゐが順調じゆんてうになつたので機關きくわんを停とどめて帆走はんそうした。

此日このひ出逢であつた大氷山だいひやうざんの數六箇小氷塊こせうひやうくわいは無數むすうであつた。

翌四日よくの午前零時ごぜんれいじ二十五分船首ぶんせんしゆに當あたつて、一大氷山の浮動ふどうせるを發見ほつけんした。之これを避さける爲ため、急遽機關きうきよきくわんを使用しようして、摺違すれちがひながら之これを檢けんするに、水面上すゐめんじやうに現あらはれたる高さ三百呎びやくふいとしう周圍まいるは二哩程ほどもあつた。

五日午前十時頃かごぜんじごろ、巨大なる鯨くじらの群むれが、無數むすうに氷山ひやうざんの間に集しうがふ合あして居あるのを發見ほつけんした。其壯觀そのそうくわん、實じつに形容けいようの辭じなき程ほどであつた。午後ごゝに至いたつて又またもや雪降ゆきふり出だし、寒氣かんきは一層強そうつよくなつた。夜よの九時頃極光きよくゝわうを見たみ。此日このひも大氷山だいひやうざんには數知かずしれぬ程遭あつたが、今日こんにちまでの經驗けいけんにより其危そのきけん險けんに對たいする心配しんぱいは餘程薄よほどうすらいで、却かへつて其莊嚴そのさうげんにして凄壯せいさうなる光景くわうけいに對たいして實地じつち其境そのまきやうに臨のぞまなければ、逆とても想像さうぞうだに及およばぬ底ていの壯快さうくわいを味めふやうになつた。

六日かは午前ごぜんから半晴はんせいとなつた。昨日きのふからの測量そくりやうによつて、船ふねは南極なんきよく



大陸に餘程接近したことが解つたので若しや陸影の目に入ることもやと瞬時の油断なく行手に注意をして居た。すると午前五時過に至つて東南東約四十海里の邊に、雲の如く又山の如く見ゆる白皚々たる陸影を發見した。此時總員は連日の疲勞を打忘れて踊り狂はむばかりに喜んだ。

次第に近づくに従つて陸影は、峨々たる白色の高山脈の連亘で其高峰の中には、一見富士山位のもので多數であつた。其外觀は尖つた摺鉢を伏せたるが如き有様を

なして、天に聳えて居る。打見たる處草木の繁茂せる状は少しもなく、僅かに山麓とも思はるゝ斷崖絶壁の處に、黑色の點々を見得るだけで、満目只一白である。

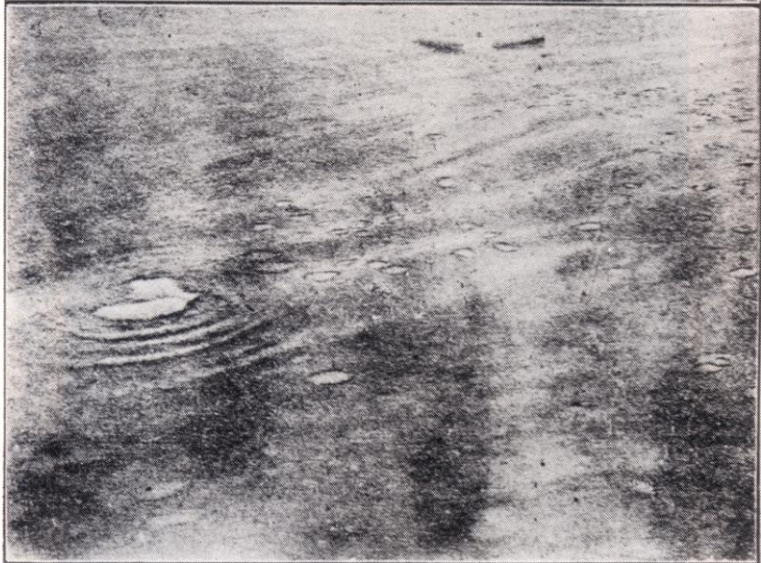
一行の目的とする南極洲の陸地は、愈よ目前に近づいた。今日まで或は狂瀾と闘ひ、或は暴風と戦つて、幾千海里の烟波、一百日に垂んとする日子、此間の苦心と困難とが今や將さに酬みられんとするの時期に達したのである。隊員は爲めに勇氣百倍して、未だ錨をも卸し得ないのに、早や諸般の準備に取掛つて、今にも上陸せん心組で居た。

此處は南ヴェクトリア洲のアドミラルチー附近に當るのである。

七日の午前一時三十五分、我開南丸と並行して大氷山が流れるのを認めた。其高さ約二百五十尺位で周圍は二哩とも思はれる位であつた。此外にも大小無数の氷山が流れて居た。其氷山の頂上に降り積つた雪が、烈風に吹き捲かれて、其附近の海上一面は、宛も白烟の濛々として立罩めたるが如き壯觀を呈して居た。午後五時、ベルカー山の附近に、六箇の大氷山



長部 衛 學 田 武 と 長 船 村 野 の 上 板 甲 丸 南 開



(影撮日八月三年四十四治明)水幼しせ生發に上海に前るすとんら凍く如の葉蓮に將



(影撮日十月三年四十四治明)氷の形葉運しせ生發に面全上海



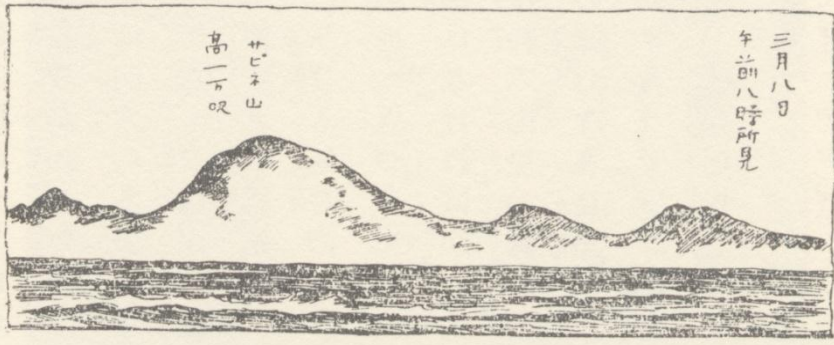
の浮んで居るのを見たが、それは殆ど品川沖の臺場を見るが如き形を示して居て、上部は平坦であつた。其等の冰山の中には、洞穴のある物もあつて、其洞中に波濤が出入して居る様も見えた。

折しも、夕陽が南極の山に映じて、是等の冰山を彩つた光景は、話に聞く仙境とは、恁んな美景を云ふのであらうと思つた。

八日も連日の如き無数の冰山氷塊の漂流するのに遭つた。冰山は極地へ近づくに従つて、全然其形が小さくはなるが、併し十分の注意を拂はなければ頗る危険である。午前六時頃チヨレット・ポイントの陸岸約六海里の處に接近したが、風位が思はしくないので、船は斜走するの止むなきに至つた。やがて、一箇の島影が眼界に現はれた。それはポツセツション群島であつて、其數は六箇より成り、北より南に向つて、殆ど整列の形を成して居た。其傍を進航しゆくと、又も氷塊氷盤の海に出た。

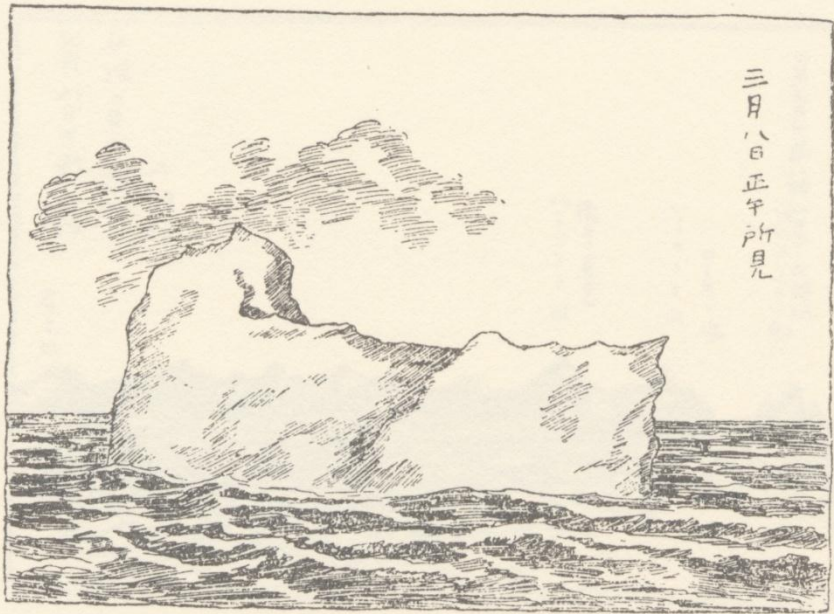
翌九日午前三時頃夜が明け離れ、風は順調に復したので、増帆して進





航した。同八時三十分前後から、海上全面凍結しつゝあることを認めた。初めは小形の蓮の葉の如き物であるとき居るうちに、それが次第に海面に擴がつて行くのである。そこで、船は成るべく結氷の少なき方向を選んで南進した。此時右舷前方に當つて、雪に掩はれしコールマン島を見た。此島は可なり大きい島で、中央に山とも思はるゝ突起した場所が二箇所ばかりあつた。此邊で特に驚くべきことは、一羅針盤に狂ひを生ずる事である。此日は終日結氷しつゝある、海を右縫左航しつゝ困難を極めた。

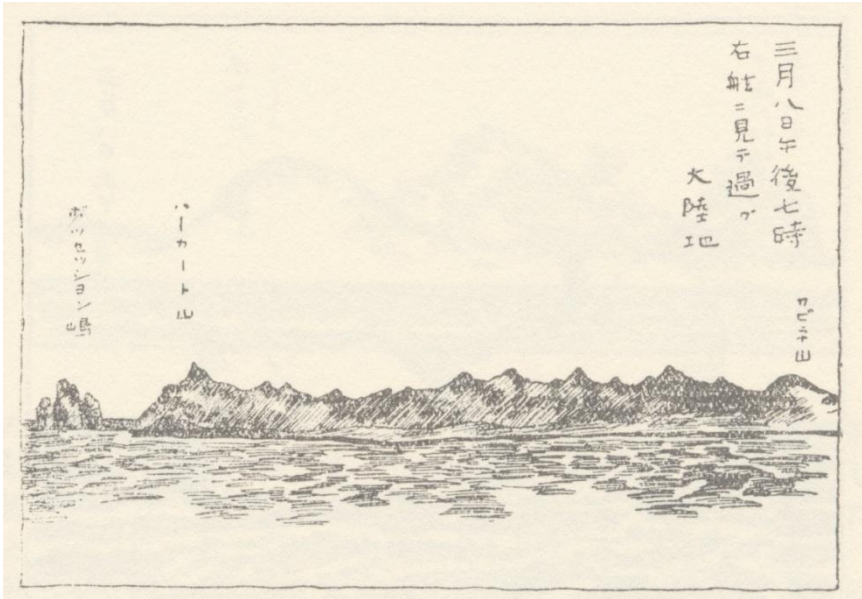
十日は概して半晴であつたが、又時に降雪を見た。海上の波濤は高く、結氷海に於ける船體の動搖と其危険とは、名狀し難きものであつた。



三月八日正午所見

とく かに せう  
 特に風が逆風であつたので、斜走  
 して進航する外はなかつた。船員  
 等は注意に注意を加へて、結氷の  
 模様、羅針盤の錯誤等の研究に多  
 忙を極めた。

はじめはす  
 初め蓮の葉を水面に散らした如  
 くに見える直径一尺厚さ一寸許  
 の結氷は次第に方二間位もある  
 氷盤と爲つて、海面上に流れるの  
 であつた。南緯七十三度二十六分  
 の海上に於ける測量に據れば、結  
 氷の厚さは五吋乃至一呎餘とな  
 つて居た。それが見亘す限の海上  
 に張り詰めて、動ともする



三月八日午後七時  
右舷ニ見テ過ル

大陸  
エ

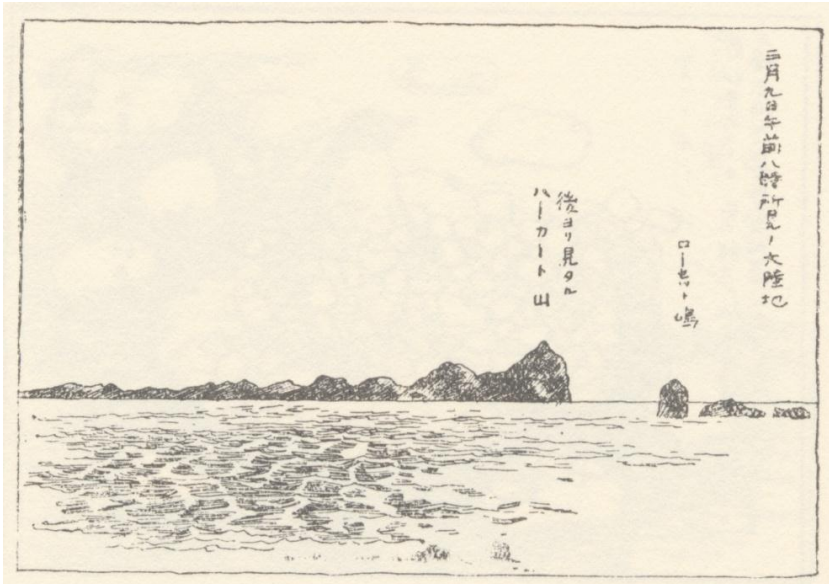
ワシントン

ハイカートル

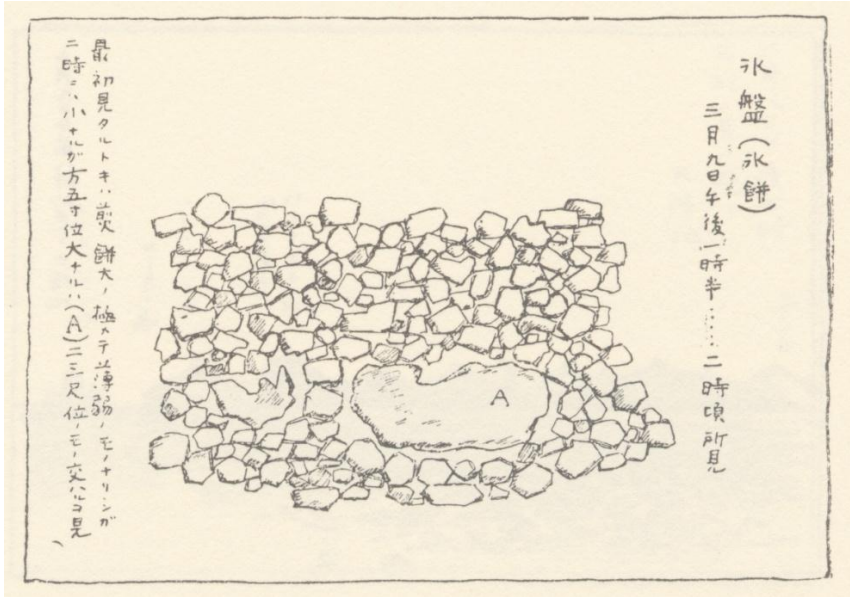
ボッセツシヨン島

と船の進航力を失はしめんとするに至つた。之から以南は一面の結氷なることを發見したので、全く航路を變じて、他の方面から目的地點に進入せんと試みた。其結果午後五時三十分頃に至つて、辛ふじて、結氷の厚き場所を離れることが出来た。此日は二回迄も氷結の爲めに、船は進航力を失つたのであつた。

夜來の降雪未だ歇まず、十一日午前中雪であつた。船は天候が險惡なので、結氷海の附近を航走しつゝ、天候の恢復するのを待つて居た。

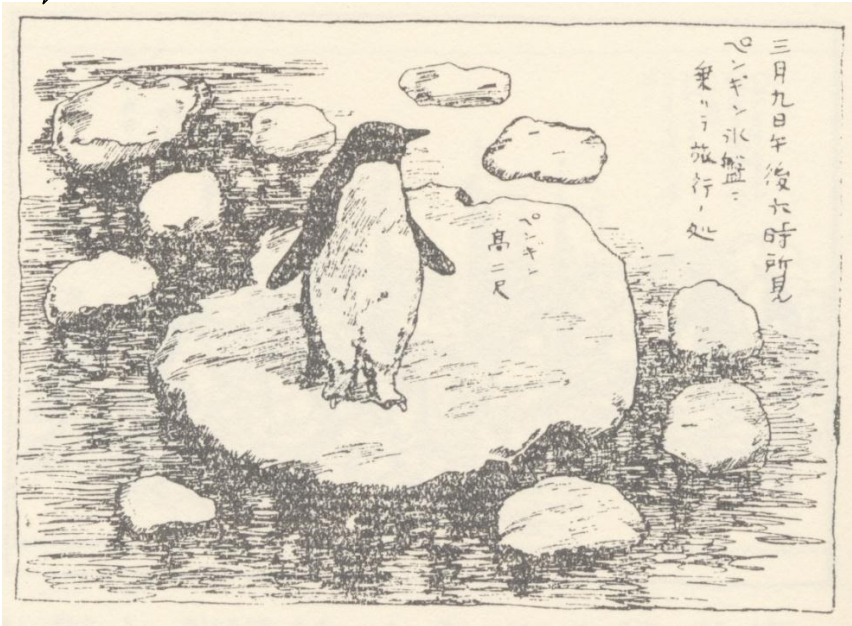


さいはひ  
 幸にして正午近くから波濤も鎮つた  
 ので、警戒を嚴重にしつゝ、船首を南西  
 方に向けた。午後二時三十分頃に至つ  
 て漸く船を目的の方面に進めること  
 が出来た。其後の海上は、到る處すべ  
 て氷結で、船はそれを破碎しつゝ進航  
 したけれども、氷の厚き爲めに數次航  
 走力を失ふのであつた。此邊の氷上に  
 は南極名物ペンギン鳥の群が無數  
 に居た。又た、海獣も此處は我黨の王國  
 であると云はむばかりに遊び集うて居  
 た。

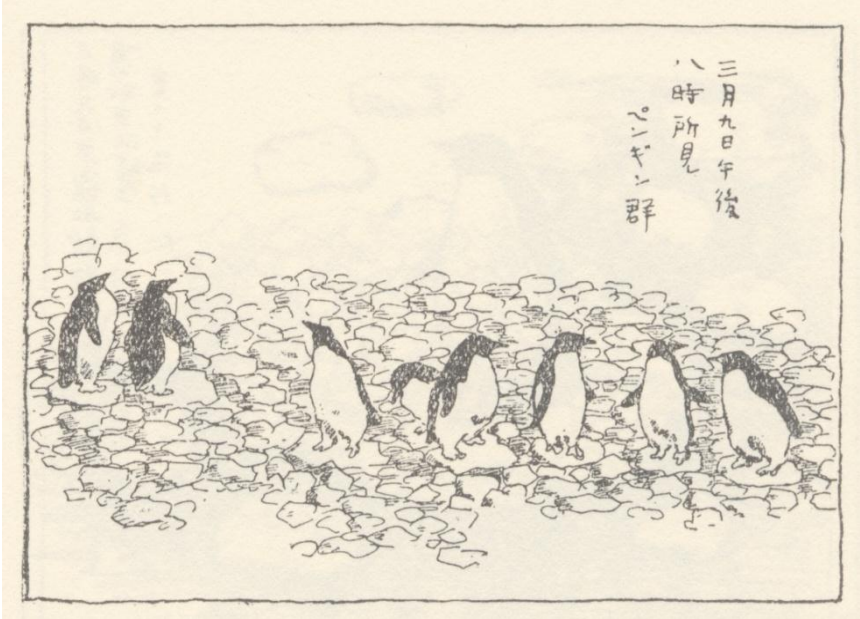


午後六時頃幸ふじて結氷海を離れることが出来たが、降雪粉々咫尺を辨ぜぬやうな有様なので、少なからぬ困難をした。今は偏へに天候の恢復を祈るの外は無。

翌十二日も前日と異らぬ降雪で、且つ時々不定の強風が吹いて、船員の作業を妨ぐることが夥しかつた。此邊の天候は瞬間に轉々變化して、海上生活に慣れた船員も、少なからぬ苦楚を嘗めた。正午頃船は結氷の最も厚き場所に乗入れた。此處は南緯七十四度十六分、東經百七十二度



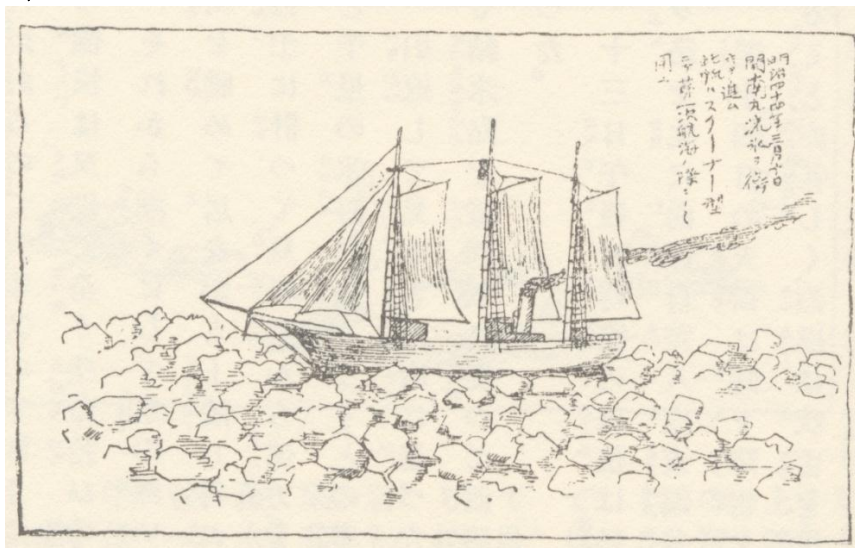
零七分の地点で、悲しい哉我南極探  
 検船開南丸の第一次南征航海に於て  
 達し得たる最南最後の緯度であつた。  
 最初海面は一面に凍結しては居た  
 が、然しそれ程に氷が厚くないので、  
 船首で突破つて進んで往くと、其度  
 毎に碎氷の響がガツガツと傳つて  
 何となく不快である、然しそれにも  
 屈せず進んで、往くと、廳て結氷は  
 増して約一尺に達した。船は憶せず  
 此堅氷の中をも進むに、氷は裂けて  
 兩側に白き堤防の形を爲す。



一面の海上見渡す限銀色皚々、宛も湖水の結氷の如く、波無くして平坦なる有様である。けれども往ける丈は往かんと、尙も船を進めた所、竟に帆力は素より汽力を以てするも効を奏せず、ハツタとばかり停船するに至つた。見れば今や氷の厚さは増して二尺に達して居る。

このとき  
此時フト振返ると、元來し方は砕氷で兩岸を爲し、高堤を築いて居るが、それが又海上に浮き出し流れて居る。何れは又凍結して終ふらしい。斯くては出入の航路を閉塞さ





され氷海中に立往生せねばならぬ事と爲るから、頗る危険と見て取つて、急ぎ船首を廻すことにした。

この船首を廻す時の苦心は、一通りや二通りではなかつた。船員隊員總掛りで非常の苦心をした。何分にも機關は小さいから、船體を後退らせる譯にも往かず、ホトク閉口した。

辛つと堅氷を碎きながら風下の方へと船首を向けた。そして進むと、氷片が船に觸れて高音を發し、船體の損傷は免れぬかと思はれたが、時期を失しては閉塞されて終ふ虞れがあるので、

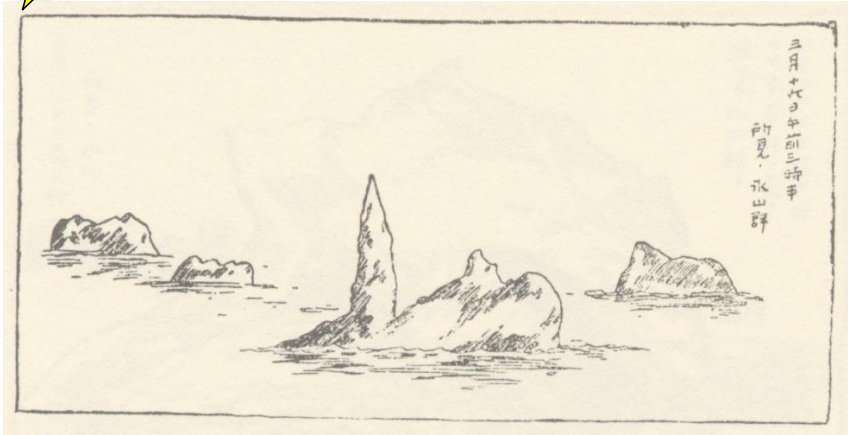
大辛苦だいしんくの末漸すゑやうやく危地きちから脱出だつしゆつする事が出来できた。その時の愉快ゆかいは又別またべつで、全まったく生命いのち拾ひろひの感かんがあつた。

それから漸やうやくにして氷こほりの無い處ところまで逃にげ出したが、さて目前もくぜんに南極なんきよくの山やまを眺ながめて居あながら上陸じやうりくし得えぬと云いふは、如何いかにも殘念ざんねんの至いたり一等とううんてん運轉士しに計はかつて、見張臺みはりだいから遠方ゑんぼうを視察しさつさして貰もらつた所ところ、一望ぼうたゞ只氷界ひやうかい！殆ほとんど千里りの氷野ひやうやの如ごとくなりとの事ことである。遺憾ゐかんは言いふばかりもない。



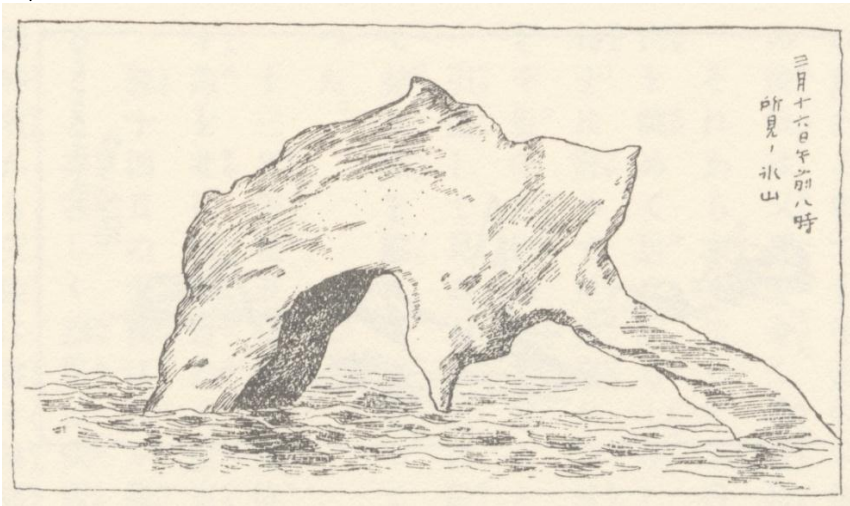
引返ひきかへして見みると、氷海ひやうかいに居をつた時は波立なみたたず頗すこぶる平穩へいおんであつたが、さて結氷點けつひやうてんを離はなれるに従したがつて波濤はたうも烈はげしくなり、船體せんたいの動搖どうえうも激はげしくなつた。十三日にちじう午後五時ごじ頃の風位ふうゐは殆ほとんど東北東とうほくひがしに變かはつて居あた。そこで羅針らしんしんろ々路ろを北きたに向けむ、自差じさ八度東偏差どとうへんさ四十八度東じゅうはちだうとうを指さして航走かうそうした。

翌よく十四日の天候てんこうは、時々降雪じゝゝかうせつを催まよふして、海上かいじやうの波高なみたかく、甲板かんばんの氷結ひやうけつすること亦甚またはなはだしく、烈風れつふうは吹雪ふぶきを送おくつて困難こんなん云いふばかりなかつた。午後四時ごじ頃ころから天候てんこうは益々ますます險惡けんあくとなつて、觀測くわんそくによると當分たうぶん恢復くわいふくの見込みこみも



なく、今は全く絶望するに至つた。南極洲上陸の目的を抱いて、遙々氷海を渉り、幾多の艱難を排して来たが、目的の地点に上陸するの希望が絶えた。殊に昨今は、南極圏では夏期を去つて段々寒さに向はんとして居る時期であるから、逡巡して居ると忽ちにして船が氷に鎖れる憂がある。即ち若し一たび氷に鎖れたが最後、冬季間は到底其處から脱出することが出来ない。又其鎖氷中に於る船體の損傷などを考へて、進むべきか將た引返すべきかの議題に就て、午後八時幹部會議を開催する事になつた。

處が此會議の席上では、誰一人口を開く者もなく何れも落膽失望の色に沈んで居

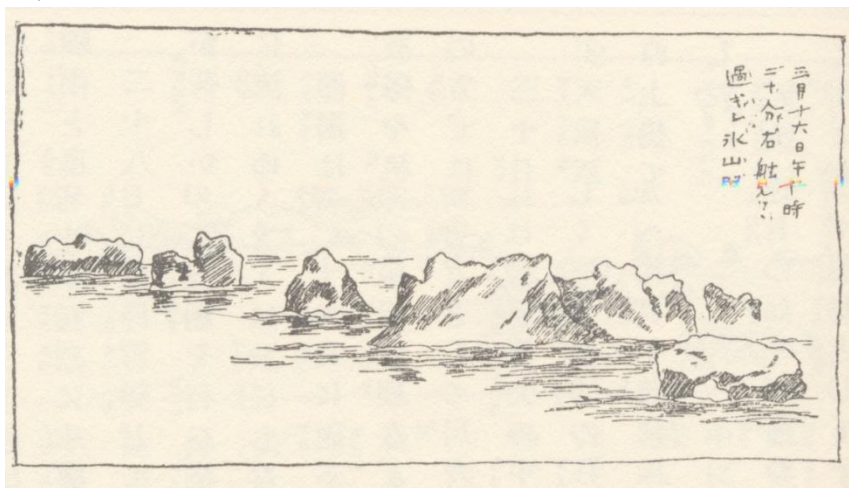


三月十七日午二時八時  
所見、氷山

たが、結局遺憾ながら一たび船を濠洲シド  
ニ一港に引返すことに決議した。

翌十五日は昨夜の決議に従って、船首を  
濠洲の方向に轉じて、歸港を急いだ。此日も  
吹雪の烈しい不良の天候で、且つ大小無數  
の氷山水塊は船の進路を妨げた。乗組員等  
は終日船尾の甲板に集つて、目的地たる南  
極洲を眼前に見ながら、上陸の出来なかつ  
たのは頗る残念であると、一同天を仰いで  
長嘆したのは、無理ならぬ次第である。

十六日から十七日へかけても、亦た連日  
の如き流水波濤と闘つた航海であつた。十  
七日の黎明に月光の現はれたのを見たが、  
之が南氷洋に入つて以來始めて仰いだ



三月十六日午下時  
二十人右舷先、  
過ギレ氷山

月であつた。周囲の群氷に映ずる月光は、宛も白晝の如くであつた。此日の午後から天候は益々險惡となつて、激浪の爲めに船首のジップ・ブームを挫折されたが、直ちに應急の修理を施して航走した。

十八日から二十四日までの天候は、概して不良で、吹雪あり。高浪あり、氣候の激變あり、又た流氷の危険などがあつて、航走に非常なる苦心をしたが、二十五日に至つて、天候は依然として變りがないが、風が順位に復したので減帆して走つた。此日も降雪があり、時々猛烈なる驟雨の來襲があつた。

二十六日には稍や天候が良好になつたが翌二十七日には再び變じて險惡の兆を

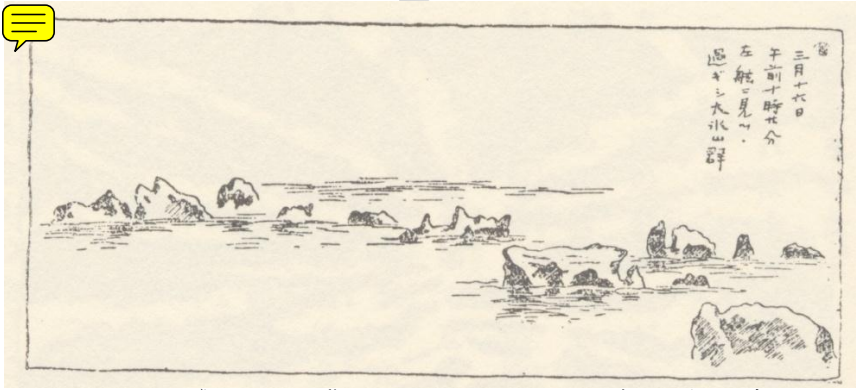
呈し、四十呎もあらうと思はるゝ激浪が、船體を弄び、又た過日來の如き驟雨と風雪とが猛烈に來襲した。

二十八日には降雪變じて強雨となつた。怒濤の爲めに船體の動搖が甚しいので、漂蹶を行ひ、測程器を引揚げて、船が東北東の方向に自然に流れゆくまゝに放任した。

漂蹶は翌二十九日に至るも撤することが出來ず、又た船員は船體の故障や帆布の破損修理などに眼を廻すほど多忙を極めて居た。隊員の方では讀書などして居た。

三十日には薄き極光の中天に出現せるを見た。三十一日は相變らず天候悪しく、海上波濤の狂亂の爲めに十分の航走をすることが出來ぬ上、搗て加へて其午後には烈しき降雨があつて、海上暗愴の光景を呈した。

天候は連日の如くであつて、四月一日の午後まで續いた。それから二日に至つて忽焉として一天拭ふが如く晴れ渡り、風力も亦た微弱な

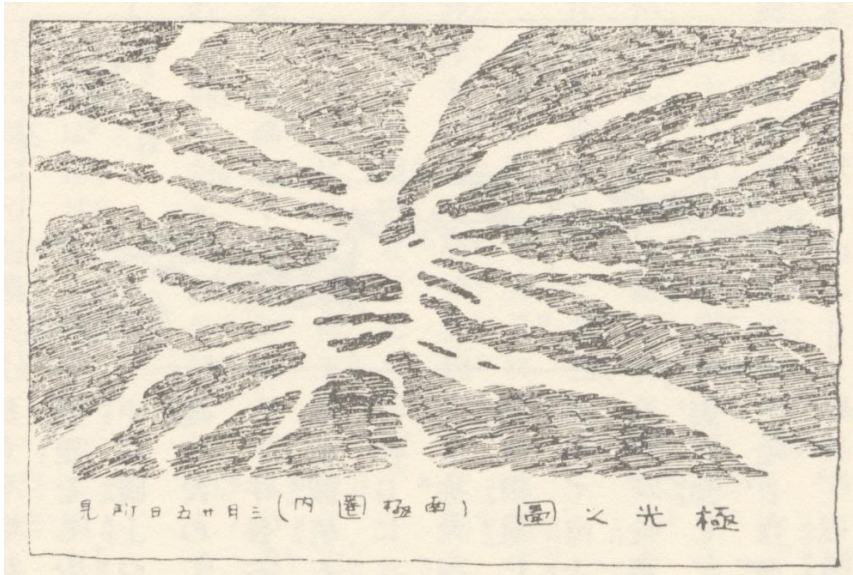


三月十六日  
午前十時  
左航三見  
隠岐大津山洋

がらも順位じゆんゐに復かへしたので、全帆ぜんはんを張はつて快こころよき航かう走さうをした。翌よく三日未明みめいに雨あめがあつたが、午前中ごぜんちゆうに晴はれ上あつた。平和へいわなる海上かいじやうに神武天皇祭じんむてんのうさいを迎むかへたので、船員等せんゐんらは作業さげふを休やすんで祝意しゆくいを表へうした。午後六時頃ご、じころから再びふたたび天候てんこうは險惡けんあくとなつたので減帆げんはんした。

四日かには午前中ごぜんちゆうから非常ひじやうな大雨おほあめがあつて、風位ふうゐも亦また逆風ぎやくふうと變かはり、殊ことに濃霧のうむなど生しやうじて航海かうかい頗すこぶる困難こんなんになつた。而しかして翌五日よくにちから六日にちへ掛かけて、海上かいの波動はどう高たかく、又またた濃霧のうむも續つづいて立たち罩こめた。此邊このへんには信天翁あほうとりが群集ぐんしゆうして居ゐるので、短艇ボートを卸おろして狩しゆ獵りやうを試こころみた。

七日かは概がいして半晴はんせいであつたが、時々とき々く濃霧のうむが起おこつた。風力ふうりよくは少すくなかつたが順位じゆんゐであつたので



増帆して進むことが出来た。八日から九日へかけて降雨時々来り、海面の波濤も高かった。野村船長の観察によると此邊は南太平洋中でも航海上最も危険なる所であつた。されば風位の變轉することが多く、船體は潮流又は波濤の爲めに流さるゝことが數次であつた。十日の夜は晴れて、月明かに星稀に、測量も思ふやうに出来たが、此頃風位波濤の爲め多く石炭を消費したのが、幹部での心配の種であつた。午後七時頃船首索具に故障を生じた。間もなく殷々たる雷鳴轟き渡つて大豪雨



となつた。

明あくれば十一日いちにち、半晴はんせいの天氣てんきとなつて、時々驟雨ときどきぐスコールの通過つうくわに遭あうた。十二日にちから十六日にちへかけては、天候てんこうは半晴半曇はんせいはんどんで、時々驟雨ときどきスコールの來襲らいしゅうと猛烈もうれつなる波浪はらうの動搖どうごうとがあつた。十六日の午後ごごのこと、船首せんしゆの外板一枚ぐわいはんまい、怒濤どたうの爲ために、破損はそんして居ゐたのを發見はつけんした。此日柏鳥このひかしとりに似にた黑白斑こくはくはんの海鳥かいてう一羽はを射擊しやげきしたが、海中かいちゆうに落おちて其姿そのすがたを見失みうしなつた。

十七日にちは何事なにごともなく、翌よく十八日にちの午後六時頃ごごろ、赤白交せきはくまじりの美うつくしき小鳥こどり一羽は、甲板かんばんじやう上に舞來まひきたつたので、船長せんぢやうは生擒せいぎんして大切たいせつに飼育しいくしたが直すぐ死しんで終しまつた。此鳥このとりは多分たぶん新西蘭ニウジラントから迷まよひ來きたつた者ものであらう。此頃このごろは毎日まいにち信天翁あほうどりや其他そのたの海鳥類かいてうるゐの射擊しやげきなどで、乗員じやうみん一同どうは大おほひに興きようじて居ゐた。

十九日にちの深夜しんや、甲板かんばんに立たつて居ゐると、久振ひさしぶりに南十字星みなみじせいの青白あをしろき光ひかりを船ふねの現在げんざいの位置みちの眞上まうへより、少すこしく南方なんほうの空そらに仰あをいだ。

十八日にちから二十二日にちまでは、天候てんこう概がいして同一どういで、船内せんない無事ぶじべつ別に誌しるすべきこともなかつた。二十三日にちは日曜にちえうの事こととて、船内せんないの掃除さうじよを終をへると

休業きうげふした。驟雨スコールは時々とき來襲らいしゆしたが、良風りやうふうゆる愉快ゆくわいに航走かうさうすることが出來た。  
此日このひ土屋運轉士やうんでんしが、信天翁あほうどり一羽はを射留あとめて、それが海中かいちゆうに落ちたのを認め  
て渡邊水夫わたなべすゐふが、それを捕とらふべく拔手ぬきてを切きつて海中かいちゆうに飛込とびこんだ處ところが、船ふねとの  
距離きよりが餘あまりに遠とほざかつたので、歸船きせんするのに甚はなはだ困難こんなんらしく見みえたので、  
木片もくへんに綱つなを付つけてそれを船ふねから海中かいちゆうに流ながし、乗員じやうゐん總掛そうがりで渡邊水夫わたなべすゐふを引揚ひきあ  
げることが出來た。

二十四日かの正午しやうごから天候てんこうが不良ふりやうになり、午後ごご二時じ頃ごろには猛烈もうれつなる降雨かうりゆうが  
あつて、ジブシートせつだんが切斷せつだんされた。此夜海上このよかいじやう一面めん燐りんの如ごとき光ひかりを放はなち、云いふ  
ばかりなき美觀びくわんを呈ていした。定めし魚族ぎよぞくの一種しゆが放はなつた光ひかりなのであらう。  
二十五日にちの夜よも亦また燐光りんくわうの流ながるのを見みた。其大そのだいなるは三呎フイット位ぐらゐ小せうなる  
は五吋位インチぐらゐであつた。土屋氏つちやしは其一尾そのひを捕獲ほくわくすると、それが水母くらげの一種しゆであ  
ることが解わかつた。

二十六日にちから二十七日にちへかけて、豪雨疾風迅雷がうりゅうしつぷうじゆんらいの三大敵だいてきが、鋒ほこを揃そろへ

て襲來したので、我開南丸は宛も木の葉の如く、翻弄せられた。二十七日の午後に至つて餘程靜穩に歸したが、宛も遙か水天髣髴の間に、濠洲の陸地が、雲烟を隔て、其姿を現はした。

二十九日は半晴の天候で、驟雨の來襲は時々あつたが、順風ゆる帆走上頗る都合が良かった。前日來風雨の折に飛込んだものか、甲板上で見廻りの者か、二尾の飛魚を拾つた。これを調理して久振に一同は生魚の臭を齧いだ。

三十日は略ぼ前日と同じ天候で、愉快に航走することが出来た。午前八時頃濠洲の東海岸が見えたので、乗員一同は久方振に陸影を前にし、嬉しくも亦た悲しく感じた。

翌五月一日午前四時頃、風位が突然南に變じたので、針路を北西に向け航進した爲め、濠洲東海岸の山姿が何時しか視界から消えた。仍て、種々工夫して、時辰儀の遲早に差異があるものと思ひ、兎に角機關部に命を傳へ、汽走帆走の全力を傾けて、シドニーに當る方向へ急駛した。



すると正午頃我開南丸と同じ位の汽船が突然行手に現はれたが、やがて近づいて『沖合で一隻の帆船を見受なかつたか』と問ふ。否と答へると今度は『貴船若しシドニーに入港するなら、曳船しやうではないか』との相談であつたが、開南丸は汽走力があるから其必要が無いと云つて謝絶した。濛氣で前方が模糊として居るが、此汽船の來航に卜して、シドニー港は正しく船首に當つて居ることを確めたので、船長は乗員一同に入港準備を促した。

斯くて、諸帆を收め、専ら汽走を以て港口に到つた時、水先案内船が來て居た。依つて導かれて、午後三時四十分、檢疫の終了と共に、開南丸は、シドニー港内ダブル灣の海深四尋半の場所に碇を卸した。

開南丸甲板の上結氷破壞(明治四十四年三月九日撮影)



開南丸甲板結氷光景

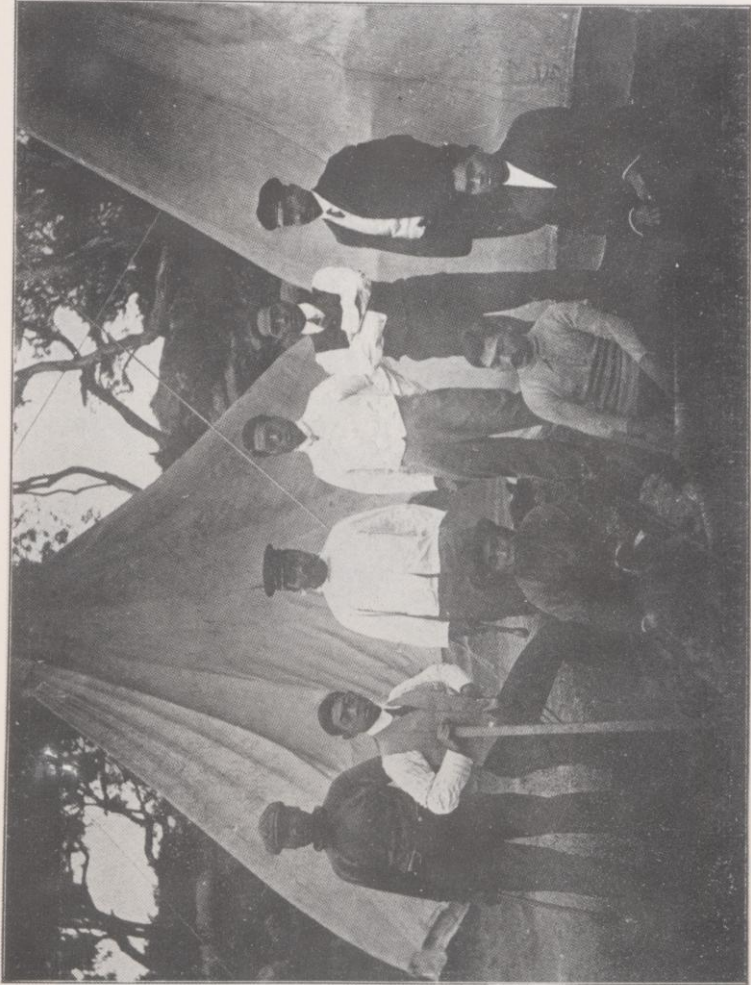
明治四十四年二月二十八日撮影



右上方より第一航海のみに従事せし丹野一等運轉士佐藤高夫取火浦三夫



前列向つて左より白根隊長、西川隊員、渡邊隊員



後列向つて左より山邊大尉、村松隊員、花守大尉、武田學術部長、吉野隊員、三井所衛生部長

員 隊 と 長 隊 の 中 活 生 營 露 ー ニ ム シ ド 洲 瀛

## 第八章 濠洲シドニーの露營生活



南極洲の山姿陸影を認めながら群氷の爲めに前進するを得ず、恨を呑んで空しく濠洲シドニー港へ引還して來た開南丸は、明治四十四年五月一日無事同港へ投錨はしたが、困つた事には、此地は例の排日思想の盛んなる場所である。同地の官民は種々猜疑の眼を以て我が探検隊を眺め始めた。殊に同市のサン新聞の如きは我南極探検隊一行を誤解し『隊長以下隊員一同は何れも豫備軍人にて、名を南極探検に籍るも實は此の地に何等かの野心を有する軍事的日探である。宜しく上陸を拒絶して、萬一の危険を保障すべきだ』など、途方も無い論説を掲げたのである。

すると他の新聞紙も之に雷同し、種々誤解を含める漫畫などを掲載し始めた。同地の陸軍は神經過敏にも、要塞の警戒を一層嚴重にすべ

く哨兵を増加するなどの事も演ぜられたのである。

併し本来誤解であるから、同地駐劄の齊藤總領事を始め、領事館員、及

び日本人會員諸士の斡旋により、同地官憲との意志こゝに疏通し、漸く八

日に至り、濠洲聯邦政府から左の如き通牒を接受することが出來たのであ

る。

濠洲政府は、今回當港に來着せられたる日本南極探檢隊の上陸に關し、

別に何等の制限を附せず、且開南丸在港中は公船と看做し、定規の課税を

爲さず。(寫)

斯くて開南丸は、入港後一週日目を以て同港内バースレー灣外に碇泊す

ることとなり、隊員は灣上の一地劃に露營小舎を建設して漸く陸上起臥の

自由を得ることとなつたのである。

我隊員の露營小舎造營地は、同市の親日派紳士ヂエー・ホーン氏が、義侠

的に無代貸與せられた同氏所有の林地であるが、今其地理を説明すると、此

シドニー埠頭サーキュラーキーから約四哩の南方に位する半島は





之を總稱してボウクラス區と云ふて居る。其の南端は對岸の北岬に對して南岬と呼び、北岬と共に港口を扼して、宛然一大防波堤の如き觀を呈して居る。外海岸一帶は懸崖絶壁で高さ數十丈に達し、其頂きには、砲臺あり、兵舎あり、探海燈燈臺、信號所、無線電信局等の設備もあつて、同地樞要の要塞地帯である。其の内海、即ちポルト・ヂャクソンに於て、南岬に近き一小灣を、ワツトソン灣と稱し、其陸上にはタウン・ホール、小學校、教會堂、公園等あつて、街衢稍や整然として居る。此處から市の電車、灣又灣の小蒸汽艇と相通じて交通の便頗る宜しきを得て居る。而して、之より北方に當れる灌木の生茂る間をば、内海岸に沿うて約十町許も行くとき深い入江に架けられたる雅致ある白塗の釣橋がある。之が即ちバースレー灣の釣橋で、其彼岸が即ちバースレー灣である。此灣内小蒸汽艇の棧橋から、眞直にバースレー・ロードに従ひ、左右十數軒の宏壯なる邸宅を見つゝ、約七町餘進むと、其處には右側の樹林の間から、日章旗の高く翻へつて居るのを望見することが出来るのである。



是が即ち我隊員の露營小舎にて其周圍には、同地の名産たる、ガン、ハニサカ樫、松等の老木鬱葱として繁茂し、綠陰風を送つて極めて閑靜である。又た後方の臺地に立つと、眼下には碧海を望み、背後には邱壑を仰ぎ、海を隔て、遠くノース・ハーバー・マンレー等の地點を雲烟模糊の間に眺め得られて、全く一幅の活畫を展したかの如くである。

此露營小舎は、前年芝浦で種々研究の上、輕便堅牢を旨として造られた木造平屋建の切崩したもので、今此地で之を組立てたのである。而して全く小舎の建上つたのは、五月十六日であつた。

此小舎は、桁行が五間半、梁間が二間半、都合十三坪七合五勺の營舎である。其組付は、頗る嚴重になし、一々鐵材にて締付け、屋根は取外しに都合よきやう板戸を以て巧みに張られ、内側から掛金で母屋に固着せしめてある。而して降雨の際は帆布を張詰めて雨漏を防ぐことゝした。又た周壁間仕切等も板戸を以て建込み、尙ほ窓としては六尺毎に一平方尺位の厚き硝子板を張つたので、室内は十分に明るい。

間取りの具合は、床は全部板張とし、夜は藁蒲團と毛布四枚とで、暖かき夢を包んだ。建築上少しの裝飾もないが、風に倒れるやうな粗造のものではないから、久しく開南丸に在つて、棚の如き寢室に起臥したことを思へば、此小舎は隊員に取つては、金殿でもあり、又た玉楼とも云はねばならぬ。又た便所は別個に建設し、又別に天幕三個を張つて、食糧器具一切を格納し、其一つは浴場に充てた。

尚ほ家屋の周圍には、深き溝を穿つて水利に便し、後方から來る雨水の流出を計り、爲めに林中の濕地も乾燥を保つことが出來た。又其外縁には、近傍から灌木、テーツリー（杉に類似して枝葉の一層柔軟なるもの）等を移栽して生垣となし、正面及び側面には風雅なる枝折扉を結び、庭内珍木奇草の間に怪石を散在せしめ、雅致ある石燈籠は、坐ろに故國を偲ぶに足る唯一の材料であつた。

此瀟洒たる露營小舎は却つて外人の眼に珍らしく映ずると見えて、敷地の所有者ホーン氏を始め、幾多の同情家に満足の感を與へたのである。

露營小舎は此の如くにして出来上つたが、一方には種々協議の結果、野村船長、多田書記長の二人が、一旦事情報告の爲め本國に歸還する事と爲つた。其出發したのは五月十七日である。

佗しき露營小舎生活に在つて、各員が唯一の慰樂は食事であるが、萬事儉約を主とせざるを得ざる現在の境遇では、決して贅澤なる食事を許さない。先づ米は船艙内に貯藏せらるゝこと久しきに亘つた爲め、一種の異臭を放つて居る物、罐詰類は多く變味して居る物である。此米と此罐詰とが常食であるが、其外には僅に少しばかりの野菜を買つて來て煮る位のものである。

併し隊員は、これに不平は云はなかつた。母國に於ける我後援會の慘憺たる苦心を思ひ、又た極地に於ける冬營の勞苦を思へば此米此罐詰も誠に感謝せねばならないのである。

即ちかゝる生活ではあるが、總員の元氣は却々旺盛で血色も次第に

佳良となり、肉も肥つて來て居る。これと云ふも再舉てふ前途の希望が胸宇に充ち滿ちて居るからである。麥飯の握に梅干一箇で、征戰の野に起臥した日本軍人の兄弟であるを思ふからである。

尚ほ此休養期を利用して、體育の鍛鍊を行ふ必要があると云ふので風の晨、雨の日も、勉めて舎外に動作し、市人の誤解を招かぬ範圍に於て、山野を跋涉し、海岸を逍遙し、或は山に入つては枯木を伐採して薪料となし、海に出でては釣綸を垂れて鮮魚を味ふ等、頗る體育的原始時代の生活を送つた。

随つて被服の如きも、外出用の他は、常に弊衣を纏ひ、能ふ丈け被服費の支出を節約することにした。

露營小舎生活も、日數を経るにつれ、市人も我眞意を諒し大に同情を表し。時々種々の贈品を齎らして慰問してくれた。取わけ隣家等とは、常に相互往來して幾多の厚意に浴した。又た毎週土、日雨曜の午後などには、來訪者頗る多く、各員其應接に遑なきばかりであつた。



茲に一言すべきは、第一次計畫に於ては極の中心に達する事を目標として居たが第二次計畫の際には既にスコット、アムンドセン等が上陸して居るので、到底是等と極の中心を競ふの不可能なるを知り、出來得る文學術的の探檢を行ふに決した事である。後援會では此事に就いての希望を探檢隊に通知して遣ると、同隊では西經百六十度より百七十度南緯七十八度半の附近へ上陸して東南に向ひ探檢を行ふべき事を定め、又沿岸隊を組織してエドワード七世州に上陸せしめ、能ふべき丈の探檢を行ふべき事及更に開南丸を以て出來得べき丈東方の氷海を探檢すべき事等を定めた。幸にしてシドニーには嘗てシャックルトン一行に加つて南磁極を探檢した同大學教授デビッド博士等が居たので武田學術部長等は同氏に就いて少なからず實驗談を聽いて益する所があつた。

船員の方では又此期間に於て開南丸の修繕を行つた。丹野一等運轉士はジブリー船渠に交渉して各種の修繕を施した。

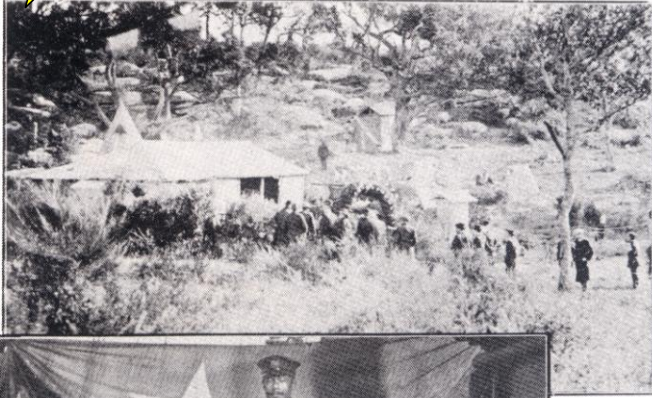


左段向つて右はロンドン大学教授アール・ワット君  
 上は新西蘭日本名譽領事ヤング君



員隊野吉、掛穴邊山、長部生衛所井三、書記松村、掛穴守花、夫厨浦三、氏某、氏某、員隊川西、員隊邊渡  
 君ボリー、ルトクワド、長隊瀨白、長部常學田武

濠洲露營に於ける英皇  
帝戴冠式祝賀會



土屋運關士 多田隊長  
島事務長 三井所部長  
清水機關長 三宅船員  
中段野村船長餘は濠洲貴婦人

山邊犬掛と花守犬掛





次に露營小舎生活の二十四時間を記述して見ると、先づ午前六時三十分、當番の吹き鳴らす笛聲に、一同は起床するのである。各自毛布を疊み、便宜戸を外して、直に室の内外を掃除し、同七時に至ると、各々水道の淨水に身を清め、衣を拂うて後應接室に奉安しある御眞影に對して最敬禮を行ひ、終つて隊員及び隊員間の挨拶を交換し、それより三十分間は思ひくに朝餐前の行事を執る。

七時三十分に至るや朝餐の卓子は整へられ總員は酸っぱい味噌汁と香の物とで箸を執る。それが終ると八時から十二時半までが學課時間で此時間内に探檢に必要な天文地理等の書を読み或は突進準備の講究其他の雜業を執る。午後一時例の變味せる鐘詰で晝餐を終ると二時より五時までが前述せる遠足等の専ら體育を主とする課業に入るのであるが、やがて五時三十分、一汁一菜の晚餐を終ると、それより就寢までは自由の時間で、雑談する者、讀書する者思ひくに九時三十分の就寢時刻までを費やすのである。



尚ほ毎土曜は被服の洗濯をする日で、此日は清潔検査を行ひ互に衛生上の注意をする。日曜は休養日として、終日各員の自由に任せ、入浴は毎週水士の二回の定めである。

斯くて隊員一同は毎日上述の如き日課を繰返し、船員等も船中に起臥して之に劣らざる日課を繰返しつゝ、一日千秋の思を爲して再舉出帆の日の到着を待つて居たが、光陰は誠に矢よりも速く十月十八日には本國に歸還中なりし野村船長は再舉用の糧食船具其他の準備品を携へて歸還し來り、十一月十六日には熊野丸便により新に農學士池田政吉、活動寫眞技師、田泉保直及本國歸還中の多田惠一、犬の世話役橋村彌八等は多數の補充品と二十九頭の犬とを率ゐて到着した。一行の勇氣は凛々たるものである。今回は必ず無事南極洲に上陸して日本男兒の面目を施さばやと心は勇んで踊上らんばかりと爲つた。之より前一行中身體の健康を缺ける者は本國に歸らしむる事と爲し船員佐藤、高取、及コック三浦の三名は郵船便にて歸還せしめたが今又丹野一等運轉士は病氣の故を以て歸還する事となり、



其位地は土屋運轉士代つて占むる事と爲つた。其外新にシドニーより加はつた者には船員として三宅幸彦、濱崎三男作の二氏がある。噫シドニー郊外の夢！半歳の間辿つた儂ない効外の夢は破れて、今より震天動地の偉業に従事せねばならぬ。一行の任務は益々重きを加へた。



第一次計畫探檢隊員姓名

上陸隊員

隊長	白瀬 轟
學術部長	武田 輝太郎
衛生部長	三井 所清造
書記長	多田 惠一
糧食係	西川 源藏
被服係	吉野 義忠
炊事係	三浦 幸太郎
犬係	山邊 安之助
犬係	花守 信吉

船員

船長	野村 直吉
一等運轉士	丹野 善作
機關長	清水 光太郎
二等運轉士	土屋 友治
三等運轉士	酒井 兵太郎
事務長	島義 武
木工	安田 伊三郎
油差	藤平 量平
機關士	村松 進
水夫長	高川 才次郎
舵取	佐藤 市松
同上	渡邊 鬼太郎
同上	釜田 儀作
火夫	杉崎 六五郎
同上	高取 壽美松
料理人	渡邊 近三郎
水夫	柴田 兼次郎
同上	福島 吉治



鳥 - イグンペ王帝



# 附 録

## 第一章 南極圏採集標品調査報告

### 日本探検隊採集の動植物



日本探検隊の極地より採集し來りし標品中、植物に属する者は、僅に褐色を呈せる藻類の一小品に過ぎず。數尺もある可きものゝ僅かに數寸の破片なるを以て到底種族を明瞭に定め難しと雖、多分褐藻類(Phaeophyceae)中の「フークス」科(Fucaceae)の「サルガススム」(Sargassum)に属する如し。

動物に至ては、海豹(Stenorhynchus leptonyx (DE BLAINVILLE) = Ogmorhinus leptonyx)の毛皮を持ち歸りし外、鳥類、魚類、蝦類、蟹類を採集せり。次に其各に就

き鑑定せる記載を掲ぐ。

## 南極圏内採集の鳥類

探検隊採集の鳥類は十一種類にて、其内濠洲産の二種を除き、凡て海鳥にして就中海燕目に属するもの多し。左に各種を列記すれば、海燕目に属する鳥類は次の五種類なり。此目に属する鳥類の特徴は鼻孔普通の鳥類の如く孔状をなさずして、嘴の基に縦に附着する管状物の中を開通し。翼は長大にして能く長途の飛行に堪へ得。脚には極めてよく發達せる蹠を有る。

第一「アホウドリ」の一種 (*Diomedea melanophris* BOIE.) 本邦に産する信天翁に類し、體軀偉大にして、體長二尺七八寸に達し、翼長(翼を疊みたるもの)一尺一寸餘あり。體の地色は大體白色にして、目の前後に黒色の條あり。背及び翼は黒褐色にして脊の兩翼の間は黄色を呈す。尾は灰色にして羽の軸のみ白色なり。嘴も偉大にして四寸五分計りあり。



黄白色にして先端薄黒く脚は黄色を呈す。

本種は主として南氷洋地方に分布し、北は往々大西洋北部邊迄達する事あり。平時は海洋中を遊泳するも、繁殖時期に至れば絶海の孤島に無數に集合して。高き圓錐形の巢を營み、一腹只一個の卵を産す。

第二「ウミツバメ」の類 *Cymodroma melanogaster* (GOULD) 此の種は本邦に産する海燕類に近き種類なるも、脚の前面の鱗一列なる事（「ウミツバメ」類ハ數列ニシテ網目狀ヲナス）及爪が極めて扁平なる事（「ウミツバメ」類ハ細クシテ釣曲ス）により異なれり。

形態細長にして少さく、體長は七寸餘翼は比較的長く六寸に達す。體色は主として黒褐色にて頭部は色濃く翼の基部は色淡し。腰は純白色を呈し腹部の中央は褐色なり。嘴及び脚は黑色なり。

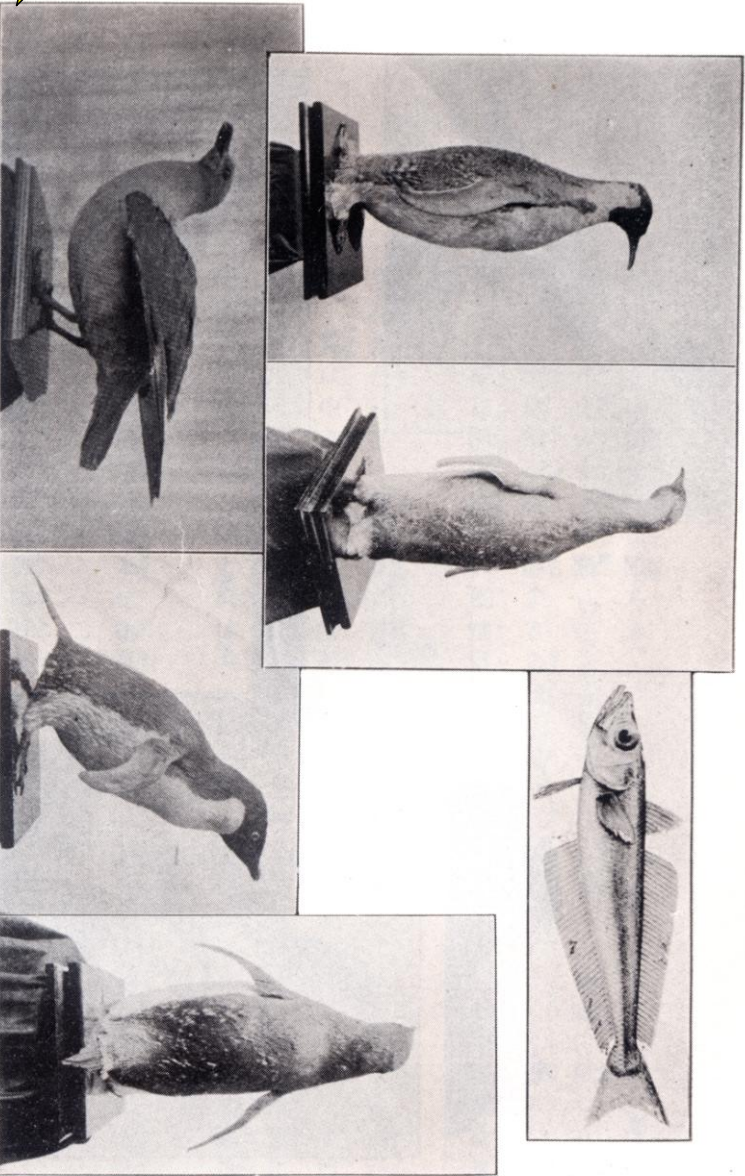
此種は弘く南氷洋に分布し、北は「ベンガル」灣又大西洋にては回歸線の邊迄達す。

第三雪鳥 *Pagodroma nivea* (GMELIN) 本種は前種よりも一層本邦の「ウミツバメ」

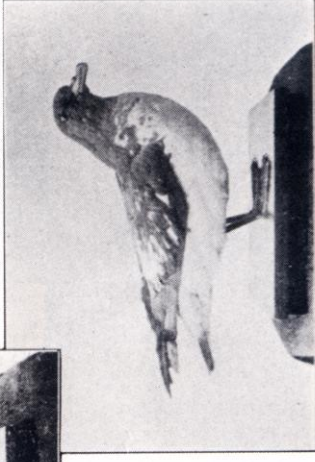
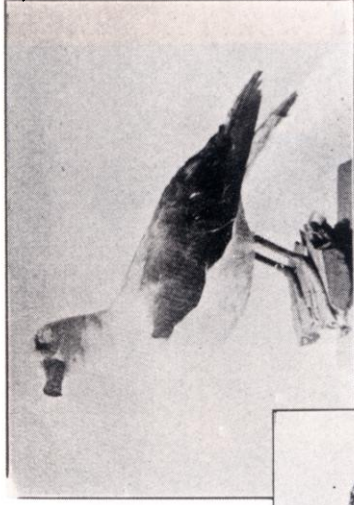
類に類縁せるものなれども、羽色は全く異なれり。其名の如く全體純白色にして嘴と脚のみは色を異にし、前者は黒色後者は黄色なり。形は前種に似るも大さ大なり。本種は個體によりて大小不同あり。大なるは體長一尺四寸翼長九寸小なるは體長一尺一寸翼長八寸位なり。

本種は南氷洋中氷結せる地方に多く、北方に産せず。従前響尾蛇號「チャレンジャー」號等の探檢船により「ルイフキリップランド」「ビクトリアランド」「フオー克蘭ド」等の地にて採集せられたる報告あり。

第四水風鳥の類 *Thalassoica antarctica* (GMELIN) 此種は本邦産水風鳥に稍類似する鳥類にして、大きさも略水風鳥に近く、體長一尺四寸翼長一尺あり、嘴比較的長く一寸四五分に達す。體色は背面は褐色にして翼は大部分白色なるも翼縁は褐色を呈し尾筒及び尾は白色にして尾端褐色を帶ぶ。頭及び頸は下面も褐色なれども胸腹以下は白色なり。嘴は黒色にして脚は黄色を呈す。



鳥ソーイグンベ皇帝 部背の鳥ソーイグンベ皇帝  
 メモカクゾカト。鳥ソーイグンベレピア。部背鳥ソーイグンベレピア  
 ムイチクルアトツア、マソラゴロレア



信天翁  
フマルカモメ



海燕



水風鳥  
雪鳥

本種ほんしゆの分布ぶんぷは南氷洋なんひやうように限かぎらる。

第五「フルマカモメ」*Daption capense* (L.) 本種ほんしゆは一見鷗けんかもあに類るあする形態けいたいなるも、實じつは海燕目うみつばめに属ぞくする鳥類てうるあなるを以もつて、嘴くちばしには管狀鼻孔くわんじやうびこうあり。此類このるあの特徴とくちやうは嘴くちばしの内面ないめんに櫛齒狀せつしじやうの溝みぞあるを以もつて、普通ふつうの海燕類うみつばめるあと異ことななれり。

頭あたまは黒色こくしやくにして其以下そのいかの背面はいめんの羽毛うもは先端せんたん黒色こくしやくなるも基部きぶは白色はくしやくなり。翼つばさは中央ちうあうに白斑はくはんを混こんじ風切羽かぜきりは黒くろと白しろと染そめ分わけらる。下面かめんは胸以下むねいかは凡すべて純白じゆんぱく色しやくにして胸むねには黒色くろいろの差毛ちがひけを有いうす。尾をは白色はくしやくにして先端せんたん褐色かつしやくを呈ていし嘴くちばしと脚あしは共ともに黒色こくしやくなり。體長たいぢやうは約一尺三寸翼長よくちやう八寸五分ぶあり。

本種ほんしゆは弘ひろく南洋なんようの海上かいじやうに棲息せいそくする種類しゆるあにして、北きたは錫倫島邊せいろんたうへんに迄分布までぶんぷす。

第六「ペンギン」の類たんけんたいさいしゆ、探検隊採集たんけんたいさいしゆの「ペンギン」鳥てうは二種類しゆるあにして一つは

「ペンギン」中最大ちゆうさいだいなる帝王てうわう「ペンギン」*Aptenodytes forsteri* (GRAY) として他たは

之より遙かに小形なる *Pygoscelis adeliae* HOMB. & JACG. と稱する種類なり。「ペンギン」鳥は南氷洋特産の鳥類にして、他に全く之を産せず。其體形頗る奇異にして一般に他鳥と特異なる點多し。體軀は重大にして脚は體の後方に附着するを以て陸上にある時は他鳥の如く體水平に位置せずして恰も人頭の如く直立して歩行する事普く人の知る所なり。翼は極めて小にして扁平にて魚類の鰭の如く、普通の鳥類に見る風切羽は甚しく退化して判然せず。其作用も全く魚の鰭の如くなるを以て他の水禽にては脚が鰭の作用を營むものなれども「ペンギン」にては脚は單に舵の作用をなすに止る。

「ペンギン」の羽毛は他鳥のそれに異り、短小にして體に密接し恰も魚鱗の如く鳥體一面に密生す。而して羽毛は年一回秋期に脱更す。羽毛脱更は他鳥と異なり體の諸部の羽毛塊狀をなして脱落す。極寒地方の鳥類なるを以て皮下の脂肪層著しく厚く、體溫高くして華氏百度以上に達す。繁殖時期に至れば、岩石島嶼等に無數に集合し、平地又は洞穴中に草葉小石枯葉等を以て



極めて阻造なる巢を營み、之に白色又は帶綠白色の卵二個を産附す。

「ペンギン」の食餌は主に甲殻類頭足類其他の軟體動物魚類等にして、其他少許の植物質及び多量に小石を食す。

帝王「ペンギン」は「ビクトリアランド」及び其附近に廣く棲息する種類にして體軀偉大、體長四尺以上に達し重量六十乃至八十封度あり。背面は灰黑色を呈し、頭腮喉は黑色にして胸及び腹部は白色なり。頭の兩側には橢圓形の美麗なる黄色斑あり「アデリア、ペンギン」は前者よりも遙かに少にして、體彩色稍前種に類するも頭の圓斑を缺ぎ尾は著しく長し。南極に近き氷塊上に棲息す。

第七「カツヲドリ」の類 *Sula serrator* (鶴型目に属する一種類) 此鳥は嘴極めて偉大にして嘴の嚙縁は、鋸嚙状を呈し、下嘴より喉に亘り無毛節あり體の地色は白色にして背顔及び頸は微に黄褐色を呈し、翼の風切羽は黑色なり。體長三尺翼長一尺五寸嘴長三寸あり。濠洲沿海「ニュージーランド」

島附近等（此分は極地捕獲ならざる故標本寫眞抄略す）に分布する種類なり。

第八「タウゾクカモメ」の類 *Megalestris maccormicki* (SAUNDERS) (鷗目に属する一種類)、此種は鷗類に属するも普通の鷗と異なり、嘴基に鷹鷲の嘴にあるが如き蠟膜を有す。全身褐色なれ共背面より腹面の方色淡く頸及び胸は稍黄色を帯ぶ。翼及び尾は色濃く、翼の中央に近く顕著なる白斑あり體長二尺七寸翼長一尺三寸嘴二寸あり。

本種も南氷洋にのみ棲息する種類にして、千八百四十一年「マツク、コルミツク」氏の「エレベス」號の探検の結果初めて知られたる鳥類なり。

## 南極圏内採集の魚類

探検隊が明治四十五年一月に西經百六十四度三十分南緯七十八度卅分なるホエールスわん 鯨灣の一地點にて得たる一尾の魚類は「プレウログランマ、アントアルクチイム」(*Pleuragramma antarcticum*. BOULENGER)なる學名を有する魚にして、



從來「レプトスコプス」科のものと考へらる。此科のものにて日本に産するは「トラギス」の類なり。本種の初めて學會に知られたるは英國の南極探検船「サウザンクロッス」號が明治三十一年より三十二年に亘りてなしたる採集物に就て。英國の魚學者「ブランジエ」氏が明治卅五年に發表したる魚類の報告に基けり。當時採集したる本種の標品は數尾にして南緯七十八度卅五分の地より得たるものにして、從來世界の魚類にて最も南方より採集せられたる者として有名なり。當時の標品は百六十五「ミリメートル」の體長を有したる物なりとの事なるが、今回得來れる一尾の本種は百七十一「ミリメートル」の體長を有せり。尾鰭は破損して毫も其外形を知らず。由なかりしを以て「ブランジエ」氏の載せたる圖によりて其缺を補へり。背鰭は二基にして第一の背鰭は七棘、第二背鰭は三十六軟條、臀鰭は三十七軟條、胸鰭は十九軟條、腹鰭は六軟條より成る一縱線の鱗は五十三個一横線の鱗は十四個也。

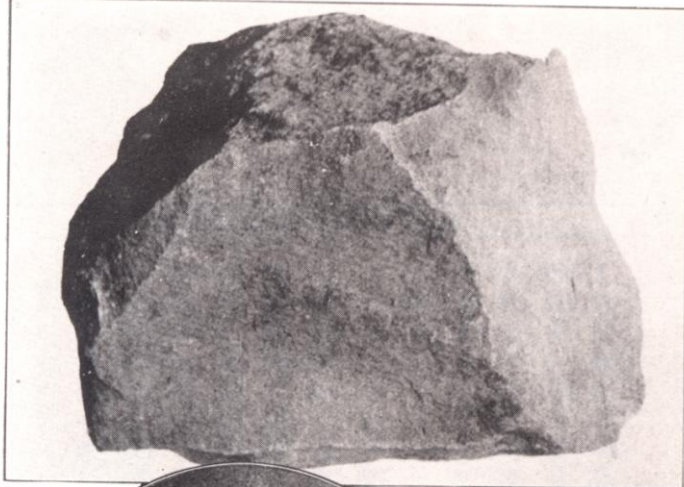
## 南極圈内採集の蝦

ユーファウシアの一種 (Euphausia sp.) 標本の全數十八個にして酒精漬標本なるが、凡て第一觸角及び第二觸角の大部分缺損せり。故に鞭毛を具備せるものは一つもある事なし。此の内眼の缺如せるもの八個尙ほ胸脚の大部分なきもの、背楯の破損せるものなどあり。保存良好と云ひ難く査定困難なれ共「ユーファウシア」属の一種たる事は胸脚の構造各對略同一なる事にて知らる可し。扱「ユーファウシア」属中の何種なるかを「ザース」氏著『「チアレングザー」號採集裂脚類報告』を参照して考察するに第二觸角鱗片の外先端が突出せる事實によれば「ユーファウシア」、アンタークチカ」に近似すれ共、尾脚が尾節より少しく短き事其外板が内板より微に長き事などの點に於て異なり。背楯の下縁に顕著に若しくは稍々不分明に一對の小棘ある事などによれば Euphausia murayi に酷似すれ共不幸にして第一觸角が此の種の特徴に吻合せ





明治四十五年一月三十日南緯七十七度四十六分西經百五十八度六分の流氷上にて採收の目方三十餘貫花崗岩



南緯七十八度三十一分西經百六十四度三十分なる鯨灣にて捕獲せし蝦



南緯七十八度二分西經百六十七度十五分にて見たる鯨群



上記岩石と同時に流氷上にて採收の花崗岩片



りやを確むる事を得ず。口部附属肢の形状は *E. antarctica* に頗るよく適合すれ共 *E. murrayi* にては如何なる形状を呈するかは其記載も圖畫も無ければ知るに由なし。上述の理由により種名を決定せざる方反て妥当ならんと思考す。標本は全部雌にして最大なるは其長さ五糎に垂んとす。

「チアレンジア」號報告による時は *E. antarctica* は南緯六十五度四十二分東經七十九度四十九分「ステーション」百五十三にて採集せられ、尙ほ此の幼期のものを程遠からぬ所（「ステーション」百五十二、百五十六）にて獲たれば特に南極地方に限らるゝものならんと推定して、ザー氏は「アンタークチカ」と名づけたるなり。又「ムライ」は南氷洋（「ステーション」百五十四）及び「ケルゲレン」*Kerguelen* 沖にて採集せられたり。即ち兩種とも南半球に産する種なるを知るべし。

「ユーファウシア」属は「ユーファウシア」目中の「ユーファウシア」科に属す。「ユーファウシア」目は「ボアス」氏の一千八百八十三年に創設したる

ものにして、其以前は此類はアミ類と共に裂脚類に編入せしものなり。「ザース」氏著の「チアレンジア」號報告の如き其一例なり。此目は *Bentheuphausia* 属を除き他は凡て發光器を有して發光するを以て著名なりとす。大洋性の甲殻類にして大洋の海表浮遊生物として採集せられ又深き所にも産す。

## 南極圈内採集の蟹

蟹の一種 *Sesarma* sp. 標本一個左側はたゞ第五脚のみ存し他は皆之れ無く右側の第三脚は今や再生の最中にあり。尚ほ觸角、口部附属肢甲尻などに缺損ありて査定に苦めども「セサルマ」属の蟹なるは第三顎脚の長節及び坐節に毛列あるを以て知るを得べし。標本は雌にして背甲の横經十四 耗 縱經十二 耗あり。

## 地質及び岩石

南極大陸の地質に關しては今日知らるゝ處僅かに一部分に過ぎず。これ沿岸の探檢未だ洽ねからざる爲めなりと雖、亦南極地方一帶常に氷雪の覆ふ所となり。岩石の露出を見る事甚だ少なきが其大原因をなすなる可し。今茲に種々の探檢記を總合して今日迄に知り得たる地質の大略を述べんに先づ比較的精密に研究せられたるは南米に面せる「グラハムランド」(Graham Land)地方と「ニュージールランド」に面せる「ロツス」海方面となり。

南米智利の「アンデス」山脈は「スターテン」島 (Staten Island) 「ブルドウッドバンク」(Burdwood Island) 「シャツグ」岩 (Shag Rock) より南 「ジョルジア」(South Georgia) に至り此れより南東に偏して「クラーク」岩 (Clerke Rock) より「トラバルセー」島 (Traversey Island) に進み「サンドウキツチ」島 (Sandwich Island) に達す。此處に於て西西南の方向を取り南「ラルクエー」島 (South Orkney Island) 「クラーレンス、エレファント」島 (Clarence-Elephant Islands) を越え、南極大陸に接せる南「セットランド」(South Shetlands) より南極陸北端の「ヂルクゲリツ」半島 (Dirk-Gherritz Archipelago) に達す。

そのほうかう南北亜米利加間の「アンチール」と全く同様の弧状をなせり。以上の大山骨の外、南極大陸と他大陸との連絡を見る他の一山骨あり。即ち「ニュージランド」より「ロツス」海に進むものにして、「ラー克蘭ド」島(Auckland Island)「カムペル」島(Campbell Island)より南極大陸に接せる「バレニー」島(Baleny Island)に進み、南極大陸に入りて「アドミラルチー」山脈(Admiralty Range)「プリンスアルバルト」山脈(Prince Albert Range)を経「ヘルバス」「テロル」(Erebus Terror)等の諸火山を含みて、南極内地深く走れる一帯の山骨此れなり。以上二大山骨は、相互に連絡せる者なるや其間の關係如何は、今日種々論議を有する興味ある問題なりと雖、今日茲に明かなる斷定を下し難し。但し南極の「グラハムランド」「シエツトランド」に存在せる安山岩玄武岩等より成る新火山は、是れ南米の「アンデス」火山の續きなる事は已に「グルドン」博士(Gourdon)に由り論ぜられたる所にして、其他岩石上の關係より南極と南米との連絡を求むるは、容易なる事實なりとす。然れ共





「ニュージールランド」と「ロツス」方面との關係に至ては、「エレバス」「テロル」より「ボスセツション」(Possession)「コールマン」(Coulman)「フランクリン」(Franklin)「ボイホアルト」(Beaufort)諸島に亘れる約南北に走れる新火山線が「ニュージールランド」に現はれ居る安山岩玄武岩等の火山脈と同一時代の噴出に属するや否やは未だ確かなる證據を得ざる者とす。

今「グラハム」地方と「ロツス」海地方との岩石を比較するに、「グラハム」には基礎に片麻岩(Gneiss)と之れに類似せる花崗岩(Granite)とを有し、南「シエツトランド」島には此の外に結晶片岩(Crystalline Schist)硅岩(Quartzite)あり。此の古代の片麻岩雲母片岩は硅石を挟みて、南緯六十六度四十八分東經八十九度卅分の地にも現はれ太古紀なる事を知らしむ。古代火成岩には猶ほ石英閃綠岩(Quartz Diorite)と飛白岩(Uralitic Gabbro)とを見る。又南「オルケニー」島に於ては同島に露出せる放散蟲を有する硅岩と伴ひて「グラプトライチス」(Graptolites)の化石を發見せしより「オルドウキシアン」(Ordovician)に属する事明になりぬ。又「グラハムランド」の東北「ホープ」灣(Hope Bay)



にては蕨類、蘇鐵類、松柏類に属する「サゲノプテリス」(Sagenopteris)「シンフェルジア」(Thinfieldia)「クラドフレブリス」(Cladophlebis)「プテロフキールム」(Pterophyllum)「ワトザマイテス」(Otozamites)の化石を発見して侏羅期(Jurassic Period)に属するを知り得たり。而して此等の化石属は濠洲東部、印度、南亞非利加、「アルゼンチン」の三疊侏羅兩期に発見さるゝ事は已に洽く知らるゝ所なるが、猶「ゴンドワナランド」(Gondwana Land)には「グロンプテリス」(Glossopteris)「ファルクランド」島(Falkland Island)には「フキロセーカ」(Phyllotheca)発見されて益々侏羅紀の存在は確かめられ合せて當時南極の氣候の温暖なりし事を想像し得らるゝなり。次期白堊紀に属する類として「グラハムランド」の東「スノーヒル」島(Snowhill Is.)に數多の菊石(Amonite)を発見す又第三紀に属する類として「セイモア」島(Seymour Island)に「アラウカリア」「ビーチ」(Araucaria Beech)ありて當時猶温暖の氣候を續けたりと知らる。又上部「オリゴシオン」若くは下部「ミオシオン」と思はるゝ海層中に械齒鯨(Zenaidodon)の背骨と「ペンギン」鳥の五属種の骨片を得



南極固有の「ペンギン」鳥が既に數十萬年前より同地に生息し居たるを證せられたり。猶「セイモア」島の北「コックバルン」島(Cockburn Island)には「プリヲシーン」期に属する帆立貝(Pecten)含有の蠻岩海上百六十米突の高さに存在し「アルゼンチン」の北の「バラナ」層(Parana Bed)南「パタゴニア」の「フェアウエザー」層(Cape Fairweather Bed)と同一層なる事を研究せられたり。新火山岩は所々に噴出し南「シャットランド」島に安山岩及び其凝灰岩と玄武岩とを見南緯六十六度四十八分、東經八十九度卅分の地に火山口の残りありて、白榴石玄武岩(Leucite Basalt)と其凝灰岩とを發見せり。轉じて「ロツス」海方面の地質を検するに基礎岩としては全く「グラハムランド」と同一にして、片麻岩及び此れに類似せる花崗岩閃綠岩の外雲母片岩、硅岩「コンドロライト」を有する結晶質石灰岩の如き大古代の岩石を見、又「カムプトナイト」(Camptonite)「ケルザンタイト」(Kersantite)「バナカイト」(Banakite)等あり此等の基礎岩の上に非常に廣大なる區域を占むる「ブーコン」砂岩(Beacon sandstone)

ありて、南緯七十五度邊の「ナンセン」山(Mt. Nansen)より約七百哩を隔つる南緯八十五度迄に亘り厚さ二千呎以上に達する所あり。南緯八十五度の地に三呎乃至七呎の厚さを有する石灰層七枚ありて、内に松(Pinus)の幹の化石を有す。此の重要な厚層は上部泥孟紀若しくは上部石灰紀に属す。此れより多分下部と思はるゝ石灰岩が「ロイド」岬(Cape Royds)にありて内に赤色の層を挟み、内に放散蟲の化石を含み厚さ數百呎あり、但し石灰岩は又「ビーコン」砂岩中に夾まるゝ物も發見さる(「グラニツト」港の東南十里南緯七十七度の地)以上の外に「グラハムランド」に見る如き中生代の岩石は、「ロツス」方面に發見されず。火山岩及其凝灰岩としては「ドレライト」(Dolerite)響岩(Phonolite)粗面岩(Trachyte)「キーナイト」(Kenyte)角閃玄武岩(Hornblende Basalt)橄欖玄武岩(Olivine Basalt)玄武凝灰岩等ありて「ロツス」海中の多くの火山島には粗面岩「キーナイト」玄武岩の順序を以て、噴出せる如し。以上新火山岩と古代岩との關係等を論ずるに、右火山線は「エレバス」「テルロ」兩活火山より「ポッセション」「クルマン」「フランクリン」「ボイフォルト」

諸島を結べる約南北に走れる者にして最も興味ある問題は此に接し、數百哩に亘れる古代水成岩なる「ビーコン」砂岩が或る特別の地方的小變動を除き、總て殆ど水平に堆積し居ることなり。此れ新火山線の噴出は南極大陸の成生に關する地殻の皺曲等の重大なる地質學的原因に由るに非ずして、或は小陥落に起因する「ロツス」海の成生に際せる一小割目に噴出せるには非ずやと思はる。今回白瀨隊の「エドワード」七世州より採集せる岩石は海上に轉倒せる流氷に附着せる者にして、其數大小合して數十に達すれども皆花崗岩（殊に角閃石に富める者多く内に構造片麻岩狀に剝性を有する者もあり閃綠岩（Quartz-biotite Diorite 多し）に屬し、其岩質「ロツス」海西部地方の基礎岩と全く同一なり。新期水成岩又は新火山岩の破片だも認むること能はざるの事實は、南「ヴキクトリア」州と「エドワード」七世州とは、基礎に於て同一の岩石より成れる者にして、火山線は單に前者にのみ有し、後者は其影響を受け居らざることを推測し得べし。



# 第二章 氣象觀測表

## 第一次計畫の部

日期	緯度	經度	曇降晴	氣壓	氣溫	濕度	風向	風力	雲量	波浪	海水溫
明治四十三年十一月三十日	房州館山出帆	—	雨	七六五	一二二	八三	北東	強	一〇	四	一六〇
十二月一日	北	東	全	七六一	一四二	九	北	烈	一〇	五	一七〇
全月二日	北	東	曇	七五六	一八六	八三	西西南	強	八	五	一九〇
全月三日	北	東	全	七五七	一八三	七六	全	疾	八	三	一九〇
全月四日	北	東	全	七五九	一九四	七六	西北	軟	七	三	二〇〇
全月五日	北	東	晴	七七一	二二四	七二	北	全	七	三	二二七
全月六日	北	東	全	七六八	三三四	七九	北東	全	八	二	二四〇
全月七日	北	東	全	七六三	二五〇	八〇	全	和	五	三	二四九
全月八日	北	東	全	七六二	二六八	八七	全	軟	三	二	二五〇
全月九日	北	東	全	七六四	二六〇	八六	北北西	全	三	二	二五五
全月十日	北	東	全	七六四	二六四	八三	無	無	三	一	二六〇
全月十一日	北	東	曇	七六四	二七二	八八	東北	和	六	一	二六五



全 月 廿 七 日	全 月 廿 六 日	全 月 廿 五 日	全 月 廿 四 日	全 月 廿 三 日	全 月 廿 二 日	全 月 廿 一 日	全 月 二 十 日	全 月 十 九 日	全 月 十 八 日	全 月 十 七 日	全 月 十 六 日	全 月 十 五 日	全 月 十 四 日	全 月 十 三 日	明 治 四 十 三 年 十 二 月 十 二 日	
北	北	北	北	北	北	北	北	北	北	北	北	北	北	北	緯 度	
二 四 五	四 〇 八	六 〇 〇	七 〇 〇	九 一 五	一 〇 〇	一 〇 三	一 三 〇	一 四 〇	一 四 三	一 五 〇	一 四 四	一 三 五	一 五 〇	一 六 四	二 〇 二	二 三 六
東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	經 度
一 五 三	一 五 〇	一 五 〇	一 五 〇	一 五 〇	一 五 〇	一 四 九	一 四 九	一 四 八	一 四 八	一 四 八	一 四 七	一 四 七	一 四 七	一 四 五	一 四 五	一 四 五
全	全	全	全	晴	曇	全	晴	全	全	曇	全	全	全	全	曇 降 晴	
七 五 九	七 五 九	七 〇	七 〇	七 〇	七 〇	七 〇	七 〇	七 九	七 四	七 〇	七 〇	七 一	六 六	七 二	七 六	氣 壓
二 九 七	二 八 八	二 九 三	二 九 〇	二 九 〇	二 八 八	二 九 〇	二 九 一	二 八 三	二 八 三	二 八 七	二 八 一	二 八 二	二 八 〇	二 八 一	二 八 五	氣 溫
六	無	七	八	七	八	八	八	九	九	六	七	八	八	七	濕 度	
無	北 東	東 南	東	東 南	東 南	不 定	東 東 南	不 定	東 東 南	全	南 南 東	全	全	東 東 北	風 向	
無	全	全	軟	和	和	軟	和	全	全	軟	全	和	全	疾	風 力	
五	四	二	四	七	八	六	三	四	七	七	七	四	七	四	雲 量	
一	三	二	三	二	一	〇	三	三	三	二	二	三	四	三	波 浪	
二 八 七	二 八 〇	二 八 〇	二 八 〇	二 八 〇	二 八 〇	二 八 〇	二 八 〇	二 七 八	二 七 八	二 七 五	二 七 五	二 七 〇	二 七 〇	二 七 二	海 水 溫	





全 月 十 四 日	全 月 十 三 日	全 月 十 二 日	全 月 十 一 日	全 月 十 日	全 月 九 日	全 月 八 日	全 月 七 日	全 月 六 日	全 月 五 日	全 月 四 日	全 月 三 日	全 月 二 日	一 明 治 四 十 四 年 一 月 一 日	全 月 卅 一 日	全 月 三 十 日	全 月 廿 九 日	全 月 廿 八 日
南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	北
三〇.五	一九.七	一七.四	一六.四	一四.〇	一三.〇	一一.四	一〇.三	九.〇	八.二	六.四	五.〇	四.二	四.〇	三.四	二.五	一.〇	〇.五
東 一六.四	東 一六.〇	東 一六.〇	東 一六.〇	東 一六.二	東 一六.一	東 一六.五	東 一六.四	東 一六.三	東 一六.二	東 一六.六	東 一六.八	東 一五.四	東 一五.一	東 一五.七	東 一五.三	東 一五.四	東 一五.三
全	晴	曇	全	全	晴	全	曇	全	雨	曇	全	雨	全	全	全	全	曇
七六〇	七六〇	七五九	七五六	七五八	七五八	七五九	七五九	七五九	七六〇	七六〇	七五九	七五七	七五七	七五六	七五六	七五六	七五八
二六八	二七六	二八〇	二八四	二九三	二九八	二九五	二九八	二九三	二九二	二九三	二八三	二九一	二七八	二九二	二八三	二九四	二八八
七 全	八 東	八 東北	七 全	七 東	七 東南	八 南	八 全	六 無	八 南南西	八 西南	八 南西	八 全	九 全	八 西	八 北西	八 西	七 南南東
全	全	全	全	全	全	軟	全	無	軟	和	疾	全	軟	全	全	疾	軟
三	三	五	三	三	三	三	四	五	五	九	三	四	一〇	九	九	四	四
二	二	二	一	一	一	〇	〇	〇	一	二	二	二	三	三	四	三	一
二六八	二七八	二八〇	二八〇	二八八	二九一	二九一	二九二	二九〇	二九八	二九二	二九二	二九二	二九二	二九三	二九三	二九三	二九〇



日期	緯度	經度	曇降晴	氣壓	氣溫	濕度	風向	風力	雲量	波浪	海水溫
明治十四年一月十五日	南 三三。一〇	東 一六。四八	晴	七六。〇	二六。八	七〇	無	無	三	〇	二六。八
全月十六日	南 三三。一七	東 一六。一〇	全	七六。〇	二七。九	六六	全	全	三	〇	二六。〇
全月十七日	南 三四。〇七	東 一三。〇七	全	七六。二	二七。二	六七	全	全	二	〇	二五。八
全月十八日	南 二五。二五	東 一四。〇八	全	七六。二	二七。四	七五	全	全	一	〇	二五。三
全月十九日	南 二七。〇八	東 一五。二三	全	七六。三	二六。八	八二	全	全	二	〇	二五。七
全月二十日	南 二八。〇六	東 一六。二八	曇	七六。四	二六。〇	八九	東北	和	六	〇	二六。〇
全月廿一日	南 三〇。五二	東 一六。五五	全	七六。六	二五。六	九〇	北東	軟	一〇	三	二四。九
全月廿二日	南 三三。〇四	東 一七。〇五	全	七六。八	二四。一	八八	東	疾	一〇	四	二三。五
全月廿三日	南 三三。五〇	東 一六。一六	全	七七。〇	二二。二	七五	全	和	八	三	二三。〇
全月廿四日	南 三五。一〇	東 一六。〇〇	全	七七。一	二〇。五	七四	東南東	軟	一〇	三	二二。三
全月廿五日	南 三六。一七	東 一五。二〇	全	七七。二	二〇。五	七四	東南	全	六	三	二〇。〇
全月廿六日	南 三六。三六	東 一五。五〇	晴	七七。〇	二〇。〇	七七	東	和	四	三	二〇。〇
全月廿七日	南 三六。四八	東 一六。八。〇	曇	七六。八	一八。九	七五	南東	全	六	四	二〇。〇
全月廿八日	南 三六。一三	東 一七。〇。一〇	曇	七六。三	一九。九	七五	南東	全	五	四	一九。四
全月廿九日	南 三五。四四	東 一七。一。四四	全	七五。七	二〇。三	九六	全	全	四	五	一九。六
全月三十日	南 三六。〇〇	東 一七。二。四五	雨	七五。七	二〇。二	八三	南南西	全	七	五	二〇。〇



全 月 十 七 日	全 月 十 六 日	全 月 十 五 日	全 月 十 四 日	全 月 十 三 日	全 月 十 二 日	全 月 十 一 日	全 月 十 日	全 月 九 日	全 月 八 日	全 月 七 日	全 月 六 日	全 月 五 日	全 月 四 日	全 月 三 日	全 月 二 日	二 月 一 日	全 月 卅 一 日
南	南	南	南	南	南	出 ウ エ リ ン ト ン 港	全 上	在 ウ エ リ ン ト ン 泊	入 ウ エ リ ン ト ン 港	ウ エ リ ン ト ン	南	南	南	南	南	南	南
四七。五三	四六。二六	四四。七	四三。一七	四一。五	四二。五	四二。五				四〇。元	四〇。六	四〇。五	四〇。四	四〇。九	三八。三	三六。四	三七。七
東	東	東	東	東	東					東	東	東	東	東	東	東	東
一七五。〇四	一七五。三六	一七四。五	一七三。五	一七四。三六	一七四。五					一七四。四	一七三。四	一七三。三	一七三。一	一七四。三	一七三。七	一七二。六	一七三。四
霧	全	曇	全	晴	雨	全	全	全	全	全	全	晴	全	曇	晴	曇	全
七六三	七六四	七六六	七六六	七六七	七六八	七六四	七六六	七七三	七七三	七七三	七七三	七六六	七六一	七五七	七六五	七六五	七六三
一三。四	一四。八	一六。八	一七。二	一六。四	一七。七	二二。一	一八。一	一五。九	一六。二	一六。三	一七。〇	一六。八	一五。八	一七。六	二〇。三	二〇。七	二〇。三
九 南 南 西	九 南 西	九 全	八 無	七 全	七 南 南 東	七 南 西	七 全	八 無	六 南 西	七 全	七 南	七 南 南 西	八 南 南 東	九 西 南	九 西	八 全	六 全
全	軟	全	無	軟	強	和	全	無	全	全	軟	疾	軟	和	軟	全	全
一〇	一〇	七	三	三	八	四	三	四	二	二	三	三	三	四	三	四	九
二	二	一	一	二	四	一	〇	〇	〇	二	三	三	四	三	三	四	四
一〇 二	一三 七	一四 八	一六 〇	一四 七	一四 六	一六 八	一七 〇	一七 〇	一七 〇	一六 五	一六 五	一六 八	一七 〇	一六 八	一六 八	一〇 〇	一〇 〇



緯度	經度	曇降晴	氣壓	氣溫	濕度	風向	風力	雲量	波浪	海水溫
南 四九.四	東 一七三.〇	晴	七六三	一一.五	八八	南西	軟	四	三	九六
南 五〇.六	東 一七三.〇	曇	七六四	一〇.八	九九	全	疾	九	四	九三
南 五三.四	東 一七三.八	全	七五三	一〇.一	八八	全	烈	七	五	八四
南 五三.四	東 一七四.〇	霰	七四九	八.三	八六	全	全	八	六	八二
南 五五.三	東 一七四.四	曇	七四七	八.四	八六	全	強	九	六	八一
南 五五.三	東 一七五.〇	曇	七五八	八.一	八〇	南南西	強	七	五	七四
南 五八.二	東 一七三.五	全	七四五	九.八	九三	全	全	六	五	七四
南 五八.四	東 一七二.〇	全	七四四	七.四	九四	南西	疾	六	五	六四
南 六〇.五	東 一七五.三	晴	七五五	六.九	八五	西南	和	四	三	六〇
南 六〇.五	東 一七五.三	曇	七四六	八.七	九五	西北	強	九	五	六〇
南 六三.三	東 一七五.六	晴	七四三	五.七	九五	西北	疾	四	四	四六
南 六三.四	東 一七三.〇	曇	七三三	二.八	一〇〇	北	全	九	四	一一
南 六五.三	東 一七四.五	雪	七三九	六.四	九六	西	全	一〇	三	零下〇.五
南 六五.四	東 一七.五	曇	七三三	六.七	九五	南	全	七	三	同〇.五
南 六七.四	東 一七.五	全	七四一	二.九	八三	南南西	全	七	三	同〇.五
南 七〇.三	東 一六九.〇	全	七三四	〇.九	七六	南東	全	八	二	同〇.五



全 月 廿 三 日	全 月 廿 二 日	全 月 廿 一 日	全 月 二 十 日	全 月 十 九 日	全 月 十 八 日	全 月 十 七 日	全 月 十 六 日	全 月 十 五 日	全 月 十 四 日	全 月 十 三 日	全 月 十 二 日	全 月 十 一 日	全 月 十 日	全 月 九 日	全 月 八 日	全 月 七 日	全 月 六 日
南 六。二。六	南 六。七。七	南 六。三。六	南 六。五。六	南 六。五。七	南 六。六。五	南 六。九。四	南 七。〇。九	南 七。二。六	南 七。三。三	南 七。四。〇	南 七。四。六	南 七。四。一〇	南 七。四。二	南 七。四。一五	南 七。四。〇	南 七。三。六	南 七。三。三
東 一七。七。三	東 一七。〇。〇	東 一七。七。三	東 一七。六。四	東 一七。四。一	東 一七。四。一	東 一七。五。七	東 一七。六。五	東 一七。六。三	東 一七。五。六	東 一七。五。〇	東 一七。三。五	東 一七。〇。〇	東 一七。三。三	東 一七。〇。五	東 一七。三。三	東 一七。〇。〇	東 一六。五。〇
全	全	全	曇	霰	全	曇	雪	曇	全	全	雪	全	曇	晴	全	全	曇
七。八	七。七	七。六	七。〇	七。二	七。三	七。五	七。五 同	七。三 同	七。三	七。四	七。四 曇 一。一	七。四 曇 一。一	七。四	七。四	七。四	七。四	七。三
七。六	七。五	七。四	七。六	七。四	七。三	七。一	七。八	七。三	七。六	七。三	七。一	七。二	七。四	七。四	七。六	七。六	七。〇
八。七 西 西南	八。六 西	九。二 北 西	九。三 西 西南	九。四 全	八。六 全	八。八 全	七。九 西	七。七 北 東	八。九 全	九。三 南 東	九。四 西 北	九。七 全	八。七 東 南	八。六 不 定	八。三 全	七。六 東 南	八。〇 北 東
疾	强	全	全	全	軟	烈	軟	全	全	和	軟	全	疾	全	全	軟	疾
九	七	四	八	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	九	三	九	五	六
三 〇	三 〇	三 〇	三 〇	三 〇	二 同 〇。七	四 同 一。〇	二 同 一。一	三 同 一。九	二 同 一。六	三 同 一。七	二 同 二。〇	一 同 二。四	一 同 三。〇	一 同 三。〇	三 同 一。一	三 同 一。五	三 曇 下 一。四



日期	緯度	經度	曇降晴	氣壓	氣溫	濕度	風向	風力	雲量	波浪	海水溫
明治四十四年三月廿四日	南 六二.七	東 一七九.〇	曇	七三	七六	七六	西南	軟	五	三	三一
三月廿五日	南 五九.四	東 一七八.二	全	七元	七七	六九	西南	和	八	三	三一
三月廿六日	南 五八.三	東 一七九.五	全	七四二	六六	六九	西南	全	九	四	三一
三月廿七日	南 五七.一	東 一七九.三	全	七三八	七七	七五	北西	烈	一〇	五	三一
三月廿八日	南 五六.二	東 一七九.〇	全	七四〇	七九	九一	西	疾	一〇	四	三一
三月廿九日	南 五五.四	東 一八〇.〇	全	七五〇	八八	七五	西南	和	七	四	三一
三月三十日	南 五四.五	東 一七九.二	晴	七六一	九六	八〇	全	全	三	三	三一
四月一日	南 五三.〇	東 一七九.八	曇	七六〇	一〇二	八五	西南	全	七	四	三一
四月二日	南 五二.〇	東 一七九.〇	全	七六三	一〇四	九九	西南	全	九	四	三一
四月三日	南 五〇.四	東 一七八.〇	全	七六六	一一	九七	西南	全	五	四	三一
四月四日	南 五〇.一	東 一七九.七	全	七七二	一一	九六	全	全	五	二	三一
四月五日	南 五〇.四	東 一七九.五	全	七七二	一一	九六	全	全	九	二	三一
四月六日	南 五〇.八	東 一七九.〇	霧	七六八	一一	九三	無	無	一〇	一	三一
四月七日	南 五〇.三	東 一七九.二	全	七六	一一	九三	全	全	一〇	一	三一
四月八日	南 四八.五	東 一七九.五	全	七六〇	一二	九三	西北	和	九	二	三一



全 月 廿 六 日	全 月 廿 五 日	全 月 廿 四 日	全 月 廿 三 日	全 月 廿 二 日	全 月 廿 一 日	全 月 二 十 日	全 月 十 九 日	全 月 十 八 日	全 月 十 七 日	全 月 十 六 日	全 月 十 五 日	全 月 十 四 日	全 月 十 三 日	全 月 十 二 日	全 月 十 一 日	全 月 十 日	全 月 九 日
南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南
四 一 。三 三	四 二 。四 五	四 三 。一 七	四 三 。三 八	四 五 。二 五	四 六 。二 五	四 六 。四 三	四 六 。五 六	四 七 。〇 〇	四 七 。四 五	四 八 。四 五	四 九 。三 五	四 八 。〇 八	四 九 。五 七	五 〇 。四 〇	四 九 。二 五	四 九 。三 三	四 九 。〇 〇
東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東
一 五 七 。四 三	一 五 。五 〇	一 五 。五 三	一 五 八 。〇 五	一 五 。三 九	一 六 。〇 三	一 六 。二 〇	一 六 。三 〇	一 六 。四 〇	一 六 。三 〇	一 六 。五 五	一 六 。四 〇	一 六 。四 四	一 六 。二 六	一 六 。四 三	一 七 。〇 〇	一 七 。六 六	一 七 。〇 〇
全	全	全	曇	晴	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	曇
七 四 八	七 五 〇	七 五 六	七 五 九	七 五 四	七 六 〇	七 六 五	七 六 三	七 六 六	七 七 〇	七 六 九	七 六 〇	七 四 九	七 五 六	七 六 四	七 五 八	七 五 五	七 六 五
一 四 八	一 四 七	一 五 八	一 四 三	一 四 〇	一 三 四	一 三 七	一 三 六	一 三 一	一 三 六	一 三 一	一 二 五	一 四 五	一 三 三	一 二 六	一 三 三	一 三 七	一 二 八
八 三 全	七 六 西南	八 三 西南	七 三 西南	八 一 全	七 八 西北	八 五 西北	八 九 西北	九 一 西南	八 六 西南	八 二 西南	八 六 北 北 南	八 三 全	七 九 全	八 七 北 北 西	八 三 北 西	八 一 西北	九 一 西 北 西
全	疾	和	軟	全	全	和	全	軟	和	軟	和	全	疾	軟	和	全	疾
九	七	六	六	四	五	四	四	五	五	五	六	七	五	五	七	一〇	九
五	三	二	二	二	二	二	二	一	二	二	三	三	三	三	三	三	三
一 五 七	一 五 二	一 四 八	一 四 六	一 四 三	一 四 〇	一 三 四	一 三 一	一 二 九	一 二 六	一 二 一	一 〇 六	一 〇 四	一 〇 一	一 〇 〇	一 〇 一	一 〇 二	一 〇 一



第二計畫の部

全 月 廿 四 日	全 月 廿 三 日	全 月 廿 二 日	全 月 廿 一 日	全 月 二 十 日	全 月 十 九 日	明治四十四年 十一月十九日
南 三六〇.七	南 三六〇.〇	南 三五〇.二四	南 三五〇.一五	南 三四〇.一六	南 三四〇.一六	緯 度 出 シドニー港 發
東 一五八.二八	東 一五五.四五	東 一四五.三八	東 一五四.〇〇	東 一五三.〇〇	東 一五二.一一	經 度
曇	晴	曇	晴	曇	晴	曇降晴
七六五	七六七	七六六	七六六	七六三	七六六	氣 壓
一八.二	一九.八	一九.五	一九.七	一九.三	二二.七	氣 溫
九六	八二	六六	六三	八四	六六	濕 度
全	東	南 西	全	南	北	風 向
軟	和	全	全	全	軟	風 力
九	三	六	四	八	一	雲 量
三	二	一	三	四	二	波 浪
一六.一	一七.七	一八.三	一八.七	一九.八	二二.一	海 水 溫

五 月 一 日	全 月 三 十 日	全 月 廿 九 日	全 月 廿 八 日	四 月 廿 七 日	明 治 四 十 四 年
南 三四〇.五	南 三四〇.一〇	南 三七〇.五	南 三八〇.五	南 四〇〇.八	緯 度
東 一五二.三五	東 一五二.一八	東 一五四.〇六	東 一五五.〇三	東 一五七.〇〇	經 度
全	全	全	全	曇	曇降晴
七七二	七七五	七六九	七六〇	七五七	氣 壓
一九.七	一八.七	一六.六	一五.二	一五.三	氣 溫
八五	七五	八四	八五	八七	濕 度
全	南 西	南	南 南 西	西 南	風 向
全	全	和	軟	疾	風 力
四	七	七	九	九	雲 量
一	二	三	三	四	波 浪
二二.〇	二〇.八	一八.三	一七.二	一六.四	海 水 溫





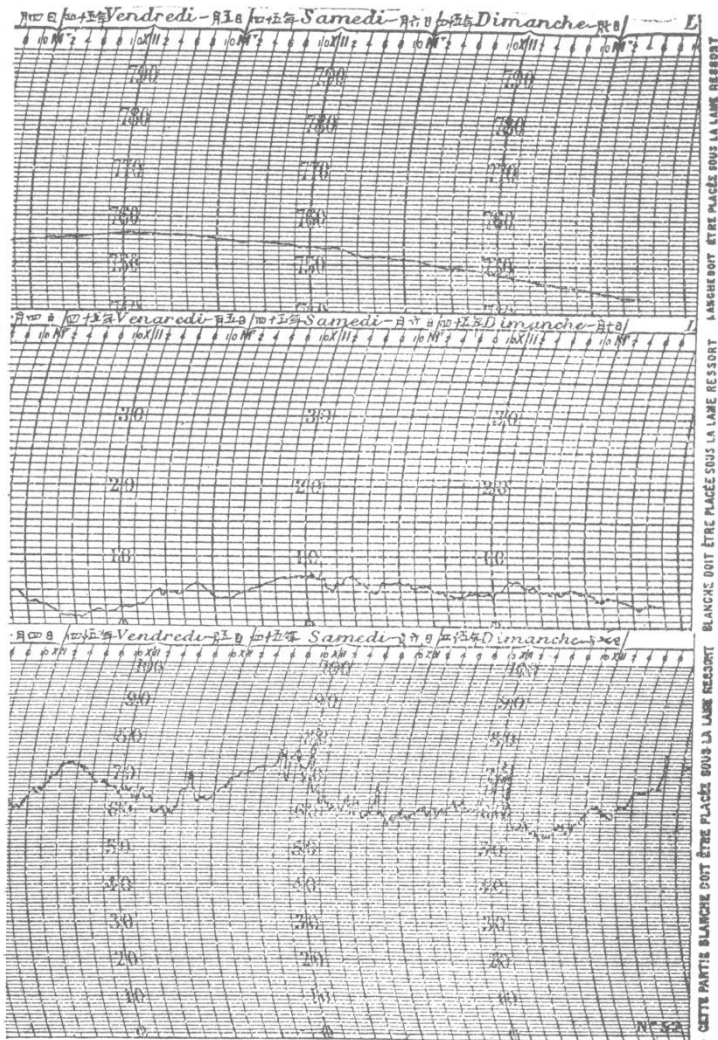
全 月 十 二 日	全 月 十 一 日	全 月 十 日	全 月 九 日	全 月 八 日	全 月 七 日	全 月 六 日	全 月 五 日	全 月 四 日	全 月 三 日	全 月 二 日	十 二 月 一 日	全 月 三 十 日	全 月 廿 九 日	全 月 廿 八 日	全 月 廿 七 日	全 月 廿 六 日	全 月 廿 五 日
南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南
六 五 〇 六	六 四 〇 三	六 二 四 〇	六 〇 二 四	五 七 五 五	五 六 〇 〇	五 三 六 八	五 〇 二 六	五 〇 二 五	四 九 〇 五	四 八 〇 〇	四 六 〇 三	四 五 〇 八	四 三 〇 三	四 〇 二 〇	四 〇 〇 五	三 九 三 〇	三 九 〇 八
東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東
一 六 七 三 五	一 六 六 〇 二	一 六 六 〇 〇	一 六 九 〇 四	一 六 六 〇 〇	一 六 七 五 三	一 六 六 三 五	一 六 八 一 五	一 六 七 一 五	一 六 六 〇 〇	一 六 四 三 五	一 六 三 四 〇	一 六 二 〇 〇	一 六 一 〇 〇	一 五 九 三 五	一 五 八 〇 〇	一 五 六 三 〇	一 五 五 五 五
曇	雪	全	全	全	全	曇	全	全	全	全	全	晴	曇	雨	全	全	全
七 五 〇	七 五 〇	七 五 三	七 五 五	七 五 一	七 四 五	七 三 九	七 四 九	七 四 六	七 四 三	七 四 四	七 四 七	七 五 三	七 五 八	七 五 六	七 四 六	七 六 七	七 六 七
三 、 二	四 、 〇	四 、 六	六 、 五	八 、 九	一 〇 、 〇	一 〇 、 一	一 〇 、 四	一 〇 、 六	一 〇 、 七	一 一 、 三	一 一 、 〇	一 四 、 二	一 四 、 一	一 五 、 九	一 八 、 二	一 七 、 六	一 六 、 八
七 七	八 二	八 六	八 〇	九 二	九 二	八 八	七 六	七 四	八 〇	八 二	八 九	八 五	八 三	八 九	九 二	七 二	八 三
無	東 南	東	北 東	北 北 東	北 西	東 北	西	南 南 西	南 西	西	全	全	全	南 西	全	東	南
無	軟	全	全	疾	和	烈	全	軟	疾	全	強	強	全	疾	和	全	全
一 〇	一 〇	一 〇	九	九	八	一 〇	四	三	四	三	六	五	七	八	七	五	七
三 時 一 分	一 時 一 分	四 時 〇 五	四 時 〇	四 時 七	三 時 七	四 時 八	三 時 九	三 時 八	三 時 八	四 時 九	四 時 八	五 時 一	四 時 一	三 時 一	二 時 四	二 時 五	二 時 七



明治四十四年 十二月十三日	緯度	經度	曇降晴	氣壓	氣溫	濕度	風向	風力	雲量	波浪	海水溫
全月十四日	南 六四。三	東 一六。〇	曇	七四九	三、三	七五	南西	疾	一	〇	零下、五
全月十五日	南 六四。〇	東 一六。五	晴	七五一	三、六	七五	南東	和	一	一	一。〇
全月十六日	南 六四。三	東 一七。〇	曇	七五二	四、六	七三	北	軟	六	一	同。〇六
全月十七日	南 六四。〇	東 一六。〇	晴	七五五	六、一	七三	無	無	四	一	同。〇四
全月十八日	南 六四。三	東 一七。三	曇	七五九	六、一	七二	全	全	五	〇	同。〇
全月十九日	南 六五。二	東 一七。五	晴	七五七	六、五	七二	東	和	四	一	同。〇五
全月二十日	南 六五。三	東 一七。四	曇	七五七	六、八	七五	北	疾	一〇	一	同。〇六
全月廿一日	南 六六。一	東 一七。〇	晴	七五七	三、一	七三	南南西	全	五	二	同。〇
全月廿二日	南 六六。四	東 一七。〇	雪	七五五	二、九	八三	南西	全	九	二	同。一、一
全月廿三日	南 六六。六	東 一七。〇	晴	七五三	三、八	八〇	全	全	六	三	同。〇六
全月廿四日	南 六六。〇	西 一七。二	曇	七三七	三、一	七七	南東	全	六	三	同。〇八
全月廿五日	南 六五。八	西 一七。四	曇	七五六	一、九	七六	南	強	八	三	同。一、四
全月廿六日	南 六六。〇	西 一七。〇	全	七五四	四、五	七三	南東	全	八	三	同。一、五
全月廿七日	南 六六。三	東 一八。〇	晴	七五五	三、二	七七	全	疾	九	一	同。一、三
全月廿八日	南 六六。三	西 一七。三	全	七五八	二、四	七九	全	和	四	一	同。一、五



全 月 十 五 日	全 月 十 四 日	全 月 十 三 日	全 月 十 二 日	全 月 十 一 日	全 月 十 日	全 月 九 日	全 月 八 日	全 月 七 日	全 月 六 日	全 月 五 日	全 月 四 日	全 月 三 日	全 月 二 日	一 明 治 四 十 五 年 一 月 一 日	全 月 卅 一 日	全 月 三十 日	全 月 廿 九 日
南	南	南	南	南	南	東	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南
七 七 〇 五	七 七 〇 四	七 七 〇 三	七 七 〇 二	七 七 〇 一	七 七 〇 〇	七 七 〇 〇	七 七 〇 〇	七 七 〇 〇	七 七 〇 〇	七 七 〇 〇	七 七 〇 〇	七 七 〇 〇	七 七 〇 〇	六 九 〇 〇	六 九 〇 〇	六 八 〇 〇	六 七 〇 〇
西	西	西	西	西	西	西	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東
一 六 三 〇	一 六 四 〇	一 六 五 〇	一 六 六 〇	一 六 七 〇	一 六 八 〇	一 六 九 〇	一 七 〇 〇	一 七 〇 〇	一 七 〇 〇	一 七 〇 〇	一 七 〇 〇	一 七 〇 〇	一 七 〇 〇	一 七 〇 〇	一 七 〇 〇	一 七 〇 〇	一 七 〇 〇
全	全	晴	曇	晴	曇	雪	全	全	全	曇	晴	全	曇	晴	全	雪	晴
七 五 二	七 四 五	七 三 九	七 三 三	七 四 三	七 四 六	七 二 〇	七 四 二	七 四 三	七 五 三	七 五 六	七 五 三	七 五 三	七 五 三	七 五 一	七 四 五	七 四 九	七 五 八
三 六	一 六	二 一	零 下 〇 三	二 六	四 五	零 下 二 二	一 六	五 一	六 〇	三 四	四 二	六 六	四 七	二 〇	三 三	四 一	四 四
五 南 東	六 無	七 南 西	七 北 西	七 南 西	六 西	七 全	六 南 西	五 全	六 南 東	六 南	六 西	六 南 西	七 全	八 北 東	八 南 東	六 西	六 南 南 東
全	軟	和	軟	和	軟	疾	全	全	全	全	全	軟	全	疾	烈	強	軟
四	四	三	七	五	七	九	八	九	八	六	三	五	九	三	一〇	一〇	四
〇 零 下 〇 四	〇 零 下 〇 六	二 零 下 〇 九	一 零 下 一 一	三 零 下 〇 九	二 零 下 〇 六	一 零 下 〇 三	〇 零 下 〇 四	〇 零 下 〇 〇	〇 零 下 〇 〇	〇 零 下 〇 七	一 零 下 一 一	一 零 下 一 〇	三 零 下 一 三	四 零 下 一 五	五 零 下 一 一	三 零 下 一 一	〇 零 下 〇 九

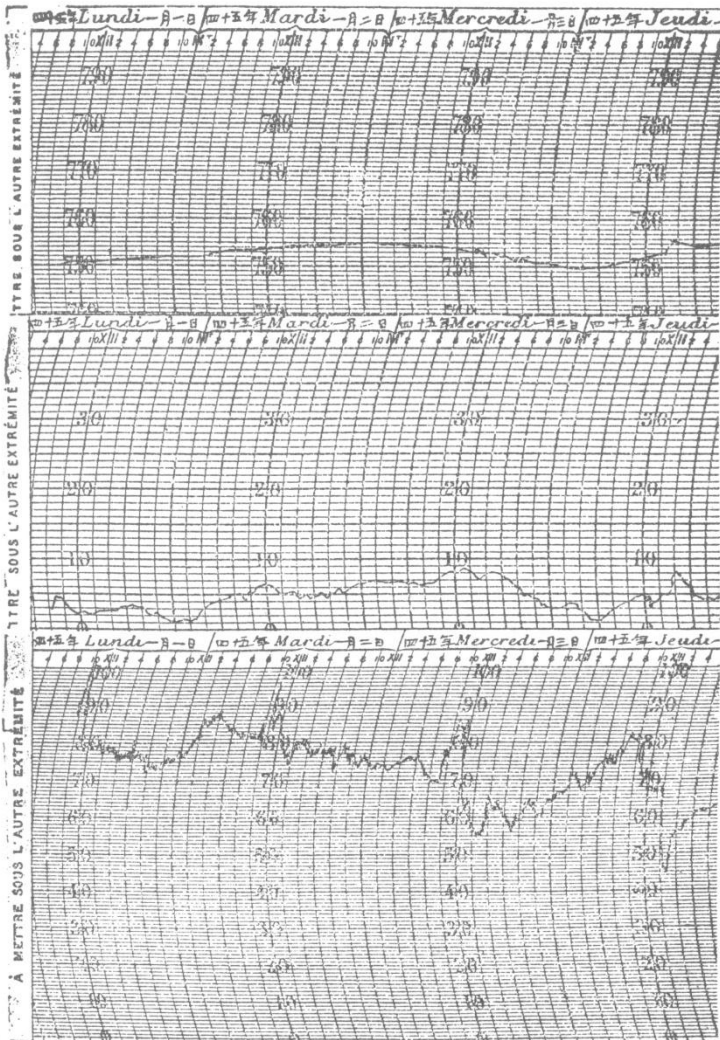


此氣象觀測表に於ける寒暖計は皆攝氏を用ゐたる物氣壓は料を單位となしたるものなり。

セ記自の計度濕は部下計暖寒は部中計雨晴は部上



明治四十五年一月一日より七日に至る分也、氣象観測表に於ける数字は毎二時間に観測せしものを毎日平均せしものなり



也のもるせ記の計記自皆は線横るあ折屈てに紙用測観る



日期	緯度	經度	曇降晴	氣壓	氣溫	濕度	風向	風力	雲量	波浪	海水溫
明治四十五年 一月十六日	南 七六.七	西 一六.五〇	曇	七五.二	零下〇.一	三	南東	軟	五	〇	零下〇.一
一月十七日	南 七六.三	西 一六.四〇	晴	七四.八	零下〇.三	七	無	無	一	〇	零下〇.三
一月十八日	鯨灣上陸	—	全	七四.七	零下二.九	六	全	全	六	〇	零下二.九
一月十九日	南 七六.三	西 一六.四三	全	七四.五	零下六.四	八	全	全	三	〇	零下六.四
一月二十日	南 (根據地) 七六.三	西 一六.四三	全	七四.五	零下二.〇	—	全	全	二	〇	—
一月廿一日	南 七六.三	西 一六.三五	雪	七四.五	零下二.四	—	南東	和	六	〇	—
一月廿二日	南 七六.四	西 一六.三〇	晴	七四.八	零下七.一	—	北西	全	四	〇	—
一月廿三日	南 七六.五	西 一六.二〇	全	七五.〇	零下七.六	—	無	全	五	〇	—
一月廿四日	南 七六.〇	西 一六.二〇	全	七四.九	零下三.四	—	南東	和	四	〇	—
一月廿五日	南 七六.二	西 一六.〇五	曇	七四.九	零下五.六	—	南西	強	七	〇	—
一月廿六日	南 七六.〇	西 一六.〇〇	吹雪	七四.〇	零下八.三	—	全	疾	八	〇	—
一月廿七日	南 七六.四	西 一五.七四	晴	七三.九	零下二.一	—	南南東	和	四	〇	—
一月廿八日	南 八〇.〇	西 一五.七三	霧	七三.九	零下三.一	—	南東	全	七	〇	—
一月廿九日	南 七九.七	西 一六.〇五	曇	七四.一	零下八.三	—	東	全	〇	〇	—
一月三十日	南 七八.四	西 一六.三〇	全	七四.二	零下四.三	—	全	全	一〇	〇	—
一月卅一日	南 七八.三	西 一六.四三	全	七四.五	零下五.七	—	北	全	八	〇	—

全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	二
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
十八日	十七日	十六日	十五日	十四日	十三日	十二日	十一日	十日	九日	八日	七日	六日	五日	四日	三日	二日	一日
南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	全	全	鯨灣根據地
六八〇	六九〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	
西	西	東	東	東	東	東	東	西	西	西	西	西	西	西			
一七〇	一七〇	一七〇	一七〇	一七〇	一七〇	一七〇	一七〇	一七〇	一七〇	一七〇	一七〇	一七〇	一七〇	一七〇			
全	全	全	全	全	全	全	全	全	曇	全	晴	雪	曇	霧	全	晴	雪
七四	七五	七四	七四	七四	七四	七四	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七四	七四	七四
四六	四二	四〇	三三	六〇	〇	一八	〇	〇	一	〇	〇	三	〇	四	五	五	八
八	七	七	七	六	六	八	八	六	六	七	七	七	七	七	九	九	九
南南東	南南東	南南東	全	全	全	全	南東	無	全	北西	東	東北	南	南南東	全	西	全
強	軟	全	全	疾	強	烈	疾	無	全	和	疾	全	和	全	軟	和	疾
九	〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	九	九	九	三	四	一〇	八	三	五	四	八
四	二	三	四	四	五	四	二	一	一	一	二	二	一	一			
一〇	八	三	〇	五	九	三	五	二	八	六	二	二	三	四			



全 月 五 日	全 月 四 日	全 月 三 日	全 月 二 日	三 月 一 日	全 月 廿 九 日	全 月 廿 八 日	全 月 廿 七 日	全 月 廿 六 日	全 月 廿 五 日	全 月 廿 四 日	全 月 廿 三 日	全 月 廿 二 日	全 月 廿 一 日	全 月 二 十 日	明 治 四 十 五 年
南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	緯
五 四。四	五 三。四	五 三。〇	五 三。三	五 七。五	五 七。六	五 八。四	六 〇。〇	六 一。三	六 一。六	六 二。八	六 二。七	六 三。〇	六 五。〇	六 六。〇	度
西	西	西	西	西	西	西	西	西	西	西	西	西	西	西	經
一 七。一	一 七。一	一 七。三	一 七。三	一 七。八	一 七。八	一 七。三	一 七。四	一 七。三	一 七。五	一 七。五	一 七。一	一 七。五	一 七。〇	一 七。五	度
全	全	全	全	全	全	曇	雨	全	全	全	全	曇	雨	全	曇降晴
七 〇。〇	七 三。一	七 三。六	七 六。〇	七 六。〇	七 六。六	七 六。五	七 五。七	七 五。一	七 四。九	七 五。一	七 五。三	七 四。八	七 四。三	七 四。六	氣壓
一 〇。〇	一 一。〇	九 八。八	一 一。九	一 一。九	一 一。九	一 二。〇	一 〇。五	一 〇。三	一 〇。七	八 六。八	六 七。七	七 六。六	七 〇。〇	七 五。五	氣溫
八 四。全	九 四。西	八 〇。南 南 東	八 三。全	九 四。全	九 〇。全	九 〇。西	八 七。南 東	九 一。全	八 三。北 西	七 〇。南 東	六 四。無	八 三。全	八 四。全	八 七。南 東	濕度
全	疾	強	疾	全	全	強	全	烈	疾	和	無	和	疾	和	風向
八	九	六	九	九	九	九	九	九	一	七	六	一	一	一	雲量
三	四	三	三	三	四	五	五	六	四	三	〇	二	三	七	波浪
一 〇。一	九 九。一	八 八。四	八 〇。〇	七 九。九	七 九。九	七 三。七	七 一。一	六 一。六	五 六。六	五 一。一	三 八。三	三 〇。三	二 七。七	二 三。二	海水溫





全 月 廿 三 日	全 月 廿 二 日	全 月 廿 一 日	全 月 二 十 日	全 月 十 九 日	全 月 十 八 日	全 月 十 七 日	全 月 十 六 日	全 月 十 五 日	全 月 十 四 日	全 月 十 三 日	全 月 十 二 日	全 月 十 一 日	全 月 十 日	全 月 九 日	全 月 八 日	全 月 七 日	全 月 六 日
港 ウ エ リ ン ト ン ニ 入 ル	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南
四一四一	四二二一	四三二七	四四一五	四四一五	四四三二	四四三八	四七〇七	四七三六	四八〇三	四七五五	四八一七	四九二八	四九五三	五〇三三	五〇五一	五〇一七	五〇〇〇
	東	東	東	東	東	東	西	西	西	西	西	西	西	西	西	西	西
—	一七四〇	一七四〇	一七三〇	一七三〇	一七三〇	一七三〇	一七九〇	一七八〇	一七三〇	一七五〇	一七四〇	一七二〇	一七二〇	一七三〇	一七三〇	一七三〇	一七三〇
全	全	晴	曇	全	全	晴	全	全	全	全	全	全	曇	雨	曇	雨	全
七六三	七六〇	七六九	七七二	七七二	七七一	七六五	七六六	七五五	七五五	七六八	七六三	七五六	七四八	七三三	七三九	七三七	七五二
一七三	一六五	一三六	一四〇	一三三	一四七	一三三	一二七	一四一	一四一	一二一	一四三	一二三	一二三	一一一	一四三	一四四	一三、四
七三 無	七五 北 北 東	七三 全	七〇 無	七四 全	八四 南 東	七三 南 南 西	八〇 南 西	九六 全	八〇 北 西	七七 南 西	七六 無	八二 南 東	八三 全	八六 全	九四 全	九七 北 西	九三 全
無	疾	全	無	全	全	全	全	疾	和	強	無	全	全	強	疾	軟	全
四	四	四	六	三	四	四	七	一〇	九	一〇	六	六	七	九	九	一〇	八
〇	三	一	一	三	三	三	四	四	三	四	三	四	四	五	三	一	三
一三九	一三二	一三〇	一二八	一二五	一二四	一二二	一二七	一二三	一二六	一二〇	一二四	一二七	一二三	一二三	一二三	一二九	一二四

此氣象觀測表中、緯度の部に於て南とあるは南緯を指し、北とあるは北緯を指せしものなり、又經度の部に於て東とあるは東經、西とあるは西經を指せしものなり、又經度の部及緯度の部に於て數字の中間に『○』印あるは度を表はせしものなり。曇降晴、氣壓、氣溫、濕度、風向、風力、雲量、波浪、海水溫等は毎二時間之を測量せしも紙數に限りあるを以て此觀測表には毎日の平均數量を示せり。氣象觀測表は明治四十三年十一月三十日房州館山出發を起點として明治四十四年五月一日濠洲シドニー歸還まで第一次航海の全部觀測を掲げ、更に明治四十四年十一月十九日濠洲シドニー出發より新西蘭ウエリントン歸還まで第二次航海及上陸中の觀測を掲ぐ、上陸中の觀測は明治四十五年一月二十日より二月三日まで上陸本隊の行ひし觀測を掲ぐる事とせり。歸途新西蘭出發より本邦歸還までの觀測は興味乏しきが上、紙數に限りあるを以て之を掲げず。觀測表に於ける氣壓は 糶 を單位と爲し、氣溫、海水溫は摂氏を用ゐたり。

# 第三章 ペンギーン鳥の胃中より

## 出でし岩石破片研究



日本南極探検隊の極地に於ける採集中最も面白く感ぜらるゝのは帝王ペンギーン鳥の胃腑中に存在して居た幾多岩石の破片である。余の考では穀類を食する鳥類は消化を助くる必要上必ず岩片、石片等を呑んで居るものであるが、肉食の鳥類は概ね是等の必要が無いやうであるからペンギーン鳥の如く魚類を常食として居るものには、石片類を胃中に取り込んで消化を助くる必要は無いと思ふ。けれども其胃腑中から多くの魚の目玉等と共に小石（岩石の破片）の出た處を考へて見ると、つまり石を呑んで居た所の魚をペンギーン鳥が食つて、其魚の胃中に在った小石が、遂にペンギーン鳥の胃腑中に

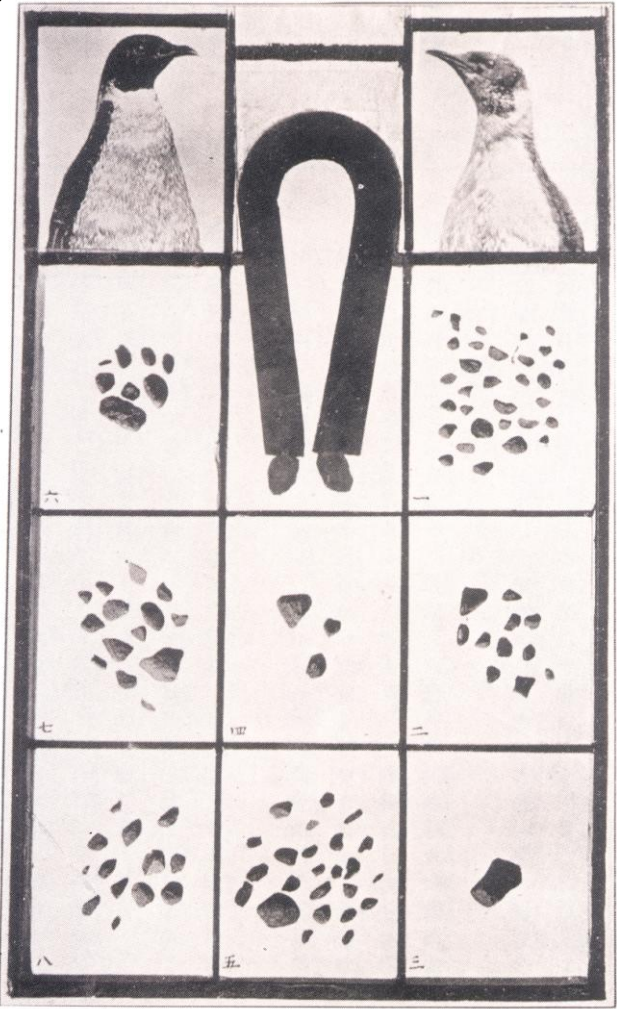


留まつて居たものと判定するが適當であらうと思ふ。がそれは何れにしても、兎に角ペングイン鳥の胃腑中から、此百四十餘個の岩石の破片を得たのだから、同鳥を捕獲せし地點（南緯七十六度五十八分、西經百五十四度五十分）たるエドワード七世州附近の海底及陸地の地質を知るには、此上もない好い材料を得たものと謂はねばならぬ。

是等岩石の破片はペングイン鳥が自ら啄んだにせよ、魚が食つて更にペングイン鳥が其魚を食つたにせよ、兎に角最初之を海底若くは陸上から啄む時には、無意識的に啄んだもので、此處の海岸彼處の沖合、若くは彼方の陸上と云ふ風に、諸處から啄み來つたものに相違ない。之に據つて觀ると、是等の岩石の破片は、其目方に於ては決して多しとは云へぬが、然し彼等が來往棲息するエドワード七世州附近の海底及陸上に於ける地質の標本としては最も適當なるものと謂はねばならぬ。然らばペングイン鳥の胃中には如何なる石が存在して居たか。次に其種類を列擧して見やう。



片破石岩して出リ中胃の鳥ンイグンベ



中央上部は磁鐵也、試に此磁鐵に今回採收し來りしベンゲイン鳥の胃中より出でし石片中の新火成岩片を接近せしむれば、密着する事圖の如くにして搖れど落ちず明白に鐵分を含有する事を示す

岩砂(七)片岩麻片(六)片岩灰凝(五)片岩砂硬(四)片岩珪(三)片岩板粘(二)岩成火新は(一)るけ於に圖本り當に(八第)の文本は(一)の圖本てにのもしせ附に圖本に特は號番列配るけ於に圖本。片岩晶結(八)片る當に(一第)は(八)(四第)は(七)(七第)は(六)(二第)は(五)(五第)は(四)(三第)は(三)(六第)の文本(二)



第一、結晶片岩(Schistose rock)が存在して居た。今回採收した分は綠色を帯びて居るが、此岩は元來變質岩に屬する太古代の岩石で、片狀に削る性質を有して居る。

第二、凝灰岩片(Truff)が存在して居た。此岩片は元來新火山或は古生代の火山の灰の凝結したるものである。今回採收した分は稍や綠白色を帯び、比較的軽く且軟かい性質を有つて居る。尙採收品中には古き凝灰岩片もある。之は稍々帶綠黑紫色のもので、比較的硬く且つ重い。

第三、硅岩破片(Quartzite)が存在して居る。此岩は元來水成岩に屬し古成代に出來たものである。今回採集分の色は白色を帯びて其質頗る硬く鋼鐵と打ては火を發する位のものである。

第四、砂岩破片(Sand stone)が存在して居る。此岩石は元來風化作用を受け砂礫となつて流れ、それが河海等の底に沈澱して固まつたもので、即ち水成岩に屬するものである。今回採集の分は黄色を帯び、粟粒を固めたやうの物である。

第五、砂硬岩片 (Greywacke Sand stone) が存在して居る。之は矢張り水成岩の一種である。今回採收の岩片は、稍や黒味を有する鼠色で、非常に質の硬きものである。

第六、粘板岩片 (Clay slate) が存在して居る。古生代の水成岩に属するものである。今回採收の岩片は眞黒の緻密の泥を固めた如きものである。

第七、片麻岩片 (Gneiss) が存在して居る。太古代の岩石で、變成岩に属するものである。今回採收の分は花崗岩と略ぼ同一の色を有して居る。

第八、新火成岩片 (Volcanic rock) が存在して居る。之は第三期以後に噴出した火山岩の一種である。今回採收せし物は何れも眞黒色を帯び多量の磁鐵鑛若くはチタン鐵鑛を含んで居る。其れゆゑ試に今回採收の是等の岩石に向ひ、磁鐵を接近せしむると直に吸引せられて附着し、搖れども容易に落ちざるものも尠くない。



天然磁石と稱するものは即ち之である。若し是等の鐵分が多量に存在するならば、立派なる製鐵の原料となり得るのである。

以上を總合して見ると、兎に角此ペングイン鳥の胃中に在つた小石によつて左の結論に到達することが出来る。

エドワード七世州附近一帯の地質は、第三期以前の粘板岩と硬砂岩と火山の噴出によりて、出來し新古凝灰岩等によりて、成れるを推定し得べし。



それと同時に是等の破片に據りて、左の推定をする事が出来る。

エドワード七世州附近には嘗て火山の噴出ありき。

之を鑛物學上から見た所では、ペングインの胃中の岩石の破片百四十餘個中には磁鐵鑛若くはチタン鐵鑛の一部を含有する岩石の破片三十個を認むる丈であるが、之を地質學上、地文學上から見れば、ペングイン鳥胃中の岩石の破片は尠からざる



光明くわうめいを斯界しかいに興あたふるものと思おもふ。



澤庵、生姜、奈良漬、梅干、味噌、醤油、大根、味噌漬（以上樽詰）

チース、ラード、ソース、バター、燻豚、ジャミ、芥子末、食鹽、ライムジュ

ース、レモン油、錯酸、玉葱、馬齡薯、赤白甲州葡萄酒、ブランデー、清酒ウ

キース

是等の糧食品は總て、開南丸中部甲板なる大船艙に貯藏して置いたが素より

通風などの設備は無し、殊には機關室に隣して居るので、熱帶通過後には變味

した物、腐敗した物が澤山あつた。

白米なども百度以上もある船艙内に、犬の食糧となるべき干鰯、或は漬物類

と共に在る事故、變味するは勿論、臭味をも帶び、丁度南京米の如きものとな

つた。他に食ふべき米の無きが爲め、一同も喰つて居たが、一度歸國して普通の

米を口にしては、再び食ふ事は到底出來ない。

玄米は如何と云ふと、是は大なる變質を認めなかつた。糯米は如何と云ふに、

之も幾分悪くなり、餅にすれば丁度陸稻にて製せし如き餅となつた。大麥は差し

たる事も無いやうであつたが、麥粉は甚だしく害されて、歸航の際には、薄赤

く變色して、虫の巢の如きものを生じ、遂に七八袋は食用とならず、

海中に投棄するに至つた。

重焼麵麩（陸軍より試験的に寄贈のもの）中には少しく苦味を帯びたるものもありしが、大體に於ては、完全であつた。陸上に於ても、海上に於ても最も適當なるものと思つた。

ビスケットには、五十斤罐の箱入りに、ミヅホ印、王花印、ホマレ印等の數種があつたが、此中ミヅホ印は可なりしが、王花印、ホマレ印等は苦味甚だしくなり廢物となつた。此外テイ印、戰勝印、開南印等上等のビスケットがあつた。是等は食用と云ふよりは、茶菓子的の物で何れも美味であつたが、價も亦他の五倍以上であつた。素麵、乾餛飩等は中々に善かりしも、水を多く要する故、突進用には絶對不適當なる上、航海中にも不適當なりと謂はねばならぬ。味付飯（罐詰）吳罐詰會社より寄贈のものは飯にシンありて海陸共に適せなかつた。牛肉にはコンドビーフ及ロースビーフの二種あり、前者は味を附けしものにて、後者は鹽煮なるが吳二川罐詰合資會社より寄贈の物は變味せなかつたが、



他の罐詰店より購入せし分は、極地に於ては全く腐敗して食するを得なかつた。罐詰魚貝類の中にて、味の餘り變せず佳良であつた物は、鯛デンプ、鯉デンプ、海鰻、海老、蟹、螺蝶、鮑、北寄貝、鮎等であるが其以外のものは、變味或は腐敗して、食用にならなかつた。此外福神漬、金比羅牛蒡、きやら蒔等も佳良にて人蔘、牛蒡、筍、蒔、蓮根、茸等の水煮は、先づく差したる事も無かつたが、人蔘、牛蒡、筍等は半分は腐敗して居た。燻豚は尤も善く、牛酪も變味せず、コンデンスミルクの中鷹印は良好であつた。

チースは全部變質して、海中に投棄した、醤油はヤマサ印、龜甲萬印、上十印、ヒゲタ印、山十印等最上等の物のみ携帯せしが、熱帶寒帶共聊かも變味せなかつた。味噌は仙臺味噌にて、樽入と罐入りとの二種があつたが、罐入りの方は、航海中船の動搖を爲す度に、顛げ廻りて罐を破り、又は赤道直下通過に際し、中より膨脹せる爲め罐破れ、十分の四は廢物となつたが、樽詰の分は更に異常がなかつた。



突進用の味噌としては、仙臺味噌よりは、鯛味噌の罐詰になりしものが、最も適當と認めた、航海中には大豆小豆豌豆等は善く、晒飴は不適當と認めた。樽詰の酢は腐敗を免がれぬ故錯酸は熱帶を通過するには、最も必要である。青物の代用として使用すれば、能く壞血病を防ぎ得たライムジュースは、最も多く斯る場合に携帯するが善い。水を欲する際、水を煮て冷し、ライムジュースと砂糖を入れて用ゆれば、美味にして身體に有益である。菓物類は罐詰にしたのが、最も善い。酒類は概して變味しなかつた。乾物類は半ば蟲が付き、或は黴を生じたが、調理法に依つては食するを得た。

以上は概略であるが、罐詰類が或は腐敗し、或は變味する原因は多々あらんが、罐詰製法の不完全も、確に一因を爲して居ると思ふ。

現に海老の水煮などは、製罐好かりし爲め、一個だに腐敗變味したものは無かつた。尙罐の外面が生地なる分は塗りたる罐に比して、何れも損害が多かつたが、



罐くわんは是非ぜいひ共通きょうと塗料とれうを施ほじこしたい。是これは錆さびを生しやうじ内部ないぶの腐敗ふはいを起おこさないのと、殊ことに寒地かんちでは生地きぢなる罐くわんは普通ふつうの鐵物てつもの同様どうやう其面そのめんに水蒸氣すゑじやうきを帶おびて膠うるしの如ごとくに手てなどに付つきて、往々わうく皮膚ひふを損そんする事ことが在あるが、塗鐘ぬりくわんには此この心配しんぱいは更さらにない。



## 第五章 探検用防寒具の研究

南極は極寒の地に相違ないが然し日本探検隊の行つたのは勿論夏季であつたから、防寒服も格別厚い物は必要がなかつた。

先づ平常はメリヤスのシャツ三枚に、毛織のジャケツ二枚位で、充分であつた。氷上で、活動する時などは是でも大に汗を流す様な場合もあつた。然し風の吹く寒い日などには、其上に陸軍から試験の爲め寄贈せられた毛皮の長チヨツキや、毛襟の附いた外套も着たが、彼の毛皮製の防寒服などは、只だ氷上に於て寢具の代りに時々用ゐた位のものである。

此毛皮製防寒服と云ふのは、樺太産の犬の皮を、裏表二重に縫ひ合せたもので、之を着た姿は全然獸類が人間に化けた様だが其仕立方は普通の西洋服と同様である。只上衣丈は着脱の折の便利に、水兵服の如く潜り込み式にしてある。

又袴またズボンは辻すべ落ちおない様やう、肩かたに眞田紐さなだひもで釣つり上げ、腰こしは同紐どうひもで結びむす締め、足袋たび形かたの頭巾づきんは小紐こひもで上衣うはぎに綴とぢ附つけられ、拇指おやゆびのみ別に縫ぬひたる手袋てぶくろは、左右共眞田紐さいうともさなだひもが附ついて肩かたに懸かけてある。此防寒服このぼうかんぶくは一式しきで、三貫目餘くわんめよもある。嚴寒げんかんの冬季とうきには必要ひつえうであるに相違そうゐない。

尙なほ第二次計畫じけいぐわくの折和漢洋防寒服をりわかんやうぼうかんぶくと稱しょうして、新あらたに黑綾羅紗くろあやらしやを表おもてとし、裏うらにはネルもちを用もちゐ、中なかに眞綿まわたを入いれた支那服仕立しなふくしたてのものを作つくつて、着用ちやくようして見たみが、餘あまり効果かうくわはなかつた。

兔とに角極地かくきよくちの寒さむさは、眞綿まわたなどでは逆とても凌しのげるものでない。

序ついでに寝囊しんのうの事ことに就ついて、一言ごんする。是これも防寒服同様ぼうかんぶくどうやういぬかほせいだが、皮かは内部ないぶのみで、毛けを中なかへ這入はいる人間にんげんの身體からだに當あたるやうに爲なし、外そとには茶褐色ちやかっしよくの洋服地ようふくぢを用もちゐて作つくる。長さながさは七尺幅四尺しやくはつしやくで、足あしの方は幾分いくぶんか細目ほそめの袋ふくろとする。携帶けいたいの折をりは、クルク捲まきて附屬ふぞくの紐ひもで、縛しばる様やうに出來できて居あるので、非常ひじやうに便利べんりで、突進とつしんの折をりなど露營地ろえいちに至いたると、直接ちやくせつを氷上ひやうじやうに展のべて寝ねるのであるが、



下靴及袋手靴寒防用軍陸(がるあ紋斑)靴豹海と兼寝るたか墨は左 袋手着明皮毛トツヤジは右てつ向部上



下圖寝着中の人は村松秘書





中々暖かなかくあたたかで頗すこぶる具合ぐあひが宜よかつた。無人境雪むじんきやうせつ中行進かうしんには此囊このふくろは是非ぜひ共必要ともひつえうなものである。

白皚はくがい々たる氷野ひやうやに上陸じやうりくして、第一着だいいちに冒ちやくされ易やすきものは、雪ゆきの反射はんしやより來きたる雪盲病せつまうびやうである。初めはじ此病氣このびやうきを防ふせぐ爲ためめに、二種しゆの雪眼鏡ゆきめがねを携帶けいたいしたが、二つながら具合ぐあひが悪わるく、鯨灣ホエールベイ上陸じやうりく當時たうじ既に三四名めいの患者かんじやを出いしたのは誠まことに残念ざんねんであつた。

其眼鏡そのめがねと云いふのは一個こは、潜水用眼鏡せんすゐようめがねの如ごときもので、黑色こくしやくレンズの周圍しうゐには皮かはを縫ぬひ附つけ眼めの縁ふちに密着みつちやくする様やうに出來できて居あるので、過激くわげきの勞働らうどうに従事じうじする折をりなど、眼縁めがちより發はつする溫氣をんきは、レンズに當あたりて氷結ひやうけつするので、直たうちに透明とうめいを缺かき永ながく、使用しやうに堪たへない。他たの一個こは黒絹くろくの布ぬので眼隱めかくしする、と云いふ至極しごく簡便かんべんのもので如何いかにも、汗あせの氷結ひやうけつする恐れおそはないが、吹雪ふぶきの折をりなど布目ぬのめより、雪片せつぺんが飛とび込こんで眼めを刺さし堪たへ難がたい苦痛くつうを與あたへた。斯かる始末しまつで此眼鏡このがんきやうに就ついては、何れいづも辛い經驗けいけんを嘗なめた結果けつこわ、茲こゝに理想的りさうてきの物ものを考案かうあんするに至いたつた。それは約幅やくはく一寸五分位すんぶくわいで、

兩眼を覆ふべき長さの皮に、眼球の當る處を切り抜き、其左右に適宜切り口を付けて、是に所要の硝子を嵌め込みて、使用するのである。之ならば汗の硝子に氷結する事はなく、又同色の眼鏡は、視力を非常に疲勞さすもので、二三日に一回位づゝ異なりたる色硝子と交換せねばならぬが、それも此眼鏡ならば出來至極實用的のものである。

氷上用の靴としては、陸軍より試験の爲め寄贈せられた、絨靴を澤山携帯したが、之は騎兵の乗馬用のものであるから、單に防寒の効力はあるにしても、氷上歩行の際に用ゆるには適當とは云ひ得られない。

彼の鯨灣に於て活動せる際など、初めは絨靴に鐵カンヂキを結び付けて使用して見たが、餘り重いので暫時の後、一樣に之を捨て、藁靴を用ゐた。木綿と毛織の靴下三枚に藁靴であるから至極軽く、暇令内部に濕氣が入つても勞働のお陰で更に寒さを感じなかつた。

加之此藁靴は氷堤に於ける荷物運搬の折など、胸突きの雪坂を登るに少しも滑らないので、カンヂキの必要も無く、頗る便利であつた。が材料が材料



であるから、永持せず一日一足乃至二足位穿き切るの之には大に閉口した。  
此藁靴の特色を有し、然も其缺點を補ひ得るのは、アイヌ人の海豹靴であつた。是は海豹の皮を以て作つた長靴であるが、第一濕氣が内部に透す心配もなく、至極軽くして雪にぬかりもせず、突進隊は皆之を用ゐて充分其効果を認めたのである。





## 第六章 樺太犬及橇の研究

當初第一次計畫に於て、探検隊が本邦を出發する際には三十頭の樺太犬を手に入れ、開南丸に乗せて南征の途に就いた。而して其犬小屋と云ふべきものも、二〇四噸の同船の事であるから、中々充分の容積が取れない。僅か幅六尺高さ五尺奥行四尺の箱を作り、上下二段に都合八區劃を設け、是に收容したのであるから、内地産より餘程大柄の樺太犬には、餘りに狭猛であつたのだ、而も晝朝晩の食事時の外は絶えて甲板に出さなかつたので、其窮屈さ加減は畜性とは云へ又同情に堪へんものであつた。斯くして愈々赤道直下に差掛るや、焼くが如き炎熱は、寒氣に馴れたる彼等に、一層の苦痛を與へしものゝ如く、其運動不充分なると共に、大に元氣衰へた。南緯に入る頃より、一頭斃れ二頭斃れロツス海に到る折は無殘にも一頭を残して、全部斃死したのである。

其経過の模様は最初食欲が減ずると同時に脚氣かレウマチスの様に、足部に異状を呈して来る。臆がて全く歩行が出来なくなるや、癩癩の如く口から泡を吹いては身體を悶えて苦しむが、此泡を吹き初めたが最後、最早一時間も保たずして絶息するのであるが、種々手を盡し薬品など與へても更に甲斐なく、多い時には三四頭も一時に、水葬した事があつた。

斯る始末で輓犬も全滅したので、再擧に際しては更に三十頭を樺太より取り寄する事となつた。で今回は増派學術部員と共に、アイヌ橋村彌八附添ひの上、シドニー迄熊野丸で到着し、更に開南丸に收容せられて、極地向つたが、今度は全部無事極地へ上陸し、非常の効力があつた。第一次の犬は三十頭共殆ど全部死滅し、第二次の犬は殆ど全部無事であつた。原因は何れに基くかと云ふに、後援會では第一次の失敗に鑑み第二次の折には犬が横濱へ到着するや直に獸醫に診察して貰ひ、又其糞便を農科大學に送つて検査して貰つた所、此糞には絛蟲が居る。前回の死歿も恐らく絛蟲

に基もとくであらう。之これを驅除くじよしなくてはならぬと云いふて藥くすりを與あたへられた。船せん中ちゆうに於おいても時々注意ときくちゆういして此藥このくすりを與あたへたと云いふ事は恐おそらく歿死ぼつしを免まぬがれた原因げんの主しゆなるものであらう。

一たい體から樺太ふと犬いぬは多種たしゆの輓犬ひきいぬ中ちゆう尤もつとも牽引けんいん力りき多く性質せいしつ又また溫順をんじゆんで能よく人ひとに馴なれるので、今回こんぐわいの探檢たんけんにも、非常ひじやうに役やくに立たつた。此犬このいぬが橇そりを引ひくには橇そりの先端せんへ海豹あざらしの皮かはで造つくつた丈夫ぢやうぶな引索ひきづなを結むすび付つけ其先そのさきに先頭犬せんとういぬを繼つぎ他たは優等いうとうの犬いぬより順次索じゆんじつなの左右さいうへ千鳥形ちどりがたに配置はいちするのである。所ところが此先頭犬このせんとういぬは最も撰擇せんたくを要えうするので其一舉そのきよ一動じゆうは實じつに一隊たいの安危あんきに係かはる。で餘程よほじれいり伶俐もつとにして溫順おんじゆん而しかも勤勉きんべんで衆犬しゆうけんの模範もほんとなる資格しかくを備そなへた者を撰えらばなくてはならぬ。倅其進行さてそのしんかうの模様もやうは如何いかんと云いふに、先づ馭者ぎよしやが板坎いたデキを穿はきて橇そりの先端せんたんに打うち跨またり、トオク（引ひく引ひく）の號令がうれいを下くだす時は先頭犬せんとういぬは第一だいい番ばんに身みを躍おどらして引ひき出いだし、以下いかの犬亦是いぬまたこれに做ならふて飛とび出いす。右みぎに曲まがるにも左ひだりに折をれるにも一ぎよに馭者ぎよしやの號令がうれいに従したがふて進すすむのである。

其運搬力は如何程あるぞと云へば、先づ左に突進隊が携帶の物品及目方を示して見やう。

突進隊携帶品

被服

防寒服（表裏犬毛皮製、製頭巾手袋付）五着 一六貫三七五匁

防寒外套（カーキ絨毛製頭巾手袋付）五着 三貫二〇〇匁

寢囊（表裏犬毛皮製）三着 六貫三〇〇匁

防寒服（眞綿製、頭巾手袋付）一着 八七二匁

換襦袢 二十着 四貫四〇〇匁

換手袋（茶毛糸メリヤス）十五着 四〇五匁

耳覆（鼠皮製）五組 一五匁

黒色目鏡（豫備）三個

鞭下（茶メリヤス）二十五足 七五〇匁

金標（カンジキ）十組 六〇〇匁



絨毛製靴

毛布

天幕 (三人住)

キャンパス (一間 || 二間 一間 四方)

犬靴

食物

重焼パン

ビスケット (ミズホ)

同 (ホマレ)

副食品

牛肉大和煮

鶏肉

魚煎餅

螺螄

八足

一枚

一折

各一枚

百足

百五十食

五十斤

二十五斤

二百罐

五罐

五磅

五罐

二貫七二〇匁

三五〇匁

三貫三二〇匁

一貫八六〇匁

六〇〇匁

コンペイ糖 とう  
 お多福豆 たふくめ  
 ミルク  
 トロ口昆布 こんぶ  
 シメジ  
 松茸 まつだけ  
 乾海苔 ほしのり  
 牛酪 ぎゅうらく  
 燻豚 はむ  
 鯛デンプ たい  
 海老 えび  
 鯛味噌 たいみそ  
 鮑 あわび  
 小鮎 こあひ

( 磅入 )  
ポンドいれ

( 磅入 )  
ポンドいれ

( 半磅入 )  
はんポンドいれ

( 磅入 )  
ポンドいれ

( 磅入 )  
ポンドいれ

五百匁 もんめ  
 五罐 かん  
 二十磅 ポンド  
 一斤 きん  
 六磅 ポンド  
 六磅 ポンド  
 一磅 ポンド  
 三磅 ポンド  
 二個 ニ  
 三罐 くわん  
 三罐 くわん  
 十罐 くわん  
 十罐 くわん  
 五罐 くわん

角砂糖 かくざとう  
 焼鹽 やきしほ  
 胡椒(唐) こしょう  
 パインアップル  
 金柑 きんかん  
 茶 ちや  
 味の元 あじもと  
 醬油 しょうゆ  
 犬食物、鰯 いぬしょくもつにしん  
 石油コンロ せきゆ  
 鍋(瀬戸引一升入蓋付) なべせとひきしやういれふたつき  
 マッチ  
 衛生材料 ゑいせいざいれう  
 寫真材料 しやしんざいれう

五百匁 もんめ  
 二磅 ポンド  
 四十匁 もんめ  
 十罐 くわん  
 三罐 くわん  
 廿匁 もんめ  
 一瓶 びん  
 一磅 ポンド  
 四俵 へう  
 壹個 こ  
 一個 こ  
 二十個 こ  
 三個 こ  
 一貫八一〇匁

四〇貫〇〇〇匁  
 二〇〇匁  
 一二〇匁  
 三六〇匁

石油せきゆ

一罐くわん

四貫〇〇〇匁

竹竿たけさ

十本ほん

一貫一〇〇匁

目標旗もくひやうき (金屬製)

十枚まい

八〇〇匁

輓犬係ひきいぬがかり、山邊安之助やまべやすのすけ體重たいぢゆう (被服共)

ひふくとも

廿一貫くわん

輓犬係ひきいぬがかり、花守信吉はなもりしんきち體重たいぢゆう (被服共)

ひふくとも

十九貫くわん

外そとに學術器械がくじゆつきかい

四貫くわん

被服計ひふくけい 四十二貫七百七十七匁くわん もんめ

食物計しょくもつけい 二十七貫くわん

副食物計ふくしょくもつけい 三十七貫八百二十匁くわん もんめ

犬食物いぬしょくもつ以下いか學術器械がくじゆつきかい迄計かいまでけい九十二貫三百九十匁くわん もんめ

總重量そうぢゆうりやう 壹百九十九貫九百八十七匁くわん もんめ

犬一頭いぬとうの負擔ふたん量りやう七貫百四十二匁強もんめきやう

此表このへうに據よれば總重量そうぢゆうりやうは壹百九十九貫九百八十七匁くわん もんめで之これを實際じつさい運搬うんぱんに使用しやう

し得えた輓犬ひきいぬ二十八頭とうに割當わりあつると、一頭とうの運はこぶべき重量ぢゆうりやう七貫百四





十貳もんめきやう勿強なと爲る。探檢本隊は二臺だいの橇そりを用ゐ一臺だいに十四頭とう宛犬づいぬを使用した  
が前まへの橇そりを牽ひく十四頭とうは能よく是等これらの重量ぢやうりやうを積つんで、駈出かけだしたが、後あとの橇そりを  
牽ひく十四頭とうは之これに堪たへない。屢々しばしば顛覆てんぷくする。そこで副食物ふくしょくもつ五貫くわん五百もんめ匁もんめと犬  
の糧食りやうしょく十貫くわん目程めほどを減げんじ漸やうやくに走り出はしすやうに爲なつた。即ち前橇せんそりの犬いぬの牽けん  
引力いんりよくは一頭とう七貫くわん百四十二もんめ匁もんめだが後橇あとそりの牽引力けんいんりよくは一頭とう六貫くわん卅五もんめ匁もんめである。  
所ところが久ひさしく船中せんちゆうにあつて疲つかれて居ある爲ためか犬いぬの疲勞ひらうが甚はなはだしい。漸やうやく最初さいしよ  
の日は三里り十八丁ちやうを進すんだに過すぎぬ。次の日は如何いかんと云いふに是又これまた三里二十  
丁ちやうを進すんだのみである。そこで到底たうてい荷物にもつの大削減だいさくげんを行おこなはざるべからずと決けつ  
心しんし、前日ぜんじつの削減さくげんの外ほか、更さらに五十四貫くわん二百七十もんめ匁もんめを減げんじた。最初さいしよの重量ぢやうりやう百  
九十九貫くわん九百八十七もんめ匁もんめから引ひくと百三十貫くわん二百十七もんめ匁もんめである。鞆犬ひきいぬ一頭とうの  
運搬うんぱんすべき目方めかたは四貫くわん六百五十もんめ匁もんめと爲る。そこで、此削減このさくげんを行おこなひ置おきて隊たい  
長ちやう、武田たけだ、三井所みみしよの三氏しは屢々しばしば橇そりに乗のる事こととした。其目方そのめかたは左さの如ごとくであ  
る。

白瀬隊長しらせたいちやう 被服共ひふくとも 廿一貫くわん

武田學術部長 被服共 二十貫

三井所衛生部長 被服共 十八貫

合計 五十九貫

之に前の削減後荷持の總目方を加ふれば壹百八十九貫貳百十七匁である。此の如く爲してから犬の牽引力は大に増加した。一日に六里十二町進んだ日もあれば、八里三十町進んだ日もあり、九里十八町進んだ日もあれば、十里進んだ日もある、最も善く走つた日には二十三里餘走つた日もあるのである。平均すれば先づ日本里程で拾壹里廿三町になるのである。

進行中の彼等の食物は矢張鯁の干物であるが船中などでは食事の折は必ず三、四合の水を與へて居た。氷上では勝手に雪や氷を食つては渴を醫して居た。尚犬は人や馬のやうに雪の反射の爲め雪盲症に罹つて失明すると云ふ事がなく、又寝るには雪の上になくなつて寝るので、



體溫で次第に雪が融け身體の形に窪む。其所を口で掘つて穴を作り其内に安眠すると云ふ始末で寒氣には中々強いものである。

本隊で使用した橇は、手橇犬橇の二種である。手橇と云ふのは勿論人間の曳く橇であるから最も輕便に出來て居る。此橇は越後で作らしたもので高さ四寸幅一尺五寸、長さ四尺、之に五尺の梶棒が附いて居て、一寸短距離の荷物運搬の時など、大に便利であつた。只だ其缺點と云ふのは丈が餘り低い爲め、雪の軟らかき處などでは、深く嵌り込み、荷物が雪に支へらるゝと云ふ始末であるから、初め四十貫位は引ける豫算が、全く齟齬して先づ二十貫位しか引けなかつたが、高さを六寸位にし、全體の用材を一層手輕にしたならば、三十貫位の荷物運搬は易々たるものであらう。

犬橇は樺太出來の、十一尺のものであるが、是は又手橇と反對に、高さが一尺もあり、而も幅が一尺二寸位であるから、荷物の積載量は少く、二尺の高さに荷物を積むと直に横倒れに倒れるもので、突進隊も是れに



は非常に困難した。然し是等の辛き經驗から、其改良の點を云ふて見れば、長さは十一尺、高さは六、七寸幅は一尺七八寸位にしたい。尙ほ日本で出来る橇は皆一様に滑り板が極狭く殊に本隊の犬橇などは、一寸七分位で殆ど角材のようで、雪に摺り込み進行を非常に妨げた。是は是非三寸から四寸位にして、底の方に一條の溝を掘る必要がある。夫は傾斜せる個處を進行の際、横に滑らない爲めである。尤も日本製のものは、皆此目的の爲め、幅四分厚一分位の鐵板を釘打付けであるが、極寒の地では鐵物は、却つて滑りが悪く、橇は重くなるので、鐵板の代りに溝を付けた方が總ての點に於て有効であると思ふ。

外國の探檢家には此犬橇の外に帆を懸けた橇などを用意したものもある。又諾威のアムンドセン隊などは、各人スキーを用意して之を馳せて突進し非常の効果を奏したようである。今後の雪上探檢家は此スキーの研究と練習とを怠つてはならぬ。

## 第七章 探検隊衛生報告

南極探検隊が本邦出帆後に於ける健康状態に就いて其大略を述べて見ると、先づ館山出帆後直に非常なる大波に遭つて、船員の半数と陸上隊の全部とが猛烈なる船暈に罹つた。之は船體の傾斜も一原因に相違ないが一ツは船室内に發生したる、三メチールアミン其他の瓦斯中毒の關係もあつたのだ。就中高取機關部員の如きは平素多少、心臟病の氣味があるので氏の職務は著しく健康を害し種々手當を施して後漸く恢復した位であつた。何しろ船内最底部の木材に滲入した鮭、鱒、鱒、等魚類の血液や脂肪や硫化物等の惡臭が容易に除去することが出來ぬので、途中は左程でもないが、赤道附近に赴くに從つて、それ等惡臭物が醗酵を始めて三メチールアミン、其他の有害瓦斯を熾んに發生し、一方ならず乗組員を苦めた。此瓦斯中毒に罹ると、頭痛眩暈等の症狀を起し實に不快に堪へぬ。

終日しゅうじつこれを嗅かいで翌日よくじつに至いたると、到底たうてい執務しつむに耐たへぬやうになる。それが爲ために乗組員のりくみんは豫定よていの室内しつないに起臥きぐわするを廢やめて何れも甲板かんばんじやう上に到いたり或あるひは「セー  
ル」を張はつて假屋かりやを造つくり或あるひは斜ななめに伏ふせられたる短艇ボートの下したに潜くゞり込こむ等とう、不  
便べんながら成なるべく船室内せんしつないに入はいらぬ工夫くふうを講かうじた。

館山解纜たてやまかいちん後ご新西蘭ニージーランドウエリントンまで七十三日間にちかんを費ついやしたが其長途そのちやうとの航  
海かいには百度ど以上の炎熱えんねつにも苦くるしめられ、又糧食またりやうしょくの如ごときは赤道せきだうを通過つうくわせし爲  
め、一部ぶの物ものは全然ぜんく腐敗ふはいしたるものもあり、或あるひは腐敗ふはいせざるまでも著いちじし  
く變味へんみせし物もの多く加くわふるに飲料水いんれうすい不ふ充分じゆうぶんであるから其苦痛そのくつうたるや全まったく言  
語ごに絶ぜつして居ゐる。

之これより後のち、南緯なんゐ三十六度四十八分邊ぶんで暴風ぼうふうに遭あつた時とき丹野たんの一等運轉士とうりやんてんしが  
過あやまつて前額せんがく及および左腕さわん等に負傷ふしやうした又「ウエリントン」港口かうこうで激浪げきろうに遭あつた時  
白瀬隊長しらせたいちやうが重心ちゆうしんを失うしなつて蹣跚よろめき甲板かんばんじやう上の端艇ポートの尖端せんたんへ突當つきあたり轉倒てんたう氣絶きぜつ  
した事こともあつたが之等これらは日ひならずして全快ぜんかいした。兎角とかく前進ぜんしんする時は勇氣いゆうきが

全身ぜんしんに満みちて居をつて少すこしの油ゆ断だんも無ない爲ため中なか々病びやう氣きなぞには罹かるもので  
は無ないが、イザ目もく的てきを達たつしたとか、或あるは歸き還わんとか云いふ場ばあ合あひになると、元げん氣き  
が挫くちけたり或あるは油ゆ断だんする爲ため随ずい分ぶん自みづから求もとめて健けん康かうを傷きつぐるやうのことが  
多おほい。そここで此この點てんに就つては、船ふねが空むなしく中ちゆう途とから引ひ還かへすの餘よ儀ぎなきに至いたつ  
た當たう時じから、隊たい員いん船せん員いんに向むかつて懇こん々くと注ちゆう意いを促うながしたのであるが、果はたして歸き  
航かうの船せん中ちゆうに於おいては病びやう人にんが多おほかつた。其その種しゆ類るゐは腦のう充じゆう血けつ、氣き鬱うつ症しやう、消せう化くわ不ふ良りやう、  
脚かっ氣け等とうで、中なかにも吉よし野の隊たい員いんは胃ゐ加か答た兒るに黄くわう疸だんを併へい發はつして中なか々苦くしんだが、  
船ふねがシドニーに入はいると同どう時じに陸りく上じやう静せい養れうをして全ぜん快くわいした。

船ふねがシドニーに到たう着ちやくすると、永ながらく船せん中ちゆうで閑かん暇か無ぶ聊りやうに苦くめられて氣き鬱うつ症しやう  
に罹かつて居ある隊たい員いんは、上じやう陸りくの際さい一じ時に随ずい分ぶん過くわ激げきなる勞らう働どうを行おこなつた爲ために其その  
疲ひら勞らうが發はつして來きて何いづれも輕けい度どの衰すゐ弱じやく症しやう狀じやうを呈ていした。三うら浦ちゆう厨ちゆう夫ふは劇げき動どうの結けつ果くわ、  
腦のう充じゆう血けつを起おこし一じ時じん人じん事じ不ふ省しやうに陥おちつたが應おう急きゆう療れう法はふを施ほじ週しゆう餘よ日じつにして快くわい復ふく  
した。

隊員廿七名中白瀬隊長、及び二三の隊員を除くの他は皆齒痛に悩まされ  
たが、之は氣候と食物との關係が主なる原因であつた。

三浦厨夫は腦充血を患つて病後の衰弱が却々容易に舊に復しさうもな  
い其上に齒痛も、時々やつて來るので極地の活動には到底堪へざるものと  
認め此地から本國へ歸還せしむることゝした。高取火夫はシドニー滞在中  
脚氣兼神經性心悸亢進に罹り、佐藤舵夫は脱腸症に、丹野運轉士は痔疾に罹  
りて何れも極地に向ふには不可と認めたるにより「シドニー」より歸國に  
決した。

「シドニー」滞在中の營舎は極地冬營の目的を以て準備しゆきたる四間  
半に二間半の木造平屋建の組立家屋であつたが、位置は「ジャクソン」灣の  
左岸パースル灣の南端の丘上だが後方には稍や高き丘を控へ左右の兩側  
も三十度計りの傾斜を有する小丘ありて、恰も丘上の谷間とでも云ふべき  
場所なる故、餘りに衛生的の地勢でない。一帯に濕氣多く殊に降雨時の如き  
は後方の丘上から灌の如く雨水が營舎の背部に注下する。處が幸にも、



地質が砂地であるから營舎の周圍に菱形の溝を設けて排水工事を施した。其爲めに土地も非常に乾燥した。

氣候は年中を通じて我國春秋の二季に等しい。寒中と雖も若干の降霜を二三回見るのみで、又夏季にても日中汗を流すといふやうのことは稀で、山野の草木四時綠色を帯び代るく紅の花の絶ゆることが無いと云ふ位である。實に此秀麗の美と季候の順とは慥かに半歳の間窮屈なる船房内に乾燥無味なる生活を續けて居た隊員一同の苦痛を醫するに大に力あつたのである。それから、此滞在中は注意して毎日體操擊劍柔術角力等をも獎勵した。是等は云ふまでもなく士氣の鼓舞にもなり、衛生上にも大に直接の効果があつた。

第二次航海に於てシドニー出帆より極地突進までは雨雪暴風等が絶えず襲來して天候が頗る不定であつたが、幸にも健康状態は極めて佳良であつた。

三月十七日 鯨灣に到着した。其翌日猛烈なる吹雪中荷物を根據

地へ運搬した爲め、雪盲症に罹つた者が多かつた。此雪盲症といふのは雪の爲め光線の反射が強いのと又、一つには吹雪や濃霧の際微細なる雪片の結晶が眼中に入つて角膜を侵して充血を起し羞明流涙。其疼痛が却々甚しくなつて來て、遂には視力に障碍を與へるやうになつて來るのである。點眼注意すれば、大概五日乃至、十日位で全治する、そこで之を豫防する爲めに藍色の眼鏡を用ゐたのであるが内部より發生する水蒸氣は鏡面に氷結して半透明となり、作業上不便を感じ折々眼鏡を外した爲め此不幸にかゝつたのである。

南極圏に入つて最も心配したのは凍傷であつたが、之は初から非常の注意を以て外部に現はれて居る部分は必ず豫防藥たる石樟軟膏を塗擦することにし、手袋は其上へ纏ふことにした。勿論濕氣ある被服類は一切皮膚に接せないやうにした。それが爲めか凍傷に罹つた者は先づ殆ど無かつたと云つてもよい位であつた。只武田學術部長が破損せる磁石を修繕すると、過つて金属の一端に指端を觸れたので軽度の凍傷に罹つた位のもので

之も數日にして全治した。

齒痛患者は第一次の時と同じく第二次航海に於ても割合に多かつたが、之は矢張何れも主として氣候と食物との關係が大に同病を誘發する原因を爲した事と思ふ。けれども皆重症には至らないで大抵三四回の充填治療や五六日間の含嗽で全治した。元來雪を噛むと云ふことは勿論齒の爲めには甚だ善くないが我隊の計畫としては氷を噛み雪を舐るが如きは易々たる條項の一つで不衛生も敢てするの止むを得ないのであつた。是が爲め武田學術部長は前齒を損じ全快迄には月餘を費した。殊に鍍金齒の者は口を開く事さへ極地に於ては餘程注意を要する事を知つた。余は試に鍍金前齒を數秒間露出したが其疼痛は劇甚で而かも唇を閉づる際鍍金に氷着せんとした。

今回の探檢に際しては、葡萄酒は時々適度に用ゐたが。其他のアルコール類は絶対に禁止して居た。

歸還の途中ウエリントンに於て安田木工が脚氣を發した爲め同人

は同地から郵船で歸國さすることゝした。

四十五年四月二日ウエリントンを出發して六月二十日芝浦海岸歸着までは病人等皆無にて一同何れも非常なる元氣であつた。

衛生状態の大體は上記の如くである。言ふ迄もなく我探檢隊の一行は最初から何れも強健の者許を選抜したのではあるが何しろ長途の航海といひ飲食物の如きも新鮮なるものは容易に攝取することが出來ず、加ふるに氣候風土等の關係も著しく變化があるので少からず困難した。が然し一行中一人の病歿者もなく又甚だしき大患者もなく、無事歸還し得たのは衛生部長たりし余（三井所氏）等の最も満足に感ずる所である。



## 第八章 開南丸氷海進航設備

日本南極探検隊の用船として、偉大なる効果を奏した開南丸は、如何なる構造の船であるかは一般社會の知らんと欲する所と思ふから茲に其大要を紹介する。

同船は素と報效義會が伊勢國大湊の市川造船所に命じて明治四十三年度に造らしめたものである。それを同會から買受けて探検船として使用したのである。買受けの際には蒸汽機關は附いて居なかつたので大阪の頼田鐵工場より購入して備附ける事とした。

先づ大要を述べると、三本檣スクーナー型木造重甲板船にして、之に十馬力の蒸汽補助機關を据附けたのである。船體の重要寸法は下の如くである。

長 (垂線間)

壹百呎





幅 はゞ  
 (肋骨の外面にて) ろくこつ ぐわいめん  
 貳拾五呎九吋 ふいーと いんち

深 ふかき  
 (龍骨上面より梁端まで) りやうたん  
 拾貳呎九吋 ふいーと いんち

總噸數 (石川島にて修繕後の總噸數) そうとんすう  
 貳百四噸 ふひゃうしよとん

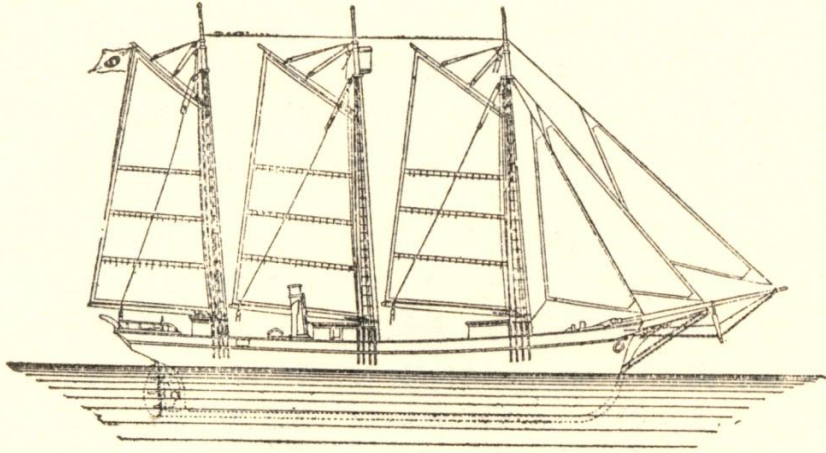
試に之が構造に就いて、梗概を述べると、下の如くである。

龍骨は椶材幅拾吋半、深さ拾壹吋にして肋骨は椶材幅五吋深さ拾吋の二材合せと爲し各心距拾九吋とす、内龍骨は椶材拾吋半角にして側内龍骨は松材深八吋幅拾吋灣曲部縦通材は松材厚さ參吋半幅拾吋半五枚通りとす。

龍骨翼板は椶材厚さ四吋幅拾吋四分の一舷側厚板は椶材厚さ參吋半幅拾壹吋外部腰板は椶材厚さ參吋四分の一幅四拾吋にして、其他の外板は椶材厚さ參吋幅八吋とす。

梁は松材九吋角にして艙口及檣前後の梁は松材九吋半角とす。梁柱は椶材六吋半角にして各梁毎に之を設く。

以上は同船構造の梗概であるが、同船は邦人に取りては未知の海洋



(物 の 用 海 航 次 一 第 は 帆) 圖 略 丸 南 開

なる南極氷海に向つて突入するのであるから、石川島造船所に託して、能ふべきだけ氷海突入に就いての設備をした。先づ外部の装置から述べて見ると船の全身約四分一位、船首兩側に、二吋半の厚板を、水平線より龍骨に至る間打付け、又た同じ厚さの板を水平線へ、艫まで一様に張つた。此板は半分水水中に入り、半分水上に在る譯である。而して此板を張れる部分には、コールタを塗つた。厚板を張つた部分の下部は、龍骨まで全部兩側に、其船體保護の爲め、氷の衝りの激しきと

おも思はるゝ箇所に、それく又た件の厚板を張り、それ以外の部分には一寸板二枚づゝを張つた。

斯く厚板を張つた上へ、更に毛製紙を張り、其上に鐵板を張ることにした。而して船首より四分一の處へは、八分一寸の鐵板を底部まで張詰め、尚ほ厚板を張つた部分へは、すべて相當の鐵板を張つた。

船首材の外に、高さ十尺許りの鐵鑄物を、防護の爲めに装置した。之は海水の結氷を裁斷せむが爲めである。

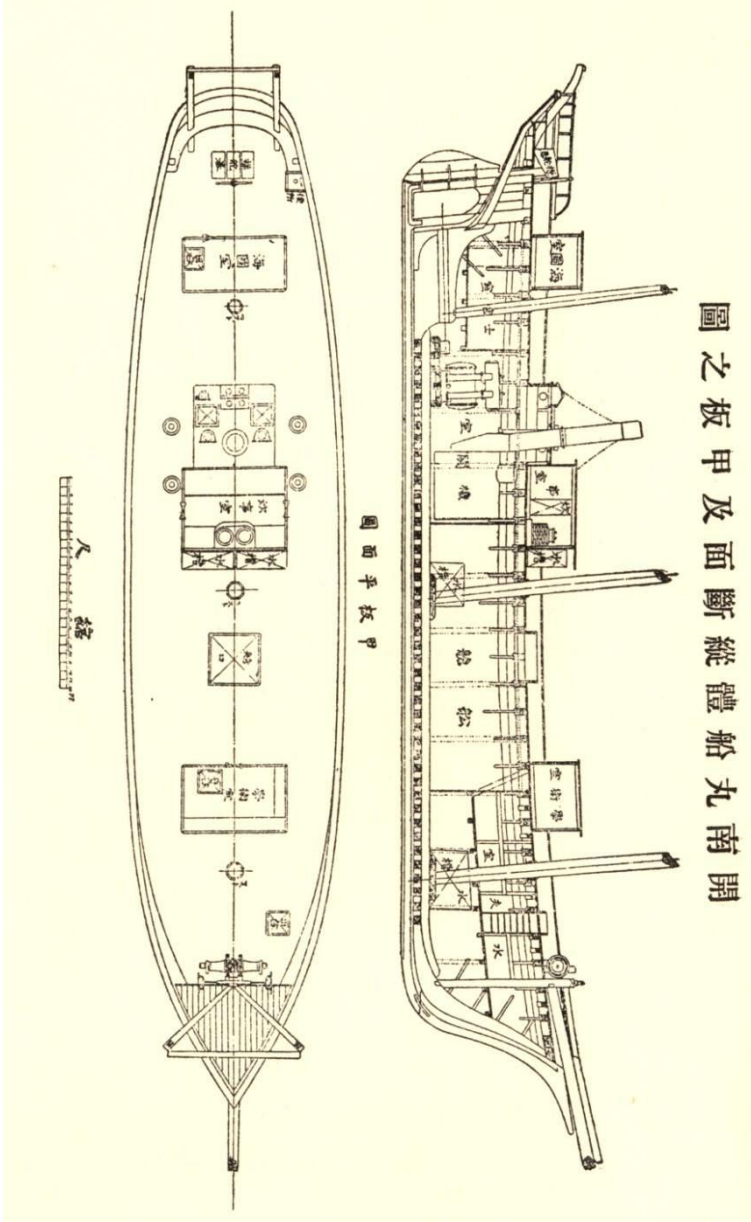
鐵板を張るには、捻釘（長さ二寸の鐵裝釘）を、一枚に百二十本を捻込んだ。處が第一次航海中激浪の爲めに船首の方が兩側とも、二十四枚の鐵板は水中に奪取られて終つた。

それから氷海突入の装置の一つとして、中檣に圓形の見張所を造つた。之は必要の場合に高處より四方を眺めんが爲めである。

次に内部の構造に就て述べて見ると、後部甲板下に新たに上等室を設けて、之を幹部室に宛てた。又從來の海圖室は狹隘であつたので、



開南丸體縱斷面及甲板之圖



甲 板 平 面 圖



稍や大きく改築した。又た帆力の補助として蒸汽機關を据附けた。其位置は中帆檣を船の全長の五分三の位置として、機關は五分三の後部に据付けたのである。即ち五分三後部に機關室と上等室とが設けられた譯である。而して五分三表方五分一位の處は船具室に宛てられ、残る五分二即ち船具室の後方には、鐵製の用水罐（二十噸量）を備付け、其餘室即ち水罐と機關室との間へ、食糧其他の器具を収める事とした。

以上は甲板下の構造、荷積の工合等を示したものであるが、之を更に二段となし（甲板より船底まで深さ十三呎）船具室の上段を、下級船員室となし、普通隊員室に兼用した。

上甲板は前檣の後部へ學術室を設け、中檣の後部へ炊事室を設け、炊事室の前部に五噸量の水槽六個を備付け、後檣の後部へは海圖室を設け、其後方約六尺を隔て操舵室を定めたのである。氷海に乘入る爲め出來得る丈堅牢と云ふ事に意を用ゐたのは言ふまでもないのである。



先づ大體の裝置は以上の如くであるが、第一次航海に於て、南緯七十四度以南に航入した爲め、船首の裝置されてある鐵索（徑四吋）二本は、凍結した。それが激浪に打たるゝ爲めに壓力加はり、ホプステーの激しき動搖によつて、遂に此鐵索は切斷し、鐵帶も亦た寒氣の爲めに切斷した。爲めに直立して居る柱は傾斜を示し、復航には意外の日子を費したのである。復航の航海中は、應急修繕を加へつゝ、不完全ながらシドニー港に引返し、兎も角同港のヂブリー船渠に入ることにした次第である。

偕シドニー港の船渠に於ける修繕の重なる箇所を示すと、我船員側では、氷山の流れ來る際は、船腹の幅員廣き部分が衝突點であらうと考へ、水平線のみに衝突防衛の設備をすればよからうとて、其積りで修繕工事を起した。而して残れる鐵板は其儘とする筈であつた。

處が次第に作工するうち、乾燥の結果、残れる捻釘は、全部用に立たぬものとなつて居ることを發見した。即ち其等の釘は、錆付いて居る爲



め鐵板から脱離せず、其儘であつたが、よく見ると寒氣の爲め緊縮して、船材からは離れて居る。且つ其釘頭はすべて除去せられて居た。

そこでステアーを三本新たに打付けた。之は經驗に鑑みた結果である。又た鐵帶も新らしく裝置した。此等の工事は十分堅牢を期して施した。且つ修繕の結果母國石川島で打つた大頭釘二本だけは、少しも損せず、依然堅牢なので、鐵板の打付けは、此大頭釘三本に二吋半の捻釘二本の割合で打込んだ。

又た乾船渠に入つた結果、船首の下部の銳形の箇所が、氷の爲め非常に損傷を受けて居るのを發見したので、此箇所には能ふ丈けの修繕を完ふるに力めた。

第一次航海の時は、三月八日頃から氷を切つて走つたのであつたが、其際目に入る處は船の水平線のみであつたから、上記の如く下部の損傷は氣付かなかつたのであるが、漸々と氷海航海者の經驗談を聞くと、全容積の七分は水中に在る譯ゆるゑ、上部よりも下部の方が大切である



と云ふ事なので、其言に鑑み、船首の四分一へは、全部鐵材を張ることにした。

凡ての作具には凡て新らしき材料を用ゐた、作具破損の時は、應急修繕を施せばよいのであるが、極寒の海上に在つては修繕思ふに任せぬから、凡て新らしき物を用ふることにした。

帆は、風力烈しくして、總帆を揚展するの必要を認めない上、操縦にも不便なので、第二次航海には三角帆を使用することにした。之も第一次航海に於て得たる經驗の著るしいものと謂はねばならぬ。

シドニーに於ける修理に就ては、丹野一等運轉士、清水機關長を始め、船員一同の熱誠なる汗が多量の貢獻をなした事は云ふまでも無い。

斯くて修繕を終へし開南丸は明治四十四年十一月十九日を以て再びシ

ドニーより南極氷海に向ひしが、無事南緯七十八度三十一分西經百六十四度三十分なる鯨灣に本隊を上陸せしめしのみならず、更に東航して、南緯七十六度五十八分西經百五十四度五十分なるエドワード七世州の一灣に



沿岸隊を上陸せしめ、更に東航して西經百五十一度二十分南緯七十六度六分<sup>ぶん</sup>に到<sup>いた</sup>つて歸路<sup>きろ</sup>に就<sup>つ</sup>き再び鯨灣<sup>ホエールベイ</sup>に立寄<sup>たちよ</sup>つて本國<sup>ほんごく</sup>に歸還<sup>きくわん</sup>したのである。而<sup>しか</sup>して歸還<sup>きくわん</sup>後石川島船渠<sup>いしかはじまドック</sup>に入れて船體<sup>せんたい</sup>を檢<sup>けん</sup>せしに氷海<sup>ひやうかい</sup>に於<sup>おい</sup>て、此<sup>かくの</sup>の如<sup>ごと</sup>き大航海<sup>たいかうかい</sup>を爲<sup>な</sup>せしに拘<sup>かゝ</sup>はらず、船體<sup>せんたい</sup>には殆<sup>ほとん</sup>ど何等<sup>なんら</sup>損傷<sup>そんじやう</sup>する所<sup>ところ</sup>がなかつたのである。

## 第九章 南極圏航海概要

南極探検船『開南丸』は、第一次航海に於て南緯七十四度十六分まで往つて引還し、更に第二次航海に於て、南緯七十八度三十一分に達して歸還したのであるから往復を合すれば、都合四回南氷洋を航海したのである。けれども其航海の模様の詳細に就いては、到底茲に述べ盡す事は出来ぬから此項には只第二次航海に於ける南極圏航海の概要に就いて余（野村船長）の所見を述べて見やう。

先づ第二次航海に於て濠洲シドニーを出發したのは、明治四十四年十一月十九日であるが其際にはジャクソン灣口のマツグバリ―燈臺（南緯三十三度五十一分、東徑百五十一度十八分）を距る東方、六海里の所に於て、船を回轉せしめ、羅針自差測定法を行ひ、而して其後南東に向ひ進行し、オー克蘭ド島（南緯五十度二十分、東徑百六十六度二十五分）の



北端ほくたんに向け航海かうかいしたのである。(此島このしまは十二月三日午後五時三十分かごつ、ごご、じゅうごふじゅうぶんとに至つて見た) 此時、波浪澎湃はらうぼうはいして船體せんたいの動搖どうえう頗る激烈げきれつであつたが、兎も角此島かくこのしまの北東端を目的物もくてきぶつとし、羅針らしんの自差及時辰儀じさおよびじしんぎの遲速差ちそくさを確かたしむる事ことを得たのである。其後の航海かうかいに於ては、天候てんこうは甚はなはだしく不良ふりやうと云いふでもなかつた、半晴位はんせいぐらゐであつた。時々驟雨しゅううの襲來しゅうらいがあり、又風またかぜは北東位ほくとうゐの和風わふうが多おほかつた。それから南極方面なんきよくほうめんを指さして行進かうしんしたのである。

前後四回通過の經驗けんけんに依よると、南緯五十度から五十五度までの間あひだは、天候てんこう最も不定ふていであつて且多かつおほくは險惡けんあくであることを實驗じつけんした。

十二月七日第二次航海じかうかいに於て、開南丸かいなんまるが此邊このへんを通過つうかうした時は夜間よかんが殆ほとんど二時間許りじかんばかであつた。波なみが非常ひじやうに高く、船ふねの動搖どうえう甚はなはだしく、傾斜けいしやは二十五度位じふごぶぐらゐの程度ていどであつた。

九日正午の位地ゐちは南緯六十度二十四分なんゐどくじゅうごふぶんと、東徑百六十九度四十分とうけいひゃくろくじゅうごふぶんとであつた。此線このせんに向つた最も早もつとき英國えいこくの南極探檢家なんきよくたんけんかロツスの航路かうろは、最も我わが開南丸かいなんまるの航海かうかいの月日つきひに近い時ちかである故ゆゑ、余よは大層都合たいそうつがふが好よいと心密こころひそかに



考へて居た。(英國製三千百七十三號の地圖に依ると、ロツスは十二月二十三日に通過して居る、)ロツス線に入つた日、即ち十日には砂の如き細かき雪が降來つた。午後六時頃の氣温は華氏三十一度を示し、海水の温度華氏三十二度に降り、十一日に至ると雪降續き、海水の色は淡白色に變化して來た。此色を以ても氷海の略ぼ近き事を知り得るのである。

十二月十一日頃より流水ボツくと現はれ、追々増加の模様を呈した。

海水の温度は華氏三十度位であつたから、常に注意を怠らなかつたが、此前後の天候は多く密霧で、北風が強かつた。此附近に至ると午前一時頃より夜が明け始め、二時頃より確かに晝となつた。而して午後十二時頃に至るも尙ほ夕刻の如く、甲板上にて新聞紙を讀み得らるゝ位であつた。此附近を航海した時は、第一次航海に於て氷山の増加した地點であつたから、一層注意を拂つた。大氣の温度華氏三十三度、海水の温度華氏三十度、晴雨計二十九吋を示した。

此附近の海上には、鯨の群を爲して遊泳せる者頗る多く、海燕等の水禽も多い。正午頃から冰山に遭遇した。次第に其數を増加し來るのである。之より我が開南丸は氷海を航行せねばならぬ。

此日は多くの氷塊に出遇ふた。而して夜の八時頃から殆んど海上一面氷ならざるはなく、純然たる氷海となつたので、始めて船の機關準備を命じた。

爾後引續き氷海を航走したが、越えて十五日頃より全く不夜の海となつた。即ち午後十二時に太陽が出るが、其日没時に於ける微弱なる光線を夜と認むべき位のものである。

寒暖計の示す所に據ると、此邊の溫度は氣溫華氏三十度、海水溫華氏三十一度位であつて。晴雨計は二十九吋五十位であつた。

此日の正午船の位置は南緯六十四度三十五分、東徑百七十度であつた。尙此日高さ三百尺程水面に現れ居る冰山に遭遇しつゝ航海したが、

其附近には小群氷が現はれて居た。

十七日頃より良好の天候とては、一日も無かつた。海は氷塊の爲めに波は高くない、羅針自差の變化ある爲め磁極の地點を越してからは船首を北東少東の針路で目的地方向と爲る。以前の測定法に依ると四度西の自差であつたが、倅今此邊に於て太陽の方向で測定して見ると、三十一度二十分東自差の起りしを發見した。兎に角、南極の航海は時々刻々細心の注意を拂はねばならぬのである。

二十日頃より、氷山は築港防波堤の如き形の物が現はれた。此氷山は氷堤の缺落して成れるものとは知れるも、これを見たる時には、頗る驚愕の感を起した。

二十一日頃より、赤く焼けたる雲が出た。其雲の疎なる處に奇麗なる青色の雲が現はれ出た。それは午前一時頃のことである。海上は氷が非常に多くなつて、一面の氷海となり、雪は霏々として降積つたのである。



そこで目的の方向に汽力を以て航走を續けた。此日正午の位地は南緯六十六度四十一分十四秒、東經百七十八度であつた。

斯くて午前より午後に涉り、雪非常に烈しくなり、船は絶大の注意を拂ひつゝ進行した。所が氷塊の爲めに、目的航路を進む事が出来ないので、船の方で言ふ所の避航をして漸く一時氷海を脱することが出来た。然るに幸にも最早不夜の境になつたので、航海には非常に好都合であつた。

所で我が探検隊の一部の者からシドニー大學教授デビット氏より聞いと云ふので、余に對し航路上の註文があつたが、余の意見として日本人は日本人として相當の航海の能力を有して居る以上は、是非共、他國人の説に随はねばならぬと云ふのは、航海者として頗る迷惑の話である。勿論其説は參考とはするが、船長としては是非共之に随ふと云ふことは出来ない、斷然拒絶することを通知した。それにも拘はらず學術部より猶ほ絶えず申來るには、少しく閉口したが、今や此開南丸の航海は、



列國（れつこく）人環視（じんくわんし）の中（うち）に行（い）つて居（ゐ）るもの（もの）である（である）から、此船（このふね）に長（ちやう）たる身（み）として（として）は慎（しん）重（じゆう）に其信（そのしん）ずる所（ところ）に進（すす）まねばならぬ（ぬ）と、回（くわい）答（とう）してや（や）つた（つた）。此場（このばあ）合南進（あなんしん）は不可能（ふかのう）である（である）から、例（れい）の避航（ひかう）を以（もつ）て氷圍（ひやうゐ）を脱出（だつしゆつ）し、氷海（ひやうかい）を傳（つた）ひつゝ南方（なんほう）に出口（でぐち）もある（ある）やと、先（ま）づ船首（せんしゆ）を東方（とうほう）に進（すす）めつゝ、探（さぐ）りく進（すす）んだ（だ）が、な（な）か（か）く出口（でぐち）と言（い）つては無（な）い、僅（わづ）か二（に）、三哩（マイル）乃至（乃至）四五哩（マイル）入（い）り込（こ）める所（ところ）があ（あ）つても、矢張（やは）り依然（いぜん）として氷海（ひやうかい）である（である）、そこ（そこ）でズン（ズン）く東方（とうほう）に向（む）か（か）ひ、遂（つい）に經度（けいど）百八十度（ど）の線内（せんない）、在右（さいう）を縫（ぬ）ひつゝ廿九日（にち）に至（いた）り氷（こほり）の隙間（すきま）より南方（なんぼう）へ（へ）の道（みち）を發見（はつけん）した（した）。段々（だんく）と南進（なんしん）して、薄氷海（はくひやうかい）を航海（かうかい）すること約（やく）一晝夜（ちゆうや）、茲（こゝ）に始（は）めて非（ひ）常（じやう）に稀（き）薄（はく）なる氷（こほり）の海（うみ）に出（で）ることを得（え）た（た）。

さて開南丸（かいはんまる）の目的（もくてき）とする到着點（たうちやくてん）は鯨灣（ホエールズわん）である（である）が、南極地方（なんきょくちほう）は羅針（らしん）に差（さ）を生（しやう）ずる（ず）るから、陸岸（りくがん）を見（み）ずして直（ただ）に目的（もくてき）の方向（ほうこう）に船首（せんしゆ）を向（む）けるは危（き）險（けん）である（である）。兎（と）も角（かく）も、南（みな）ヅキウクトリア州（みなみ）沿岸（あな）に船（ふね）を寄（よ）せて、充（じゆう）分（ぶん）、時（じ）自（じ）ら、兩差（りやうさ）を確定（かくてい）した上（うへ）で、目的（もくてき）の地（ち）點（てん）に航（かう）する（する）のが、恐（おそ）らく普通（ふつう）航海者（かうかいしや）の當（たう）然（ぜん）



取るべき方法である所から、余は其方針を執つた。

其頃の天候は、稀なる程の好晴であつて、波も又穏やかであつた。然し風が無い爲めに、汽走を繼續した。

やがて、目的とする地の附近に至り、又非常なる氷海に出遇つた。船は其爲め思ふ地點に向け進航することが出来ないで、氷塊を避けつゝ東方又は北方に避航を續け、約十日間を費して進んだが、其時の苦心は全く普通人の想像以外で、船體の危険と云ふものは實に甚だしかつたのである。一月十五日漸く氷圍を脱出して、辛ふじて目的とする南方に進むことを得たのである。翌日午前五時頃より大陸續きの氷堤を發見して十時頃氷堤に近づき見ると、灣の形を爲して居て、幸ひ上陸し得べしと思はるゝ箇所があつたので、船を近けた。其位地は南緯七十八度十九分、西經百六十二度二十分である。

所が一部の者を上陸せしめて研究の結果、愈々上陸地としては不適



當と決したので、一ト先づ船は灣を出る事となつた。其時隊より船を東方に進めやうと云ふ註文もあつたが、突然の變更で東方に往くも、上陸の箇所あるや否不明である。若し不可能の場合には再び西方へ往かねばならぬ。彼是する中時期を失し上陸せずに歸る事とならぬとも限らぬ。所で此地點より約三十哩西方に良好の上陸場所たる鯨灣のある事を知たので、其方面に船を進めたが、約六時間許り後に其處に到着した。此時同灣内に繫留して居る諾威の探検船フラム號に邂逅した。我が開南丸は直にフラム號の碇泊し居る所より約二哩東方の野氷上に錨を投げ船を繫留せしめた。時に午後十一時過ぎであつた。其位地は南緯七十八度三十一分西經百六十四度三十分である。此處にて突進隊の上陸を辛うじて終り、一月十九日上陸隊員と袂を別ち少しく沖に出て石炭の移換等を行ひ、充分の準備を爲し、初めて東方探検の航路に向つたが、其目的はエドワード七世州に探検支隊を上陸せしめた上、船の往ける所迄東に往つて見ると云ふ考へであつた。即ち



西經百四十度附近迄探檢したいと云ふ考へであつた。

斯くて沿岸を航進したが、天候は普通である。沿岸の氷堤より二三哩を隔て、航行した。又氷堤の缺落する光景を屢々船から目撃した。此氷堤の落る音は宛がら大砲を發つ如き音で實に物凄いものである。氷が落た時は白波濛々として上り、何が何やら能く見えないが、程なく大氷塊が水を潜つて浮んで來る。之が遂に沖に流れて往くのである。それが爲め氷堤に餘り近く接して航海することの危険なるを實見した。其後エドワード七世州沿岸の野氷岸（南緯七十六度五十八分半西經百五十四度五十分）に船を繫留した。其時アレキサンドラ山脈の一部を探檢しやうと云ふ事に爲り、隊員船員は二組に爲りて上陸した。一部は東方に向ひ一部は西方に向つた。東方に向つた者は氷の龜裂の大きいのがあつて進むことを得ないと云つて引返して來たが、西方へ向つた者は中々歸つて來ない。そこで非常に心配して船員に命じて搜索せしむる事としたが、夜に入つて行衛の案じられた



西方に向ひし隊員も歸り搜索隊も續いて還つて來た。

開南丸は一同を搭載して更に東北に進んだ。斯くて約一晝夜の航海を爲した後引返すことにしたが、其最終の到着點は西經百五十一度二十分南緯七十六度六分である。エドワード七世州の上陸地點と此最終航進點との間は、海上大小の氷塊充滿して、中には氷島と名づくべき程のものもあり、船の危険は非常であつた。今少し遠く航海を續けて、此地附近の研究もして見たかつたが、此邊は實に夥しい氷で、氷海に進入するが最後、最早引返すのは非常の困難である上、石炭飲料水等の缺乏し來つた點もあるので、斷然引返すことにしたのである。其鯨灣まで引返す途中南緯七十七度五十分西經百五十八度四十分の地點に於て一つの灣形をなせる場所に船を寄せて、二隻の端艇を以て氷塊附着の岩石大小數十個を採集し、尙海底の測量も爲し、氷堤の割目の隙を透して、氷と海水との相映發せる状態など視察しつゝ此灣内に約一日半を費せし後、無数の鯨群に送迎されて根據地鯨灣に



引戻したのである。

是よりは鯨灣陸上隊員の引揚げである。此灣に引返して見ると、最初上陸の個處は全部流失し灣形が頓に變じて居る。此日は又天候が險惡にして灣口にて、船は屢々避航した。之は恰も二月三日であつたが、漸く引揚げに適當なる小灣形の所に、船を寄せた、其位置は南緯七十八度卅四分卅秒、西經百六十四度四十二分である。

翌四日午前十時愈々引揚を終つた。天候さへ好くば灣内の測量も沿岸の探検も試むる筈であつたが、晝より非常の降雪となり、咫尺を辨せず、爲めに船を沖にと流さざるを得なかつた。其後ヴェクトリア州の方面に向ひ、ペングイン鳥及び鑛石類採取の爲め船を進めた。

二月十一日に至り、コールマン島沿岸に船を寄せやうと苦心したが、何分流水烈しく、天候荒く、北東の風にて波浪非常に高く船を寄せることが出来ない。二三日適當の天候を待つ積であつたが、到底恢復の見込が無い上、飲料水の缺乏等の爲め、船は空船となるの憂もある。

此場合若し天候の劇變等に遭遇せば、更にく危険なので、遂に殘念ながら、船首を新西蘭に向けて直航することに決した。之は二月十四日のことである。

此地點より以後、歸航は逆風の爲めに目的の航路を取ること能はず、餘程東方に流されつゝ航海した。其詳細は後日發表するが、兎に角第二次航海は、第一次航海に譲らざる危険なる航海であつた。新西蘭に船の着したのは、三月二十三日であつた。

偕新西蘭に到着後の開南丸は、非常に同地人の歡迎を受けたが、其中に同地の貴婦人達の參觀申込があつた、此婦人達が開南丸に來つて云ふには、最初斯る船は探檢の資格なしと思ふたのに、今回南極に於て、フラム號に遭つたと云ふので、大に其勇氣に感じた。夫故船は龜末でも、此絶大なる勇氣に感じ、觀たいと切望するに至つたのだとの事であつたが、其中には七十三歳の老婆も居た。其老婆が云ふには『妾は老年であるが、船などには一度も乗つたことがない又見たいと思つたことは無つたが、

今こんど度は是ぜ非ひ見みたいと思おもつた。幸さいはひに快こころよく見みせて戴いたき、非ひ常じやうに愉ゆ快くわいである』  
と云いつて居あた。

一どう同どうは開かい南なん丸まるを記き念ねんの爲ために撮さつ影えいしたが、此この貴き婦ふ人じん達たちの有いう力りよく者しやは、別わか  
るゝに臨のぞんで『日に本ほん人じんは海かい事じ上じやう頗すこぶる優いう秀しうなる技き倆りやうを有いうして居いる』と云いつた。  
此この淑しよく女ぢよの一言げんは、一こう行こうの最もつとも嬉うれしく思おもふ所ところである。何なんとなれば船せん員ゐん等らが最さい  
初しよ此この航かう海かいの任にんに當あたるべく蹶けつ起きした理り由いうは、要えうするに世せ界かいから此この一ご語ごを贈おくら  
れたいが爲ためであつたからである。

## 第十章 南極探檢後援事業の梗概

抑も南極探檢事業の普く天下に發表されたのは、實に明治四十三年七月五日東京神田錦輝館に於て行ひたる第一回發表演說會であつた。此演說會開催に就いては、實に下の如き經過がある。最初白瀬中尉は、成功雜誌社々長村上俊藏（濁浪）氏に對し、是非此企畫を實行したいが、何卒充分の應援を仰ぎたいとの事であつた。けれども此事たる、頗る重大の事であるので再三之を拒絶したが、中尉の懇囑頻りなるより、然らば一臂の勞を吝まずと石川半山氏を介して報知新聞社に該舉全部の引受方を交渉すると、報知社は會議の結果到底引受け難しと回答したのである。仍て次に人を以て朝日新聞社に交渉した處、同社の幹部諸氏は多大の賛意を以て此問題を迎へ、一週日ばかりの間種々考慮する所があつたが、結局主催者たることを肯んじない。最初村上氏は考へた。

雑誌は其勢力假令大なるも新聞紙の如く日刊の物にあらず、此の如き事業を遂行せんには新聞社に依りし方、白瀬氏の利益なるべしと、之に因り新聞社交渉開始となつたのである。然るに新聞社との交渉は失敗に終つたので、甚だ困却した。金こそ募集せざれ、賛成員等は餘程知人間に依頼してあるのに、此儘止めては實にそれらの人々に對して面目がない。今は騎虎の勢又辭すべきにあらずと、二三知人の應援を請ひ東奔西走を開始するに至つたのである。

今は最早之を天下公衆に訴へて、四方志士の援助を俟つの外なしと、從來の賛成者たる小松原文相、千頭清臣、伊澤修二、横山理學博士、の外に新たに辻新次、關清英、長谷場議長、三浦梧樓、大石正巳、寺内正毅、肝付兼行、江原素六、箕浦勝人、等の諸氏を訪ひ大に賛助の諾を得、又田中弘之、佐々木安五郎、櫻井熊太郎の諸氏も大に力を盡さんと誓言されたので、茲に勢を得て大隈老伯に面會を求め、發表演說會出席の諾を得るに至つた。斯くて七月五日の發表演說會は開催された。



當日の盛況、幾多名士の應援演説等の詳細は茲に改めて述べるまでもない、聴衆は堂に溢れ、門外に溢れ、窓を破つて入來る者さへあつた。斯くて此壯舉は廣く日本の隅々までも知れ渡るに至つた。突如として此大壯舉が發表されたのであるから、新聞社界には寧ろ驚愕の聲を以て迎へられた。本事業は斯くて國民的事業として歩を進むるに至つたのである。

此日後援會組織發表の議あり、南極探檢後援會は此日を以て呱呱の聲を揚たのである。先づ幹事として田中弘之、櫻井熊太郎、佐々木安五郎押川方義、三宅雄二郎の諸氏之に當る事となり、村上俊藏氏は本會の専任幹事たることを諾し、堀内靜宇氏は事務長、神谷幸吉氏は會計掛と爲り活動を開始することとなり、事務所を成功雜誌社に置く事となつた。其翌日佐々木村上、白瀬の三氏は相携へて、大隈伯を訪ふた。之は大隈伯を會長と仰がんとするが爲めである。伯は之に向つて快諾を與へ、充分の援助を約されたのである。



爾來天下の同情は湧くが如く、寄附金の募りに應じて集る額多大を算し大に前途の好望を示した。

大隈伯爵は、新に後援會長として伯爵に都下新聞社の重なる人々を招き、同情を求め、伯指名の下に『國民』『日々』『やまと』『中央』『報知』五社を委員に選り將來の應援を託した。それは實に七月十四日の事であつた。記者一同は之に對して能ふ丈の應援を承諾された。

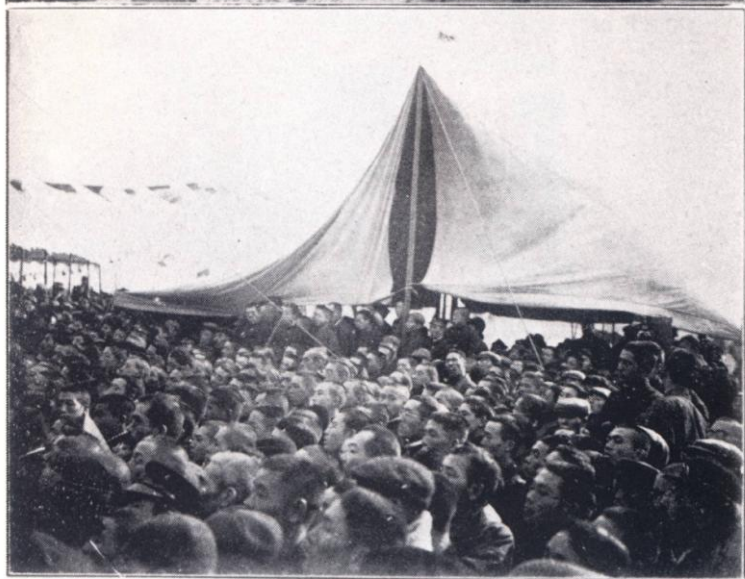
時に大阪東京の朝日新聞社は、憤然として起ち、此大事業の有力なる應援者たるべく申込んで來た。先づ、大阪よりは代表者鳥居素川氏來り、東京よりは杉村縦横氏立會ひ、早稻田なる伯爵に於て會長大隈伯村上幹事並に白瀬中尉と會見して義金募集の事を約し、越えて數日、兩紙は同時に之が發表をなした。忽ち見る義金の集るや潮の如く、空前の盛況を呈した。此間一方には白瀬中尉最初の計畫の小規模に過ぐるを説く者多く、之に對する擴張案現はれ、随つて豫算資金増額の必要に迫られた。





況盛の式會發業事檢探極南るけ於に館輝錦

明治四十三年七月五日撮



芝浦埋立地に於ける別式

斯くて後援會成り、新聞記者賛し、一般の同情集まり、朝日紙義金募集の擧あるに至つて、兎も角何事業にも最要とする資金の調達は爲し得んとするまでに至つたが、資金如何に集まるも第二の問題は用船である。此用船問題は實に後援會の一大苦心を注いだもので、同時に本事業の一大難關であつたのだ。

用船に就ては中尉は最初函館に一船を約束したとの事であつたが、それは事情あつて發表演說會前に解約した。處が發表前二日、秀島海軍大佐の紹介で、船長野村直吉氏が該擧に參加の申込をなし來り、發表會當日には、其自ら任ずる航路の大略的説明を試みた。船長は其後白瀬中尉の案以上更に堅固なる船舶を得るの必要を唱へ出したので、先づ横濱に繋留中なる『孟春號』實查の爲め、村上專任幹事と共に之に赴いたが、同船は老艦にして逆も長途の航海に耐へ得べくもないので、此度は肝付中將に話して見ると『磐城艦』が善かろうとの事であつた。同艦は佐世保軍港に廢艦として繋船中なので、之れぞ絶好の船ならめと、池邊朝日主筆、杉村幹事

(當時新たに後援會幹事に就任) 村上專任幹事等協議の末、之が貸下方を  
財部海軍次官に諮つた。次官は大に好意を表し、政府の許否は兎も角、先  
づ船體の實査を爲せとの事に、野村船長は早速佐世保に急行し、一應調査の  
末先づ適船なることを認めて歸つた。仍て更に其筋に對して貸下交渉を  
開始すると、海軍省の意見では同艦は略ぼ貸下げても宜しからんとの内意  
である併し直接海軍省からの貸下は法規上不可なので、先づ手續上之れ  
が保管轉換を爲さねばならぬといふ話である。そこで遞信省又は東京府  
廳へ向ひ、池邊、村上佐々木、其他の交渉委員は、保管轉換を交渉すると、  
制規なく面倒にて急場のことには間に合はない。抑も之れが行詰りの第  
一難關であつたのだ。

於是乎、神奈川県廳へも交渉した處が不結果である。委員等は更に文部  
省に交渉した。文部省の云ふ所では、善い事ではあるが、學術探検といふ  
と政府の事業となるの虞れある故六ヶしからむと、之も結局拒絶である。



此間一方には委員等は是非共曩きに後藤男の内意を知り得たることとて、後藤男と交渉を重ねんものと、恰も男が富山、福井、地方巡回中であつたので、男の歸京を一日千秋の思ひで待暮して居た。

處が茲に一大障碍が突如として起つた、障碍とは何ぞ。云ふまでもなく、彼の大水害である。

此間にも絶えず、義金及物品の募集をした。後援會は主として物品の寄贈を受くる事と爲し、現金は概ね朝日新聞社に於て募集した。又此間に於て後援會では東京及横濱等に於て盛んに演說會を開催した。先づ大隈伯を始め、三宅雄次郎田中弘之、佐々木安五郎、福本日南、村上濁浪、櫻井熊太郎、野依秀一、高橋秀臣、鶴澤總明、江原素六、小川運平其他の諸士の顔揃ひで、各々懸河の辨を振つた。府下各大學出身の雄辨家及在校中の能辨家を以て組織せる丁未俱樂部員も各所に演說會を開いて活動して呉れた。栗山博、寺田四郎、大井靜雄、横田稔、加藤正人、甲斐惟一、稻毛利榮、福岡良朗、宮澤胤男、稻田直道等の丁未俱樂部諸士は大に活動して呉れた。

日本力行會其他の有志學生が集まつて大道演説もして呉れた。栗山恒子と云ふ婦人は銀座街頭に夜店を出し、其收益を寄附して呉れた。社會の同情と關係者の努力とは此の如くであつたが、磐城艦問題は依然として繼續して居る。一方後藤男は、一度歸京したが直ちに關西地方へ出張した。是に於て村上幹事は野村船長と共に是非共男と交渉せんものと、大阪方面に出張した。時に志州鳥羽町立商船學校に、生徒練習用として使用中の舊軍艦、天城艦があるとの報に、行つて見て居るうち、水害の爲めに、遂に男と會見の機を逸した。天城艦は結局船體老朽、よつて又元の磐城艦に逆戻りして、洪水最中歸京したる村上幹事は、神奈川縣廳に出頭し、保管轉換の件を交渉すると、知事大に好意を表し、態々事務官出京の上、内務省に交渉の勞を採り呉れたる等の事もあつた。併し兎に角抄々しくないので、池邊朝日主筆始め、當事者一同は非常の苦心を以て此間に處した。此時山縣有朋、清浦奎吾、長谷場純孝、頭山滿、杉山茂丸、牟田口元學、關清秀、等の諸士大に

同情を寄せ、其結果磐城艦の問題は二度閣議の問題と爲つた程であつたが、同艦は假し貸下となるも大に修復を爲さしむべしとの當局者の意嚮が知れたので、後援會も其費用の多大なる爲め到底絶望と決し。遂に同艦は残念乍ら斷念することになつた。

元來極地向ふべき探検用船の資格としては木造の一級船にして堅固の船體を有し、補助汽罐附でなければならぬ。種々詮索したが適船がない、そこで新造案が出て、工學士小池通次郎氏に托して設計を爲し、又大湊から市川造船所員を招きて相談した事もあつたが、迎も時日多くを要して豫定の日子内には新造は出來ぬと決した。

一方白瀬中尉等は一般同情者の注意を諒とし、學術部を置きて小倉、碧海、武田氏等に囑托し、計畫に就て種々研究する所があつた。杉村氏堀内氏も大に助言を與へた。斯の如くして準備おさく怠りなかつたが、肝要の用船が出來ないので、八月中の出發は不可能となり。隊員出張所の移轉其他で、わけもなく貴重の日時を空費するの餘儀なきに立到つた。



時に大阪に『第七平安丸』といふ船ありとの事に、出張臨検したが、不  
適当と認めて、之れも止めと爲つた。結局之れは一應幹部會を開くに如か  
ずとなし、會長大隈伯邸に幹事其他の協議會が開かれた。此時豫算上の議  
論があつた。豫算表は第一、第二、第三、の三通作製され、押川、杉村、堀内、  
の三氏豫算委員に當つたが、結果費目は頗る尨大となり、殊に水害中の事  
とて茲に端なくも種々の議論が現れた。然るに後援會にては白瀬中尉が、  
既に天下に聲言せる處もあり、此儘斯の如き壯舉を延期するが如き事を爲  
すに忍びずとなし、兎に角小規模設計の遠征案を用ゐ、用船の方は白瀬中尉  
と野村船長とに一任することに決した。是に於て中尉は船長をして名古屋  
方面に出張せしめ、又大阪木津川の天照丸をも實査せしむる等、極力奔走  
したのは實に九月中の事であつた。

中尉、船長等の報に基き田中幹事堀内事務長等大阪に出張し、種々船舶  
を調査し、又大阪朝日社に向つて船舶其他に就き交渉を開始しつゝ



あつたが、此期間は殆ど數週間、一同の心痛は血を吐かん計りであつた。然るに此時に當り、第二報効丸來るの飛報を耳にした。そこで村上氏は、白瀬氏を伴つて郡司氏を訪ひ、交渉を開始したる處、翌日に至り、ものゝ見事に拒絶されて終つた。是に於て村上幹事は憤然として蹶起し、拒絶書を請取ると同時に第二報効丸に趣き、郡司大尉に面して徹宵心肝を披瀝し、再熟考の承諾を得たのである。之より翌日大隈伯と大尉との會見となり、結局契約は成立して、第二報効丸は後援會の手に歸したのである。此時に當つて後援會と朝日新聞社とは出發の時期に關して意見を異にして居た。後援會では白瀬中尉が天下に誓言したる所もあり、武士道の面目上十一月末を以て出發せしむべしと云ひ。朝日新聞社では一層設備を完全にして、明年を以て出發せしむべしと言つた。兩者意見を主張して止まなかつた結果、竟に朝日新聞社より義金全部を後援會長大隈伯に交附し、伯は責任を以て船を出發せしむる事と爲つたのである。



斯くて第二報効丸は直ちに石川島造船所の船渠内に入り補助汽鐘を据置き、其他の修復、改築、並に設備を整へつゝある際、東郷大將は之に『開南丸』と命名し、三宅博士は自己の意匠に成れる南十星の探検旗を翻へさしめたのは、人の知る處である。

其後十一月二十二日開南丸の試運轉と爲り、二十四日、二十五日の兩日芝浦に於て公衆の船内縦覧と爲り、二十六日大隈伯邸に於て隊員一同の盛んなる告別式と爲り、同日午後日比谷公園に於ける國民的送別會と爲り、越えて二十八日隊員一同の皇城遙拜及芝浦埋立地に於ける日本本土との告別式と爲つたのである。此日芝浦に會せし者は無慮五萬と註せられ流石に廣き埋立地も人を以て埋つた程である、會長大隈伯はやおら、壇上に現れて百發の空砲は一發の實彈の如かざる旨の大演説を爲して一同を獎勵し、白瀬氏は誓つて目的を達せん事を期する旨を述べて降壇し、來賓、幹事及丁未俱樂部員の諸士も各々熱辨を揮つて此行を壯にした。翌二十九日、開南丸は愈々品川灣を出發した。

萬里の波濤を凌ぐべく、意氣天を衝いて出發した。顧るに過去半歳の間、後援事業に従事せる者が晝夜兼行の苦心は實に容易なるものでなかつた。或者は此奔走の爲め其母の重患に艱めるをも顧るの暇なく、或者は全然此夏季の暑さを感じしなかつた程一心不亂に奔走したのである。

此處に特筆すべきは、此事業の當初より筆を揃へて、此事業の發展を援助せられた東京の各新聞社通信社及全國の各新聞通信社の厚意である。次には義金募集上に於ける朝日新聞社の多大なる盡力である。米國布哇南洋等海外に於ける邦字新聞の好意である。是等の同情が一般人心を動かしたるの効は實に測るべからざるものがある。日本力行會の直接間接の盡力、全國各種學校職員並に生徒諸君の同情地方青年會在郷軍人團の應援、天下の富豪及江湖幾萬同情者の厚意、堅確なる森村銀行が無料にて義金取扱を爲し呉れし好意等數へ來れば盡くる處がない。

斯くて開南丸は、歡呼聲裡に品川灣を出發したが、さて後援會に於ては、船の出發以後募金が非常に困難となつた。それは國民一般が最早船が出發したから、義金寄贈の必要はあるまいと考へたが爲めである。

けれども出發の際には、一萬圓の借財をもなし、船具其他に未拂の額も少なくないまゝで、出發をしたのであるから、此結末を付ける丈けでも是非共相當の募金をせねばならぬ。そこで、後援會では大に苦心した結果全國の小學校に向つて募金の勧誘狀を發することゝし、又一方には大隈伯爵送別の光景及び開南丸品川灣出發の光景の活動寫眞に若干の外國探檢隊に關する幻燈を加へて、それを以て東京宇都宮其他に於て興業することゝした。

然るに斯かる活動のみでは、到底多額の義金を得ることは、不可能なので、再び議會に建議案を提出し、政府より今後に要する資金の下附を得んとして、其運動を開始することに決した。而して此運動には、村上、堀内、天生目、武見等の諸士が當ることゝなり、東奔西走して、大に盡力し

た。

處で四十四年二月八日に至り開南丸は波濤恙なく新西蘭に到着し、同日南極に向つて出帆したので、後援會の一同は大に勇氣を得たが併も亦た前途不安の念をも抱かざるを得なかつた。それは新西蘭までは幸ひ無事に到着しても、それより以南の氷海は、本邦人が未だ曾て往つた事のない渺茫たる未知の海洋であるから豫め覺悟はして居るものゝ、如何なる事變が生ぜぬとも限らぬので、今更の如く何れも危懼の念を懷いた。けれども斯くてあるべき場合でないから、一層勇氣を鼓舞して、議會の運動に努力した。

さて議院の方では、小久保喜七氏が主となつて盡力し呉れ、長谷純孝、佐々木安五郎、吉植庄一郎、高木正年の諸士も大に努力して呉れたので、此建議案は三月二十一日、滿場一致を以て衆議院を通過した。是に於て直ちに政府に向ひ、補助金（豫算額五萬三千圓）の下附を迫つた處が、政府は何うしても下附を肯んぜない。最後には田中、村上、押川、佐々木の

四幹事に、野村船長、高木正年氏も加はつて、總理大臣官舎に赴き、下附の請願をしたが遂に承諾されなかつた。

斯くてあるうち、五月一日、一通の電報は濠洲發で白瀬中尉から後援會へ向けて來た。其電文に據ると、開南丸は三月十一日、南緯七十四度十六分、東經百七十二度七分の地點まで到達したが、恐るべき結氷の爲め、コールマン島を眼前に見ながら上陸する能はず、恨を呑んで濠洲シドニー港に引返して來たとの事である。

そこで後援會では直ちに大隈伯邸に緊急會議を開いた處が、猛烈なる結氷の爲めに南極大陸に上陸し得なかつたことは遺憾の至であるが、然し此地點まで開南丸の到達し得た事は、船員の技能が、能く陸上隊員をして南極洲へ上陸せしめ得べき事を證明したものであるので、直に左の決議をした。

- 一、南極探檢後援會は飽まで南極探檢隊一行を援助し、同一行をして一層設備の完成と學術的研究の充實とをなさしめんことを期す。

員部樂俱未丁及部幹會後後と員船隊の旋凱るけ於に邸爵伯隈大



最後列向つて右より 榎子隆の人不明、五明忠一君、渡邊蛇夫、三浦前隊員、三宅運轉士見賀、安田木工、釜田舵夫、柴田水夫、福島水夫、向つて右上方枠中の人故櫻井幹事



書秘松村、夫火崎、掛大、長夫水川高、士轉運等二井酒、士關機平藤、君某、君舟超岡山、君鐵鑿築都  
君博山粟、士轉運等蓋屋土、員隊野吉、員隊邊渡、員隊川西、掛大守花、員委見武、長務事内堀、君榮利毛野藤、君稔田横、君亮庄植吉、君郎四田寺  
長部生福所井三、長關機水清、士學田地、長部術學田武、長隊禰白、長會隈六、長船村野、事幹老三、事幹任常中田、事幹木々佐、事幹任常上村





一、南極探検隊一行をして、本年解氷の時期を待ち、同一行が定むる根據地より更に南極圏に於ける目的地點に向ひ進行せしめんことを期す。

一、滿天下の同情に訴へ更に同一行に對する後援の實を擧げんことを期す。

處が此第二次計畫を實行するには、更に非常なる費用を要する。最初の計畫通りに事が進行するも、尙ほ却々責任は重大であるのに、一たび目的を達するを得ずして歸還し、外國の物價の高き場所に於て、總員が半年以上も滞在し、それから再び糧食、被服其他の必需品を準備して、第二次計畫を實行するとすれば、その困難は一方ではない、殆ど新たに探検隊を組織して、出發せしむる程の資材を要する、處が一旦募集した後の事であるから全國の重なる有志者からは、既に一回義金が仰いてあるし、又も義金を受くると云ふは頗る困難な事である。そこで大に當惑して居たが、兎も角五月上旬市村座に於て嘉悦孝子、栗塚龍子、有地男夫人、



林田文字、鳩山春子、三輪田眞佐子、鈴木やす子、高田博士夫人、天野博士夫人、棚橋絢子、岡田博士夫人、柳谷夫人等の發企で、寄附演劇の開催を行ひ、又六月二十三日に板垣伯、三宅碩夫氏等の盡力で、國技館に於て夏場所大相撲の興業をして居たが、此際野村船長は事情報告の任を帯び、多田書記と共に七月十五日日光丸で歸朝した。

之より前、後援會では、到底尋常の努力では第二次の出發は覺束なしと思ひ、七月七日大隈會長は府下の各新聞社通信社の代表者を早稻田の自邸に招待して今後の募金事業に就いて、各社の盡力を依頼した。先づ南極探檢の經過と、政府が補助金を與へざる事を陳じ、更に勵聲一番して『船は小なりと雖も、日本の國旗を掲げ其名譽を代表せる開南丸は今やシドニーの船渠に在り、廿七名の勇士はシドニー郊外に天幕生活を行ひ居れり、今にして糧道を絶ち、此世界的事業の勇士を見殺しにするは、實に日本の耻辱なり、予は曾て何事にも泣きし事なけれど泣かぬ辦慶も此事のみに泣かざるを得ず』とて深く囑托する所があつた。



斯くて、東京各新聞社側では、南極探検聯合援團なるものを組織し、呉れ、其幹事として日本電報通信社の權藤震二氏、讀賣新聞社の足立荒人氏、日々新聞社の鶴崎熊吉氏の三氏を擧げ。大に此事業に盡力して呉れた。都の後藤長榮氏報知の奥田信俊氏やまとの宮本氏日本の早川茂一氏等も以上三氏と連絡を取り盡力して呉れた。

後援會にてはそれよりして常任幹事二名を置く事と爲り、從來の村上幹事の外更に田中幹事が常任幹事に就任した。而して之と同時に全國に大擧遊説を開始した。先づ第一に七月十四日を以て、神田錦輝館に後援大演説會を開き、大隈伯、鶴崎鷺城、伊藤龜雄、三宅雪嶺、佐々木照山、田中舍身、村上濁浪、福本日南、野村船長等諸士の演説があつた。此時より後援會事務所を神田錦輝館内に移し而して田中、佐々木、兩幹事は大阪、神戸、京都、名古屋方面に向つて遊説募金の爲め出發した。

折から箱根滞在中の大隈伯を訪ふて、村上、栗山、兩氏相談の結果、全國に丁未俱樂部有志の大活動を行ふ協議を爲し、東北六縣及び北海道



(七月二十日より九月二十日まで) 方面には、栗山博、寺田四郎、加藤正人、都筑懋鎮、稲田直道、佐藤榮志其他の有志諸氏野村船長と共に遊説し、關西中國山陰(八月月上旬より九月下旬まで) 方面には、齊藤徳藏、猪野毛利榮、小松良朗、吉田實、後藤國彦、河岡潮風其他の有志諸氏出演し、大に募金運動に努めた。此遊説に次いで丁未俱樂部の主催で、上宮教會、牛込高等演藝館赤坂三槐堂、青年會館、早稻田大學、日本大學、明治大學、法政大學、中央大學、品川東海寺等に於て盛に後援演説會を催した。

後援會本部に於ては、村上幹事、専ら任に當り各地遊説者と連絡を取りて、之が活動を敏活ならしむるに銳意し、又全國各種學校、役場等に向つて募金運動を開始し、再舉計畫に必要な物品の準備を爲す事を努めた。此際各地に出張中の一人々よりは、演説會の熟れも盛會なる由の電報はあつたが、寄附金は之と正比例して直に集まり來るものでないので、物品の購入上少なからざる困難をした。けれども兎も角同年十一月の中旬には隊員をして濠洲シドニーより再び極地に出發せしめねばならぬので、

のむらせんちやう  
野村船長は、米、大豆、豌豆、醬油味噌、奈良漬、鹽鮭、鐘詰類、椎茸、  
干瓢、等を用意し、船具の方では、ホーセール、メインセール、船用測量  
器械其他の必要品を買入れ、九月十六日の日光丸で出發した。

それから又た第一回の探検の時、開南丸に搭載した鞆犬三十頭のうち、  
廿九頭まで死亡したので、此犬をも補充せなくてはならぬ、其處で小川運平  
氏の盡力と、樺太廳及び其他有志者の盡力とに依つて、樺太犬三十頭に、  
犬の世話係としてアイヌ人橋村矢八附添ひ、取寄せることゝなつた。而し  
て犬も人も程なく來着した。

以上食料品船具、鞆犬等の補充の外、防寒服を新調し、學術器械を買入  
れ、尙ほ幾多の補充品をも完全にした。此時の防寒服は、新式の物を調る  
ことにした。大天幕一着は岡部安次郎氏の寄附品を持往く事とした。此折  
は曩に野村船長と共に歸朝中なりし多田書記のシドニーに出發する際  
あつたので、此等の貨物は其船便にて送附して、同一行は新たに學術部員  
に加入したる農學士池田政吉氏、エム、パター會社長梅屋庄吉氏

の義侠により加入したる活動寫眞撮影技師田泉保直氏、及び輓犬係の橋村アイヌの三名であつた。樺太犬二十九頭と共に十月十四日熊野丸で出發した。

乗船に際し横濱に滞在中、犬一頭は突然病氣に罹つて斃れた。萬朝支局主任曾我部一紅氏は探検隊の事に就きては從來何くれとなく世話をなし呉れ居たるが、此際も獣醫をして検診せしめたる處、其結果、之は縲蟲が發生したる爲めで、他の壯健なる犬にも藥を與ふるに如かずとの事に、其言に随ひたるに、今回は途中に於て一頭も斃るゝ事なく、悉く使命を全ふした。

斯くて十一月十九日に至り、開南丸は再び南征の途に上るべく濠洲シドニー港を出帆したが、然し募金は尙ほ大に不十分なので、各新聞社應援團諸君等の助力を得て、盛んに之に従事した。東京市及横濱市等に於ける募金に就いては武見喜三氏の功は少なくない、全国の學校役場等に向つての運動に就いては大島茂夫氏の勞は多大である。

一般に對する募金に努むる一方、後援會にては、華族會館に於て府下の富豪諸士を招待し、義金を請ふた、此時は大隈伯會長として自ら此會合に起き、其結果、森村市左衛門、村井吉兵衛の諸氏、衆に先んじて多額の寄附を申込み、三井家からは又も澤山の寄附をされた。實業之日本社長増田義一氏も自ら寄附をされた上大に幹旋の勞を執つて呉られた。

此際柴田種吉氏は布哇に赴いて募金運動に従事し、明能文氏は臺灣に赴いて募金事業に従事した。又た同情ある早稲田、慶應、兩大學野球選手の發企で、早稲田グラウンドに於て、ベースボール大會を催した。之れは相當の入場者があつた。又た歌舞伎座に於て、寄附演藝會が催ふされた。此時も嘉悦孝子女史等女流有志の主催で、極力盡力せられ、本會よりは天生目一治氏擔任して奮闘努力した。二條公爵夫人、戊申婦人會員諸姉も此際大に盡された。之は翌四十五年二月六、七兩日であつた。

又た讀売新聞社の主催で、桃中軒雲右衛門の浪花節會を、本郷座に於

て開き。其揚高を寄贈せられた。之は三月二日であつた。斯くの如く幾多同情者の應援的活動によつて、日を重ねつゝあるうちにも、後援會にては絶えず開南丸の消息を待焦れつゝあつたのである。

處へ宛も三月九日に至り、濠洲タスマニア島のホバートより諾威南極探検家アムンドセン氏が、デーリー・クロニクル紙に寄せたる記事の中に、同氏の探検船フラム號が日本の南極探検隊と、鯨灣に於て出逢ふたが、此隊は一月十六日を以て、無事上陸したといふ事を報道した。此意外の吉報を得て後援會では、非常に喜んだ。勿論前回に於ける航海上の經驗もあり、氣候さへ好くば、必ずや上陸は爲し得べしと信じて居たが、今外國の探検家より此報道を得て、此大苦心の事業に裏書をされたるの感を起し非常に喜んだのである。

斯くて三月二十四日に至つて、一通の電報は來つた。其電報に據ると、探検隊は南極洲に上陸し、探検を終へし後、人船共に恙なく、二十三日無事新西蘭ウエリントン港に着したとの事である。そこで一同は又



も大に喜んだが、偕之と共に種々の問題を生ずる。船が既に新西蘭に着いた以上は、最早國民に向つて、義金の寄贈を仰ぐことは遠慮せねばならぬ。然るに今後支拂ふべき物は船員の給料、隊員の手當、借財の返済、其他澤山ある。そこで今後は一行の撮影し來れる活動寫眞の力に依頼し、専ら之を以て是等の費用を辦ずる事にせんければならぬと決心したのである。

之より一ヶ月半程を経て探検隊の一部は日光丸便で歸朝した。即ち白瀬隊長、武田學術部長、池田學士、村松書記、田泉活動寫眞技師等の一行は要務を帯び、開南丸に先つて歸朝したのである。

日光丸が長崎へ着くと、東京から電報があつて、東宮殿下（今上陛下）が早稲田大學及び大隈伯邸に行啓あらせらるゝに就き南極洲に於ての採集品を携へ、陸路急ぎて上京せよとのことであつた。そこで武田學術部長一人は、長崎に於て下船し、採集品及び寫眞等を携へて、急遽上京した。



斯くて五月十七日東宮殿下には、桂公爵を随へて早稲田大學及大隈伯爵  
に行啓あらせられたが、其際 忝くも本邦未曾有の壯舉たる南極探檢の採  
集品を台覧あらせられ、且つ慰勞の御言葉をさへ給はつたのは、誠に該事  
業の光榮と謂はねばならぬ。

一方日光丸にて歸朝の白瀬隊長の一行は、五月十六日横濱に着し、直ち  
に入京した。而して開南丸は新西蘭ウエリントン港解纜後無事赤道を通過  
し、六月五日小笠原島に着して、電報を後援會に送つて來た。此電報を以  
て推すと、小笠原島から館山若くは横濱へ到着するのが、大抵一週間位の  
後であることが、想像されるので、村上幹事其他の諸氏は横濱に赴き堀内  
事務長は館山に赴き、互に入船を待受けて居た。

處が開南丸の着する頃に當り、非常なる暴風雨が起つた。爲めに少な  
らず危惧の念を以て待受けて居たが、幸にして六月十八日、延着ながら  
も無事に房洲館山に入港し、其翌日を以て横濱へ廻航し來つた。

横濱では新聞記者團、後援會員、隊船員の家族親友及び一般の公衆の



歓迎があつたが、六月二十日には品川灣に廻航し、出發の地たる芝浦埋立地に歸還して、茲に盛大なる歓迎の式が行はれた。此式には會長大隈伯、其他朝野の名士も多數臨席し、會衆約五萬人と註せられた。兎に角非常の盛會であつた。斯くて式場を去るや隊員一同は、隊長と共に二重橋外に至り、皇城を拜して後歸路に就いた。此夜盛んなる提燈行列は早稲田大學其他の學生約五千人に依りて行はれた。東京市中は爲めに非常なる壯觀を極めた。

さて田泉技師が携へ歸つた活動寫眞は、光線の不足なる極地で撮影した爲めに、現像にも少なからざる困難を感じたが、エム、パテー會社顧問吉本氏の盡力によつて、一般公衆の觀覽に供し得るまでの鮮明なるものとなつた。よつて赤坂萬歳館に於て、新聞記者諸士を招き、試験的の撮影を行つた。然るに突然青山御所から大隈伯邸へ御申越あり、六月二十五日同御所に於て、南極にて撮影し來りし活動寫眞を、皇太子殿下（今上陛下）皇太子妃殿下（皇后陛下）皇孫殿下の御三方（皇太子殿下二皇子殿下）



並に各宮殿下の台覽に供し奉ることゝなつたので、當日大隈伯、押川、田中、佐々木、村上の各幹事、白瀬隊長、野村船長、武田學術部長等は、エム、パター會社の活動寫眞技師を率ゐて參内し、忝しく台覽に供し奉つた。其時、忝くも五百圓の御下賜金があつた。

それより淺草國技館に於て、活動寫眞及び採集品展覽會の興行を開催することゝなり、六月二十八日より開會した。然るに翌二十九日に至り、忝くも、山階宮、伏見宮、久邇宮、賀陽宮、華頂宮の各若宮殿下の台覽あり、後援會は少なからず、面目を施した。

國技館の興行後、後援會は各地に於て興行を試みる事と爲り、京都、大阪、神戸、名古屋等の方面に向つて一組、北海道方面に向つて一組、今一組は九州方面其他に向ひ、弘く興行を開催した。又探檢船「開南丸」を前持主報效義會に賣戻す事とした。大正貳年五月十九日、畏れ多くも、今上陛下は後援會が此國家的事業の爲め、殆ど滿三年間苦心慘憺、有らゆる艱難と戰つて努力しつゝある事を聽こし召され、金貳千五百圓を御下賜

あらせられた。

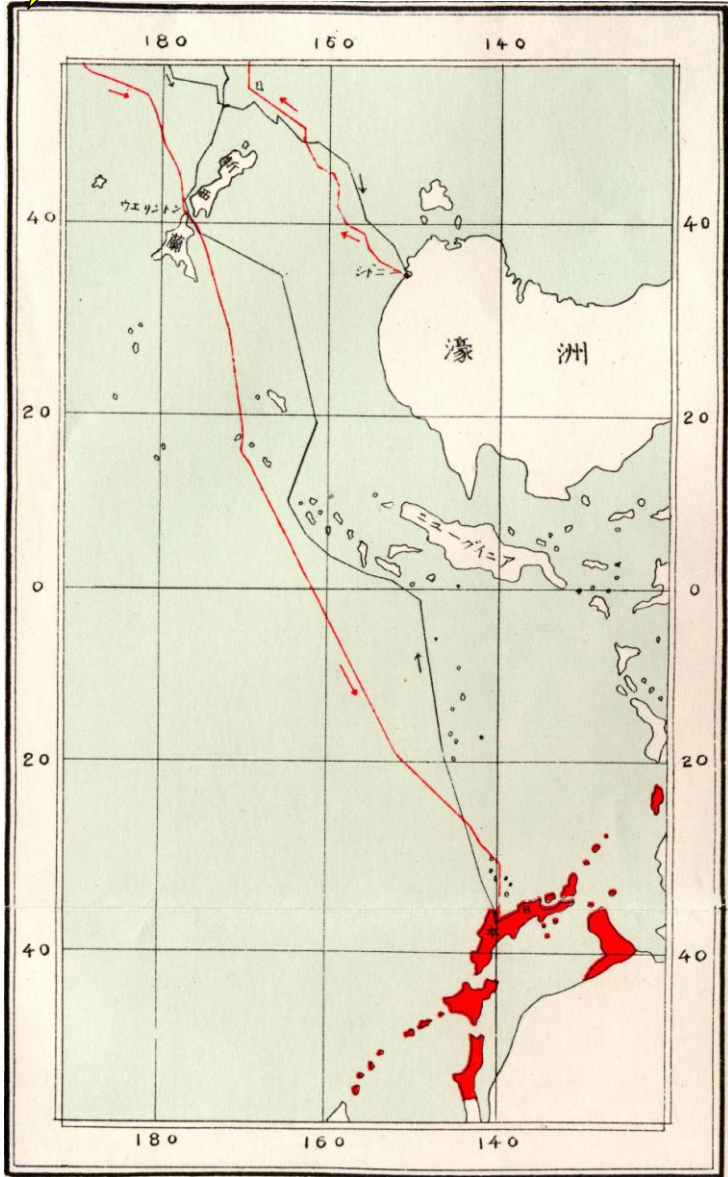
元來探檢隊の經費問題は孰れの國に於ても困難として居る所である。英國の探檢家シヤツクルトン氏は五年前に探檢を終了したに拘はらず、尙ほ借財は少なからず遺存し居り、同國のスツト氏は死に至るまで三十萬の借財を負ふて心痛して居たと云ふ事であるに、我後援事業が探檢隊の歸還後一年有餘にして、將に終局に近づかんとしつゝあるは喜ぶべき事である。

願はれは明治四十三年六月、南極探檢の賛助員募集に従事してより以來、大正二年の今日に至るまで滿三箇年以上を費したる、日本開關以來未曾有の壯舉南極探檢の事業は、斯くの如くにして兎に角終局に近づいたが、偕此事業は如何なる効果を我が國家に及ぼしたかと云ふに、實に下の如き効果ありし事と信ずる。

一、開南丸が、船としては達し得べき最南方に達し（南緯七十八度三十分）本邦の航海史上に特筆大書すべき新記録を作りたる事。

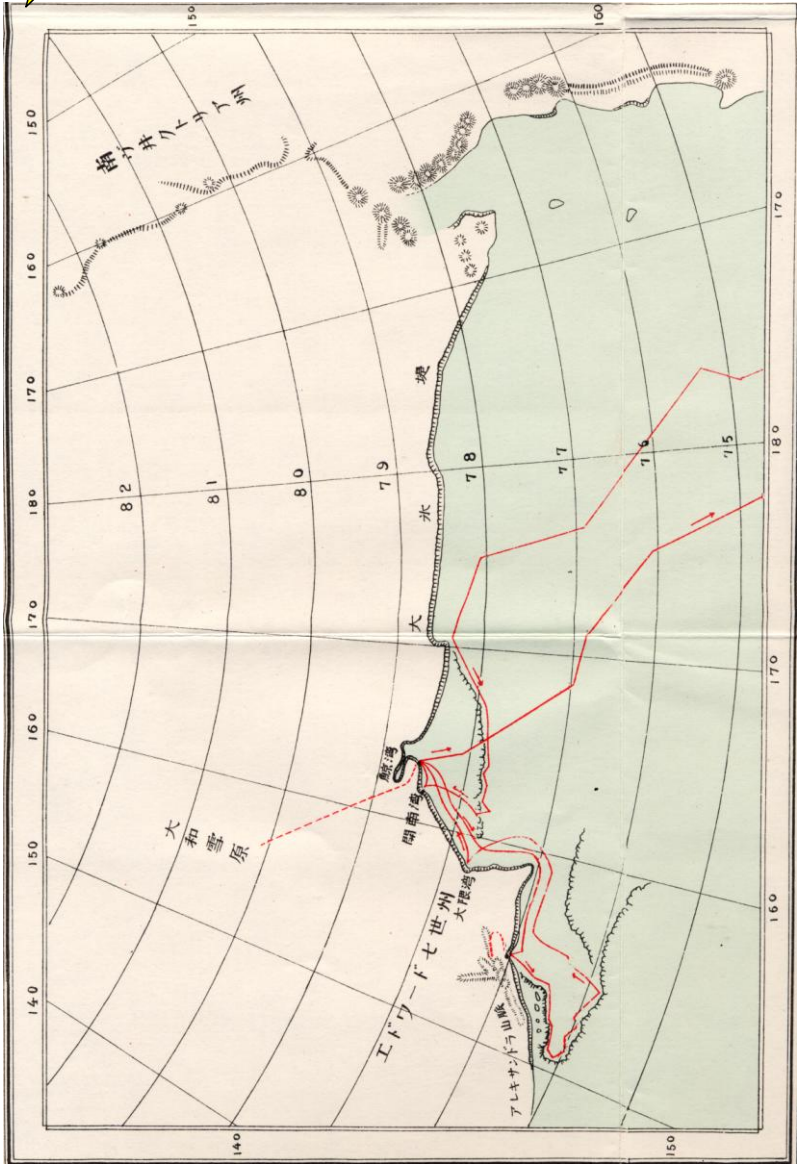
# 南極記 大尾

二、本邦航海者の技倆を弘く世界に認めしめたる事。  
三、平和の時代に決死的探検を試み、本邦人の士氣を鼓舞せしめし事。  
四、學術上に裨益する所少なからざりし事。  
五、本邦人に世界的の思想を普及せしめたる事。  
六、本邦人の體力が極寒の地に堪へ得る事を證明せる事。  
七、氷海の航海に就て少なからざる經驗を得し事。  
八、本邦人の探検に關する趣味性を養成せしめたる事。  
九、極寒の地に於ける衛生状態に就て研究を重ね得たる事。  
十、極寒地旅行用の防寒具、糧食、犬橇等に就き研究を爲し得たる事。  
以上の如き効果は必ずやありし事と信ずる。茲に謹んで此事業に對し直接間接に同情を寄せられたる滿天下の諸士に向つて感謝の意を表するものである。











大正貳年十二月十五日發行



製複許不

編纂者 發行所 印刷者 發行所

定價貳圓五拾錢

南極探檢後援會

東京府豐多摩郡戸塚村大字下戸塚七十番地  
南極探檢後援會長 大隈重信

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

石川勝次郎

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

秀英舍第一工場

南極探檢後援會

發賣元

東京市本郷區弓町壹丁目十一番地

成功

雜誌社  
振替口座東京二二〇九番

大賣所

東京市神田區  
表神保町三番地  
東京市京橋區  
元數寄屋町三丁目  
東京市日本橋區  
西紺屋町十六番地  
大阪市北區  
大塚市梅田

東京隆盛堂  
北隆堂  
良明館  
盛文館

東京市京橋區  
尾張町二丁目  
東京市神田區  
裏神保町壹番地  
東京市日本橋區  
本石町三丁目  
大阪市西區  
京町堀通二丁目

東海堂  
上海屋  
至誠堂  
大華堂

久留米市菊竹書店  
米屋町三番地  
外全國各書店賣捌



南極記 〔復刻〕 領価二万五千円

昭和五十九年八月二十五日 印刷

昭和五十九年九月 四日 発行

編著者 南極探検後援会

発行者 湯川武弘

発行所 白瀬南極探検隊を偲ぶ会

事務局 東京都中野区沼袋一―三三―十二

電話 東京(〇三三)三八八―六〇六九

郵便振替 東京二―九四二―一九

印刷所 研友社印刷株式会社



南極記 デジタル復刻版（第三版）

平成二十四年一月二十八日発行

編集者 田阪茂樹

発行者 岐阜大学総合情報メディアセンター

岐阜県岐阜市柳戸一番一

文章は、南極記（大正二年十二月十五日発行、発行者大隈重信、編集者南極探検後援会、発行所南極探検後援会）を、国立国会図書館近代デジタルライブラリーからダウンロードして復刻した。

写真、スケッチ図、カラー絵画、日本探検区域図の図画は、南極記復刻版（昭和五十九年九月四日発行、編集者南極探検後援会、発行者湯川武弘、発行所白瀬南極探検隊を偲ぶ会）に掲載されているものを、スキヤナーで取り込み復刻した。

湯川武弘氏には、デジタル復刻版への図画の掲載について格別のご高配を賜り、ここに感謝申し上げます。



